

銀河英雄伝説～流血と硝煙と運命の日々～

雪の師走

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

銀河英雄伝説く不敗の魔術師と肩を並べ、帝国の天才と最後まで戦い抜いた男の生き様を見ろく

目次

運命の邂逅	1
再びの出会い	3
士官学校、着任	7
イゼルローン要塞を語る	11
問題児との出会い	13
候補生との差	15
イゼルローン要塞攻略戦について	19
講義と後の名将	23
ヤンとの会話	26
悪友との再会	29
嘗ての上官	33
朝の一時とイゼルローン要塞の講義	35
心情の吐露と戦争への思い	38
ヤンの才能の片鱗	41
夏季休暇	45
告白	48
上官グリーンヒル司令官	51
艦隊運動の講義	56
バレンタインと名将との出会い	59
同盟、帝国の人の考察	63
卒業式と退任	66
出兵式典	68
艦隊司令官としての初陣	71
勝利の代償	75

平和な日常と運命の転換期	78
訓練と英雄の誕生	83
英雄の苦悩と私の評判	87
防衛態勢の要望	91
部下との情報共有	95
戦争への準備期間	100
第5次イゼルローン要塞攻略戦	105
副司令長官就任と再編	110
赴任前の来客	113
赴任とエル・ファシルの一時	116
訓練と自宅での一時	119
ヴァンフリート星域会戦前の作戦会議	122
ヴァンフリート星域会戦、始まる	125
ヴァンフリート4Ⅱ2宙域会戦	129
ヴァンフリート4Ⅱ2宙域会戦の終結	132
戦後の対応	135
ハイネセンへ帰還	138
最後の教え子と宿敵を知る	143
ハイネセンでの平和な日常	147
第6次イゼルローン要塞攻略戦前哨戦	151
第6次イゼルローン要塞攻略戦の考察	154
血の代価	158
まさかと不本意	161
第3次ティアマト会戦	166
同盟	166
第3次ティアマト会戦	170
帝国その一	170

第3次ティアマト会戦	帝国その二	178
第3次ティアマト会戦	同盟その二	184
束の間の一時		188
束の間の一時	その2	192
束の間の一時	その3	195
祝賀会と初航海		199
第4次ティアマト会戦		206
帝国の談合		209
戦場へ		212
アスターテ会戦	ヤンside	216
アスターテ会戦		224
アスターテ会戦	帝国side	231
次のステップ		237
第十三艦隊		247
一夜の逢瀬		259
苦悩と葛藤		265
陰々滅々		271
ハイネセン到着		282
最高幕僚会議		289
帝国軍人として		297

運命の邂逅

宇宙歴783年 テルヌーゼン 士官学校

士官学校を卒業してから6年がたった。少尉任官から大佐まで昇進した。自分でも見事なものだと思う。いつ死んでもおかしくない戦争を何度も潜り抜けてきた。帰ってくる度に昇進する運に恵まれたと思っっている。

そんな自分に士官学校で教官を任じられた。任官前に着任の挨拶に来たのだが特段何もなく無事に終わり懐かしの青春の学び舎を見て回っている。校長や教官から訓示を頂き、懐かしい教官に挨拶をした。些事が終わり外を回っていると微かな音が聞こえた。ピアノの音だろう。近くのハイネセン音楽学校からだろう。

「中々の演奏だな。今少し側で聴きたいな」

独り言を漏らしてしまった。苦笑しながら音が聞こえる方に歩き出した。

音楽室の中にあるピアノの前に女性が座っている。彼女が弾いているようだ。目を瞑り静かに聞いている。

10分ほどで終わった。もう少し聴きたいと思ったが仕方ないか。自分に気付いたのだろう。女性が顔を向け、立ち上がり此方に歩いてきた。

「こんなところで何をしているの？士官候補生？それとも教官かしら？」

「1月後から教鞭を取ることになったユーリ・クーク大佐です。貴女の名前は教えていただけるのかな？」

笑いながら話しかけると答えてくれた。

「ジェシカ・エドワーズです。よろしく、新任教官さん。」

中々の美人だと感想を抱いた。

「見事な演奏だった。リストの愛の夢だろう。」

「知っているの？軍人がこの曲を？」

驚いているのが表情に出ている。

「軍人だから関係ないだろう。軍人でも音楽を興じる感性のあるも

のもいる。」

私の返しに彼女が苦笑をした。

「ごめんなさい、確かにそうね。失礼な事を言いました。」

「謝罪を受けよう。また機会があれば聴かせてもらえないだろうか？

それとも嫌かな？」

「構いませんよ。機会があれば。」

「よかった。ではよろしく頼むよ。ちよくちよく顔を出させてもらうから不審者扱いはしないでくれよ。」

自分を卑下する言い方が壺に入ったのか笑っている。

「安心していいわよ。中々のルックスだから生徒達がざわめくだけよ。」

「そうか。なら安心だ。では入学式が終わった後に聴かせてもらうのは駄目かな？」

「分かったわ。代わりに昼食は貴方がご馳走してね。」

「いいだろう。好きな店を予約しておくといい。」

「いいの？高いお店を予約するわよ。」

笑いながら聞いてきた。

「年の割に昇進しているからそこそこの高給取りだし、恋人も候補もないからね。有り余っている。本当に好きな店を予約していいよ。」

「どうか、こういう時は男性がエスコートしてくれるのでは？」

ジーツと此方を見ているジェシカ・エドワーズに苦笑を漏らした。

「こういうことは苦手だね。いざというときは女性に任せようと決めているのだよ。」

そう答えて踵を返した。此れが長い間の人生を共に歩むことになるジェシカ・エドワーズとのファースト・コンタクトであった。

再びの出会い

宇宙歴783年 テルヌーゼン 士官学校

始業式が始まる2時間前に着いて、近くの喫茶店で朝食を取っている。トーストにサラダ、ハムエッグにコーヒーといたって普通のメニューだ。

食べ終わったので友人からわざわざ家に送られてきた雑誌を読み始めた。

月刊自由惑星同盟軍報という軍の人事や派閥、昇進や降格、未来の展望が描かれているゴシップ紙の類いの本でそこに自分が載っているから送ってくれたらしい。

ペラペラと捲るとシドニー・シトレ中将与ラザール・ロボス中将の出世争いが熾烈であると書いてある。どちらも将としての実績良く甲乙付けがたいと書いてある。

次に現在の統合戦本部長と宇宙艦隊司令官の紹介、正規艦隊司令官の面々の紹介、指揮下の副司令官や分艦隊司令官、参謀長の紹介が載っている。

その次がネクスト正規艦隊司令官の紹介のようだ。ウランフ、ボロデイン、グリーンヒル、アップルトン等の名前が並んでいる。軍内では有名で妥当な線の人選だと思った。

次は佐官からの将来有望な未来の正規艦隊司令官候補の紹介みただい。

表紙を見て凍りついてしまった。いの一番に自分の顔が載つけられている。紹介文が不正に厳しく、艦隊戦も勇猛果敢な一面も有りながら思慮深い心理戦も行える若き驍将と書かれている。

余りの美辞麗句に右手で顔を覆い溜め息を吐いた。顔が赤面している自信がある。昨日入っていたメールの多くはからかいの内容だろうと予想がついた。嫌な予想だ。

通信端末がピピツと音が鳴った。1時間前のアラームだ。そろそろ向かうことにするかと立ち上がり精算をする。戸を開けるとカラーンと音が鳴ると同時にキャツツと女性の驚きの悲鳴が聞こえた。外

に出て声を掛けた。

「申し訳ない。驚かせてしまいました。お怪我はないですか?」

「いえ、こちらこそごめんなさい。ビックリして声をあげてしまいました。」

目の前に先日知り合ったばかりのジェシカ・エドワーズがいた。

「君か、先月以来だな。元気そうで何よりだ。」

当たり前障りのない会話を始めようとしたが何かが気に触ったようで自分の事を睨んでいる。

「何かしたのかな?君の気分を害したのなら謝るが?」

心当たりは全く無いので聞いてみると意外な答えで困惑した。

「この1月の大半を教室でピアノを弾きながら待っていたのだけれど1回も顔を見せなかった同盟軍きつての佐官様ではないですか。」

嫌みがたつぷりと籠った笑顔を向けてくるジェシカ・エドワーズが正直に云うと怖かった。

しどろもどろになりながら言い訳を口にした。

「申し訳ない。将官の試験や前の部隊の引き継ぎで統合作戦本部に行きっぱなしでね。此方に来たのは1回だけなんだ。シトレ校長に諸々の書類を出しに夜中にね。」

ジェシカ・エドワーズはフウーと息を吐いてから此方に視線を向けた。

「昼食をご馳走してからピアノを聴かせるって約束は冗談なのかと思っただわよ。集合場所も時間も決めずに別れたから。」

言われてからハツと気づいた。

「そうだったね。何も決めていなかった。もしかしてお店も決めてないのかな?」

おそろおそろ聞くとジェシカ・エドワーズは満面の笑みを浮かべた。

「近くの日本懐石のお店を予約したわ。1度行ってみたかったのだけど高いから諦めていたの。駄目なんて言わないわよね。」

その笑顔に思わず苦笑しながら返事をした。

「分かった。約束だからな。そこでいいよ。それよりも学校に向かい

ながら話そう。時間も差し迫っているからな。」

「ええ、分かったわ。」

他愛ない話に話題を切り替えた。

「随分と早くに学校に行くんだね。音楽学校も9時に始業だから1時間はあるだろう？」

「私はいつもこの時間に来るの。本を借りて読んでいるの。あなたこそ、この間と制服の襟章が少し違うけど昇進したの？」

首を傾げながら聞いてきた。

「ああ、本日付で准将になった。歴代最年少将官らしいね。興味が無いけど。」

「あら、おめでたいことじゃない。高く評価されるのは素敵なことよ。」

自分を持ち上げてくるジェシカ・エドワーズに少し居心地の悪さを感じて、顔をしかめながら答えた。

「あまり嬉しくないな。味方に実力以上の結果を期待されるのは正直迷惑だ。」

私の答えが面白かったのか笑っている。音楽学校が見えてきた。

校門の前で向かい合った。

「お別れね。1230時にここに集合ね。よろしいかしら若き驍将さん。」

彼女の言葉に返事を返してから凍りついてしまった。

「ああ、その時間なら問題ない迎えに来るよ。!!……………」

私が言葉を失ったのが可笑しかったのか声を上げて笑っている。

「アツハツハツハツハツハツハ。ご、ごめんなさい。まさか固まるなんて思わなかったから。」

目から涙が出たのか目元を押さえながら謝ってきた。

「んん、構わない。まさか君もあの雑誌を読んでいたとは思わなかった。では失礼させてもらうよ。私も始業式に行かなければならないから。」

逃げようと思ったが先に彼女が話しかけてきた。

「ジェシカ、私の事はこれからはジェシカって呼んで。私も貴方の事

をユーリさんって呼ぶわね。」

「えっ、あつ、わ、分かった、ジェシカ。自分の事も呼び捨てで構わないが。」

「駄目よ。貴方の方が年上なんだから一応は敬わなくっちゃっ。」

彼女の物言いに苦笑してしまった。

「では失礼させてもらうよ。ジェシカ。お昼にここに来るからよろしく頼むよ。」

「ええ、待っているわ。ユーリ准将。」

つたない敬礼をしてきた。そんな彼女に頷き、士官学校に向かっていった。

士官学校、着任

宇宙歴783年 テルヌーゼン 士官学校

始業式が行われて1時間程が経つ。シトレ校長の挨拶、国防委員長の挨拶等が終わり、在校生の歓迎の言葉が始まる。

ゴリゴリの肉体派の男が壇上上がった。あれがウイレム・ホーランドか。手元の資料によれば敢闘精神に溢れ、決断力も行動力も有る為に指揮官に向いていると評価されているみたいだ。大いに独善的で視野が狭くなる傾向があり、身の丈に合わない大いな自信を持っており、高圧的なため同級生からの信望が薄く、下級生からの尊敬も少ないと書いてある。

良いところの方が少ない首席ってなんだよ！長所よりも短所が多い奴が1番ってどうなんだよ。前途多難な教官生活になりそうでゲンナリしてきた。

調子の良いことばかり言っているホーランドを見て、つい溜め息を吐いてしまった。

それを隣にいる同僚の教官が見て話しかけてきた。

「溜め息を吐いて如何しましたか？」

自分と同じ新任で事務次長に就任してきた新任のアレックス・キャゼルヌ大尉だ。

後方勤務の練達者でエリート官僚そのものだと能力では評価されている。エリート官僚の負のイメージそのものとは無縁な人柄で中々な毒舌家で上司、上官でも平気で噛みつくので上層部からは煙たがられているが能力が際立っており捨てるに捨てられないと評判の人物らしい。

「いや、中々に熱の入った挨拶をするものだから。呆れているだけです。」

私の回答が壺に入ったのか手で口を押さえながら笑っている。

「クーロ准将の挨拶は3分に満たず今でも始業式の話の種にされているですよ。」

「貴方もご存知なのですか？」

「ええ、貴方の後輩なので此処で聞いていましたよ。余りの簡潔さの中身の薄さに驚きました。」

笑いながら言うキャゼルヌに自分も苦笑を返すしかなかった。

「自己紹介がまだでしたね。事務次長に就任したアレックス・キャゼルヌ大尉です。よろしくお願いたします。ユーリ・クーロ准将。」

「士官学校に戦術、戦略及び艦隊運用の教官として就任しましたユーリ・クーロ准将です。こちらこそよろしくお願いたします。」

互いの自己紹介が終わると同じタイミングでホールランド候補生の挨拶と訓示が終わったようだ。

教官の紹介に移るよう先任の教官が名前を呼ばれて一礼している。自分の名前が呼ばれた時にざわめきが少し起きたが一礼をして無視した。

式が終わりキャゼルヌ大尉と話ながら教官室に向かう。

「私の事はキャゼルヌと読んでください。クーロ閣下と呼ばせて頂いてもよろしいでしょうか？」

訊ねてきたので構わないと返し、教官室の前で別れた。事務局は隣なのでそちらに向かっていった。

部屋に入り自分の席に着くとシトレ校長が入ってきて直ぐに明日からの講義の話をして解散となった。

新生は家族と入寮前の最後の食事に向かっているようだ。多少のざわめきが聞こえる。12時にもう少しでなるから待ち合わせ場所に向かおうと準備をしているとシトレ校長から声を掛けられた。

「クーロ准将、少し話があるのだが時間を貰えるかな？」

そう言われたので正直に話した。

「1230時に先約があるので手短かにしていただけるなら。」

まさかの返しに目を白黒させている。そして大声で笑いだした。

「分かった。5分程貰えるかな？」

それくらい時間ならと頷きながら返した。

「承知しました。場所は何処でしょうか？」

私の回答に1つ頷いた。

「校長室で頼む。着いてきたまえ。」

ハツと敬礼をし、先に歩きだしたシトレ校長に着いていく。

校長室に入ると椅子に座ることを薦められ大人しく着席し話を待った。

「君に来てもらったのは今後の君の予定を話しておかないといけなからだね。2年此処で教鞭を取ってもらおうことになる。」

これは教官を命じられた時に言われたので知っていたので1つ頷いた。

「その後、君は正規艦隊司令官になるグリーンヒル中将の副司令官に少将として配属される予定だ。」

まさかの内容に驚いた。本当なのか顔を見ていると頷いたので事実だと確信が持てた。

「ここ数年で正規艦隊司令官の顔を変えるつもりだ。これは今のところ内定しているのは私の第一艦隊とパエッタの第二艦隊、ルフエーブルの第三艦隊、グリーンヒルの第四艦隊、ビュコックの第五艦隊、ムーアの第六艦隊、ホーウツドの第七艦隊、アップルトンの第八艦隊、アル・サレムの第九艦隊、ウランフの第十艦隊、ロボスの第十一艦隊、ボロディンの第十二艦隊へと艦隊司令官の刷新が行われる予定だ。その後には私かロボスが宇宙艦隊司令長官に就いた後にイゼルローン要塞攻略戦が行われる予定だ。」

最後の内容について眉をしかめた。

それを見たのかシトレ校長は聞いてきた。

「何か問題でもあるのかね?」

「いえ、何か策でもあるなら別ですが特段無いならイゼルローン要塞を攻めるのは止めた方が無難かと思っただけです。」

シトレ校長が目を細めて肘をつき手を顔の前で組んだ。

「理由はなんだね?何かあるから口にしたのだろうか?」

話せと言ってくれているがチラリと時計に目をやると12時を回り10分になる。

「明日にしましょう。申し訳ないですが先約に遅れてしまいます。」

私が時計に目をやったのを見ていたのだろう。苦笑して頷いた。

「分かった。明日の講義終了後にここに来てくれ。いいね。」

有無を言わせぬ貫禄で頷いてから立ち上がった。

「申し訳有りませんがここで失礼させていただきます。」

部屋を出ると足早に教官室に鞆を取りに向かった。このままではギリギリ間に合わん！

イゼルローン要塞を語る

宇宙歴783年 テルヌーゼン 音楽学校校門前

「遅いわよ、准将閣下。レディーを待たせるなんてマナーがなってないわよ。」

眦を上げて怒っている。やはり走っても間に合わなかったようだ。「すまない。少し喫緊で話さないといけないことが出来てしまったんだ。しかし遅れたのは事実だ。謝罪しよう。」

頭を深く下げると困惑した声が聞こえた。

「えっ、あの、そこまでしなくても。こちらが悪いことしたみたいなき持ちになるわ。」

「予約の時間もある。案内を頼んでもいいかな。ジェシカ。」

私のお願いに気を取り直したのが分かった。腕を取り引つ張りながら歩きだした。

「ごつちよ。案内するわ。」

笑顔を見せながら腕を引つ張るジェシカに笑ってしまった。

店に入ると個室に通された。

そこで日本酒というお酒が注がれ乾杯をした。料理も1度に運ばれるように机の上が色とりどりの料理で埋め尽くされた。

「綺麗ね。シンプルなのにそこになんともいえない美しさがあるわ。」

ジェシカの感想に頷き、箸を持ち食べ始めた。

特殊な箸でピンセットみたいな形をしている。難しいからという配慮なのだろう。苦勞することなく食事を楽しめた。

半分位食べ進めるとジェシカが質問をしてきた。

「イゼルローン要塞を何度も攻めては負けてるけど、そこまで落とせない難攻不落の要塞なの？」

軍事に疎い人ならではの質問に笑ってしまった。

「まず、要塞の外壁が流体金属で覆われている。これはレーザーやミサイルに大きな防御力を発揮する。そしてそこに浮かぶ浮遊砲台が艦隊やスパルタニアン、ミサイルを迎撃する。1番の難問は防御不可能の神の雷、トールハンマーだ。一撃で艦隊の多くを吹き飛ばす威力

を持つているため迂闊に近寄ることが出来ない。」

「ここまでの説明で分からない所はあるか聞くと続けてと言ってきたので続けることにした。」

「要塞は動くことが出来ないので射角などに制限があるし、ツールハンマーも連射は出来ない。そこを補助するのが機動力を擁する駐留艦隊の1万5000隻だ。この2つが有機的に連携されることであの要塞が難攻不落を足らしめているのだ。」

ウンウンと頷いているが難攻不落を更に補強するのがそれだけではない事も説明した。

「ジェシカ、こちらが3個艦隊4万5000隻で攻めようとする。そうするとフェザーンが此方の陣容を帝国に伝えて援軍を派遣するだろう。つまり我々は敵の援軍を排除し、駐留艦隊を排除して、初めて要塞攻略に取り組めることになる。そんなことを悠長にしていられると思うかい？」

首を横にふりながら答えた。

「無理ね。手間取っていると更に援軍が来るかもしれないし。」

頷き答えた。

「俺はそもそも要塞攻略には消極的だ。労多くして益なしになる可能性が高い。要塞を落とせなければ何のための攻撃なのかといった疑問も出てくるだろうからな。」

真剣に答えたのにジェシカはクスクスと笑っている。何か可笑しな事を言ったのか発言を振り返り考えたが分からなかったので眉をひそめると謝ってきた。

「ごめんなさい、やっぱり最年少将官は伊達じゃないな〜って思ってた見事な見識ね。説得力があったわ。」

「あまり血生臭い話は止めよう。美味しい料理に悪影響が出ると困る。構わないかな、ジェシカ。」

そう言い彼女との初めての食事を続けるのだった。

問題児との出会い

宇宙歴783年 テルヌーゼン 士官学校

始めての講義を終え、廊下を歩いていると前方から一人の候補生が此方に視線を逸らさずに向かってくる。

ウイレム・ホーランドだ。普通は数メートル先で上官を避けて敬礼をするのがルールなのだが立ちふさがっている。

「ホーランド候補生。何をしているのかな？通行の邪魔になっているのだが。」

顔を陰しくして声も厳しい口調にした。そうしたら敬礼をして話しかけてきた。

「クロー准将閣下にお問い合わせがあり、こうした行動に出た次第であります。」

お願いが直ぐに分かったので憂鬱になった。

「是非ともシミュレーターで1個艦隊同士の艦隊戦のシミュレーションをお願いしたい。」

断つてもしつこく付き纏われるのが一目で分かったので仕方ないから行うことにした。

「分かった。いいだろう。講義後の1600時に第一シミュレーションルームに來い。一戦だけ相手をしてやる。それでいいな？」

「はっ、ありがとうございます。」

敬礼をして去っていた。いずれは來ると思っていたが予想よりも早かったな。我慢が出来ないのか、自分の実力に自信があり、それを証明したいのかどちらにしても度しがたいことだと思い、苦笑してしまった。

午前中の講義を終えて、昼食を取ろうと教官室を出ると隣の事務局からキャゼルヌ大尉が出てくる所だった。

「クロー准将、お昼ですか？よろしければご一緒させてもらえませんか？」

「ええ、構いませんよ。行きましようか。」

「そういえばウイレム・ホーランドと模擬戦をすると言いましたが？」

「耳が早いですね。流石は後方支援の練達者として有名なキャゼルヌ大尉ですね。」

「勝てるのか？ 奴は中々優秀と聞いているが？」

「問題ありませんよ。多分。」

私の答えが面白かったのか笑っている。

「いや、悪いな。自信が有るのか無いのか分からないからつい笑ってしまった。」

「構いませんよ。」

食堂に着いたのでプレートを貰い、教官用の席で食べ始めた。

「経験の差が大きいですから此方が有利ではあるでしょうね。」

「俺はよく分からのだが経験の差っていうのはそんなに大きいのか？」

後方支援畑のキャゼルヌ大尉では今一分からないみたいだ。

「経験の数が多いということは取れる選択肢が多いということになります。同じ局面でも攻める人と守る人が出るのはそのためです。そして流れがどちらかに傾いた時に適切な判断、決断、実行が出来るかで優位か不利かが決まります。」

「そして素早く状況判断を適切な決断をして指揮下の部隊に実行させることが出来るのが有能か無能かの違いでしょうね。」

「なるほどそれが出来たからクローク准将は昇進しているというわけですね。」

キャゼルヌ大尉のヨイシヨに笑ってしまった。

「私の昇進は戦場の戦功と後方の取り締まりの半々なので少ないですよ。」

「私も時間が合えば見に行ってもよろしいですか？」

「ええ、多くの方が来るでしょうから1人や2人増えても大丈夫ですよ。」

「では見学させてもらいますね。」

「ほどほどに頑張りますよ。」

丁度食べ終わったので、そうキャゼルヌ大尉に告げて食堂を後にした。

候補生との差

宇宙歴783年 テルヌーゼン

シトレ校長に少し遅れる事を伝えに校長室に赴いた。ノックをする入りたまえと声が聞こえたのでドアを開け入った。

「失礼します。クローロ准将です。」

「クローロ准将、どうしたのかね？」

用件を聞かれたので直ぐにウイレム・ホーランド候補生とのシミュレーターでの艦隊戦シミュレーションをする約束をした旨の話をして、30分程時間をずらしてほしいと伝えた。

机の上で手を組み、組んだ手の上に顎を乗せながら答えた。

「その話なら私の耳にも入っている。分かった。1830時に変更しよう。ついでに伝えておくがここから私も君達の対戦を見させてもらうから頑張りたまえ。生徒にあっさり負けるような事がないようにな。」

楽しそうに笑っている。性格が悪いオツサンだなと思った。

「おそらく勝てるでしょう。彼のデータは閲覧しているので得意戦法、不得意な戦法は分かっています。」

「ならいいが、もしも無様に負けるようなら2年後の辞令も考えなければならぬからな。」

「ハッ、承知しました。失礼いたします。」

敬礼をして退室した。

放課後 シミュレータールーム

部屋に入るとシミュレーターを囲むように人集りが出来ている。中央の2台を中心に集まっているようだ。その前に筋骨隆々の男、ウイレム・ホーランドが腕を組み立っていた。その威圧的な格好に溜め息が漏れた。ヤル気満々なようで此方はウンザリした。

「お待ちしておりました、クローロ准将。既に設定は終わっております。15000隻同士の遭遇戦で開敵場所はアルレスハイムとしております。」

アルレスハイムは大規模な艦隊戦が可能な広大な場所で小惑星も無いし、隕石群も無いといった場所で純粋な戦術と艦隊行動が勝敗の重要性を占めるだろう。

「分かった。それで結構だ。準備はいいかな？」

ニヤリとホーランド候補生は笑う。あまりに期待の教官に勝ちたいという欲が出ているので気持ち悪い。

上の観覧席も多くの人が入っていて満員のようだ。

「どうやら皆が知っているようで見学をしたいというものですから入れたのですがダメでしたでしょうか？」

私に答えを聞きながら断るわけがないですよねといわんばかりだ。教官に勝ったという事実を広げるための証人なんだろうなと思った。「構わないから早くしよう。予定が有ってね。あまり時間を掛けられないんだ。」

ホーランド候補生に背を向けて、シミュレーターに乗り込んだ。

シミュレーターの設定を確認する。艦数、編成をチェックし、戦場も確認する。艦隊の物資もチェックする。何も問題はないようだ。

「では、始めましょうか。」

ホーランド候補生から通信が入った。頷き答えた。

「ああ、始めてくれ。」

答えた瞬間にシステム画面が動き出した。相手の艦隊15000隻がイエローゾーンに入ってきて来るところだ。

そして1000隻位の単位でバラバラに分かれている。

それを見て、艦隊に後退の指示を出した。ゆっくりと前進から後退に切り替わった。まだ敵はイエローゾーンの真ん中位だ。しつこく追ってきている。

無秩序なまでに機動的で奔放な用兵だ。確かに何処を攻撃すればいいのか分からず有効な戦術だろう。

だが、めちやくちやに動いているから動線が無秩序で無駄が多く、エネルギー切れを起こさんばかりの運動だ。

更に後退するかと考え、指示を出した。

あんな非常識な艦隊運動が何時までも続くはずがない。

時計では2時間が経ったことになっている。後2時間位かな？それまではユルユルと後退しようと思った。

キャゼルヌ視点

それから追うホーランド、逃げるクローロの状態が続いて実際の時間で20分、シミュレーションでは4時間が経とうという時にクローロ准将の艦隊が停止し、前進を始めた。皆がざわつき始めた。そしてイエローゾーンを突破する前にホーランドの艦隊が動きが遅くなった。

レッドゾーンに入ったクローロ准将の艦隊がホーランドの艦隊を押し包むように半包囲で殲滅戦になっている。ホーランドの艦隊は反撃がほとんど出来ていないようだ。

25分で決着が着いた。ホーランドの艦隊は全滅、クローロ准将の艦隊は1000隻も被害がなかった。

他の見学をしている候補生も言葉を失い、戦況を表示しているモニターを青白い顔で見ている。

俺には分かった。エネルギー切れをホーランドの奴は起こしたのだ。あんなに跳ね回っていたら消費量が上がり、クローロ准将の艦隊は後退していたから追いつこうと全速力で向かっていた。それが決定打だな。

クローロ准将がシミュレーターから降りてきた。そしてモニターの結果を見てから観客席の方に目をやった。俺を見つけたのか右手を軽く上げた。

ホーランドも降りてきたようだ。怒りか悔しさか身体をブルブルと震わせながらクローロ准将に近寄っていく。

クローロ視点

目の前にホーランド候補生がいる。何か身体を震わせている。悔しいのかな？もしかして勝てると思っていただけのかな？それは私を低く見すぎだろうと思ったが過度な自信に満ちている状態なら仕方ないかと思った。

「負けました。完敗です。ですが教官があんなに逃げ回るとは思いませんでした。」

皮肉のつもりかそんなことを言ってきたので私も皮肉で返すこと

にした。

「あの艦隊運動は見事だった。芸術的なほどにね。だがあまりにも非生産的過ぎる。あれではエネルギー切れを起こしに行っているようなものだ。私はそれを突いて完勝したのだ。」

身体を震わせ、肩を震わせ、顔面を紅潮させている。

「あんな非常識な艦隊運動では行動限界点に達するのが早くなるだけだ。私が後退したのも全速力で追いつこうとするのを狙って戦闘速度での後退にしたのだ。」

「それを理解せずに追ってきた時点で君の敗けは決定していたのだよ。理論が何故有るのか其処から勉強した方がいいな。」

周りの生徒に目をやり、話しかけた。

「君達も見ての通りだ。無限の艦隊運動など無い。補給が無いと戦いにならないのだ。君達は士官になるが後方支援を軽んじる傾向があるようだな。」

「今回の戦闘でそこら辺を理解してくれば幸いだ。ではこれで失礼するよ。用事があるのでね。」

そう告げて退室した。ドアが閉まる直前に雄叫びと機械を叩く音が聞こえた。が気のせいになろうと思った。

イゼルローン要塞攻略戦について

宇宙歴783年 テルヌーゼン

校長室の前に来た。ノックをして返事を待つ。入りたまえと声が聞こえたのでドアを開けて部屋に入った。

「失礼いたします。ユーリ・クロー准将です。」

敬礼をして入室の挨拶をすると直ぐに答えてくれた。

「来たか、クロー准将。そのソファアに座りたまえ。コーヒーを出そう。インスタントで悪いがね。」

そうやってマグカップに2つコーヒーを入れて持ってきてくれた。

「さて、昨日の話の続きなのだが。イゼルローン要塞攻略に反対の理由を教えてください。」

しつかり此方を見据えて問いかけてきた。それに対して真摯に答えるべきと考えて発言した。

「閣下もイゼルローン要塞をご覧になったことがあると思いますが、これは大部分を流体金属が周囲を覆っています。防御力は高いでしょう。更に浮遊砲台が多数あり此方を攻撃する術があります。何よりツールハンマーの威力が凄まじいの一言です。あれでは此方が攻略に移る前に一撃を喰らいます。そして駐留艦隊の15000隻が横槍を入れる形や逆に浮遊砲台、ツールハンマーが横槍を入れるといった具合に様々な要因が絡み合って、あの要塞を難攻不落足らしめています。」

シトレ校長が眉間に皺を作りながら質問をしてきた。

「私としては要塞主砲を撃たせない状況を作りそのままの状態で要塞を攻略する事を考えている。具体的にはツールハンマーの射程圏内ギリギリを出入りするD線上のワルツ・ダンスを行い、帝国軍を挑発し、期を見て混戦に持ち込む。」

ここまでは良いかと視線に力を入れて此方を見た。それに対して頷き返すことにした。

「敵は混戦を解こうと急速後退を図るだろう。その流れで要塞に取り付き攻略をする事を考えている。」

この作戦案はどうかと尋ねてきた。

暫くの沈思黙考を行い、説明された作戦の是々非々を考えて答えを出した。

「閣下、残念ながらその作戦案はお止めになった方がよろしいかと思えます。」

私の答えに一瞬だが不愉快な気持ちが出た。手を組み顎を乗せて尋ねてきた。

「何故かね、准将？」

大きく息を吐き出してから答えた。

「まず間違いなくその状況になれば敵は味方諸ともツールハンマーで敵を吹き飛ばします。」

まさかの答えを言われたからかシトレ校長が目を見開いた。

「味方殺しをするというのかね？一隻、二隻ではなく数千隻は纏めて撃つことになるが？」

シトレ校長の疑問を大きく頷く事で肯定の意を示した。

「帝国は帝政を敷いています。そして要塞を落とされたら間違いなく要塞司令官と駐留艦隊司令官は死を賜るでしょう。銃殺か斬殺か自殺かは知りませんが生きていないことはないかと。同盟では降格、軍籍の剥奪位ですむかも知れませんが。」

シトレ校長は目を閉じて俯いた。

「二度目の味方殺しを受けて、同盟軍は混戦状態を維持できると思いますが？恐慌に陥らないと思いますか？私は雪崩を打って後退し、混戦状態が解消されることによる作戦の失敗まで見えます。」

シトレ校長はまだ俯いたままだ。

「以上の点から作戦案の修正、もしくは抜本的な見直しを為されるべきかと愚考いたします。」

まだ黙ったままだ。空気が重いが言っておかないと何時巻き込まれるか分からないから明け透けに言ったが誤りだったのかなと思っただ。

1分か5分か分からないが経ってから顔を上げられた。

「クロー准将、君ならイゼルローン要塞はどう攻略するかね？」

代わりに作戦案を出せつてことなのか変な質問をしてきた。それに対して正直な考えを答えた。

「小官はイゼルローン要塞の攻略はしません。攻めても落とせるか分からない要塞を四苦八苦するよりも軍事力の強化に努め、同盟領内に進行してきた敵の遠征軍を撃滅する事に専念します。その方が同盟にとって人的資源も物的資源も損失が小さく、敵に与える影響が大きいのと思うからです。」

シトレ校長は私の答えを聞き、腕を組み直して唸るような声を上げて考え込んでいる。それから1分位してから腕を解いた。

「君の考えは分かった。一考の価値がある意見と思おう。今日は帰っていいぞ。長い時間すまなかったな。気をつけて帰ってくれ。」

そう言つて立ち上がり自分の執務机に向かった。私も立ち上がり敬礼をし、退室する旨を伝えた。

「失礼いたしました。」

踵を返して、部屋を出た。時計を見ると2時間近く経っていた。

20時に近い時間で早く帰ろうと教官室から鞆を取り、校舎から出た。

校門の前に一人の影がある。見るとジェシカが門にもたれ掛かっている。

「何をしているんだ。日も落ちて暗いから早く帰りなさい。」

そう注意をして帰りを促した。それが不満だったのか頬を膨らませてから文句を言ってきた。

「貴方を待つていたのよ。折角だから少し話そうと思つてね。それを早く帰れだなんて。」

「そうなのか？わざわざ待たなくても良かったのに。君も女性なんだからここまで遅くなったら帰った方がいい。次は無いようにしてくれ。いいね？」

私の言葉に頷いてくれた。そして腕に下げているバッグから通信端末を取り出した。

「連絡先を教えてちょうだい。それならお互いに待つことも待たせることもないでしょう？」

そう言って端末を私の方に差し出した。それに思わず笑ってしまった。

「分かった。交換しようか。代わりに今回のような遅くまで待つのは無しだ。いいね？」

そういつて連絡先を交換するとジェシカは嬉しそうに笑いながら私にありがとうと言った。それに対して私はどう答えていいかわからず、ああとしか返せなかった。

今日の最後の任務は彼女を家まで送ることのようだ。

講義と後の名将

宇宙歴783年 テルヌーゼン

艦隊戦の戦術についての講義をしている。

「必勝の作戦は無い。これは君達も知っているだろう。では、どうやって勝つのか？それは分かるかな？」

聞いている候補生を見回しながら尋ねたが誰も答えない。それに苦笑してから話した。

「紡錘陣形、縦深陣形、横列陣形、斜線陣形等と数多くの戦術がある。これはどれも一長一短がある。それを理解して使い分ける事が基礎中の基礎になる。」

「敵が陣形に合わせたを陣形を組むのか、此方から主導権を取って陣形を組むのかで有効な陣形は違う。それをしっかりと勉強してくれ。」

それから各陣形の用いる状況等を説明して講義を終えた。これから少しずつ自分の色を出して候補生が少しでも優秀な士官になり、長く生き永らえるようにしないといけない。それが今の自分の仕事だ。

午前の講義を終えてキャゼルヌと昼食に行く。話題は昨日のウィレム・ホーランドとの模擬戦だ。

「昨日の模擬戦は見事でしたね。完勝とっていい内容だと思いましたか？」

キャゼルヌ大尉に頷き答えた。

「しっかりと勝って良かったよ。負けてたら私の講義も顔を覆う事態になっただろうね。」

キャゼルヌは笑っている。確かに他人から見たら笑うような話だろう。

「どうでした？ホーランドは？」

「彼は中々に優秀だよ。決断力、判断力、攻撃力、行動力等は非常に優れているだろう。だがそれも一士官として見ればと言っておこう。」

私の回答に怪訝な顔をしている。

「彼の目標は正規艦隊司令官から宇宙艦隊司令長官、統合作戦本部長だと聞いています。でしたら指揮官としての能力は勿論必要ですが自分の名声ではなく自軍の勝利もしくは敗北をしないように撤退を選択出来るかが必要になってきます。」

「それを考えると不利な状況で撤退を選択出来るか有能な敵と会敵したときに守勢を取って被害を軽減する選択が取れるか不安がありませんね。」

キャゼル又大尉が目を細めて此方を見ている。

「こういつては何ですが結構細かいところまで見ているんですね？」

「当然です。最終学年の候補生のデータは全て閲覧しています。人が死ぬのは一瞬ですが育てるのは長い時間がかかります。その観点から自分の仕事は適当にしていけないと考えています。」

自分の仕事への決意を感じてくれたのが見て分かった。

ちょうど食べ終わったので話はここまでにした。

放課後に資料室に資料を探しに来ている。色々な資料がある。戦史、経済、歴史等、様々な資料が書籍媒体、データ媒体で保存されている。アーレ・ハイネセン達が行ったフェザーン経由で帝国の資料も軍事のA級保全資料等の機密以外の物も意外とある。保全期間が過ぎたもので現在に役に立つかは分からない資料だが集めている。

お目当ての資料を取って貸し出しの申請をして退室しようとして出口に向かう。途中のデータ媒体資料を見るブースに一人の候補生がいる。机に両足を乗っけている。行儀が悪すぎるので声をかけた。

「行儀が悪すぎる。候補生、学年と名前を言いたまえ。」

「えっと声を出して顔を上に向けてきた。そのままバランスを崩して椅子ごと倒れてきた。それを一歩引いて避ける。」

「イツタ〜と声をあげている。頭を擦りながら敬礼をしてから答えてきた。」

「戦史研究科初年生のヤン・ウエンリーです、クーク教官。」

「そんな体勢で敬礼、挨拶をされたのは初めてだ。」

「つい笑ってしまった。これが私と不敗の魔術師の最初の出会い」

だ
っ
た。
。

ヤンとの会話

宇宙歴783年 テルヌーゼン 士官学校

机に両足を乗っけている候補生に注意をしたら後ろ向きで倒れてきた。そのままの状態で敬礼と挨拶をしてきた。

「戦史研究科初年生のヤンⅡウエンリーです、クローロ教官。」

「そんな体勢で敬礼、挨拶をされたのは初めてだ。」

つい笑ってしまった。これが私と不敗の魔術師の最初の出会いだった。

私の言葉に頭を擦りながら立ち上がったヤンⅡウエンリー候補生は改めて敬礼をした。

「戦史研究科初年生のヤンⅡウエンリーです、クローロ教官。」

1つ頷き、此方も答礼をした。

「ユーリ・クローロ准将だ。よろしくウエンリー候補生。」

「さて、ウエンリー候補生。君に3つの選択肢をあげよう。視聴覚ブースの掃除、私の持つ本を教官室まで運ぶ、そして反省文だ。どれがいい？好きなものを選びたまえ。」

驚いた顔をしている。言われた内容を理解したのかおぼろげと返事をしてきた。

「お荷物をお持ちします。」

手を差し出してきたので本を載つける。

「よろしく頼むよ。では行こうか。」

資料室を出てからウエンリー候補生に話しかけた。

「君は何で戦史研究科に入ったんだい？」

「歴史研究者になりたいので無料で歴史を学べる当校に入ったんです。」

「そうか、それで昔の映像を見ていたと云うことか。」

「はい。教官は何をしに資料室に？」

ウエンリー候補生の疑問に微笑みながら答える。

「講義で使う資料を取りに来たんだ。人類が地球にいた頃の戦法等を振り返ろうとな。」

ウエンリー候補生が怪訝な顔をしている。

「そんな古い戦法が役に立つんですか？」

そんなことを聞いてきた。それに対して正直に答えた。

「分からん。だが何かのヒントになるものが有るかもしれないし、知識として持つておくのは決して無駄ではないと思っている。私は今はここで教官の任に着いているがいずれは艦隊司令官になる。その時の為の勉強でもあるのさ。」

私の考えを聞いて少し考え込んでいる。顔を上げると意を決した表情をしていた。

「何故そこまで努力するのですか？出世欲ですか？名誉欲ですか？何が貴方を突き動かしているのですか？」

ウエンリーの真剣な表情に感じるものがあつたので此方も真剣に答えた。

「私は今、准将の地位にいる。部下を何人も持ったことがある。そして何人も部下が死んでいる。その部下の生きた証、その部下の家族の悲しみ、苦しみ、様々な想いを背負ってしまったんだ。ここまで来て引き返すことも後戻りも出来ない。」

私の吐露した思いを聞いてウエンリーは俯いた。そもそも軍人なんて殺した殺されたなんて阿漕な職業だ。その職業で他人の思いを背負って戦うなんて馬鹿げているが、それでも死んだ者を無視して生きていくことも出来ない。

「難儀な生き方をしているんですね。自分は軍人に向いていませんね。」

そんなことを言うウエンリーに対して自分の考えを答えた。

「私も最初の少尉の時はそういった思いはなかった。昇進していく喜びがあつた。部下を持って任務に当たる時もな。しかし、直卒の部下を亡くした時に抱き始めた。そして何人も亡くしていくと大きくなってきたんだ。」

言ってしまったからしまったと思つた。まだ候補生に重たい話だ。悪影響が出ないか心配になつた。

「それをどうやって自分の中で消化しているんですか？」

そんなことを聞いてきたので真剣に真摯に正直に答えた。

「消化なんて出来ていないさ。私は背負い続けて生きていくと決めたんだ。」

「何も感じない奴もいるし、自分の出世しか見えない奴もいる。でも私はそういつた生き方しか出来ないんだ。」

「つまらない話をしてしまったな。ありがとう、ウエンリー候補生。ここまででいい。」

本を受け取り部屋に入ろうとしたら声をかけてきた。

「いえ、此方こそ色々とありがとうございました。よろしかったらヤンと呼んでください。」

そう言ってきたので。

「分かった、ヤン。また会おう。」

そういつて部屋に入った。

悪友との再会

宇宙歴783年 テルヌーゼン 士官学校

士官学校に赴任して三ヶ月経った。ヤン経由でジャン・ロベール・ラップという戦略研究科の少年と知り合ったり、同じ戦略研究科のマルコム・ワイドボーンと知り合ったりと色々あった。

そんな平穏な日常を壊す男が襲来してくるとは思っていなかった。今日の講義を全て終えたので隣の音楽学校に向かう。何時も通りのジェシカの演奏を聞きためだ。週に一回か二週に一回聞きに行っているので音楽学校の警備員とは顔見知りで手続きが楽になった。ジェシカが警備員に伝えてくれているので諸々の入校手続きをしなくて良くなつたのは助かった。

そんなことを考えながら士官学校の校門へと歩いていると一人の男が此方に向かって歩いてきている。夕方なので陽射しのせいで顔が見にくい。5m位の距離になり、その人が誰か分かった。

「あまり会いたくない人物だったので顔を顰めて声をかけた。

「部外者は立ち入り禁止だぞ。何をしている?」

その声に男は肩を竦めながら返事をした。

「勿論、閣下が将官になられたことのお祝いですよ。お互いに尉官からの仲ではないですか。あまり邪険にせんでくださいよ。」
そんなことを言ってきたので更に辛辣に返すことにした。

「お前のせいでもろくな目にばかりあっていいるからな。辛辣にもなる。軍務でもプライベートでもだ。嫌な事が多すぎる。」

その男は笑いながら質問してきた。

「話を戻しましょう。閣下は此れからどちらに?まだ就業中かと思っただけですか?」

「今日の講義は終わったから私用で早上がりさせてもらったんだ。約束の時間もあるから歩きながら聞こう。場所は近くの音楽学校だ。」

「分かりました。お供しますよ。」

横に並び歩き始めた。

「それで何の用なんですか?音楽学校になんて?」

「ピアノを聞くために行くんだ。」

立ち止まり、一瞬呆けた顔をして笑い出した。

「閣下がそんな高尚な趣味があるとは知りませんでした。分かりました。付き合いますよ。」

そう言つて歩き出した。やっぱりあまり会いたくない男だと思つた。

音楽学校に入つていつもの教室にノックをして入った。

「いらつしゃい、不良教官さん。あら、お客様？どなたか紹介してください？」

ジェシカがそう言つてきたので顔を顰めながら隣にいる男を紹介した。

「こいつはローゼンリッターのシェーンコップ大尉だ。」

紹介されたシェーンコップは恭しく一礼して挨拶をした。

「ワルター・フォン・シェーンコップ大尉です。お見知りおきを。」

ジェシカは目をパチクリしながら聞いてきた。

「ローゼンリッターってあの薔薇の騎士連隊の？貴方、知り合いですの？」

そんなことを聞いてきたので正直な気持ちを答えた。

「非常に不本意ながらな。関わらずに人生を終えられるならそうしたかったよ。」

そう答えると隣のシェーンコップは笑いながら出会いをジェシカに説明した。

「閣下の初任官の地に私達が偶然居ましてね。その不正を政治家、軍部、官僚、民間人問わず残らず検挙したのが彼なんですよ。そこで指揮下に入って取り押さえたのが我々ローゼンリッターなんですよ。」

そんな話を話していると30分ほどの時間が経っているのに部屋の時計で気付いた。

「ジェシカ、そろそろ頼むよ。私達は座って大人しく聞いているから。」

そう言つて椅子を少しピアノから離れた位置に並べて座つた。ジェシカが1曲目を弾き終えて2曲目に入った所で隣の男に声をかけた。

「それで、何の用で来たんだ？」

「あつ、やはり分かつていましたか？」

「当然だ。お前がメールや通信で済ますような内容で態々ここに来るはずないからな。となれば他聞を憚る内容何だろう。ここなら盗聴も監視もない。」

チラリとシェーンコップに視線を向ける。ニヤリと笑い話し始めた。

「実は今は我々は惑星カッフアーに居るのですがどうやらそこでサイオキシン麻薬が流行つているようですよ。」

内容に一瞬目を見開き、厳しい視線を向けた。

「事実なのだな？それで俺に何をして欲しいと？」

「流石は話が早くて助かります。実は証拠もそこそこありまして、カッフアーを預かる司令官も信頼できる方なので問題ないのですが今一強制捜査に踏み切れないようですよ。」

「そこで私に尻の蹴飛ばしを頼みに来たのか？」

「左様です、閣下。」

つい頭を搔いてしまった。

「司令官は誰だ？それ次第で言う人は変えた方が良いでしょうな。」

チラリと視線をやると直ぐに答えた。

「リンチ大佐です。」

「リンチ？アーサー・リンチか？」

「ええ、ご存じだったのですか？」

コクリと頷き話し始めた。

「私が大尉になつた時の上官だ。その時は少佐だったな。そこそこお世話になつた。軍事も軍政も器用にこなす使える人だ。恐らく惑星全体が騒動で揺れるから尻込みしてるのだろうな。帰ったら話を通しておこう。抜かるなよ、ローゼンリッター。」

「ありがとうございます。ご期待にはお応えしましょう。ローゼン

リッターの名誉にかけて。」

気障な仕草だかコイツがすると様になる。やっぱり嫌いだと思います。

「ちよつとお二人さん。私が演奏してるのに楽しくおしゃべりですか？ ホント失礼よね。」

ジェシカが注意をしてきたので2人揃って頭を下げ謝り、それから1時間程は集中してジェシカの奏でる旋律を楽しんだ。

演奏を聞き終えてシェーンコップと2人で帰ることになった。駅までジェシカを送ってから私の官舎に来るそうだ。

「ジェシカ、気をつけて帰れよ。今日は家まで送れなくて悪いな。用事が出来てしまつてね。」

「気にしないで。貴方が何も言わずに友人を連れてきた時に何となくだけど察しがついたわ。じゃあ、またね。」

そう言つて軽く手を振り駅に向かって行つた。行こうかとシェーンコップに視線をやると急に少しお嬢さんと話してくるのでここに居てくださいといつて、ジェシカの方に小走りで向かつて行つた。

一言、二言話して帰つてきた。

「すみません、お待たせしました。では、行きましようか。」

そう言つて歩き出した。やはりこの男はあまり関わりたくない男と再認識した。

嘗ての上官

宇宙歴783年 テルヌーゼン

シエーンコップをリビングに案内する。

「適当に座っていてくれ。酒を持ってくる。」

「ありがとうございます。」

シエーンコップの声を背に受けながらキッチンに向かう。キャビンからバーボンを取り出しグラスに氷を入れて持っていった。

「それでどれくらいで準備は整うんだ？」

「2日頂ければ各所に配置は完了する手筈は整えています。前以て移動すればバレルの可能性があるので直前に配置する形にしています。」

「分かった、それならいい。今から連絡しよう。」

立ち上がり携帯の通信端末を持つてくる。

「リンチ大佐は動いてくれますかな？」

「分らん。だが彼は基本善人でしたっけとした証拠と動く理由、命令があれば動くさ。多分ね。」

「期待しておきますよ、閣下。」

肩を竦めて笑うシエーンコップに一瞬視線をやってからリンチ大佐に連絡を入れた。1分程出るのに時間がかかったが出してくれた。自室のようだ。恐らく移動してくれたのだろう。

「クロー口准将、お久し振りです。また昇進なされたようでお祝い申し上げます。」

画面越しに頭を下げられた。嘗ての部下が直属ではないが上官になっている。面白くないはずなのに階級を守り、此方に対して敬語を使っている。本当に出来た人だと思った。

「ありがとうございます。運が味方してくれたようで。」

「運じゃない。君の実力は私もよく知っている。それで連絡をしてきた件は。」

リンチ大佐が口にしようとしたので手を画面に向けて言葉を止めた。

「はい、例の件です。私から紙を送るのでそちらで手配して下さい。」

責任者は私なので。」

リンチ大佐は一瞬怪訝な顔をしたが察してくれたようで1つ大きく頷いた。

「分かった。しかし文句は無しにしてくれよ。こういったことは初めてで不馴れなんだ。」

「分かりました。適当にしなれば何も言いませんよ。宜しく願います。」

「承知した。では、また会える日を。」

敬礼をして通信が切られた。

シェーンコップに視線を向けながら笑った。

「何とかかなりそうです。君が着いたら作戦開始だ。」

「そのようすな。しかし一言もそれらしい事を話しませんでしたが、よく意思疎通を取れましたな。」

「彼は有能だよ。特別数は多くないが知り合いの中では能力が安定しているよ。」

「それにこの部屋に盗聴器はないが通信は監視されてる形跡があつてね。常に用心しているのさ。面白くない事実だか。」

一瞬目をパチクリさせて笑い出した。

「ハハハハハハッ、要注意人物ということですか。大変すな。」

「仕方ないと諦めてるよ。いつか情報部に行つて、そういった技術を学び、何も心配のない生活を送る事が出来る事を願っている。」

そう言つて溜め息を吐いた。

「そういえばシェーンコップ、ジェシカに話しかけていたが口説いていたのか?。」

「閣下、私は意中の相手がいる人を口説くなんて無粋な真似はしませんよ。ちよつとしたアドバイスをね、してあげたんですよ。」

「あまり年下をからかうなよ。俺達ほど擦れてないんだからな。」

私の注意を肩を竦めて笑っている。

「今日は飲みましょう。朝まで付き合ってくださいよ。朝の便で帰りますので。」

深く溜め息吐いて頷いた。やっぱりコイツは苦手だなと思った。

朝の一時とイゼルローン要塞の講義

宇宙歴783年 テルヌーゼン

シェーンコップが襲来してから3週間、ジェシカと喫茶店で朝食を取っている。

「凄いニュースになっているわね。逮捕者続出で。」

「ああ、この際に膿を出しきろうとしているのだろうな。それが近隣惑星にまで拡がるとは思ってもみなかったが。」

「貴方は今回の事に関係しているの？この間来ていたシェーンコップさんが関わっているのは映っていたから知っているけど。」

チラリと視線をジェシカにやる。すると心配そうな顔をした。聞いてはいけないことを聞いたのかと思っただろう。

「今回は私の名前が入った命令書で強制捜査に入った。本来なら更に上官の司令長官か本部長、もしくは正規艦隊司令官などの中将以上の階級を持つ人の命令で動くべき事案だ。」

「それを私が責任を取るから好きにやって良しの命令を准将の私が出したから少し問題になっている。」

「それって大丈夫なの？」

フウーと息を吐いた。

「多分問題にはならないだろう。やり方はまずかったが結果が大きく出ている。色々と不満だろうが上としては認めざるを得ない。」

「私は最近昇進したから勲章だろうね。現場で動いてる奴らは問題がなければ昇進だろう。色々と忙しいだろうから報われるかな。」

「そろそろ行きましようか？コンサート、付き合ってくれるのでしよう？」

ジェシカが笑っている。この日常をずっと過ごさせていけたらと思った。

宇宙歴783年 テルヌーゼン 士官学校

今日はイゼルローン要塞の話で初年生候補生にしている。ワイドボーンやジャン・ロベールの姿もある。

「イゼルローン要塞は銀河帝国軍が自由惑星同盟と帝国を繋ぐ回廊の一つ、イゼルローン回廊に建設した軍事用人工天体である。」

「イゼルローン回廊における戦略補給基地、および帝国の同盟に対する抑止力として建設されたもので、多くの同盟軍人を消滅させてきた難攻不落の要塞だ。」

要塞の映像を見せながら説明する。流体金属に覆われたシヤボン玉のような美しい外観をした要塞は美しい見た目とは裏腹にその戦闘能力は凶悪の一言である。

「500万人の人員と2万隻の宇宙艦艇を収容でき、多数の強力な兵器を内蔵しているため抜群の防御能力を誇っている。」

「特に要塞主砲は下手な艦隊なら丸ごと消し飛ばす事も出来る威力を誇っており大変危険だ。」

イゼルローン要塞の基本的なスペックを説明する。溜め息を吐いている者ばかりだ。

「同盟軍は要塞主砲トゥールハンマーの射程の境界をD線(テッド・ライン)と称し、同盟軍本隊がそのD線を出入りして帝国軍を挑発する『D線上のワルツ・ダンス』を生み出したがこれで何が変わったということでもない。負け続けている。」

「帝国は何度も敗れる同盟軍の様子を見てこういつている。イゼルローン回廊は叛乱軍兵士の死屍をもつて舗装されたりと。ここから考えると作戦も無しに挑むべき物ではないということが分かる。」

「イゼルローン回廊内に帝国の手によって膨大な費用を費やして建設された。予算と運用の関係で完成までに数十年の時を費やしたが、兎にも角にも完成してからはその凶悪な攻撃力を持ってイゼルローン回廊を支配している。」

「その甲斐あって大小関係なく同盟軍の軍事行動を文字通り消し飛ばしてきた。なので考えなしに攻めて落とせることはないと肝に銘じておいてくれ。」

ちやうどチャイムがなったので切り上げた。

「ここまでだ。解散！」

少しはイゼルローン要塞の怖さが伝わっていればいいのだが。少

しでも学び、将来の役に立ってくれたらと思わずにはいられない。
1人でも多くの人が生き永らえることを祈って。

心情の吐露と戦争への思い

宇宙歴783年 テルヌーゼン

士官学校に赴任してから9ヶ月が過ぎ、初めての長期休暇が始まった。

此れから2ヶ月の休暇である。いつも通り仕事を終えてから音楽学校でジェシカの演奏を聞く。今回は部屋の外の芝生で横になりながら聞いている。演奏が終わり、ジェシカが此方にやって来た。横に腰を降ろして座った。

「貴方はどうして軍人になったの？」

右目を開けてジェシカを見ると真剣な顔で此方を見ている。目を閉じて答えた。

「どうして軍人にか。どうしてだろうな。私の家は代々医者の家系なんだ。人を救うのが仕事の家から人殺しを仕事にする、中々に皮肉だな。」

「さっきの質問の答えだが、よく分からん。何となく士官学校に入り、何となく卒業し、何となく出世して今がある。そんな程度だ。」

「私は軍が嫌いよ。」

今度は左目でジェシカをみる。前を見ていたので此方が視線を向けているのに気付いてないだろう。

「奇遇だな。私も嫌いだよ。」

「なら他の仕事でもよかったじゃない。」

「周りで士官学校に行く奴が多かったから流されたという面もある。そして運か実力か適正があって同期では一番出世した。」

「好きだからといって上達するとも限らないし、ヤル気があればどうにかなるというわけでもなく、嫌いだからといって適正がないともいえない、その典型だな。」

「それで適正をみせている軍人で立身出世をしたいと？」

「立身出世は興味がないな。ただ、責任は感じている。次は艦隊司令官が内定している。少将だから3000隻位だろう。人員にして30万人の命を預かることになる。私の命令1つで多くの者が失わ

れる事になる。其れだけは堪らなく嫌なんだ。」

「貴方は優しすぎるわ。」

「そうかな。」

「そうよ。」

「ありがとう。」

その一言で会話が途切れ、日が沈むまで静寂が支配した。

宇宙歴784年 テルヌーゼン

年が変わり後期の日程も2ヶ月で終わる。初年生に戦術シミュレーションの使い方を教えている。来年度早々に新二年生による新人戦が行われるからだ。

ワイドボーンが新人では頭一つ抜けているといったところだ。

楽しそうにシミュレーションに興じる候補生を見て暗鬱な気持ちになった。あの一つ一つに多くの人が乗っているという事実を認識しながら戦っているのかと。しかし其れは自分の感傷に過ぎず、異端な考えだと思い、心の奥底に閉まった。

最初なので此方からは使い方を教えるくらいで試合の寸評をすることもなく、各自自由にやらせている。

思い思いに楽しんだのだろうか笑顔が多い。

そつとヤンが近寄って話しかけてきた。

「厳しい目で見ていますよ。」

言われてからハツとして目を指で解した。

「今は楽しんでいればいい。だが現場で働くと多くの生き死にを見ることになる。それでも楽しめるのか一抹の不安があるんだ。」

「私の最初の赴任地は地上勤務だった。そこで汚職の取締りをした。相手が抵抗してきてね。一緒に捜査に当たった同期の頭に1発の弾丸が当たったよ。血が噴き出してから倒れ込んだ。回らない舌で死にたくない、死にたくないって言って死んだ。そこから私の価値観が変容した。それが良いのか悪いのかは分からないが。」

大きく息を吐き出した。

「つまらなく暗い話だ。すまなかった。」

「いえ、そんなことは。」

気遣うような態度をみせたヤンの頭をぐしやつと撫でてからその
場を離れた。

ヤンの才能の片鱗

宇宙歴784年 テルヌーゼン 士官学校

新年度が始まり初年生が入校して2ヶ月が経った今日から二年生のシミュレーションの大会が行われる。

注目カードは二年生首席のマルコム・ワイドボーンだろう。対戦相手がヤン・ウエンリーなのが面白い。

二階の観客席から見ると予定で部屋に入ったらしトレ校長がいた。隣にはキャゼルヌ大尉もいる。仕方ないと諦め、声をかけた。

「校長も観戦ですか？」

「ああ、毎年観戦させてもらっている。校長室のモニターでなのだが今日はワイドボーンの試合だから生で観ようと思ってる。お邪魔しているよ。」

「いえ、構いませんがキャゼルヌ大尉ですか？」

「付き合えと云われてね。」

「ご苦労様ですね。」

お互いに苦笑を浮かべている。そんな私達を見ながらのシトレ校長は話しかけてくる。

「ワイドボーン候補生の相手は誰かね？ヤン？ウエンリー？何処の学科かね？」

「戦史研究科のヤン・ウエンリーです。中々に戦史の造詣が深いので面白い戦いになるかもしれませんよ。」

「ほう、君の期待の候補生かね？」

「期待はしています。しかし、個人指導はどの候補生に対してもしていませんよ。」

「そうなのかね？理由はあるのかね？」

「先ずは得意、不得意、癖や傾向等のデータを見ています。そこから指導を入れていくのが私のスタイルなのです。」

「二年しかないのにそこまでするのかね？時間なんて幾らあっても足りないだろうっ。」

「データ全てを検証なんてしませんよ。相手の用兵の癖や傾向が分か

ればいいんです。パラパラと見るだけですからね。データは多いほうがいい。」

「君を嫌っていたホーランド候補生にも教えたのかね？」

「当然です。私は好き嫌いで区別はしませんよ。それを有効に使うか、使わないかは当人の問題です。そこまでは関知しませんかね。」

肩を竦めてシトレ校長とキャゼルヌ大尉に伝えた。

両名が顔を見合わせて笑った。

「始まりました。」

モニターに視線をやり、二人に伝えた。

宇宙歴784年 テルヌーゼン

キャゼルヌ視点

ワイドボーンが前に出ていくのに対してヤンは躲して後方に出ていく。ワイドボーンの後ろを突くと思ったが更に後方の補給基地を攻めるようだ。

「ヤン・ウエンリーの勝ちですね。」

モニターを厳しい目でクロー口准将は見ている。まだ互いに戦力に大きな差がないのに早々に告げる彼を疑いの目で見てしまった。それに気付いたのか苦笑を浮かべて訳を話してくれた。

「私とホーランド候補生の演習ですよ。あの再現になります。ワイドボーン候補生は補給が出来ない。ヤン候補生は出来る。其処を突くと思いますよ。」

「彼も見ていたのか？」

「恐らく。実際にはなく、データ保管庫にあったデータだと思います。」

「中々に勉強熱心な候補生のようだね。」

シトレ校長がクロー口准将に話しかけた。それに苦笑して答えた。「只の暇潰しでしょうね。彼がそんなものを態々見るとは思えないので。」

クロー口准将の返しに大笑いしている。私も笑ってしまった。

そこでワイドボーンの艦隊が撤退を始めた。ヤンの艦隊が反転攻

勢に出ようとしたところで演習は終わった。

宇宙歴784年 テルヌーゼン

「まともに戦っていれば俺の方が勝っていたんだ！奴は逃げ回っていただけじゃないか。」

ワイドボーンがウエンリーに向かって吠えている。それに対してヤンは頭を掻いて苦笑している。

周りもワイドボーンの味方のように卑怯者とか言っている。流石に問題だと思い、下に降りることにした。

「少し下に行ってください。」

そうシトレ校長とキャゼルヌ大尉に告げて、部屋を出て下に降りた。

シミュレーション室に入ると私の顔を見て、発言が止まった。

「さっきのワイドボーン候補生とヤン候補生の経過は見ていた。ヤン候補生の見事な作戦勝ちだな。おめでとう。」

そういつて右手をに差し出した。ヤンは私の顔を見てから、おずおずと握った。

周りから逃げ回っていたただけだと声が出た。

「君達は何か勘違いをしている。此れは1対1の艦隊戦だ。結果から見ればヤンはワイドボーンの艦隊を追い返したという事になる。あのまま戦闘を続ければ燃料切れで大敗していただろう。撤退は良い判断だった。」

ワイドボーンは手を強く握り締めている。肩も震えているから屈辱を噛み締めているのだろう。

「ワイドボーン、君は悔しがっているがあのまま戦えば全滅していただろう。そうなれば 150万人が死んだという事になる。」

私の言葉に皆がハツとしている。

「それを防いだのだ。私は高く評価する。あそこで無理攻めをしなかった君をな。」

そう言つてワイドボーンに笑いかけた。

「君達は士官になる。部下を持つということだ。部下を無駄死にさせ

ることのないようにするのが仕事になる。無駄死にしたいなら自分だけでやってくれ。それが分からないなら軍人になるのは止めた方がいいと私は思っている。」

「君達に求めるのは勝つことだがそれが厳しいなら難しいなら退くことも勇気を持って選択できる軍人になってほしい。どうか無駄に人を殺さないようにしてくれ。」

私の言葉に場が静まり返っている。重く暗い言葉に何もいえないのだろう。だが其れで良い。自分の生死について真剣に考える機会になってくれたのなら。そう思いながら部屋を出た。

夏季休暇

宇宙歴784年 テルヌーゼン

夏季休暇まであと1週間のこの日はヤンとラップを引き連れてジェシカのピアノを聞きに来ていた。

ラップは窓辺にもたれ掛かりながら、ヤンは木の下に座りもたれ掛かっている。私も木陰に寝そべりながらといった思い思いの格好で聞いている。

ジェシカの演奏が終わったのでヤンに気になっていたことを聞いた。

「ヤン、お前夏季休暇に外出も外泊も予定がないらしいな？お前1人だけ申請がないそうだが。」

私の質問に驚いたのかラップがヤンに事実か尋ねている。

「本当か？2ヶ月もあるのに1人で寮にいる気か？」

ヤンは困った時にする癖の頭を掻く癖をみせながら答えた。

「はい、その予定です。身寄りがいませんので何処かに帰るも出来ないの。アハハ。」

苦笑しながら言うヤンに士官学校の予定を伝える。

「真ん中の1週間は売店も食堂も閉まるから食べ物も調達してこないダメだぞ。それに外出許可を出す先生方も出勤してこないから食えずに過ごすことになるぞ。」

呆れながら云うと驚いた顔をしたヤンが聞いてきた。

「クロー教官も来ないのですか？いざとなれば全部教官に頼ろうと思っただけです。」

おずおずと言っているのに図々しい内容に思わずこめかみを押しえた。

「おい、幾らなんでも図太い要求だろ。」

ラップも思ったのかウンウンと頷いている。ヤンに自分の予定を伝えてから提案をした。

「私は将官用の避暑地が当たったから其処に行く予定だ。何ならヤンも来るか？」

私の提案に心底嫌そうな顔をしてヤンは答えた。

「男2人で避暑地ですか？ゾツとしますね。ゴメンです。」

その物言いにラップと顔を見合わせて笑った。

「あら、いいじゃない。将官用の避暑地なんて早々行けるものではないわよ。予定を空けるわ。」

後片付けを終えたジェシカが窓辺に来ながら伝えた。

「クロー口准将も今年度一杯で教官も終わりでしょ。父が言っていたわ。なら記念に行きましょうよ。花も恥じらう女の子が付き合うわよ。」

そんなジェシカの提案に私は軽口で返した。

「ほう、そんな知り合いがジェシカにいるとは驚きだ。是非とも紹介してほしいね。出来るならグラマラスな方がいいね。」

そんな返しをヤンとラップは顔を見合わせて肩を竦めた。当のジェシカは頬を膨らませている。そして皆で笑いだした。

「悪かったよ、ジェシカ。予定はこれになるが大丈夫かな？」

皆に確認を取ると了承したので決定のようだ。休暇の予定が引率になるようだ。小さく溜め息を吐いた。

宇宙歴784年 湖畔

予定通り将官用の避暑地にヤン、ラップ、ジェシカを連れてきた。男3人に女1人で問題があるかと思ったら士官学校の事務長を勤めるジェシカの父親は思いの外簡単に許可を出した。どうやら度々私の事が家庭内の話題に出ているようで娘が信頼しているならと云うことのようにだ。但し私の端末に連絡が来て、くれぐれもよろしく頼むと釘を刺す事も忘れてなかった。キャゼルヌがいるからそれとなく挨拶付き合いがあるのも関係したのかもしれない。

「おい、ヤン。見ろよ。絶景だぞ。」

「ああ、ラップ。そうだね。」

ヤンはこういう事に慣れてないのかぎこちないが追々楽しんでくればいいのかと思った。

「気持ちいい風ね。夏とは思えないわ。日もキツくないし風が適度に吹いていて。」

白いワンピースを着たジェシカが風でたなびく髪を押さえながら言う。

「ああ、思ったより良いところだな。おい、落ち着いたら荷物を部屋に運べ。夕食はBBQを用意してくれている。1時間後に準備をして食事にしよう。」

3人から「はい。」と言う声を聞いてからコテージの中に入った。部屋を決めて、荷物を置き、着替えてから食事の準備をする。といても炭に火を付けて焼くだけだから30分もあれば終わる。

各々思い思いに食べている。私も送っていたバーボンを飲みながら食事をする。

「それにしてもお前達は教官引率の旅行で良かったのか？息苦しいだろう？」

そんな質問に3人から笑いながら返してきた。

「いや、教官は講義ではピリピリしてますがそれ以外では話し掛けやすいですよ。真剣に聞いてくれますし、答えてくれますから。兄貴みたいです。」

「はい、自分も上手く付き合うとか考えなくていいのは楽です。それにビールを飲んでも煩く言っておかないですから。」

「紳士だし、一線はしっかりしてるから付き合いやすいわね。」

ラップ、ヤン、ジェシカの言葉に苦笑を浮かべた。

「褒められているのか誉められているのか分からんが、褒められたと取ろう。人間前向きが良いらしいからね。」

肩を竦めた私を皆で笑った。そんな感じで旅行の初日は終わった。

告白

宇宙歴784年 湖畔

2日目は釣りをしている。隣にはラップが釣竿を垂らしている。少し遠くにボートが見える。ヤンがジェシカに引つ張られて乗っているようだ。ヤンの事だからヒーヒー言いながら漕いでいるだろう。それよりもラップが2人に付いていかないで釣りをしているのに驚いた。

「良かったのか？2人に付き合わなくて？」

此方をチラリと視線を向けた。

「はい。少し教官と話したいことがあったのでヤンに無理を言ってジェシカを連れていってもらいました。」

私もラップに視線を向け、聞く体勢をとった。

「教官はジェシカの気持ちに気が付いてますよね？教官御自身はどう思っているのですか？」

真剣な思いで言っているのが伝わってきた。はぐらかすのも誤魔化すのも嘘を付くのも悪いと思わせる口調だ。

「自分は好きです。男として彼女に魅力を感じていますし、友人から一歩進んだ関係になりたいと思っています。」

真剣に答えたラップに此方も真剣に答える義務があると感じたので思いを伝えた。

「彼女に対して恋とまで言っていないのか分からないが好意を持っているのは事実だ。真面目で勉強熱心で優しさもある良い女性だと思っている。性格が真っ直ぐでキツイところがあるが。」

スツと対岸で椅子に座っている二人組を指差した。

「私は要注意人物のようで情報部に監視もされている。湖の対面に人がいるだろう？あれとコテージの時にすれ違った人、あれも情報部の人間だ。そんな男がいいのかとって思いもある。」

「それに私と彼女は10はないがそれなりに年が離れている。そこを無視して踏み込んでいいのかと不安も自分の中にある。」

ラップは真剣な顔から笑顔みせた。

「それを決めるのは貴方じゃないです。貴方と彼女が2人で決めるんです。話し合うべきだと思いますよ。」

「そうか、そうだな。ありがとう、話してみるよ。」

私の決意にラップも真剣な顔で頷いた。

宇宙歴784年 湖畔

「ジェシカ、少し話がある。時間を貰えないだろうか？」

夕食を終えて、ヤンとラップは風呂に行っている。後片付けを終えたジェシカに声を掛けた。不思議そうな顔をしている。

「ええ、分かったわ。ここでいいの？」

ジェシカの質問に少し考えて答える。

「いや、折角だから、湖を見ながら話さないか？」

「ええ、分かったわ。行きましょう。」

そう言って2人連れ立って湖に向かう。

この夜は風がないから湖に月と星が映っていて幻想的な景色が広がっていた。

「綺麗ね。来て良かったわ。ありがとう。」

「ああ、私も来ることが出来て良かった。」

しばらく2人で景色を静かに見ていた。3分か5分か見ていると少し風が吹いて木々が音を鳴らした。そこで静寂が途切れた。

「それで話って何かしら？」

私の眼を逸らさずにジッと見つめてくる。その顔に思わず躊躇ってしまった。頭を手で掻き回す。

「ジェシカ、私は君よりも年上だ。それでも私は君に好意を抱いているんだ。その、こんな私だが付き合ってほしい。」

言うだけ言って眼を瞑ってしまった。ああ、言ってしまったと若干の後悔がある。関係が変わる事に怯えがあるのだろう。

1分程、無言の時間が流れた。そしてジェシカの口から答えが伝えられた。

「あゝ、えっと。その、私もユーリの事が好きです。不束者ですがよろしくお願ひします。」

まさかの返事に驚いて、ジエシカの顔を見た。

「本当にいいのかい？」

「ええ、よろしく願います。」

「そっか。ありがとう。これからもよろしく願います。」

そう言つて右手を彼女に差し出した。彼女が手を乗せてきたので指を絡めた。

「そろそろコテージに戻ろうか？」

そうジエシカに聞くと首を横に振った。

「お願い、もう少しここにいきましょう。こんなに綺麗なんだもの。」

「そうか、そうだな。もう少しここにしようか。」

互いに肩を寄せあつて幻想的な景色をしばらく眺めることにした。

上官グリーンヒル司令官

宇宙歴784年 テルヌーゼン

1週間の避暑地への旅行を終え、帰ってきた。ジェシカと付き合うことになったことを一緒に旅行に行ったヤンとラップに伝えると祝いの言葉とからかいの言葉も貰った。教官でもからかう、良い性格した教え子だ。

家の端末に連絡が来ていた。とある人物からの連絡だ。

会いたかったので連絡をくれと入っていたので連絡をして予定を調整した。3日後に夕食を共に取る約束になった。

当日の午前中にジェシカに付き合ってもらいお土産に持っていく菓子折りを買いに行き、昼食を共に取ってから別れた。

夕方に一軒の住宅を訪れていた。チャイムを鳴らすと1人の女性が出てきた。

「いらつしやいませ。ユーリ・クロー准将ですね。どうぞお入りください。」

そう言つて勧めて来たので入った。

案内されてリビングに入ると壮年の男性が1人立っていた。敬礼をして挨拶をする。

「ユーリ・クロー准将です。本日はお招き頂き、ありがとうございます。」

男性は軽く答礼して、直ぐに手を下ろした。

「座つてくれ、クロー准将。」

勧められたソファアの場所に座ると男性も紹介した。

「ドワイト・グリーンヒル少将だ。初めましてだな。」

「はい、御名前は存じ上げておりましたがお会いするのは初めてになります。」

「今回の大規模組織再編で君は私の艦隊の副司令官に任命されることになっている。」

「ハッ、そのように聞いております。」

固い返事にグリーンヒル少将は苦笑しながら伝えてきた。

「今はお互いにプライベートだ。普通に喋ってくれ。家庭にいるのにそれでは息が詰まる。」

「そう仰られるのでしたら。」

「よろしく頼むよ。話を戻そう。副司令官として4500隻の指揮を頼むことにしている。」

「私は6000隻、分艦隊司令官3人に1500隻ずつの予定だ。此れは15000隻の場合だがね。」

「承知しました。閣下がそれで良いなら此方に問題はありません。」

奥方がコーヒーを持ってきてくれた。そこで私が持ってきたお土産を渡した。

「あら、モン・サン・ミッシェルのクリームチーズケーキじゃないですか。朝から並んで買いに行ってくれたの？娘も喜ぶわ。」

「何だ、知っているのか？」

奥方の反応にグリーンヒル少将が訊ねた。

「ええ、有名なケーキ屋の一番人気のケーキですよ。朝の10個で終わりだから中々手に入らないのよ。食後にコーヒーとお出ししますね。」

「いえ、御家族でお召し上がりください。」

「こんなに良いもの、私達だけで頂くなんて出来ないわ。ねえ、貴方？」

「そうだな。折角持ってきてくれたのだから皆で食べようじゃないか。」

2人の勧めに了承した。

「分かりました。では食後に。」

「もう少し待ってくださいね。30分程で食事が出来ますからね。」

「ありがとうございます。」

頭を軽く下げた。

30分程で食事がテーブルに並んだ。ご息女も降りてきて。4人でテーブルを囲んで食事になった。ご息女が隣に座っている。

「ユーリ・クロー准将です。よろしくお願ひします。」

「フレデリカ・グリーンヒルです。よろしくお願いします。」

ぎこちない挨拶を交わす私達に奥方が間に入ってくれた。

「フレデリカ。ユーリさんがモン・サン・ミッシェルのクリームチーズケーキを持ってきてくれたのよ。食後に頂きましょうね。」

此方をバツと見て御礼を言ってきた。

「本当ですか！ありがとうございます！」

「ああ、喜んでもらえたなら良かった。」

ぎこちないながらも食事は進んでいった。

食事が終わり、食後のケーキを食べて、楽しい時間が終わり、グリーンヒル少将が自室に私を誘ってきた。恐らくこれが本題だろう。

「シトレ中將から聞いたが中將が考えた作戦案を危険だから止めるように進言したそうだね？」

少し厳しい視線を向ける。内容が内容だ。何故知っているのかという疑問に答えてもらうための視線だ。

「閣下から直接教えてもらったのだ。その作戦には私も参加する予定だからね。此れを知っているのはビュコック少将、私、そして君の3人だ。」

「危ないと言っていたと聞いたがどれくらい危険だと考えているのかね？」

「限りなく危険だと思っています。先ず要塞を保持している帝国側が圧倒的に有利なんです。それがイゼルローン要塞ならば尚更です。」

「トールハンマーもあるのです。普通にすれば守れて当然なんです。それを落とされるかもしれないところまで追い詰める。それで常道の防衛を要塞司令官が続けると思えますか？」

深く考え込んでいるグリーンヒル少将に構わず続ける。

「万が一でもイゼルローン要塞を落とされたら司令官2人は皇帝に殺されますよ。下手をすれば家族、親族悉くかもしれない。そんな状況を我々が作って味方ごと撃つのを躊躇うと思いますか？だから止めた方が良いと進言したのです。」

「いや、非常に考えさせられた。少しシトレ中將、ビュコック少將と話してみよう。」

「それがよろしいかと。」

お互いに頷き、この話はここまでにしようとなった。

「クロー准将は今の政府、軍の在り方をどう思うかね?」

質問の意図が分からず訊ねた。

「どういう意味でしょうか? 在り方というのは?」

私の答えに苦笑を浮かべて話し出した。

「いや、先走ったな。ロボス中将は軍内部で派閥を作ろうとしているよなのだ。パエツタ、ルフエーブル、ムーア、ホーウッド、アル・サレム辺りが集まっているようだ。国防委員会で力を付けてきているヨブ・トリューニヒトと組んでいるようだね。」

「それは軍閥化ということですか?」

「ああ、そうみたいだ。互いに協力しあって勢力を大きくしようというところらしい。」

「なるほど、では来年の出兵は?」

「ああ、手柄を先にかけてロボス中将と子飼いの部下で上層部を固めようといった腹のようだ。」

「私はどうやらシトレ中将派閥に見られているらしい。ビュコック提督、ウランフ提督、ボロディン提督もね。私に関してはそんなことはないのだがね。どちらが上に立とうが変わらずに協力し合うだけなのだ。アップルトン提督は私と同じどっち付かずのようだね。」

上の混沌とした派閥争いに辟易としたのだがそれを吹き飛ばす威力を持った爆弾を投下してきた。

「君もシトレ中将閥と見られているよ。それも懐刀とね。」

「私はシトレ中将と特別親しくないのですが?」

「士官学校の教官を君は勤めていて、校長がシトレ中将なのにかね?」

「はい、小官に疚しいところなどありませんよ。」

グリーンヒル少将がフフツツと笑っている。

「君がどう思ったか、思っているかは関係ない。周りからどう見られているか、見ているかだよ。どう見ても側近と見られるよ。同じタイミングで士官学校に着任して退任するのだからね。」

あんまりな内容をグリーンヒル少将に告げられて天を仰いでし

ま
っ
た。
。

艦隊運動の講義

宇宙歴784年 テルヌーゼン 士官学校

今日は艦隊運動の講義をしている。私が正規艦隊司令官の部隊に配属されることが噂として本格的に流れ出した為か候補生達の聞く態度が少し変わったようだ。

「稀に艦隊戦で敵に後方を取られることがある。その際の自艦隊の取るべき行動について話そう。」

「我が艦隊は前方に向けて航行している。そこを敵が後方に現れたと想定する。その際にその場で反転するのは最大の悪手だ。デメリットが多すぎるからだ。それを説明していく。」

モニターに自艦隊と敵艦隊を映しながら説明していく。

「先ず自艦隊は前方に移動しているので、その場で反転するなら一旦停止させてすることになる。その際に距離を詰められて先制される。そして横腹を見せながら攻撃を受ける事になる。そもそも反転するスピードが違うから艦隊として攻撃をするのに時間も掛かるからメリットがあるのか分からない。」

「では次に前方に移動しながら小回りでの反転の場合を説明する。艦隊には色々な種類の艦がある。反転するのに必要な距離、速度、周りとの距離もある。ぶつかったりしたら一大事だからな。なので一斉に反転など出来ない。なので此れも危険なので止めた方がいいだろう。」

「ここでの対処法としては前方に進みながら大きく円を描いて敵の後方に食らいつくが無難だろう。互いに尻尾を噛みつく形だ。」

候補生達がざわついている。

「何か質問があるか？疑問があるなら聞きなさい。自分の命がかかっている。」

1人の候補生が質問してきた。

「それで勝てるのでしょうか？互いに尻尾を噛んで円を形成する。消耗戦になるのでは？」

候補生の質問に頷きながら答えた。

「敵に先手を取られている。しかも後方を取られている。ここから逆転など不可能だよ。よほどのバカが敵の司令官でもない限りね。」
「消耗戦に持ち込んで相手と息を合わせて互いに撤退をするのがベストになる。」

「こういった敵に後方を取られた時に慌てて全艦反転を出す司令官がいる。正常な思考が出来ていない訳だ。戦場が人を追い込むということがよく分かる事例だな。」

講堂を見回してから講義を締める。

「キリがいいからここらで終わろう。お疲れ様。」

そう言ってから部屋を出た。

宇宙歴784年 テルヌーゼン 音楽学校

今日はジェシカに誘われて音楽学校に来ている。クリスマスなので、音楽学校の中で様々なイベントが行われている。学校内の教会で讃美歌を歌っていたり、ホールで発表会をしていたり、飲食店をしている所もある。

ジェシカはホールでピアノの演奏をしていた。色々と見学した。ジェシカはクラスでクレープを作っている。発表会の後2時間はクラスの方に参加する予定らしい。

目当てのクラスに入ると直ぐにジェシカが見つかった。エプロンをして綺麗にクレープの皮を焼いている。

「やあ、今日はお招きありがとう。」

挨拶をすると笑顔になった。

「もう少しだけ待って。時間まで少しあるから。」

「ああ、少し早く着きすぎたな。」

「いいわよ、ただそこだと邪魔になってるから廊下で待ってて。」

後ろに並んでる人がいるので取り敢えず注文をした。

「クレープを1つ、クリームとバナナとチョコので頼むよ。」

「あら、本当に頼むの？分かったわ、少し待ってて。」

そう言って手際よく作っていく。出来上がったのを紙で巻いて差し出してきた。

「はい、出来上がり。どうぞ。」

ジェシカから受け取ると彼女はそのままエプロンを外して店の子に声を掛けた。

「時間だから上がるわね。後はよろしく。」

そう伝えてから私の手を取って引っ張っていく。

様々な催し物を見て楽しんだ。少し疲れたので少し人通りの少ない場所でコーヒーを飲みながら会話をした。

「来年早々に戦争があるそうね。貴方は参加しないのよね？」

「ああ、士官学校の任期中だからな。私は再来年になる。要塞攻略戦か艦隊決戦かは分からないが、その予定だ。」

「勝つても帰ってきてとも言わないわ。1つだけ約束して。最期まで生きることを諦めない、命を粗末にしないって。」

「縋るような視線を向けてくる。」

「来年の話だ。気が早いな。」

茶化そうとしたが首を横に振っている。

「貴方が出来る人だということは知っているけど心配で。」

「大丈夫だ。私は無茶も無謀も冒険もしない。必ず生きて帰ってくるさ。ずっとね。」

そうジェシカに伝えてから唇にキスをした。

バレンタインと名将との出会い

宇宙歴785年　ゴールデンブリッジ　自宅

今日は2月14日だ。そう、バレンタインデーである。ジェシカが私の家に来ている。チョコを一緒に作ろうと云うのである。それは云いとして、何故かヤンとラップも付いてきたことが問題だ。空気の読めない教え子だ。正直、超迷惑だ。空気を読まずにヤンが話しかけてきた。

「教官がここに住んでいたなんて知りませんでした。」

チラリと視線をやり、答えた。

「先月引越したんだ。色々トラブルがあつてね。それに4月に少将になることが内定している。ついでだから引越せと命令がきたんだ。」

コーヒーを3つ入れて持っていった。ヤンが嫌そうな顔をしながら紅茶がよかったとブツブツ文句を言っている。

「空気を読まずに来るからだ。反省しろ。」

私の答えにラップとヤンが顔を見合わせて笑った。ヤンがコーヒーにミルクと砂糖を大量に入れてから一口飲み顔を顰めた。そんなヤンを見ながらラップが質問してくる。

「色々なトラブルがときつき言ってきましたが。」

「ああ、佐官用の官舎に炸裂弾をぶちこまれてな。部屋がボロボロになったから引越したんだ。」

冷たい視線をラップに向けながら答えた。ラップとヤンは顔を引きつらせている。

「何でそんな事態になったんです？」

「私が汚職、サイオキシン麻薬、スパイで3回昇進したのは知っているな？」

此れは軍内部どころか同盟市民の多くが知っていることだ。ニュースで大々的に報道され、ドラマにもなったから有名だ。

「その関係者の襲撃だろうと思っっている。どれかまでは分からないがな。」

「逮捕されてるのですか？」

「ああ、大体はな。全員かと言われると分からないが。」

「偉くなるのも考えものですね。」

「安心しろ、ヤン。お前に立身出世する要素が見当たらん。」

私の突っ込みにラップは吹き出して爆笑し、ヤンは懽然としている。その様子に私も笑ってしまった。

「今の世の中は簡単に人が死ぬ。長寿を全うするのも大変だ。生き残るための努力は怠るなよ。」

ヤンはやれやれと首を横に振っている。

そこにジェシカがやってきた。お皿にチョコがのっている。どうやら出来上がりのようだ。

宇宙歴785年 ハイネセン 統合作戦本部

3月5日、私は統合作戦本部に召集命令を受け、集合場所の部屋に向かっている。内容は大体は想像がつく。3月1日に行われたロボス大將率いる自由惑星同盟軍4万3000隻とミュッケンベルガー元帥率いる3万9000隻がイゼルローン回廊同盟側出口付近で3個艦隊同士の艦隊決戦になった。

結果としては多数の同盟が攻め、帝国が守るといった形になった。帝国が巧みに守り同盟側が敗走迄はいかないまでも敗退と言っていない結果に終わった。

下士官に待ち合わせの部屋に案内してもらった。

入りましたまえというシトレ中將の声が聞こえたので部屋に入る。

「失礼します。ユーリ・クーク准將です。召集命令を受け参りました。」

敬礼をして挨拶をする。中にはシトレ中將、ビュコック少將、ウラソフ少將、ボロディン少將、グリーンヒル少將が椅子に座っていた。「そこに座ってくれ。ああ、遅刻ではないよ。我々は艦隊司令官同士の打ち合わせをしていたのだよ。」

そう声をかけられながら椅子に座る。

「それで何の用でしょうか？」

意地の悪そうな笑顔を見せている。

「何の用か、見当はついているだろうか？」

「先の艦隊決戦の考察をするためでしょうか？ 態々私を呼ぶ必要があったので？」

フウーと息を吐いて答えた。

「やはり君は聡いな。君が有能だから呼んだんだよ。他の副司令官、参謀長は呼んでいない。君をここに居る皆が高く評価しているということだ。」

「左様で。」

「誰か顔見知りはあるかね？」

「ビュコック少将です。ビュコック少将、御無沙汰しておりました。お元気で何よりです。あの時は大変お世話になりました。」

ビュコック少将に頭を下げて挨拶をする。顔を上げてビュコック少将の顔を見ると皺が多い顔を更に皺を深くしている。

「あの時の小僧か。嫌な目によくも遭わしてくれたな。」

ウランフ少将が間に入ってくれる。

「2人の間に何があったのだね？」

「小官が中尉の時に任地のパトロール艦隊を率いていたのがビュコック少将だったのです。当時は中佐でしたね。」

嫌そうな顔をしながら私の話を引き継いだ。

「こやつが来て1月で惑星単位の不正、汚職を調べ尽くしよつての、検査したいから部隊の乗組員を貸せと言って来たのよ。突入はローゼンリッターがするから確保したのを取り調べ等を担当しろとな。」

ボロデイン少将が昔の事件を上を見ながら思い出そうとしている。

「ありましたなく。あれにビュコック少将が関わっていたとは。」

ビュコック少将がボロデイン少将を睨んでいる。

「脅してきおつたのよ。同盟全土に広がるニュースになるでしょう。その際に協力にしていただけなら小官にインタビューが来た時に非協力的だった、何なら関わっていたのではないかと言いたくなるような事がないようにとな。お陰で大佐に昇進させて貰ったがな。」

吐き捨てるように言うビュコック少将の様子に皆が顔を見合わせ

て苦笑している。シトレ中将が笑いながら私に言ってきた。

「初任官から上官を上官と思わなかったのだな。」

その言葉に4人が失笑している。コンコンとノックがされ、入ってきた下士官が皆のコーヒーを入れ替えて私の前にコーヒーを置いて出ていった。

「さてそろそろ映像を見ながら検討を始めよう。君のコーヒーも来たようだしね。」

シトレ中将の言葉に皆が顔を引き締めて頷いた。

此から本題が始まるようだ。

同盟、帝国の人の考察

宇宙歴785年 ハイネセン 統合作戦本部

統合作戦本部の1室にシトレ中將、ビュコック少將、ウランフ少將、ボロディン少將、グリーンヒル少將と私の6人でロボス大將がパエツタ中將、ムーア中將の2人を率いて戦った会戦を見ることになった。帝国はミュッケンベルガー元帥が総大將でゼークト中將、シュトゥックハウゼン中將を率いていたようだ。

シトレ中將がフェザーンから入ってきた情報を我々に見せながら説明する。

「ゼークト中將、シュトゥックハウゼン中將は今のクライスト大將、ヴァールテンベルク大將の後にイゼルローン要塞司令官、駐留艦隊司令官の筆頭候補のようだ。」

グリーンヒル少將がシトレ中將に質問した。

「その2人の戦歴から読み取れる事はありそうですね？」

「クロー准將、どう見るかね？」

自身にされた質問を私に回してきた。この腹黒狸と思ったが真摯に答える。

「ゼークト提督のこれまでの戦い方を見ると攻勢に対して自信があるように見えます。シュトゥックハウゼン提督は敵の攻勢を巧くいなして逆撃を与えて崩す形が多いですね。守勢に用いたい提督と評価します。」

ビュコック少將が嫌そうな顔をしている。

「君は本当に出来る男だな。そんなに早く出世する理由が分かったよ。」

一礼して嫌みを躲す。話を続けていかたとシトレ中將に顔を向けると頷いたので映像を流しながら話した。

「中央に関してはロボス大將、ミュッケンベルガー元帥共に攻勢に力を発揮するタイプの司令官なので共に攻勢強めながら被害を出しあっている形になります。」

皆が頷きながら話を聞いている。話を続ける。

「同盟左翼のパエツタ中將は守勢を取り、帝国右翼のゼークト提督の攻勢を受ける形になっています。しかしながら上手く言っておらず崩れる迄は行っていないものの負けていると言つて過言ではないでしょう。」

「同盟右翼のムーア中將は帝国左翼のシュトックハウゼン提督を攻めるも上手く攻撃を流されている形になっています。」

ウランフ少將が感想を述べた。

「ムーア中將は攻撃を上手く対処されているな。ミュツケンベルガー元帥との繋ぎ目にいる分艦隊に良い攻撃を入れられている。」

此方を見てきたので資料を見ながら答える。

「シュトックハウゼン提督の分艦隊司令官ウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッツ少將ですね。戦歴が長く帝国のビュコック少將のような方です。」

ボロディン少將がメルカッツ少將について訊ねてきた。

「君は彼の戦歴を見てどう思う？主観的でも構わないから言つてくれ。」

「敵の意図を読むのが上手いですね。ムーア中將の分艦隊が中央の援護に動いたのを見てタイミング良く効率的に攻撃していると分かれます。ここからムーア中將の左翼が崩されて中央と挟撃の形になり敗走しています。そのタイミングでパエツタ中將の艦隊もゼークト提督の攻勢に耐えきれず崩れて敗走。帝国の両翼は追撃、中央もメルカッツ少將の大外からの援護射撃で崩れて敗北となりました。」

説明が終わり5人の顔を見ると暗い顔をしている。

「帝国側は5000隻位の被害だそうです。それに対して同盟は15000隻は失ったそうです。完敗といっても差し支えないかと。」

ボロディン少將が私に苦言を呈した。

「クロー准將、もう少しオブラートに包むとかしないのかね。」

苦笑して返すことにした。

「資料に載っている事実を申し上げただけです。これでオブラートに包む報告をしろとは虚偽を申せと言うことでしょうか？それは軍人として如何なものかと愚考しますが。」

私の申しように皆が溜め息を吐いた。シトレ中將がその空気を振り払うように私に質問した。

「准將、この戦いで勝つことは出来なかったかね？」

「無理でしょう。両翼が最初から上手く行っていないのです。中央はいつ崩れるか分からない。両翼を見ながら集中して戦えると思いますか？無理ですよ。」

グリーンヒル少將が深く溜め息を吐いた。

「身も蓋もない事を言うな、君は。そんな君が私の副司令官か。災難かもしれないな。」

その物言いが壺に入ったのか皆が爆笑している。一頻り笑ってからシトレ中將が伝達事項を伝える。

「4月に我々は階級が1つ上がり配属される。それから訓練を開始して11月に出兵の予定になっている。どの提督を連れていくかはまだ決めてはいない。訓練の状況、練度、互いの意志疎通等の相性を見て決めるので励んでくれ。よろしく頼む。」

皆でシトレ中將に敬礼をして答えた。

卒業式と退任

宇宙歴785年 テルヌーゼン 士官学校

今日は卒業式と終業式だ。私も退任になる。2年と言う短い期間の教官生活だったが仕事としては頑張ったと思う。

式が進み、私から卒業生への訓辞になった。必要な事を端的に言うことを決めていた。

「卒業生諸君、君達は今まで死ぬことがなかった場所から死ぬ確率が高い職場も混ざった所へバラバラに配属されることになった。毎年老若男女問わず多くの軍人が死んでいる。無能な上官に当たり死ぬこともあれば運に恵まれ出世することもあるだろう。実力があっても流れ弾1発で死ぬこともある。」

「どんな人間にも命は1つしかない。無駄な命の使い方はしないように願う次第だ。君たちの武運長久と幸運を祈る。」

敬礼をして壇上を降りた。内容が過激かつ事実をリアリティーに伝えた為か拍手はなく、ざわつきが止まらない。進行の教官が重い空気を振り払うように次々と式を進めていき、何事もなく終わった。

宇宙歴785年 ゴールデンブリッジ 自宅

式が終わり自宅にキャゼル又大尉を連れて帰ってきた。独り身同士の夕食だ。デリバリーを頼んでいたのが届いたのでテーブルに広げて夕食の準備をする。

そこにヤンとラップがやってきた。ヤンがムスツとしている。先日シトレ校長から聞いたあの事だろう。

「失礼します！教官、シトレ校長から聞きました。来年度で戦史研究科が廃止になるそうですね。私は戦史を研究したくて士官学校に入学したのです。学生を募集しておいて、卒業前に学部を廃止するのはおかしいと思いませんか？」

フツと笑ってしまった。

「確かにヤンの言う通りだろう。しかし軍上層部の決定である以上は候補生の君達は従わなければならない。しかしその事を上申するの

は問題ないだろう。今年の決定がひっくり返えられないが未来の候補生の為にするのは良いと思う。」

「ついでに言うておくが私は退任した身だから手伝わないし、特段アドバイスもしないからな。自分達の力で動くんだな。大変さが良く分かるだろう。」

そう私の考えを伝えると不貞腐れたのかハイピッチで飲んでる。ヤンとラップは酔い潰れて寝ている。キャゼル又とサシで飲んでる。

「私も来年度で後方勤務に移ることが決まりました。補給担当の責任者で派遣されるようです。」

「おめでとうございます。次の遠征の時はよろしく頼むよ。」

「はい。私に出来ることはしますよ。その時はよろしくお願いします。」

「私は補給等の準備は万全にしたいタイプなんだ。疎か、軽視する司令官がいるが私からすると早死にしたいようにしか見えない。そういった意味では後方に信頼できるキャゼル又大尉がいてくれるのは助かるよ。」

「後方支援を軽んじる人が多いのはずっと気になっていたのですがクロー口准将がそういつてくれると少しは変わりますね。」

そんなことを話ながら、しばらくはお酒を楽しみながら飲んでるとキャゼル又大尉が思い出したかのように言ってきた。

「私の事はアレックスと呼んでください。」

そんなことを言い出した。

「いいのか？」

「はい。仲良くさせていただいているので。」

「分かった。私の事はユーリと読んでくれ。」

「流石に呼び捨てはまずいのでユーリさんと呼びますね。」

そんなことを言いながら親睦を深めて夜も更けていった。

出兵式典

宇宙歴785年 テルヌーゼン 士官学校

6月のある日、1日休暇の私はアレックスと飲みに行く約束をしたので夕方に士官学校を訪れていた。たった2ヶ月前まで毎日のように来ていたのに2ヶ月来ないだけで懐かしさが胸にあった。

門の前ではヤンとラップ、ジェシカの3人がビラを配っている。ヤンは『戦史研究科廃止反対』の文字が書かれた旗を持ち、所在無さげに突っ立っている。どうやら熱心に活動しているのはジェシカで、その熱意に付き合っただけで真面目に取り組んでいるのがラップのようだ。

ヤンはここまで大事になるとはって困惑しているのだろう。

遠巻きにコーヒを飲みながら抗議運動を見物する。私を見つけると、一観衆に徹しようとする私に不満なのだろう。ジェシカが眉を顰めて手招きをしている。

「貴方、後輩がこうやって頑張っているのに遠巻きから見てるだけなんてどうなのよ！」

怒っているジェシカを見てからヤンに目を向ける。ジェシカもヤンに目を向けたので一言伝える。

「あれで精一杯頑張ってるって。」

つい笑ってしまったが思っていることが伝わったのだろう。額に手を当てて唸っている。

「それにだ、戦史研究科は廃止になるが放校になるわけではなく、別の科に移動できるんだ。そこまで酷いことをされてるわけではないだろう？一番下の科からの移動だ。最低限の配慮はされているよ。」

「軍の候補生として軍から給与を貰っている以上は決定に従わないといけない。部署異動と一緒にだ。それが嫌なら辞めるか抗議をすればいい。どういう結果になるかは見当はつくが。」

ムスーツとしているジェシカに苦笑してしまった。

「心の中では応援しているよ。」

そう告げて肩を叩いて校内に入っていく。

宇宙歴785年

ハイネセン

統合作戦本部前

11月になり、遂に出兵になった。シドニー・シトレ大将を総司令官にビュコック中将、グリーンヒル中将の2人が従う形で総勢4万5000隻の艦隊で出撃する事になった。

対する帝国もミュッケンベルガー元帥を総司令官にクラーク上級大将、グライフス中将が従い、総勢4万4000隻の艦隊のようだ。現在は国防委員会副委員長に先日就任したヨブ・トリューニヒトが戦意を煽る煽動演説をしている。シトレ大将を始め、各艦隊司令官は白けた眼で見ている。隣に座っているグリーンヒル中将が話しかけてきた。

「君はあのトリューニヒトという男をどう見るかね？」

「どうという？」

「主戦論を煽り、国民に耳触りの良いことを言って人気取りに勤しむ、あの卑劣漢をどう評価するのかと聞いている。」

あまりの酷評と嫌悪感満載な言葉に苦笑しながら答える。

「民主主義を取っている同盟に於いて議員になるなら多数を取らないといけません。その点では的確に同盟市民が望んでいる事を訴えて票に繋がっているところに関しては評価します。好きではありませんが。」

顔を陰しくしている。私がトリューニヒトを褒めたことに反感を覚えたのかもしれない。

「問題は彼が他人に責任、労苦を押し付けているのではないかといったところです。彼の親族等の周りで前線に出ている人はいるのか。恐らくいいでしょう。そういった点で私は彼を支持することはありませんし、関り合いになりたくとも思いませんね。」

グリーンヒル中将が深く頷いている。

一通りの式典が終わり、各々の乗艦に向かうことになる。途中にグリーンヒル中将のご息女がいたので声を掛けに行く。

「フレデリカさん、ご無沙汰しています。お元気そうで何よりです。」
「ありがとうございます。クーロ少将もご無事のお戻りをお祈りしています。」

「感謝します。ところでお母さんはどうしたのかな？来ていらっしやらないのかい？」

「体調が思わしくなくて。」

「そうか、お大事にと伝えてくれるかな？」

「コクリと頷いてくれたので頭を一撫でした。」

「帰ってきたらモン・サン・ミッシェルのケーキを持ってお見舞いに何うよ。約束だ。」

「そう伝えてからその場を離れた。」

「待つてますからね!!」

そんな声が後ろから聞こえたので右手を上げて応えた。

少し行くとジェシカがいた。心配そうな顔をしているのが一目で分かった。

「見送りに来てくれたのか？感謝するよ。」

「武勲なんていいから無事に帰ってきてね。約束よ。」

「そういつてきたので額に1つキスをした。」

「約束するよ。必ず帰ってくるよ。」

涙ぐんでいるのが分かったが何も言わなかった。シャトルに乗り大気圏外に待機している乗艦に移動した。艦橋に入ると全員が敬礼したので答礼を返す。

参謀長のチュン・ウー・チエン中佐が近くに来て報告をしてくれる。

「乗員、皆揃いました。何時でも発進可能です。」

「分かりました。命令あるまでスタンバイでお願いします。」

ハツと敬礼して指示を伝えにいった。年下の上官に不平、不満を表に出さず、忠実に任務をこなしてくれるチュン参謀長に感謝しかない。席に着き、時が来るのを待つ。

オペレーターが声を上げた。

「総旗艦へクトルより命令、全艦発進せよ！です。」

チュン参謀長が閣下と声を掛けてきたので頷き命令を出した。

「全艦発進。予定宙域へ移動する。」

多くの会戦を戦うことになる私の艦隊司令官としての最初の一戦がここから始まった。

艦隊司令官としての初陣

宇宙歴785年 エル・ファシル宙域

シトレ大將が作戦会議を開くというので各艦隊から人が旗艦ヘクトルに集まった。司令官、副司令官、参謀長の3人が3艦隊分10人の会議のようだ。シトレ大將が入室したので立ち上がり敬礼をする。敬礼をし、座ったのを確認してから座る。

「では始めよう。オスマン准将、説明を頼む。」

「ハッ、帝国との会敵予想宙域は回廊出口付近となります。フェザーンからの情報によると4万4000隻となっており、此方との艦数に大きな開きはないものと思われます。」

シトレ大將が大きく頷き話し出した。

「では布陣の話をしよう。中央が私の艦隊、左翼をグリーンヒル中將、右翼をビュコック中將に任せる。」

両名が頷くことで答える。

「互いに正面の敵を撃ち破り勝つことが目的であり、目標になる。細かい作戦、戦法はお任せする。各員健闘を祈る。」

敬礼をして出ていったので敬礼をして見送った。帰るかと考えているとグリーンヒル中將が話しかけてきた。

「私達は左翼になった。君には最左翼についてもらう。君は眼前の敵を崩して欲しい。」

「分かりました。微力を尽くします。」

そう言って敬礼をして、その場から立ち去った。

宇宙歴785年 イゼルローン回廊同盟側出口付近

正面に帝国軍艦隊3個艦隊が見える。まだ互いにイエローゾーンにも入っていない。艦列を整えて準備している段階だ。チュン参謀長が傍に寄ってきた。

「閣下、如何戦いますか？何か御命令があれば仰ってください。」

「データ42で戦おうと思っています。どう思いますか？」

「此方から攻めるのですな。」

驚愕の顔をしながら問いかけてきたので頷くことで答える。

「承知しました。閣下の直卒艦隊に命令を送ります。」

敬礼をして命令の手配をしにオペレーターの所へ向かって行った。賽は投げられた。どうなるかは天運次第。敵か味方かどちらに微笑むか天を仰ぎ祈った。

まもなく戦闘が始まる。イエローゾーンに入り先頭の部隊はレッドゾーンに入ろうとしている。

先頭の部隊は入った。もう少し、もう少しと我慢をする。右手を軽く上げて命令に備える。

「敵艦隊、射程圏内に入りました。」

オペレーターの声に反応し右手を下ろし命令を下した。

「放てー！」

艦橋の窓から多くの煌めきが見える。敵味方関係なく命を奪う輝きだ。綺麗だと思う自分が少し嫌になった。それを振り払うようにモニターを見る。戦況の確認をする。よし、作戦通りだ。内心でガッツポーズをしているとチュン参謀長が声を掛けてきた。

「中央と右翼は正面の敵に専念せよ。攻撃の手を緩めるな。左翼は半包囲に移れ。」

私の命令をオペレーターが各艦に通信を送る。敵の中央と右翼に隙間が大きく空いている。敵が艦列を整える前が勝負だ！

「中央、右翼は微速前進。敵に対して圧迫を強めよ。」

命令を出して数分で前進を開始した。敵は此方への対応に必死で繋ぎ目に対処出来ていない。敵右翼が孤立している。トドメを刺すべき流れだ。

「中央艦隊はミサイルを敵右翼に発射。味方左翼に攻勢を強めるように伝達。」

チュン参謀長が命令を明確化していく。1時間後には敵の右翼全体が総崩れになっていた。此方が崩した敵の最右翼が中央にもたれ掛かるように後退したために順番にドミノ倒しのように崩れていっ

た形だ。

敵中央のミュッケンベルガー元帥は捲き込まれては堪らんと思つて後退したのだろう。それを見て敵左翼も後退した。1万隻は倒したはずだ。これで戦うとなればイゼルロンの駐留艦隊を呼ばないと不安のはずだか。そんなことを考えていると帝国の旗艦から撤退命令が出たのだろう。全艦後退していった。

終わったと思つて物思いに耽っているとオペレーターが声をあげた。

「総旗艦へクトルより通信です。」

頷くことで答えるとチュン参謀長が命令を出した。

「通信をモニターに。」

中央モニターにシトレ大将が映つたので敬礼をする。答礼を御座なりに返し、私に質問してきた。

「クロー少将、武勲おめでとう。さて敵は後退しているが追撃に移るべきかな？ 貴官はどう思う？」

「ゆるゆると後を追つて回廊内に入り撤退したことを確認してから此方も撤退でよろしいかと。」

「更なる戦功をあげようとは思わないのかね？」

シトレ大将の不思議そうな顔に苦笑してしまった。

「そこまでやる気に満ちてませんよ。ここらで十分です。私個人に関してには。」

暗に不満なのはろくに戦えなかった中央のシトレ大将と右翼のビュコック中将の艦隊だろうと云う当て擦りに気づいたの苦笑いをしている。

「それに関しては残念だが負けるよりはいいさ。私達は次の機会に期待しているよ。」

「それならばよろしいのですが。」

「では、しばらく追つて折を見て引き返すことにしよう。」

通信が切れてから大きく息を吐いた。

「チュン参謀長、ゆるゆると敵の後を追います。突出することのないように厳命してください。」

「ハッ、かしこまりました。」

敬礼して指示を伝えにいった。私の最初の艦隊司令官の戦闘は終わりのようだ。

疲れた。早くゆつくりと休みたいと思った。

勝利の代償

宇宙歴785年 ハイネセン

帝国軍との戦闘が終わり、朝の9時に帰ってきた。昼から戦勝パレードとセレモニーを行う予定だ。

控え室で正装に着替えている。シトレ大将にビュコック中将、グリーンヒル中将もいる。残念なことに今回の主役は私らしい。憂鬱だ。

暫くすると会場の席に案内され、セレモニーが始まった。ダラダラとスピーチがされる。3人が終わって30分が過ぎた。長いスピーチに辟易してきた。

皆もやつと戦場から帰ってきて、この仕打ちにうんざりしているようにみえる。

トリユーニヒトの演説が始まった。打倒帝国から始まり、今回の勝利の美辞麗句を並べて調子良く喋っている。

隣に座っているグリーンヒル中将にトイレに行く旨を伝えて席を立つ。トイレで用を済ませて、そのまま外に出る。5分程歩いて近くにある公園に向かった。入り口に自販機があったのでコーヒーを買って中に入っていく。

池の傍にあるベンチに座ってボーツとしている。

しばらくボーツとしていると前に人が立った。見上げるとジェシカがいた。

「やあ、ジェシカ。どうしたんだい？こんなところまで？」

厳しい視線を私に向けてきた。

「どうしたはこっちのセリフよ。主役がいなくて会場は大慌てよ。哀れな位政治家連中とスタッフがオロオロしているわ。」

「そうか。其れは悪いことをしたな。」

どうも今日は調子がでないなと思った。

ジェシカ視点

目の前でベンチに座っているユーリの暗い表情に困惑した。武勲

をあげた高揚感も喜びも誇らしさも感じない。虚無感に近いものを見せている。

「どうしたの?」

そう訊ねると一瞬だけ私に視線を向けて俯いた。もう一度声を掛けようか悩んだけど彼から話してくれるのを待とうと思った。少ししてからポツリポツリと話し出した。

「ジェシカ。君は今回の戦闘の結果についてどれくらい知っている?」

彼からの質問に戸惑いながら答えた。

「ほぼ同数で戦って此方は3000隻、帝国は12000隻位の被害があったと放送でしていたわ。貴方の活躍でグリーンヒル中将の艦隊が1万隻近くを落としたりって言うていたわ。」

「ああ、此方は3000隻位の被害だろうな。私の直卒艦隊は5000隻が撃破された。2000隻程は大破しただろうな。乗組員で6万人は死んだだろう。」

「帝国人を100万殺して、部下を6万も犠牲にした。それなのに帰ってくれば私に同盟のヒーローになれと云う。その事がどうしようもなく虚しいんだ!」

吐き捨てるように言葉を発する彼に驚いた。ここまで感情を吐露する姿を見たことがなかった。驚きと共に嬉しさも少しあった。彼が弱さを私にだけ見せているということがただ嬉しかった。

彼の頭を胸に抱き締めた。何て言うてあげたらいいのか分からなけれど辛い時に、苦しい時に傍にいてこうやってぎゅっとしてあげようと思った。どんな言葉を掛けてもこの人は自分を決して赦さないだろうから。ただ傍で抱き締めてあげようと思った。

「私が傍にいるから。ずっと、ずっとこうしてあげるから。」

そう伝えて抱き締めてあげた。身体を少し震わせながら微かにありがたうと聞こえた。聞こえない振りをして更にぎゅっとして抱き締めた。

クーロ少将が居なくなつたので探せと命じられて周辺の搜索をする。公園のベンチに座っているのを見つけた。目の前に女性が立っている。逢い引きかと思ひ、声を掛けようとする。彼の慟哭と言つてもいい心の叫びが聞こえた。思はず木の陰に隠れた。

いつも一喜一憂することなく、冷静沈着に指揮をとる姿に安心と頼もしさを感じたが本人はそんな苦悩を抱えていたのかと思つた。

自分が殺した帝国人、自分が死なせた同盟人にそんなことを思つていたなんて思ひもしないことだつた。彼が功績をあげて昇進する度に苦悩するだろう。有能である分その苦悩は大きく重くなつていくだろう。彼女と違って何が出来るか分からないが参謀長として部下として軍人として出来る限りの補佐をしようと心に決めた。

自分の仕事は明確に定まつた瞬間だと思つた。

平和な日常と運命の転換期

宇宙歴785年 ハイネセン 統合作戦本部

式典をサボった次の日にシトレ大将に朝9時に出頭命令が出た。命令なのでしぶしぶ出頭する。

「ユーリ・クロー少将、出頭いたしました。」
「入れ。」

声を聞いてから入る。頬杖をついて此方を見ている。
「座りたまえ。」

ソファアを指差したので大人しく座る。

「昨日はやってくれたな。何処に行っていたのかね。」

「まあ、そこら辺をウロウロしていました。」

苦笑しているシトレ大将に呼び出した理由を訊ねた。

「お叱りの言葉を言うために呼んだのでしょうか？」

「いや、違う。今回の勝利で君は昇進することになった。」

「昇進ですか？」

「そうだ。今回出兵した者の中で君だけが昇進し中將になる。」

「そうなると同艦隊で中將が2人いることになりましたが。」

「残念ながら君は第一艦隊に移動だ。」

「シトレ大将の艦隊で副司令官をと云うことですか？」

疑問をシトレ大将に聞くと苦笑いしている。

「君が第一艦隊の司令官になる。」

驚きの声をあげてしまった。

「本当ですか？」

「詳しく説明するのでよく聞いてほしい。」

「私は宇宙艦隊司令長官代理に任命される。そして指揮していた第一艦隊の直卒していた6000隻が私の艦隊になる。そして君が指揮していた4500隻が代わりに第一艦隊に配属される。その第一艦隊司令官に君が就任することになる。」

「グリーンヒル中將の艦隊にはパストーレ少將が君の代わりに配属される。理解出来たかね？」

「分かりました。」

「話は変わるのが来年にロボス大將が2個艦隊を率いて合計3個艦隊で出陣する。その次は私が3個艦隊と私の直属の半個艦隊で出陣することが決まっている。」

「それに参加せよと?」

「いや、ロボスは自分の派閥から連れていくだろうな。私も前回出なかったウランフ、ボロディン、アツプルトンの3人を連れていく。」

「シトレ大將は3人、自分は2人で怒りますね。ロボス大將は。」

笑いながらシトレ大將が話の続きをする。

「この2回の戦闘で私が司令長官になるかロボスになるかが決まる。」
「代理になっている分、閣下が有利なのでは?」

「勿論だ。五分か六分四分の闘いで私の肩書きの代理が消えるよ。」

「ロボス大將は余程の勝ちがないと無理ということですね。」

功を焦って無茶しなければいいかとロボス大將に従う兵士達に同情した。

「その後は流動的に事態が推移することになるだろう。そう頭に入れておいてくれ。」

「ハッ、承知しました。」

「君の昇進と任命は年が明けて宇宙歴786年1月5日に公布される。頑張ってくれ。」

また1つ階段を登り、多くの部下を預かる身になったことに疲労感と憂鬱感が身体を支配した。

宇宙歴787年

ハイネセン

士官学校

今日はヤンとラップが士官学校を卒業する。第一艦隊司令官を拝命したが訓練で1年が終わった。訓練とミーティングの日々だ。特別なことはない平凡な日々だが死人が自分の艦隊から出ないというのは心の安寧に多大な影響を及ぼすらしい。鬱屈した気分になることもなく良い日を送ってこれた。

校門前で待っているとヤンとラップが肩を組みながら出てきた。

周りにいる他の候補生からジロジロ見られているが気にせず声をかけた。

「ヤン、ラップ、卒業おめでとう。」

「ありがとうございます、教官。」

そう2人が言うので訂正を入れる。

「もうお前達の教官ではない。中将と呼べ。」

ヤンが頭を掻いている。

「いや、そうなんですがつい癖で言っしまいましたね。」

「まあ、追々直せばいい、私に対してはな。他の人なら殴られるかもしれないが。」

ラップが疑問を口にした。

「どうしてクォーロ中將がここに？何か用事ですか？」

「ああ、ヤンは身寄りがないと知っているからな。夕食でも祝い代わりにご馳走してやろうかと思ってな。」

ヤンが驚きながら聞いてきた。

「よろしいんですか？」

「知らない仲ではないからな。特別だ。ヤンは約束があるのか？」

ヤンは癖の頭を掻く仕草をしている。

「ありがたくご馳走になります。折角来ていただいたので。」

頷いてからラップに声を掛けた。

「ラップはどうする？来るならお前もご馳走するよ。」

申し訳なさそうな表情をしながら答えた。

「両親が来ているので今回は申し訳ないです。」

そういつて頭を下げた。

「気にするな。ラップとの食事などその気になれば幾らでも共に出来るからな。ラップ、分かっていると思うが初日に遅刻するなよ。」

軽く注意するとラップは敬礼をした。

「3日後に閣下の元にご挨拶に伺います。」

「副官として支えてもらうことになるがあまり気負うな。無理をするのもさせるのも好みじゃない。」

「ありがとうございます。」

うんと1つ領いてからラップと別れた。

「ヤン、行こうか。店はもう予約してあるんだ。」

そういつて歩きだした。ヤンが後ろをヒョコヒョコと付いてきている気配を感じながら。

宇宙歴788年 ハイネセン 三月兔亭

ヤンとラップが卒業して一年がたった。ヤンは統合作戦本部の資料室で読書の日々を送っているらしい。それが上層部にバレて面倒な所に飛ばす事にしたとシトレ大將から聞いた。折角なのでヤンから直接話を聞こうと食事に誘った。両名とも一年たったので万歳昇進で中尉になった。

「お疲れ様。ヤン中尉」

「お疲れ様です、教官。」

癖でまた教官と呼んだ。ヤンが気付いて苦笑いしている。その姿を見て私も笑ってしまった。

「任地は何処なんだ？ラップは私の副官をしているから知っているが？」

「エル・ファシルです。最前線に近い惑星の。」

「そうか。上官は誰なんだ？」

「リンチ少将です。たしかエル・ファシル警備艦隊司令官のはずです。」

「リンチ？アーサー・リンチか？」

「はい。そうですが、お知り合いなんですか？」

「私が大尉だった時の上官だよ。少佐だった。前線でも後方でも一定以上の実績を挙げ、評価も高い有能な軍人だ。そうか、そんな所にいるのか。分艦隊司令官に呼べばよかったな。」

「どういった人柄ですか？」

不安そうに尋ねてくるヤンに苦笑した。

「悪い人ではないよ。真面目で誠実な人だ。サボれないからな。」

ヤンは私の忠告に苦笑して頭を掻いている。

「ボチボチ頑張りますよ。」

「ああ、死なないように頑張れ。リンチ少将には私から連絡しておいてやる。」

「ありがとうございます。」

そう言って食事を済ませ。店の前で別れた。

次に会う時に色々と言が成し遂げるなんてこの時は夢にも思わなかった。

訓練と英雄の誕生

宇宙歴788年 バーラト星系

艦隊の慣熟訓練のために昨日の朝にハイネセンを出発した。私の副官を勤めることになったラップの初の遠出での任務になる。イゼルローン回廊に程近い場所で訓練を行う日程だ。他の艦隊はハイネセンの近場で訓練をするのに私の艦隊は遠くでするので疑問に思ったのだろう。ラップが質問をしてきた。

「閣下、何故訓練を回廊出口に近いところですか？ハイネセンの近辺でやればいいのでは？他の艦隊はそうしていますが？」

この質問をされてチュン参謀長と顔を見合わせてから2人して笑ってしまった。笑いながらラップ中尉に答える。

「それには3つの理由がある。分かるかな？ラップ中尉。」

「3つの理由ですか？なんだろう。」

「この質問は第4艦隊副司令官の時にチュン参謀長にも聞かれたよ。」

「なんですか？3つの理由って？」

「まず1つ目はロボス大将が回廊付近で戦争しようとしている。予備の役目になる。」

「2つ目は目的地に行く道を覚えさせる意味がある。早く着かないと行けない時もあるだろうからな。」

「3つ目は戦闘になるかもしれない戦場の確認だ。環境のチェックが大事になる。データとしてはあるが実際に見て分かることもある。気象状況、隕石、小惑星帯、重力、太陽風等といった様々な事象に触れておくことが重要だと考えている。」

「閣下がそこまで考えているとは思いませんでした。」

ラップは感心したようだ。そこにチュン参謀長が会話に入ってきた。

「私もデータであるから態々遠くまで出かける必要があるのか疑問だった。移動時間を訓練に充てたらもつと練度が上がるのにと。」

「実際に行つてから提督の考えを聞くと幾つも使えそうな戦法があることに気付いたんだ。それだけで私達は他の艦隊より有利に戦える

ことになる。ラップ中尉もそこを理解していかないと提督を支えることは出来ないぞ。」

チュン参謀長の注意と忠告になるほどと頷いている。

「しばらくは高速運動の訓練だ。しっかりと司令官として、参謀長としてチェックしよう。」

そう言っただけで仕事に取り掛かるように促した。

ハイネセンを出て3週間、目的地まで後3日になった日に緊急で通信が入った。部屋でシャワーを浴びていた時に呼び出され急いで着替えてブリッジに上がる。

チュン参謀長が急いで傍に寄ってきた。

「提督、エル・ファシルより通信が入っています。」

「モニターに映してくれ。」

直ぐに指示を出して指揮官席に座る。リンチ少将が映った。顔が険しい。嫌な予感しかしない状況だ。

「第一艦隊司令官ユーリ・クロー中将です。」

「エル・ファシル警備艦隊司令官アーサー・リンチ少将です。」

1つ頷いてから用件を言うように促した。

「緊急の連絡とありました。何があつたのです?」

「エル・ファシルに前線を抜けてきた艦隊が接近しているようです。」

まさかの事態に私も顔が険しくなるのが分かった。

「前線はロボス大将が総勢4万隻を越える3個艦隊で警戒しているはずですが?」

「それが星系の外縁部をすり抜けたようです。商人の船が知らせてきたのです。早く察知出来たのでロボス大将の艦隊とクロー中将の艦隊に連絡を入れて救援を要請したと云うわけです。」

「敵の来襲は何時ですか? 大体で良いのですが。」

「ハッ、およそ62時間になります。ロボス大将の救援は96時間になるようで無理なようです。」

「私も72時間になります。10時間をどうにか稼げないですか? それが出来れば。」

リンチ少将は私が暗に言っている事が分かったのだろう。目を

ギユツと力強く瞑っている。10秒程で開いて話し出した。

「小官に囷か人の壁になれと仰られるのですね？」

「それしか方法が無いのであれば。」

リンチ少将が私の顔をじつと見てくる。私は死ねと遠回しに命じたのだ。察してそれを実行しろと。非情な事をしたと思つた。此方から命じたのではなく、自らで察してやれと言つたのだから。

彼がずつと私の顔を見ている。逸らすようなことは出来ない。彼に死ねと命じたのは自分だから。

リンチ少将がふうふうと一息吐いた。

「分かりました。囷になります。」

「すまない。貴方にこのようなことを決断させて強いることになるのは。」

真剣な顔で私に頼み事をしてきた。

「私は囷になつて敵の艦隊を引き付けます。キリの良いところで捕虜になります。恐らく逃げた。市民を置き去りにした卑怯者と誇りを受けましょう。」

私にもリンチ少将の結末が見えているので暗い気持ちになつた。

「私には妻と娘がいます。どうか後をお願いできないでしょうか？それが最期の頼みです。」

「分かりました。何処まで出来るか分かりませんが出来る限りの事をすることを約束します。」

目に涙を溜めているも泣かないようにしている様に胸が大層痛んだ。

「ヤン中尉、来たまえ。」

ノツソリとやってきた。

「君が惑星脱出の指揮を取りたまえ。クーロ中將の教え子の君なら出来るな。」

「しかしそれは。」

声を荒げてヤンの反論を遮つた。

「新米士官が何の役に立つ!!君の仕事はエル・ファシル住民を一人も残さず、一人も死なせずに脱出させることだ。これは命令だ!!」

身体を震わせながら敬礼をヤンがリンチ少将にする。リンチ少将が綺麗な答礼を返した。

「め、命令承知しました。」

「うむ、しっかりとやってくれ。」

2人のやり取りが終わり、リンチ少将が私に話し掛けてきた。

「閣下、ヤン中尉をお返しします。若い奴らも手伝いに残すのでどうか彼らの事をよろしくお願いします。」

リンチの決意に頷くことしか出来なかった。

「承知した。必ず私の力で守ってみせると誓おう。」

「これで心残りはありません。さらばです、クーク提督。通信終わり。」

敬礼して通信を切った。此方の答礼を返す前に。彼らの決意を無駄にすることは出来ない。

「参謀長、全艦最大船速！」

「ハッ、全艦最大船速！」

無駄になるだろうがリンチ少将とそれに従う兵士を助けるための努力をしようと思つて命じた。

2日後にエル・ファシルを脱出した民間船、商船を指揮したヤンと合流することが出来た。

その3日後にリンチ少将が乗っていた戦艦以下10隻が帝国の拿捕されて捕虜になっていた事を帝国の通信を傍受して知った。

そしてその5日後には軍の失態を隠すために人身御供として、ヤンがエル・ファシル住民を一人も欠かすことなく避難させたことでエル・ファシルの英雄と呼ばれるようにする事を知った。

英雄の苦悩と私の評判

宇宙歴788年 エル・ファシル近辺

ヤンと合流してハイネセンに向かう。エル・ファシルに接近していた帝国艦隊はリンチ少将率いるエル・ファシル警備艦隊を追っている。特別危険はないが護衛に付くことにした。

ヤンが此方に移ってきたので少し話そうと思った。自室の方が良いと思い、チユン参謀長に艦橋を任せる事にした。部屋に入り、冷たい水を用意してヤンに渡し、対面に座って話し合うことにした。

「ありがとうございます、教官。」

「ご苦労だったな、ヤン。」

「いえ、赴任して直ぐにこんなことになるとは思いませんでしたが。」
「ヤンにもつらい仕事をさせてしまったな。申し訳ない。」

リンチ少将以下エル・ファシル警備艦隊を見捨てたような形になった事を謝罪した。

「昔に教官が言っていたことを思い出しました。」

「何て言ったかな？色々と話したからどれか分からんな。」

ヤンは苦笑しながら頭を掻いている。

「様々な思いを背負って生きていくって。」

「そんなことも言ったな。」

「今回で私はリンチ少将の覚悟を見ました。そして後を託されました。若い下士官を助けるために多くのベテランの人がリンチ少将に従って凶になりました。」

「それは私が命じた事だ。お前が責任に感じる必要はない。」

「教官はそう言ってくれますが何も感じずに生きていける人間ではありませんよ。」

思い悩んでいるヤンに事実を伝えた。

「今、ハイネセンではリンチ少将を住民を置いて逃げた。ヤンは置いていかれた住民を救った英雄とすることが決定したそうだ。」

俯いていたヤンが驚きで顔を上げた。リンチ少将達が逃げ出したときれることに怒りを感じているのだろう。

「分かっています。軍の失態を隠すための人身御供ですよね。リンチ少将達を悪者にして私を英雄にする。それが政治家のやり方なんですよね。」

「そうだ。」

「教官が上に行けば行くほど背負う物が多く、大きくなるって分かった気がします。」

苦笑してヤンに忠告した。

「偉くなるのも大変だぞ。味方には実力以上の結果を期待され、敵には狙われる。」

「それでも教官は軍を辞めないのですね。」

「背負ってしまったからな。そして今も多くの部下の期待と命を背負っている。」

「教官……強いですね。その強さを尊敬します。」

「ヤン。お前も引き返すなら今だぞ。お前の性格は理解している。このまま行けば辛くなるかもしれないぞ。」

私の忠告に悩みを一瞬みせたが私の目を正面から見えてきた。

「リンチ少将の覚悟を見ました。あれを見て辞めるような人間ではないです。」

「そうか。」

そう言っただけで会話が途切れてしまった。

宇宙歴788年

ゴールデンブリッジ

自宅

ハイネセンに着いて直ぐにエル・ファシル住民を無血で避難させたヤンを讃えるセレモニー等が行われた。私は早々に退散して自宅で飲むことにした。夕方から1人で飲むのは味気無いのでアレックスを誘ったのだが何故かシェーンコップが訪ねてきたので男3人で飲むことにしたのだが直ぐにジェシカとラップもやってきた。

セレモニーの最中に聞いた話をアレックスにしてみた。

「そういえばパーティーで聞いたのだがアレックス、上官の娘さんとお見合いをするそうだな。」

「何処からその話を!? まだ話が微かに出ただけですよ。実際のところ

何も決まっていますよ。」

「そうなのか？私は決定しているみたいなき感じに聞いたが？」

アレックスは目を押さえている。

「どうやらユーリさん達シトレ大将派閥の艦隊の補給を一手に引き受けているのが評価されたみたいです。それから狙われてますね。」

シェーンコップが笑いながら伝える。

「部長の娘さんですか？それでしたら中々の美人と評判ですよ。」

「まさか手を出したりしてないよな？」

私の質問に肩を竦めている。

「中々にガードが堅い女性でね。私は撃墜済みですな。」

シェーンコップのおどけた仕草に笑いが溢れた。そこにジェシカが質問してきた。

「ユーリは士官学校時代とか任官してから女性関係はどうだったの？」

まさかの質問に口ごもってしまった。そしてシェーンコップは横を向き、口を手で押さえて笑いを我慢している。

「笑っていいぞ、シェーンコップ。我慢も辛いだろう。」

そう言えばシェーンコップは爆笑し始めた。アレックスとジェシカはシェーンコップを見て呆然としている。アレックスが気になったのだろう。質問してきた。

「何が可笑しいんだ？モテたかモテなかったかだろう？」

その質問にシェーンコップは笑いながら答えた。

「任官してから直ぐに不正を取り締まったので皆から恐れられていましたよ。道を歩けばみくんな避けてましたよ。なんなら視線も合わせませんでしたからね。」

「上官、政治家、官僚、民間人関係なく逮捕してましたから恐れられていました。誰も近寄りませんでしたよ。我々以外はね。」

笑いを噛み締めながら言うシェーンコップに腹が立つ。

「なので女性関係云々どころか友人、知人もいませんでしたよ。同期の友人以外にね。」

アレックスとジェシカが本当なのかと視線を向けてくる。それに

対して大きな溜め息を1つ吐いて肯定した。

「事実だ。私に関わる人はほとんどいなかっただな。関わりがあるのはここにいる4人とヤン位だな。友人、知人付き合いをしているのは。」
そう言っただけでまた溜め息を吐いた。ヤンが美辞麗句の称賛の嵐に嫌気が差して私の家に逃げ込んでくるまで、そして来てからも他愛のない話が続いた。

防衛態勢の要望

宇宙歴788年 ハイネセン 統合作戦本部

ヤンと共にハイネセンに帰還してから1週間がたった。ヤンは彼方此方と引つ張りだこだが他の軍人は通常業務に勤しんでいた。

私の艦隊も訓練帰りなので補給や休暇を行っていた。補給に関してはアレックスが全面的に請負ってくれているので楽が出来る。エル・ファシルの救援に一番乗りで行ったことも無条件で補給出来る要因らしく、アレックスが周りがあまりにも協力的で恐いそうだ。

そんな時にシトレ大将に呼び出しを受けてシトレ大将の待っている部屋に向かう。話の内容が読めないので困る。

「クロー中將、参りました。」

部屋の前で声をかけて入る。

「来たか、座りたまえ。」

ソファアーに腰掛けると正面にシトレ大将が座って話を始めた。

「エル・ファシルの件はご苦労だったね。」

「いえ、一番近くに居たのが私の艦隊なので。」

「そうか。国防委員会では君を副司令長官にという声もあるそうだ。」

あまりに自分の中では荒唐無稽な話に啞然とする。

「そんな話があるんですか？ 正規艦隊司令官では一番年少で期間も短いのですが？」

シトレ大将が笑っている。冗談だと思った。

「かなり小さい声だがね。ここ最近で艦隊個人で勝っているのは君だけだ。ロボス派閥は敵に与えた損害と同等の被害を受けているからな。」

「私も君が崩してくれたので敗走に追い込んでいる。なので近年の武勲1位は君という評価だ。しかも圧倒的にな。だから相応しい地位にという事らしい。」

厳しい顔をしている自覚がある。そんな話が有ることに驚いたが自分の評価が思ったよりも高くなっていることにも驚いた。

「その話はどこまで本当なのです？」

「100か1000の内の1案といったところだよ。そうなるには後2戦位君の活躍で勝利が出て、ようやく人事案の有力候補になるだろうな。」

「気の遠くなる話ですね。少将から中将の昇進は早かったのに。」

「君の昇進が早すぎるから士官学校に教官として送り、間を空ける意味があったのだよ。まあ、その間にも色々とやってくれたから上げざるを得なかっただけなのだがね。」

シトレ大将の話も一通り終わって、本題に入るように促した。

「それで何の用件で御呼びになったのです?」

1つ大きく頷いてシトレ大将が話し始めた。

「君は同盟の防衛体制にも色々と言呈していたがそれをしっかりと聞こうと思ってるね。」

「よろしいのですか? 辛辣な意見ばかりになりますか?」

「仕方ない。言いたいことが沢山有るのだろうか?」

そう言って溜め息を吐いている。

「分かりました。では言わせていただきます。」

シトレ大将が頷いてくれたので話し始めた。

「まずはハイネセンに正規艦隊を全部待機させる意味が分かりません。イゼルローンまで1ヶ月程かかるのにそこで待機させる必要があるのか私には分かりません。」

「今はフェザーンの連絡で帝国が攻めてくる時期、規模、将帥が分かりませんがそれも善意ではなくフェザーンなりの思惑があつての事ということを理解しているのか同盟政府、軍部、市民が理解しているのか大いに不安です。」

シトレ大将がウーローンと考え込んでいる。

「その対応策はあるのかね?」

「エル・ファシルを中心に艦隊を配置して防衛体制を強化するのはどうでしょうか? 前線に半分配置して中間に2、3個艦隊を置き、予備とするのがベストかと。」

ふむと言ってコーヒーに手を伸ばすシトレ大将に釣られて私もコーヒーを一口飲む。

「これはフェザーンがどちらにも肩入れしない。もしくは両方に肩入れしている状況であるならベストです。」

「というところということかな?」

「フェザーンが何かしらの理由で帝国に肩入れして、フェザーン回廊の通行を許可した時に防衛体制が崩れますのでフェザーン方面も睨んだ体制をするべきでしょう。」

シトレ大将が目を見開いている。

「フェザーンが同盟を裏切るというのかね。」

「フェザーンは商人の国です。帝国に付く方が大きな益になるなら付く。そういった国ですよ。それにどちらかに付く以外にも正しい情報を与えない、正確な情報が分からなかった等の言い訳をされても此方には確認する術がありません。」

「なるほど。確かにその通りだな。」

「2つ目はアルテミスの首飾りです。」

何が疑問か分からなかったのだろう。首を傾げている。

「中将、何が問題かね?」

「ハイネセンに有っても意味がありません。置くのならイゼルローン回廊の入り口を封鎖するように置くのがベストです。ハイネセンまで攻められたら他の有人惑星は攻略されています。そしてハイネセンは人口が圧倒的に多いので自給自足は出来ないので兵糧攻めで終わりです。それなのに惑星防衛兵器など有っても交戦論、主戦論を助長させるだけで、百害あって一利なしです。」

また溜め息を吐いた。

「続けても?」

「ああ、続けてくれ。何時かは聞かないとならんだらうからな。今聞いてしまおう。」

そう言つて溜め息を吐いた。

「エル・ファシル等に大規模な補給基地、駐留基地を造るべきです。後方の安定は勝ち負けに多大な影響を与えます。ハイネセンから出発するより近隣から出発する方が早いので便利かと。それにエル・ファシル等の近隣惑星の経済に大きい影響を与えますが。」

腕を組み考え込んでいる。

「他にも有るかね？」

「シトレ大將はまだイゼルローン要塞の攻略を考えているのでしょうか？」

怪訝な顔をして私を見ている。

「同盟市民の悲願だ。当然だろう？これはロボスも同意見だろうね。」

「国力に差が有るので大敗は同盟の軍事の屋台骨が輝が入るか折れる等になりかねませんが？」

「君はイゼルローン要塞攻略をしないと云うのかね？」

「はい、今のところは攻略をする必要がありませんから。」

シトレ大將は苦笑している。

「君はあっさりしているな。それが君の持ち味なのだろうな。」

私は微笑み返して言葉を濁して話を終えた。

部下との情報共有

宇宙歴792年 ハイネセン 艦隊司令官室

ラップと補給関係や艦隊の修理、乗員の休暇等の書類を片付けながら午後をのんびりと過ごしていた。

「アッシュビー提督の調査をしたかと思えばエコニアで騒乱に巻き込まれるとは。乱がヤンを呼ぶのかヤンが乱を呼ぶのか悩ましいな、ラップ大尉。」

私の物言いが可笑しかったのか面白かったのか笑っている。恐らく失笑だろうが。

「偶然でしょうがここまでくると呪われてますね。」

「そういった星の下に生まれたんだろうな。御苦労なことだ、ずっとこういったことに巻き込まれるなら。」

「閣下も大差無いと思いますが。自宅が襲撃されるなど早々ありませんよ。しかも3回もなんて。」

「1回目の時にボロボロになった家を見て物を置くのを止めようと思ったな。だからシンプルかつ物が少ないだろう。今は将官用のゴールデンブリッジだから無いがそれも何時まで分からんからな。質素は変えられないよ。」

言ってから虚しくなり溜め息を吐いた。ラップも同情の視線を向けている。そんな昼下がりの時間にチュン参謀長がやってきた。厳しい顔をしているのが分かった。傍に寄ってきて直ぐに話し掛けた。

「閣下、閣下がイゼルローン要塞攻略を反対していると統合作戦本部、宇宙艦隊司令部で噂になっています。事実でしょうか？」

聞かれた内容に覚えがあったので頷いた。

「事実だ。」

「宇宙艦隊司令部では中々に大きな話になっております。帝国と戦うことに消極的な者が艦隊司令官とは如何な事かと。」

声高に言っている面々の顔が脳裏に思い浮かんで失笑してしまった。それがチュン参謀長の琴線に触れてしまったようだ。

「閣下！笑い事ではありません！」

手をチユン参謀長に差し出して言葉を止めた。

「すまない。しかしな、ヤル気があっても自分が被害を受ける奴とヤル気がなくても帝国に被害を与える奴のどちらが有能かな。」

ラップは口を押さええて笑うのを我慢している。ヤル気がある無能とヤル気の無い有能のどっちが使えるか聞いたのだから中々に皮肉が効いているだろう。

「戦果にヤル気の要素は無かったと思うが私の勘違いかな？あのバカどもがそこまで言うなら辞表を出そう。その時は味方に被害を出してばかりのアホな同僚に妬まれて苛められて辞めることにしたとマスコミに言うことにしよう。」

そう告げるとラップは腹を抱えて爆笑している。目の前にいるチユン参謀長もどう返せばいいのか分からずに変な顔をしている。

「閣下がそう言うなら私もそのように答えましょう。」

「よろしく頼むよ。」

チユン参謀長も納得してくれたようなので笑いながら答えた。ロボス派に呆れているのが伝わったのが良かったから良しとしよう。

呆れた顔をしていたチユン参謀長がまた真面目な顔をした。

「内密な話があるのですが。御時間頂けますでしょうか？」

「それは2人でということかな？」

「はい、出来ましたら2人で。」

頷いてラップに顔を向ける。

「すまないがこの書類をキャゼルヌに届けてきてくれ。話が終われば連絡する。」

「承知しました。キャゼルヌ少佐に渡しましたら、食堂で待機しています。」

「すまないな。よろしく頼むよ。」

ラップが書類を受け取って部屋から出ていったのを確認してから参謀長に声を掛けた。

「長くなるから座ろうか。」

そういつてソファアを指差して私も移動する。

「それで話とはなにかな？」

「イゼルローン要塞攻略を反対している真のお考えです。それを参謀長として是非とも伺っておきたいと思えます。」

厳しい視線を向けても逸らさない参謀長に1つ溜め息を吐いた。

「参謀長の胸の中にも詰まっておけますか？」

「はい、閣下の御深慮を他所で他言するようなことはありません。例え最高評議会議長や統合作戦本部長、宇宙艦隊司令長官であろうとも。」

「分かりました。まず、私はイゼルローン要塞の攻略を完璧に反対しているわけではありません。」

私の物言いが分からなかったのだろう。顔に？を浮かべている。

「といたしますと？」

「参謀長もお分かりの通りあの要塞は難攻不落と謳われています。」

「はい、既に何度も手痛い損害を受けて敗退しています。」

「あの要塞は普通に攻めたら落とせないように出来ているのです。」

私の言葉の意味が分からなかったのだろう。疑問が顔に出ている。

「今回、シトレ大將がイゼルローン要塞攻略を考えています。規模としては私、グリーンヒル提督、ビュコック提督の3個艦隊を動員。シトレ大將の半個艦隊合わせて3個半艦隊になります。」

ここまでは良いかと視線を向けると頷いてくれたので続ける。

「フェザーンは帝国に同盟の軍事行動の規模、出発日、将帥の情報を伝えるでしょう。普通の指揮官なら同等の数はイゼルローン要塞に援軍として差し向けます。つまりその援軍と駐留艦隊を排除してイゼルローン要塞の攻略を開始できるのです。」

「それに要塞自体にも浮遊砲台が無数にあり、何よりツールハンマーが多数の艦船を吹き飛ばします。」

「要塞内も要塞司令官直属の陸戦隊か装甲擲弾兵が多数いるでしょうね。それを排除して始めて攻略完了です。」

言っていて憂鬱になったので溜め息を吐いた。

「私が一番懸念しているのがもし、万が一、あわよくば落とせたとします。その後の作戦計画が白紙なんです。その後の事など考えたこと

を政府も軍部もないでしょうね。」

私の言ったことが分からなかったのだろう。ポカーンとしている。「今まで要塞を攻めるか、同盟側の回廊に侵攻してきた帝国艦隊を迎撃するの2つだったと言うことです。」

「要塞を落とせたとしましょう。戦場が持ち主の変わった要塞から帝国側の回廊、帝国辺境地域になります。帝国がイゼルローン攻略をする。それを防ぐだけなら満足なのですが打倒帝国を掲げる同盟がそれで満足すると思いますか？市民が、政府が、軍部が。国内の世論は主戦論が圧倒的に優勢です。辺境星域の占領、帝都攻略なんて考え、立案されるかもしれません。」

チユン参謀長は顔を青くしているが知ったことではない。知りたいたと言ったのは彼だ。最後まで責任を持って聞いて貰おうと話を続ける。

「昔、フェザーンに駐在武官として赴任した時に聞いたのですが帝国辺境はフェザーン商人は行かないようです。貧しく商機がないようです。そこを同盟が占領して何の得が有るか分かりません。インフラも十分では無いようなので後方支援の基地にするのも大変でしょう。」

「何より獲ったら守らなければならない。帝国の正規艦隊は18個、それに貴族の私設艦隊が沢山有るそうです。帝国屈指のブラウンシュバイク公爵、リッテンハイム侯爵の艦隊は合わせて3個艦隊分はあるそうなので貴族全部で10万隻は軽々と上回るでしょうね。そんな数を相手に同盟は守れますか？12個艦隊しかない同盟が。」

「なんか言ってる自分も虚しくなってきたな。溜め息しか出ない。で、ではそれを上層部に言えばよろしいのでは？」

チユン参謀長の疑問は当然なのだがそれを言っても意味はないのだ。

「今さら方針転換出来ると思いますか？これまで多くの人命が失われてきました。残念ですが打倒帝国は諦めますと。政府が、軍部が言えますか？」

首を横に振って答えるとチユン参謀長も首を横に振った。

「帝都攻略を目指すと最悪ですよ。後方の遮断が怖いですから要塞に1個艦隊、補給線の確保に数個艦隊はいるでしょう。実際に帝都を目指して侵攻するのはどれくらいの規模になると思います？10個艦隊使つての侵攻作戦だと半分程の艦隊で帝都を目指すことになりません。袋叩きに遭うでしょうね。チュン参謀長はしたいですか？」

「いえ。」

そういつてチュン参謀長は口を噤んだ。

「貴族が味方についてくれるとか考えてるなら無駄ですよ。大貴族は特権の剥奪等、認められませんか。同盟も許せないでしょうしね。」

肩を竦めながら言うとチュン参謀長は遂に顔を手で覆って俯いた。

「こんなところですよ、私が考えてることは。口には出せませんが。まあ、とりあえずは今回の要塞攻略戦を考えましょう。どうせ落ちないでしょうから撤退の方法とか。」

私の提案に苦笑して頷いた。憂鬱になった午後の一時だった。

戦争への準備期間

宇宙暦792 ハイネセン 統合作戦本部

司令長官になったシトレ大将の号令の下に出兵命令が出た。4月にハイネセンを発つ事になり、後方支援の部署と遠征部隊は準備に大忙しだ。

部隊は第一艦隊の私と第四艦隊グリーンヒル中将、第五艦隊のビュコック中将の3個艦隊とシトレ大将の直卒艦隊半個の計3個半艦隊を動員する事になった。

先に行われた艦隊司令官会議では私が左翼、中央にグリーンヒル中将、右翼にビュコック中将を配置して中央後方にシトレ司令長官が待機して指揮統率をする事になった。予備の役割もある。

今回の目的、目標はイゼルローン要塞を攻略する事にある。そのため陸戦部隊も3個師団が用意されている。各正規艦隊に1師団ずつが配備され、それが要塞内の攻略の主戦力になる。

私の艦隊は補給に関してはアレックスが全面的に請け負ってくれているので安心していい。艦の整備状況もチュン参謀長を中心に見てくれているので安心。

代わりにその決裁の書類が山のようになっているので処理している。

書類仕事が嫌いな人が多いが私は好きだ。殺し合うより余程健全的で有意義だ。

正午を告げるベルが鳴り、そろそろキリの良いところで昼食に行くかどうか考えていると扉が空いた。視線を向けるとヤンが入ってきている。

「あれ、教官。ラップは居ないんですか？」

「ヤン、まずはノックをしろ。ラップならキャゼル又少佐の所に補給関係の書類を出しに行ってもらってる。その内に帰ってくるだろうから座って待っている。」

そう言っつてペンで目の前のソファアを指した。

「慣れたか？司令長官直属の参謀は？」

そう尋ねると苦笑しながら頭を掻いている。

シトレ大將は年越し前に行われた帝国との艦隊決戦でミュツケンベンガー元帥の艦隊に損害を与えて6分4分の勝利を得た為、年明けの論功行賞で代理が取れて宇宙艦隊司令長官に任命された。

ヤンも3月1日付でシトレ司令長官直属の作戦参謀として配属されている。

「どうも息苦しいですね。教官の元が良かったですよ。気を遣わなくて良いので。」

「ヤン。職務中に酒が飲めるからじゃないだろうな?」

凶星をつかれたのか苦笑いしている。仕方ないやつだ。

「ヤンは今回の作戦は聞いているのか?」

「はい、教官が反対されているということもシトレ校長に教えてもらいました。」

「どう思う?今は2人だ。率直な意見を言え。」

「閣下の懸念は分かりますが攻略の可能性は多分に有ります。」

「味方殺しが起こる可能性はあるか。私の艦隊は混戦にすることはない。」

命令を無視すると言った私に驚いたのかヤンが視線を向けてくる。

「司令長官に言うも言わないも自由にしろ。今言うのか戦争後に言うのかも全て任せる。」

私の生殺与奪の権利も与える発言に眼を見開いて此方を凝視している。

「聞かなかった。聞こえなかったの対応でも好きにすればいい。」

大きな溜め息を吐いているヤンを見て、つい笑ってしまった。

ヤンが何か言おうとした時にラップが帰ってきた。2人に昼休憩に行つてこいと告げて話を終わらせた。

帝国暦483年 オーデイン 軍務省尚書室

ミュツケンベンガー視点

軍務尚書の執務室に軍のトップ3長官が集まっている。エーレンベルク軍務尚書、シユタインホフ統帥本部総長、そして宇宙艦隊司令

長官グレゴール・フォン・ミュッケンベルガー元帥がフェザンより知らされたある報せについて話し合うことになっている。

「フェザンより叛乱軍がイゼルローン要塞攻略を行うようだ。4月に軍を発すると報せがあった。」

「叛乱軍の規模はどの程度になるのかな？」

私の疑問に軍務尚書が答える。

「正規艦隊3個にシトレ大将の半個艦隊の3個半になると報せにある。」

視線を統帥本部総長に向けると一つ頷いて話し出した。

「情報部からも同じ内容が入ってきている。間違いはなからう。」

「率いる司令官は分かるかな？」

「フェザンからの報せではシトレ、ビュコック、グリーンヒル、クローの4名が率いるらしい。」

3人で目を合わせた。

「彼奴が来るのか。ユーリ・クロー中将。」

「ああ、叛乱軍の若き名将だ。ここ最近の敗けは彼奴に齎された。」

「そこも考えて援軍を送らなければなるまい。」

私の言葉に軍務尚書、統帥本部総長も同意してくれた。

「司令長官は行けるのかな？」

軍務尚書の問いに首を横に振った。

「無理だ。先の戦闘で分艦隊司令官2人が死んだ。他のと合わせては5000隻は減った。補充はされたが新兵のようなものだ。訓練に今少しの時間がある。」

「では他の司令官を派遣するしかあるまい。」

統帥本部総長の言葉に頷いた。

「ゼークトも先の戦闘で被害を受けた。出せるのはシュトックハウゼン、クラーゼン、メルカッツ辺りであろう。」

誰にするかと問う軍務尚書の視線に頷いて答える。

「シュトックハウゼンとメルカッツにしようと考えている。そこにヴァルテンベルクの駐留艦隊があれば数はほぼ同数。要塞のトゥールハンマーもある。」

それで良いかと2人に視線を向けると頷いてくれたので此方も頷く。

「ではシュトックハウゼンとメルカツツの2人に出兵命令を出そう。」
これで3長官会議は終わった。後は大神オーデインに祈るばかりだ。

宇宙暦792年

ハイネセン

街中

出兵を5日後に控えて、今日はジェシカとショッピングに来てい
る。朝早くから色々な所を回っている。

朝の8時に迎えに行き、軽食を取り、映画を見て午前中を過ごした。
昼は窯焼きのピザが有名な店で食べ、腹ごなしにウインドウショッピ
ングしている。

あれこれと服を着てみて、雑貨を見て回る。夕方にケーキの美味し
いカフェに連れていかれた。

テラスに座りジェシカはミルクティーと紅茶を、私はチョコケーキ
にコーヒーを楽しんでいる。

30分ほどで食べ終わり、出ようかと声をかけると少し話が有ると
言ってきた。

「もうすぐ出兵ね。」

「ああ。」

会話が続かない。ジェシカが話すまで待とうと口を噤んだ。1分
ほどの静寂の後、話し出した。

「その、ユーリは何で男女のその、一線を越えようとしなの?」

恥ずかしいのか顔を真っ赤にしている。耳も赤い。

まさかの質問に答えを窮した。いや、答えは決まっているが伝える
べきか濁すべきかで窮したのだ。覚悟を決めて問うてきたのだ。誠
実に答えるべきだろう。

「私と君の年齢差は10近くある。付き合い始めた時は君は20にも
なっていないから手を出すのが憚られた。20歳を越えてから
も私よりも相応しい相手がいるのではと云う思い、迷いがあった。」

「後悔なんてしないわ。私が自分で選んだ相手だもの。私は貴方を愛

してるわ。だから貴方も私を愛して。」

顔が赤いが強い意志が籠った強い視線を向けてくる。それに対して誠実に答えるべきだろうと思った。

「分かった。君が真剣に答えてくれたんだ。私も答えよう。ジエシカ、愛してる。ずっと傍にいて欲しい。」

「ユーリ、末永くお願いね。」

目に涙を溜めながら満面の笑みを浮かべているジエシカを見て、やはり綺麗な子だなと改めて思った。

第5次イゼルローン要塞攻略戦

宇宙暦792

イゼルローン回廊

遂にイゼルローン要塞攻略戦が始まる。中央後方にシトレ司令長官5000隻、中央にグリーンヒル中将14000隻、右翼にビュコック中将14000隻、左翼に私の艦隊15000隻が配置して会戦の時を待つ。

帝国側は中央がヴァルテンベルク提督15000隻、左翼がシュトゥクハウゼン提督15000隻、右翼がメルカッツ提督13000隻のようだ。

フェザーンから帝国の増援部隊がシュトゥクハウゼン提督とメルカッツ提督と云う報せが入っている。ヴァルテンベルク提督とシュトゥクハウゼン提督の旗艦は分かっているので不明の艦隊がメルカッツ提督指揮の艦隊なのだろう。

私の相手がメルカッツ提督ということまでシトレ司令長官が目論む混戦に持ち込んでからの要塞攻略が私の方は無理か厳しい状況だと思っただ。

「総旗艦より命令。作戦を開始せよ、です！」

チュン参謀長が此方を見ている。それに頷いて命令を出す。

「全艦、前進。」

参謀長が復唱し、オペレーターが艦隊に命令を伝えていく。直ぐに艦が前進を始めた。艦橋にいる全員が顔を緊張で強張らせている。

トゥールハンマーの射程圏内に入るか入らないかで私の艦隊に停止命令を出した。長距離砲撃戦を開始した。

隣のグリーンヒル中将、反対側のビュコック中将の艦隊は要塞主砲の射程圏内に出たり入ったりしている。血の戦訓から産まれたD線上のワルツ・ダンスだ。

1時間ほど経過した時に一気にグリーンヒル中将とビュコック中将の艦隊が前方にいる艦隊との距離を詰め、混戦に持ち込んだ。ミサイル攻撃と爆発物を積んだ無人艦を突入させて爆破する作戦を敢行している。

その破壊力は強力でイゼルローン要塞の強固な外部装甲を破損させているようだ。

「これは落とせるかもしれないぞ！」

艦橋にいる誰かが言った言葉に全体が活気づく。帝国は混戦を解こうとしたが退いたら要塞に近付くことになり、進めば一気に同盟が要塞に近付くことになるために前進も後退も出来ずにいる。

「閣下！トウルハンマーが発射体勢に入っています！」

イゼルローン要塞からトウルハンマーの発射準備をしている報告が入った。

「現状を維持。この艦隊は射程圏内に入っていない。艦列を乱さないように伝えてくれ。」

そう命令を出し、副司令官、分艦隊司令官から了解の返事が入った。その瞬間に中央に目映い閃光が走った。トウルハンマーが射たれたようだ。通った場所にポツカリと空白地帯が出来ている。これで作戦は中止だなと思ひ、副司令官を呼ぶことにした。

「ここからが私の艦隊の本番だ。落ち着いて対応するように通信を送れ。クブルスリー副司令官を呼び出してくれ。」

オペレーターに伝えると艦橋全体が動き出した。

本当にこれからが本番だ。焦らず的確に対処していかないといけない。

シトレ司令長官視点

帝国がトウルハンマーで味方諸共撃った。グリーンヒル中将の艦隊の右翼部分が消滅している。3000隻は消えただろう。

まさかという気持ちとやっぱりかという気持ちがある。クーロ中将に警告されたが可能性は低くないと思ひ、実施したが案の定の結果だ。帝国軍艦艇と同盟軍艦艇とを区別なく破壊した予期せぬ攻撃によって同盟軍は恐慌状態に陥っている。これ以上の戦闘は無理だろう。

「ヤン少佐、全軍に退却命令をだしてくれ。私はどうやら、不名誉な記

録の樹立に貢献してしまったようだ……。」

ヤン少佐も暗い表情だ。命令を伝達している。

「司令長官、クロー口中将から通信が入っています。」

命令を出し終えたヤン少佐と顔を見合わせた。

「繋いでくれ。」

そう言うと直ぐに正面のスクリーンに繋がった。敬礼をしているので答礼をすると彼が話し始めた。

「小官の艦隊のクブルスリー副司令に中央の後退の援護をさせます。右翼のビュコック提督の艦隊は司令長官の艦隊にお願いしても宜しいでしょうか？」

「私に前に出ろと言うのかね？」

「この状況下で贅沢を言ってもいられないでしょう。幸いビュコック提督の艦隊はトゥールハンマーに撃たれてないので援護も撤退も容易かと？」

「分かった。責任を取れということだな。」

「はい、総司令官である以上仕方ないかと。」

重々しく頷く彼が頼もしいと同時に憎たらしく感じた。

「その後の殿は私がしましょう。それで宜しいでしょうか？」

彼の了承を得ようとする言葉に一言だけで返した。

「頼む。」

それ以上は何も言えなかった。

シトレ司令長官から許可も得た事だ。仕事にかかろう。

「クブルスリー副司令、中央の撤退の援護に回ってくれ。私は正面の艦隊に睨みを効かせる。」

「ハッ、承知しました。」

「撤退が完了するまでこの場に留まる。各員、奮闘せよ。」

1時間の撤退戦が終わった。

敵味方諸共の攻撃は同盟を恐慌状態に陥ったが帝国も恐慌状態になっていたようだ。混乱していたのかバラバラに追撃してきたのでクブルスリー副司令官とシトレ司令長官の横撃を喰らい、早々に追撃

を切り上げたみたいだ。第五次イゼルローン要塞攻略戦は失敗となった。

宇宙暦792

ハイネセン

統合作戦本部

第五次イゼルローン要塞攻略戦から帰ってきて3日、私は司令長官室に呼ばれた。ノックをして部屋に入った。

「よく来てくれた。論功行賞が終わったので伝達する。」

結果的に失敗したとはいえ、イゼルローン要塞に対して有効な作戦で実行した事を受け、同盟軍内で高い評価がされているようだ。

「今回の戦闘でイゼルローン要塞を物理的に色々と破壊したことが評価されて私は元帥に昇進、統合作戦本部長に任命される。」

「負けたのにですか？」

「もう少しのところまで敵を追い詰めた事が評価されたようだ。初めて要塞に大きな傷痕を残したということだな。グリーンヒル中將も一番被害を受けたが直接要塞に被害を与えたということで大将に昇進し、総参謀長になることが決定している。」

「左様ですか。それで小官を呼んだ理由は？」

「うん、君には私の後任になってもらう。」

驚きで目が大きく見開いているのが分かる。

「しかし残念ながら国防委員会、ロボス派の司令官達の反対で実現しなかった。」

「では後任は誰がするのです？」

眉を顰めて大きな溜め息を吐いてから言った。

「ロボスだ。そして君を副司令長官にで話が纏まった。前に言っていた前線に近いところに補給設備を整えた。君にはその司令官も兼務してもらおう。大将に昇進した上でな。」

「大した功績もなくロボス大将は司令長官に就任なされるのですね？」

私の厳しい物言いに苦笑いを浮かべている。

「今回のロボスの処遇は君の司令長官就任を望んだ私の動きが発端になっているのだよ。」

シトレ大将が気になる言い方をする。

「それはどういう事です?」

「君を司令長官にすると同盟で最年少での就任となる。それを国防委員会、ロボス派の奴らは問題視した。同盟に人無し等という事になるのではとね。」

あまりの馬鹿馬鹿しい理由に溜め息を吐いてしまった。

「ロボスの司令長官、君の副司令長官は覆すことが出来なかった。代わりに2つの条件を呑ませる事にした。君のエル・ファシル駐留艦隊司令の就任、それと戦争への参戦の自由化だ。」

「自由化?どういう意味ですか?」

「予算編成等で君の出兵は保証されるということだ。ロボスの出兵に不安なら付いていくことも後を追って予備としての役割を持つことも自由ということだ。便宜上国防委員会、統合作戦本部の承認を得るという行程があるが余程の事が無い限り通る事になっている。」

なるほど、内容は理解した。

「エル・ファシル駐留艦隊も我々の艦は大気圏離脱、突入能力がないからな。近くの小惑星型補給基地を空けるのでそこを拠点にしてもらう。君はロボス大将の下に付くのが嫌だと思いがどうか同盟兵士の為に尽力して貰いたい。」

大層嫌だがこれも多くの同盟将兵の為だと思い、了解の返事をした。

「分かりました。微力を尽くします。」

この時の私は最年少での副司令長官就任となった。此れが同盟に、帝国に何をもたらすのかまだ知るよしもなかった。

副司令長官就任と再編

宇宙暦792年

ハイネセン

統合作戦本部

自室

シトレ本部長との話し合いから2日後、我々は引越しの準備をしている。正規艦隊司令官の部屋から副司令長官室に移動である。本棚から本を段ボールに詰める作業の真っ最中である。副官のラップ大尉、参謀長のチュン准将も一緒に荷造りをしてきている。

そんな最中、1人来客が現れた。

「この度、副司令長官の作戦参謀に任命されました。

マルコム・ワイドボーン少佐です。よろしくお願いいたします。」

「よろしく頼む。チュン参謀長と協力して任務にあたってください。」

「ハッ。チュン参謀長、よろしくお願いいたします。」

「ああ、こちらこそよろしく頼む。とりあえず片付けを手伝ってください。引越しの準備をしている。」

「分かりました。」

そうやって各々手を動かした。

片付け終わったので最後の休憩をしているとワイドボーンが話題を出した。

「副司令長官が戦闘の自由化を与えられたという話がありますが事実でしょうか?」

「事実だが事実ではない。」

ワイドボーンが怪訝な表情をしている。

「私をからかっているのですか?」

「そうじゃない。反対側にある帝国ではないんだ。オールオーケー、オールフリーな許可なんて出すわけないだろう。」

「では自由とは?」

「まだシトレ本部長と国防委員会、ロボスの豚と折衝中だろうが出兵計画の立案、出兵希望の優先権、戦場での戦術行動の制約の無し位になると思うよ。」

「それって自由とっていいのですか?」

「文民統制が基本の民主主義国家の軍隊の在り方からすればここら辺がギリギリのラインだろうね。」

更に困惑の色を深めているようだ。

「副司令長官はそれでよろしいのですか？」

「一向に構わない。そもそも戦争に積極的ではないからね。出兵計画の立案等は毛頭する気もない。となると優先権と戦場での自由だがロボスパイは負け続きだからね。国防委員会も不安に思っているだろうから私に手伝わしたいのだろうな。」

「それはどういう意味です？」

「若き英雄と見られているから取り込みたいという国防委員会の思惑もある。シトレ本部長と最近は上手くいっていないと悟られたかも知れないし。」

「上手くいっていないのですか？」

肩を竦めて苦笑してしまった。

「ああ、色々とお互いに思うことがあるからな。」

「思うことですか？」

「今回の昇進に不満がある。何故私を昇進に持っていったのか。そもそも作戦にも反対していたからな。」

「エル・ファシルに移動になったのは？」

「前のエル・ファシルのような事は起きないというパフォーマンス、いざというときにその対応を私にさせて失敗したら私の責任問題にする、ハイネセンに居られると邪魔だと思ったロボスの差し金、純粋に前線の警護を任せれる有能な艦隊が居て欲しかった。どれだと思う？」

顔を顰めて悩んでいる。

「もしかすると全部ですか？」

微かに笑いながら頷く。

「ついでに伝えておく。君がここに来たのもロボスの意向が有ると思う。」

びつくりしている。予想外なのだろうな。

「短い間だったが私の教え子だったのが気になったのだろう。私の事

を恩師のように言っていたいな。宇宙艦隊司令部に居ると目障りに思っただろうな。」

「厄介払いですか？」

笑ってしまった。ラップもチュン参謀長も笑っている。

「ようこそ、左遷先に。これから出世出来ないかもしれないがよろしく頼むよ。」

「わ、分かりました。出世の機会が無いのは残念ですが。」

そんなこんなで私の艦隊に1人仲間が増えた。

副司令長官室に引越しを終え各司令官に挨拶をしに行っている。ロボス派のやつはろくな挨拶が出来なかった。これからビュコック提督を訪ねるが年下の上司は今までも居ただろうから問題はないだろうが私に個人的好き嫌いがあるかが問題になるだろう。

部屋をノックして返事を貰ってから入室する。

「今回、副司令長官に就任しました。若輩者ですがよろしくお願いします。」

柔らかく笑って対応してくれた。

「お前さんの力量も性格も知っている。だから構わんよ。」

「ありがとうございます。ご協力をお願いします事もありますがその時はよろしくお願いします。」

「うむ、挨拶は受けた。ウランフ、ボロディン提督には挨拶をしたかな？」

「いえ、これからです。」

「あの2人とは話してある。君に協力してくれるだろう。」

「そこまで話をしてくれているとは。ありがとうございます。」

「君の事を高く評価していた。驕らずに職務に専心することだな。」

「ご助言ありがとうございます。ではここで失礼します。次の方に行かなければならないので。」

敬礼をしてビュコック提督への挨拶回りを終えた。

赴任前の来客

宇宙暦792年 ハイネセン 統合作戦本部 自
室

エル・ファシルへの赴任を一週間後に控えて、色々と準備をしているとヤンがやってきた。

「副司令長官へのご就任おめでとうございます。」

やって来て締めりの無い挨拶を目の前でされた。

「ありがとう。お前もエル・ファシルへの凱旋おめでとうと云うべきかな?。」

頭を掻きながら苦笑いを浮かべている。苦笑も収まり、敬礼をして申告をする。

「この度、クーロ副司令長官の艦隊の査閲を担当することになりました。ヤン・ウエンリー中佐です。」

「御苦労。エル・ファシルに着いたら色々忙しいと思うが職務に邁進してくれ。」

真面目なやり取りを終えて、2人でソファアに座って話をしようとして伝え、対面で座って先の要塞攻略戦を話すことにした。

「結局、要塞攻略戦は教官の言う通りの結末になりましたね。」

「要塞が自身を守る方法は2つしかない。味方の艦隊が守るか自分の力で守るかだ。自分の力で守ると言うことは要塞主砲、浮遊砲台を使うしかない。」

「はい、しかし味方ごと撃つなんて。」

「自分の任務を全うする為の苦慮した結果だろう。あのまま混戦状態が続けば落とされた可能性はある。それを考えれば妥当な方法だ。」

ヤンが溜め息を吐いて、首を横に振っている。

「イゼルローンの司令官が代わったと聞きましたか?。」

「ああ、フェザンからの報せでは要塞司令官にシュトックハウゼン大将、駐留艦隊司令官にゼークト大将らしいな。」

「前任の2人は更迭ですか?。」

「いや、同盟の艦隊を撃退したからな。一時的に中央から離すかもし

れないが直ぐに中央の別の任務に着けるだろうな。」

「味方殺しをしておきながらですか？」

「次の要塞戦で混戦状態にされた時に味方殺しを怖れて要塞を落とされるよりはましだろう。そういった面でも味方殺しは叛乱軍の狡猾な作戦が原因、対応としては誤りではなかったとおかないといけないと思う。」

「イゼルローン要塞を守るためにですか？」

「ああ、シュトックハウゼン、ゼークトの両司令官が対応を間違えないためにな。」

「なら今後は並行追撃からの混戦は難しくなりますね。両名が警戒するでしょうし。」

「ああ、落とすなら前回で一気に落とすべきだったな。落とせるのならな。」

「落とせるのならと言いますと？」

ヤンにフェザーンからの情報を教える。

「オフレッツサーが居たそうだ。子飼いの部下を連れてな。さぞかし歓迎してくれただろうな。」

白兵戦において多大な武勲を立て上級大将、装甲擲弾兵総監まで上り詰めた歴戦の猛者だ。もし要塞内に攻め込んでいたら地獄絵図を作られただろう。

顔を青くしているヤンを見ると、思わず苦笑いが漏れた。

同盟は多くの血を流してきた。その量に対する見返りを求めているのではないか。それがイゼルローン要塞の奪取ならば底無し沼に嵌まっているのではないのかと思う。

「ヤン。お前はイゼルローンを攻略出来たら帝国と和平が結べると思うか？」

「可能性は有ると思います。帝国がイゼルローン要塞を奪還しようとはしますが、それを撃退して大きな被害を受ければ和平か休戦状態になるのではないかと。」

「同盟が帝国に攻め入る可能性は考えないのか？」

「戦力差があるので、そんな無謀な事はしないとと思いますが。」

「そうか。そうなら良いな。」

ヤンを退室させ、1人椅子に座り様々な事に思考を巡らせた。

多くの敵も味方も殺した過去に。多くの将兵の命を預けられている現在に。撃つては撃たれる、終わりが見えない未来に。

副司令長官になった私の人生の評価がどうなるのか後世の歴史家に聞いてみたいものだ。

赴任とエル・ファシルの一時

宇宙暦792年

エル・ファシル近郊

旗艦

明日、エル・ファシルに着く。それからのスケジュールを司令部要員と査閲を行うヤンで行っている。

チュン参謀長が読み上げてくれるので、それを聞いている。

「到着したら閣下とヤン中佐は就任式典、凱旋式典に参加していただきます。その後、エル・ファシルの代表者達と打ち合わせを行い、取材や収録等のメディアに出演していただきます。」

私とヤンが頷く。それを確認して連絡を続ける。

「翌日には閣下には艦隊に戻っていただき、駐留基地の確認とイゼルローン回廊迄の予想戦地の確認を二週間かけて行う予定です。」

「その間にヤン中佐には商店街での握手会、デパートでの写真撮影会、児童施設への慰問、戦災被害者との懇談会など様々な行事に参加していただく事になります。」

驚くヤンに苦笑する。嫌がるからギリギリまで伏せていた甲斐があったようだ。決定事項を告げる。

「ヤン中佐、まさかとは思いますが二週間の休暇を貰えると思っていた訳ではあるまいな。エル・ファシルの英雄の凱旋だぞ。使う場面は沢山ある。」

「そんなあ。折角の休暇がなくなるなんて。」

私もチュン参謀長もラップ、ワイドボーンも笑ってしまった。

「副司令長官としての最初の命令だ。」

命令するとヤンは肩を落として項垂れている。

「了解しました。」

1つ大きく頷いてから残りの命令も伝える。

「ラップ大尉をマネージャー代わりに付けてやる。ラップ、分かっていると思うがサボらせるなよ。」

ラップがお手本のような敬礼を笑いながらしている。それを見て、ヤンが苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「ジェシカに伝えてあるから寝泊りは私の家できるように。ラップも

泊まっていけるといい。」

「いいんですか？その…」

「構わない。護衛代わりになるし、お前が遅刻、欠席とかされるよりはな。引越しの片付けも2人とも手付かずだろうからな。」

「……了解しました。」

「そういうことで。よろしく頼むよ。」

伝える事は伝えたので解散して明日に備えるよう命令を出してミーティングを終えた。

宇宙暦792年

エル・ファシル

自宅

私の自宅で私とジェシカ、ヤン、ラップの4人で食事をしている。半月前にジェシカが先に来て、家具や食器等の引越しの荷解きをしてくれたので、初日から確りとした生活する用意が出来ている。

「閣下、回廊迄の戦地の確認ですが何処を見る予定なのです？」

質問してきたラップに眼を見て答えた。

「ティアマト、ヴァンフリート、ダゴン、アスターテは戦術的に確りとチェックしないといけないだろうな。アルレスハイム、パランティア、ファイアザードもだな。」

「意外と手広くするんですね。」

「ああ、戦場を決めるのは此方と彼方の駆け引きから決まる。なので勝つ為に、負けない為に必要な努力だな。」

「努力をすると口にするのは簡単だが実行すると難しい。際限がないからな。」

「ですね。」

食事をしながら艦隊の今後の行動予定を確認して、その日を終えた。

寝室でジェシカと2人で横になっている。客室にヤンとラップを各々放り込んでいる。どの部屋も家具を置いた最低限の部屋になっている。寝室もベッドにテーブル、カーテン、小物類を入れるミニ箆筒だけだ。

3回の襲撃に片付けから修理、買い物、設置の行程が面倒になり、ど

んどん不要な物が無くなり簡素になった。

ジェシカが文句を言うかと思ったが彼女も最低限揃っているのを確認して必要な物を揃えたようだ。主に台所周りの家電等だが。

「明日から二週間居なくなるのね？」

「ああ、戦場になる可能性の有る場所は直に確認しておきたい。有利に戦うためにな。」

「貴方が居なくて暇だから初等科の教師の仕事をしようと思うの。教師になるのが夢でもあったから。」

「いいと思う。したいことはほとんどんすればいいさ。短いのか長いのか分からないのが人の一生だからな。」

ジェシカが胸元に顔をうずめて、顔を赤くしている。

「その、しばらく会えないから、その。したいなって……。」

顔を見せないようにしているジェシカを愛おしく感じた。ぐいつと身体を起こして入れ替えて、ジェシカを下にして目を見詰めた。

「いいか？」

「はい。」

彼女の返事を聞いてから胸元に顔をうずめた。

訓練と自宅での一時

宇宙暦792年

アスターテ宙域

旗艦

10日の宇宙での戦域確認訓練を終えて、エル・ファシルに帰っている。この後はエル・ファシルで艦隊運用の訓練を行う予定だ。

ワイドボーンが質問をしてきた。

「ここまで色々と確認するとは思いませんでした。戦場の端まで確認するとは。」

チユン参謀長と顔を見合わせて笑った。

「何か可笑しな事を言いましたか？」

「いや、ラップにも聞かれたのでね。答えよう。」

「お願いします。」

隣の参謀用の席を指差して座るように指示した。

「同盟の想定戦場はイゼルローン要塞から同盟側に絞られている。そこを詳しく知る事で帝国軍より有利に戦う事が出来るからだ。帝国は詳しく知らないだろうからな。」

「本部にデータがあるのでは？」

「データはある。私が更新したやつがな。」

ワイドボーンが驚いている。

「閣下が更新していたのですか？」

「知らなかったのか？私の艦隊は訓練はいつもエル・ファシルよりイゼルローン寄りで行っている。調査も兼ねているんだ。」

チユン参謀長が後を引き継いでワイドボーンに話してくれた。

「閣下は3つの要素を重視しておられるのです。」

「3つの要素ですか？」

ワイドボーンが首を傾げながら聞いている。

「はい。まずは艦隊の戦力についてです。敵味方の数、艦隊運用の練度、司令官や副司令官、分艦隊司令官の能力です。」

「2つ目は戦場の把握です。何もないのか、小惑星帯があるのか、ブラックホールがあるのか、惑星があるのか、その惑星の環境や太陽風や隕石等、様々な要因があります。それを敵は知らず、此方が知って

いれば有利に働く。そういうことです。」

「最後に外的要因です。私達が敵と相対している時に横から味方が敵が攻撃してきたら大きな損害を受けます。それをどちらが用意するか、出来るかということですよ。」

「孟子？の天の時、地の利、人の和のことですか？」

「そういうことだな。」

チュン参謀長の説明が終わったのでワイドボーンに質問をしました。

「その観点から私が好む戦場は何処に分かるか？」

「閣下の考えから推察するにダゴン、ヴァンフリート辺りが好みかと思われませう。惑星レグニツアも使い方次第では良きようになるかと。」

正解だと頷き、続きを促した。

「閣下の考えですとアスターテ、パランティア、ティアマト、アルレスハイムは艦隊戦に不向きと見ました。敵味方問わず動きやすすぎると。」

「正解だ。私は正々堂々と云うことは嫌いでね。必要となるならするが。」

「閣下はシミュレーターでの成績はピカーと聞いていますが？」

「それは相手より私の方が適切に戦術的行動を取れたからだ。相手が私より優れた用兵家がいるかもしれないから出来るならしたくないのが本音だ。」

「分かりました。ご教示ありがとうございました。」

ワイドボーンとの意識の擦り合わせは出来たと思う。これから艦隊の訓練をしていき、深めていければと思った。

宇宙暦794年

エル・ファシル

自宅

赴任して一年半が経ち、新年早々に本部長のシトレ元帥より連絡が入った。帝国軍が約4万隻で同盟領に侵攻するようだ。2月頃にオーデインを発つ予定らしい。

陣容は後日手に入り次第連絡するといっていた。

此方はロボス司令長官が総大将、第5艦隊のビュコック提督、第6艦隊ムーア提督、第12艦隊ボロディン提督、私の第1艦隊の4個艦隊5万隻の予定だそうだ。

私の艦隊は副司令官のクブルスリー提督がエル・ファシル周辺の警戒に残る事になっている。1万隻を率いて参戦するよう命令が下った。

久しぶりの戦場に高揚している兵士を見ると溜め息を吐きたくなるが指揮官が戦いを厭うと思われぬように我慢するのが辛い。

牛肉のシチューとサラダ、サーモンのマリネ、ピクルスの晩御飯を作り、テーブルに並べる。ジェシカも帰ると連絡が入ったからちょうど良い時間だろう。

5分もしない内に帰ってきた。玄関に迎えに行く。

「おかえり、ジェシカ。夕食がちょうど出来た所だ。」

頬にキスをして食卓に連れていく。

「あら、シチューじゃない。嬉しいわ。貴方のシチューは絶品だから。」

「そうか。では早速食べよう。赤ワインもある。」

そう言つてボトルとグラスを掲げた。

食事も終わりが見えた頃に出兵について話すことにした。

「出兵する事になった。来月には本隊はハイネセンを発つだろう。私も3月にここを発つ。」

「また、戦争なのね。」

「ああ、そうだった。クブルスリー提督をエル・ファシル及び周辺の警備に残すので問題が起こることはないだろう。」

「無事のお帰りをお待ちしているので気をつけてくださいね。」

「分かった。無理をする事はしないと約束する。」

帝国の出兵に対する同盟の出兵が少しずつ進んでいく事になる。

ヴァンフリート星域会戦前の作戦会議

宇宙暦794年

ヴァンフリート星域付近

連絡艇

目的地まで後1日の距離だ。ここで各艦隊司令官の最後の作戦会議を開く事になったためにロボス司令長官の旗艦アイアースに向かっている。チュン参謀長とワイドボーン少佐を連れていつている。

艦に着くとビュコック提督が降りているところだったので駆け寄り声を掛けた。

「ビュコック提督、ご無沙汰しております。」

「これは、副司令長官殿。そちらからわざわざの挨拶、痛み入ります。」
「からかうのはやめていただきたい。副司令長官としての初出兵で些か緊張しているので。」

「左様か。儂にはいつも通りにしか見えんがね。」

「ビュコック提督は今回のヴァンフリート星域が戦場になるのをどう捉えておいでですか？」

「君が色々と揃えたデータは見てきた。此れを巧く活用できたら大勝も夢ではないな。まあ、始まっておらんのに景気の良い話をするのも。絵に描いた餅は旨そうだが実際は喰えんからな。地に足着けて戦うのが良からう。」

冷静に今回の戦争を見ているビュコック提督に頼もしさを感じて安堵した。

「浮わついておりますよう安堵しました。」

「ロボティン提督も浮かれておらんよ。問題はムーア提督とロボス司令長官じゃな。戦場の戦い難さを何処まで理解しておられるのかが不安じゃな。」

「同感です。無茶をしなければいいのだが。」

「無理じゃよ。今回で元帥を狙うそうじゃ。お前さんが大将、ロボス司令長官も大将。面白くあるまいて。のう？」

からかうような口振りに失笑してしまった。

「では私は後方待機ですか？」

「だろうな。お前さんを積極的に使おうとはせんだろう。」

こんな私利私欲を優先する男が同盟の総司令官とはお先が真っ暗に思えた。

宇宙暦794年

ヴァンフリート星域

アイ

アース

会議室に私、ビュコック提督、ボロディン提督、ムーア提督の4名が椅子に座って、今回の戦争の総司令官ロボス司令長官を待っている。チュン参謀長、ワイドボーン少佐は外で待機になった。定刻通りに入ってきたロボス司令長官とグリーンヒル総参謀長が席に向かう。起立をして敬礼を行い、席の前に行くのを待つ。ロボス司令長官が席の前に着いて、答礼を行い腕を下ろしたので着席した。ロボス司令長官が話を始める。

「帝国と同盟はヴァンフリート星域での戦闘になるだろう。この際だから布陣も伝えよう。中央にビュコック提督、ボロディン提督。左翼にクーロ副司令長官、右翼にムーア提督だ。私は更に後方から戦場を俯瞰しながら采配を取ることにする。その都度、戦況を見て命令を出すので勝手な行動は慎むように。」

最後の言葉は私を見ながら告げる。

作戦会議が終わり、グリーンヒル総参謀長とビュコック提督、ボロディン提督が近くに来てくれた。

「どう思う？クーロ副司令長官。」

「私が予備かと思ったのですが違ったのに驚きです。予備を置かないのは一抹の不安がありますが艦数、艦隊数は此方が上です。なので無難な戦法かと。戦況の急激な変化が無ければですが。」

3人が頷いている。

こんなに不安を下に与える総司令官で同盟はいいのかと思った。出来るなら憂いなく戦える環境をと節に思う。

宇宙暦794年

ヴァンフリート星域

旗艦

帝国が眼前にいる。フェザーンからの情報通りに4万隻を少し越

えているように見える。中央にミュッケンベルガー元帥の1万5000隻、右翼にグライフス中將の1万5000隻、左翼にグリンメルスハウゼン中將の1万2000隻らしい。

私の相手はグライフス中將のようだ。ミュッケンベルガー元帥の参謀長を勤めた人物で思慮深く、冷静沈着が持ち味だそうだ。慎重な艦隊運用をしてくると推測出来る。

ここで問題はグリンメルスハウゼン中將だ。今まで名前すら聞いたことのない人物だ。情報部、フェザーンの両方に確認を取ると意外な経歴が分かった。

この人物、実は軍功を特段挙げることなく昇進したらしい。

元は子爵家の三男で士官学校での成績も凡庸であったが、兄2人が相次いで亡くなったため偶然に家を継ぐことになったそうだ。

青年時代はフリードリヒ4世の侍従武官兼放蕩仲間で、帝位に就くまで何かと尽力したため信頼も厚く、今も皇帝と仲が良いらしい。

軍部、宮廷、貴族、部下と多くの者から軽んじられている老提督で、外見は老耄としており、居眠りが多いことから「居眠り子爵」「ひなたぼっこ提督」などとも呼ばれていると報告書にはある。

この情報から何で今、このタイミングで出兵してきたのかサツパリ分からない。死ぬ前の最期の奉公かと思わなくもない。よく分からないので出来るなら関わらないでいたいと思っていたがロボス司令長官が反対側に布陣させてくれたので一安心した。

ヴァンフリート星域の会戦の幕開けが刻一刻と近づいている。

ヴァンフリート星域会戦、始まる

宇宙暦794年　ヴァンフリート星域　旗艦

艦隊同士の距離が近づいている。イエローゾーンに入り、間もなくレッドゾーンに先頭が入る。この瞬間は何時も緊張する。いよいよ命のやり取りをするという事実なのだ。そんな時にオペレーターが声を上げる。

「先頭がレッドゾーンに入ります。」

その声を聞き、チュン参謀長、ワイドボーン参謀、副官のラップ大尉の顔を見る。皆が一様に緊張している様でホツとした。

「間もなく全艦レッドゾーンに入ります！」

オペレーターの引き続きの報告に右手を上げる。誰かの唾を飲み込むゴクリという音が聞こえた。

「全艦、レッドゾーン入りました！」

その声を聞き、振り下ろして命令を出した。

「撃て!!」「撃て！」

チュン参謀長の復唱の声を聞きながら、敵味方の戦列から砲撃が放たれた。帝国軍からも同じように砲撃が来る。戦闘が始まった。

宇宙暦794年　ヴァンフリート星域　旗艦

始まって1時間が経った。私の方は1万隻、帝国軍は1万5000隻で数の上では不利なので隊列を維持して応戦する。敵が積極的に攻めてこないのが流れとしては動きが無い状態である。

「参謀長、どう思う？」

チュン参謀長に意見を求めると顎に手をやり、考え込んでいる。「数の利で押してくると思ったのですが意外に慎重な艦隊運用ですね。」

2人で考え込んでいるとワイドボーンが会話に入ってきた。

「恐らく閣下を警戒しているのでしょう。積極的に攻めれば逆撃を喰らうと考えているのではないかと推測します。」

私とチュン参謀長は視線を合わせてからワイドボーンにチュン参

謀長が問いかけた。

「どういうことだ？……ここまでの戦力差があるのにここまで神経質になる理由が分からないのだが？」

私もチュン参謀長の意見に同意なので1つ頷いて、ワイドボーンに先を促した。私達の答えが分かっている様子に眼をパチクリし、苦笑した。

「最近の同盟と帝国の戦争で戦功を毎回あげているのは閣下だけです。それも艦隊を崩しています。帝国が一番警戒しているのは閣下に間違いありません。だから1万隻の我々に1万5000隻の艦隊を当てたのでしよう。本来であれば1万2000隻のグリーンメルスハウゼン艦隊を我々に当てて、1万4000隻のムーア提督にグライフス提督の1万5000隻を当てるのが順当です。それが逆になっている事から私は推測しました。」

ワイドボーンの意見に私、チュン参謀長、ラップ大尉は顔を見合わせて苦笑した。どうやら我々は自分達が考えている以上に敵に評価されているらしい。

「ということは此のままの戦況で進むのは敵の狙い通りと云うわけか。」

「そういうことだと思えます。」

ワイドボーンの同意に小さく息を吐いた。

「他の艦隊の戦況はどうか？」

3人に問いかけるとモニターを見ながらチュン参謀長が答えた。

「中央はミュッケンベルガー元帥が大分激しく攻めていますな。連敗しているので焦っているのか、背水の陣なのか。ビュコック提督、ボロディン提督が中々に被害を出している様に見えます。どうも艦隊の防御陣形がヴァンフリート星域特有の気象に保っていないように見えます。戦い難さがデータを上回っていたのかと。右翼のムーア提督は果敢に攻め込んでいますが追い払われているみたいです。」

「グリーンメルスハウゼン艦隊のあの小艦隊が良い動きをする。1000隻にも満たないが良いタイミングで攻撃している。ムーア提督の鋭峰をすつかり丸めている。あれでは攻撃が刺さることはない。見

事だよ。」

ラップ大尉がマーカーで件の艦隊を示した。

「この艦隊ですね？確かに見事な艦隊運用です。剣がすっかりナマクラにされている。」

「あの指揮官は大層出来ますね。立身出世したら厄介になりそうですね。」

ワイドボーンがラップに続き意見を述べる。チユン参謀長も頷いて賛意を示している。

「是非とも部下に欲しいな。大層楽をさせてくれそうだ。」

私の言葉に3人が目線を合わせて笑い出した。そろそろ動くか。此のままダラダラしても仕方ないし、敵は消極的だから、此方から仕掛けないと変わらない。

大きく息を吐いて姿勢を正した。その様子を見て、艦橋に緊張が走った。

「動くぞ。パターン15の応用でいく、全艦に通達しろ。中央に集中砲火、主砲斉射三連…撃て〜！」

私の命令が行われ、敵の中央が大きく被害を受け乱れている。中央を前に出して、敵の中央に紡錘陣形で攻撃する様子を見せる。敵が慌てて中央の被害を受けた艦隊を後方の本隊に合流させ、縦深陣を構築しようとしている。この瞬間を待っていた。

「中央は左右に別れて敵の両翼を半包围しろ。中央は本隊が前に出る。両翼は艦列を伸ばして側面にも展開しろ。」

敵の後方にいる本隊は中央の被害を受けた艦隊が入った為に此方の動きに即応出来ない。この瞬間がチャンスと両翼を叩きに出る。

敵の両翼は中央突破を図る動きを見せた私の艦隊の側面を突こうと横に艦を向けようとしたのか動きが鈍い。

敵が後退をするまでの機会、しっかりと攻撃を行う。30分程で態勢を敵の艦隊は整えたので攻撃を打ち切った。恐らく4000隻近くは被害を与えただろう。此方は500隻程のようだ。緒戦は此方が優勢と云ってよいだろう。

このまま何事もなく進んでほしいと思った。

宇宙暦794年

ヴァンフリート星域

戦艦

???サイド

「敵は相変わらず正面突破か。芸がないな。猪のようだ。」

私の言葉に側に立つ男は苦笑している。

「此方は何とかかなりそうだが逆の方は危ういな。」

「グライフス提督と叛乱軍のユーリ・クロー提督の戦線ですね。」

「ああ、見事な艦隊運用だ。中央に集中砲火を浴びせてた。グライフスは前衛を下げて本隊に合流させる決断をした。その動きを見たクロー提督は中央突破の動きを見せた。それに対してグライフスは縦深陣を敷く為に両翼を内よりに向ける。その動きを見たクロー提督は中央の部隊を外に向け、両翼の部隊と包囲をする。中央は本隊同士で攻撃するので動けず。両翼が後退するまで一方的に攻撃をされた。中央で2000隻、両翼で2000隻位の被害を受けたようだな。」

「これで彼方側は戦力差は互角になったと云うことですね。」

「そういうことだ。さて、ミュッケンベルガーはどうするか。お手並み拝見だな。」

ヴァンフリート4Ⅱ2宙域会戦

宇宙暦794年　ヴァンフリート星域　旗艦

戦闘を一時中断し、同盟と帝国は距離を取って補給をしている。

「補給完了までどれくらい掛かる?」

ラップが此方に近付いて書類を見せ、報告してくれる。

「あと3時間で終わる見込みです。気象環境が悪いために想定より時間がかかっています。」

「分かった。仕方ないだろうな。総司令部が甘く見積もったのだから。」

チュン参謀長が今後の動きを聞いてきた。

「この後、ロボス司令長官はどうするのでしょうか?」

「この状況では色々な手があるがどれも欠点がある。どれを取るかで司令官の能力がある程度分かるだろう。」

そんな事を言い合って暫しの休息をとった。

補給が終わって戦闘が始まっている。総司令部より命令がきた。ヴァンフリート星域特有の気象を利用して各々の分艦隊を敵の後方に出るように命令が出た。

相手の後背を狙って渦を巻くように移動したために敵味方が入り乱れて膠着した。

我々は後方に待機せよと命令が下ったためにヴァンフリート星域から少し離れた場所で待機している。

どうやら酷い混戦になっている。戦況は各分艦隊からの僅かな連絡のみだが混乱しているようだ。

現在地不明、連絡がつかない等が多いみたいだ。

そんな時にある場所から救援要請があった。ヴァンフリート4Ⅱ2には既に同盟軍が駐屯しており基地を建設しており、グリーンメルスハウゼン艦隊が基地を発見し、攻撃をしてきたようだ。帝国軍の攻撃を受けた同盟軍基地司令セレブレレッゼ中将は総司令部、艦隊司令官に救援要請を行い、グリーンメルスハウゼン艦隊の迎撃を行うようだ。そ

れに対してビュコック提督の第五艦隊が最初に救援に向かった。

そこにミュツケンベルガー元帥が率いる帝国軍が呼応して、ヴァンフリート4Ⅱ2に急行、衛星上空にて艦隊戦を展開した。

艦艇数では帝国軍が上であったが航行可能空間の狭いヴァンフリート4Ⅱ2宙域では数の利を生かせず、第5艦隊は単独でも互角に戦ったが、物量差を覆すことはできず、膠着状態に陥った。

そこに私の艦隊が2番目に駆けつけた。ビュコック提督とミュツケンベルガー元帥の帝国軍本隊は互いに向かい合っている所に帝国軍の左翼側から半包囲を取ることが出来た。

宇宙暦794年

ヴァンフリート4Ⅱ2宙域

旗艦

「良いタイミングでミュツケンベルガー元帥の横を突きましたね。」

ラップが興奮しながら言ってきた。その様に笑ってしまった。

「部隊を展開させる。艦列は大変だろうが崩さないように注意しろ。」

部隊をミュツケンベルガー元帥の横に展開し終えた時に後方からレーダーに反応があった。ボロディン提督は帝国のグライフス提督と睨み合っているようだ。と言うことはムーア提督の艦隊のようだ。

「ムーア提督に通信を送れ。現在の場所に艦隊を展開させる余白はない。この上は後方に出て包囲殲滅をするべきだと。」

オペレーターが内容をムーア提督に送ると直ぐに返信があった。

「我、ここにいたって回り道をする面倒な事はせん。このまま突入し、敵の横腹に風穴を空ける。以上です。」

チウン参謀長、ワイドボーン参謀、ラップ大尉の3人は驚いて周りの顔を見ている。

「ムーア艦隊、突っ込んできますー！」

「馬鹿な、こんな所を2個艦隊が展開できるか！敵の一撃を貰うと混乱するぞ」

オペレーターの声に正気を取り戻し、命令を出す。

「艦隊を後退させる。全艦に通達しろ。」

ムーア艦隊が突っ込んできた。狭い中で2個艦隊が展開するスペース等なく、部隊を下げる様に命令した。

「直撃来ます!!」

オペレーターが青い顔をしながら報告し、その瞬間1発の射撃が艦を襲った。

私は前方に飛ばされモニターに肘を着き、右手を骨折し、爆発したモニターの破片が左肩に刺さった。激痛を感じながら慌てる艦橋要員に声をかける。

「隊列は適当でいい、兎に角下がるんだ!」

そういつてから椅子に深く腰かけた。軍医が駆けつけて私の怪我を見ていく。医師の見立てでは右手の骨折、左肩の破片が刺さった負傷で命に別状はないそうだ。

医者に怪我をしたのを見て貰っているとムーア提督にフツフツと怒りが湧いてきた。

「脳ミソまで筋肉で出来たバカか! いやサメよりも小さい脳しか持たないマヌケか。」

そうムーア提督の事を罵っているとチュン参謀長、ワイドボーン参謀、ラップ大尉が近くに寄ってきた。チュン参謀長は手首を痛めたのか逆の手で押さえている。ワイドボーンは無傷のようだ。ラップは頭を切ったのか打ったのか包帯を巻いている。血が滲んでいることから深手なようだ。

私は負傷を理由に大きく艦隊を下げる様に命令した。これ以上は付き合いきれないので。

今回の戦争も終わりが見えてきた。ここからどうやって終わりに持っていくか総司令官の腕を遠巻きから見物することにした。

ヴァンフリート4Ⅱ2宙域会戦の終結

宇宙暦794年 ヴァンフリート星域 旗艦

負傷して軍医に見てもらっている。

「状態はどうか？」

「右手の骨折はそこまで深刻ではありません。左肩の破片が刺さった負傷も止血と破片の除去は終わりました。輸血の必要がありますが概ね大丈夫です。」

「輸血はここでしてくれるかな。今も戦闘中だ。」

軍医が眉を顰めている。反対らしい。

「閣下、大丈夫は安静にしたらの話で仕事をしていいとは申しません。」

「私は艦隊を、多くの人命を預かる司令官です。自分の部下を守るためなら多少の無茶はしなければならぬ立場なのです。」

私の言葉に説得を諦めたのか首を横に振っている。

「分かりました。そこまでの覚悟をしているのなら仕方ありません。しかしながら治療はここでしっかりとさせていただきます。それでよろしいでしょうか？」

「ああ、それでお願います。貴方にはすまないと思っっている。」

治療に関しては終わった。次は艦隊の状況だ。

「参謀長、ワイドボーン参謀、艦隊の被害状況は？」

2人が顔を見合わせてからチュン参謀長が1歩前に出て報告してきました。

「さっきので2000隻程が落ちました。残存数は7000隻を越えています。戦闘可能艦だけですと6500隻程になります。」

「そうか、大損害だな。他の艦隊はどうか？」

「ビュコック提督が被害を出しながらもミュッケンベルガー艦隊に傷を負わせています。ビュコック艦隊は1万隻程が戦闘しています。」

「ボロディン提督は帝国のグライフス提督と牽制し合っており大きな被害を受けていません。」

「ムーア提督ですが混乱が収まっておらず今ものたうち回っています。」

す。半数程が落とされたようで5000隻程になっています。」

チユン参謀長が尋ねてきた。

「閣下、この後は如何しますか？ミユツケンベルガー艦隊の後方に出るかボロディン提督の援護に行くのが現実的な案かと思いますが。」

衛星ヴァンフリート4112の同盟軍基地をグリーンメルスハウゼン艦隊が攻略中でその救援に行きたいが数において劣勢の為に私の艦隊は救援に行くことが出来ない。

とりあえず撤退するように命令したが逃げられるかどうか。

グリーンメルスハウゼン艦隊を守るような形のミユツケンベルガー艦隊はビュコック提督の艦隊に正面から、左方からムーア提督が攻めているが互いに決め手に欠くようだ。

「参謀長、ボロディン提督の援護に向かう。私の援護が早いかグリーンメルスハウゼン艦隊の攻略が早いか時間の勝負になるだろう。」

「承知しました。全艦に命令。ボロディン提督の援護に向かう。」

これで艦隊は動き出した。移動に時間がかかるだろうから少し席で休むことにしよう。

「閣下、何故ミユツケンベルガー艦隊の後方、もしくは右方に出ないのですか？そちらの方が近いのに？」

ラップとワイドボーンが疑問を持ったことを聞いてきた。

「十分な数があればその手をとったが後方のグリーンメルスハウゼンが怖いから少し離れた所で戦闘中のボロディン提督の援護に行くことにしたんだ。グリーンメルスハウゼン艦隊が動いて来たら此方が圧倒的に不利になるからな。」

「では時間の勝負とは？」

「敵は基地を攻略し終えたら艦隊を整えて撤退するだろうな。このまま続けてもダラダラと消耗戦になる。そうなるよりは基地攻略を手土産に引き揚げるが妥当だということだ。」

なるほどと思ったのか2人はウンウンと頷いている。

移動に半日はかかるようだ。どちらに賽の目が転ぶか運命の半日になりそうだ。

ボロデイン提督の援護に動いて6時間後にグリーンメルスハウゼン艦隊が動き出したとビュコック提督から連絡があった。どうやら基地の攻略が終わったようだ。ミュッケンベルガー艦隊の横に付いて足並みを揃えて後退しているようだ。ボロデイン提督もグライフス提督が後退していると連絡してきた。それを聞いたロボス司令長官は追撃を命令しようとしたが戦闘が長引いたこと、兵力差がないこと、私の艦隊が移動中の為に追撃に移れない事から取り止めたようだ。

ロボス司令長官から衛星ヴァンフリート4112の基地に赴き、生存者の確認と基地の状態の確認を命令された。ビュコック提督らは帝国軍がしっかりと撤退したのかを確認しているようだ。

これで今回の戦闘は終わりのようだ。半日後に基地に輸送艦を降ろし、生存者を收容していく。收容中にシエーンコップがやって来た。

「閣下、救援ありがとうございます。」

「いや、遅くなって申し訳ない。上の艦隊戦が上手くいかずこのような結果になってしまった。」

「閣下のお姿を見れば何も言えませんな。愚痴か悪態の1つでも言ってやろうかと思っただのですが。」

「すまなかった。」

「何度も謝らなくて結構ですよ。」

首を横に振ってから心に思っていた事を告げた。

「そうじゃない。私が司令官、副司令長官になった時にローゼンリッターを艦隊の陸戦隊に呼ぼうとしたんだ。しかし、リユーンブルクの亡命がネックになって許可が下りなかったんだ。エル・ファシルはイゼルローン要塞に近い。後に続くものが出るのではと。」

「左様でしたか。まあ、あの状況なら仕方ないでしょうな。何れは呼んでいただけると思っただけ、その時を待ちましょう。では失礼します。」
そう言っただけで敬礼して下がっていった。

とりあえず今回も負傷したが生き延びたようだ。早く家に帰りたいと思った。

戦後の対応

宇宙暦794年 エル・ファシル 補給基地 自室

先の戦闘の被害状況が上がってきた。ビュコック提督が6000隻、ボロデイン提督が5000隻、ムーア提督が1万隻、私が3000隻で計2万隻に近い数の被害を出したらしい。

それに対して帝国はぎっと1万隻に満たない数のようなので今回の戦いに関しては同盟の敗北と言うしかない惨状だ。衛星ヴァンフリート4112に建設中だった基地も破壊されたし、その司令官だったセレブレツゼ中將も生死不明だそう。恐らくは死んだのだろう。

後方の練達者がいなくなるのは痛すぎる。只の階級が高い将校ではなく本当の後方勤務が練達な将校だったので残念だ。アレックスも頭を抱えていることだろう。

そんな事を思いながらボーツとしていると通信が入った。両腕を怪我しているので若干の苦勞をしてボタンを押すと件のアレックスが映った。

「思ったよりもお元気そうで何よりです。」

「両腕を怪我している以外は問題ないよ。何をすることも不便だがな。それで何の用だ？そちらは忙しいだろう。セレブレツゼ中將がいなくなつて前線の補給担当者が消えたのだから。」

だいぶ他の所から色々と言われているのだろう。渋い顔をしている。その様子について笑ってしまった。

「この補給関連が終わつたら昇進させてくれるそうです。」

「ほう、そうか。おめでとう。」

大体の先が見えたので笑いながら告げたら恨めしそうに視線を向けてきた。

「キリがありません。4個艦隊の補給、修理、陸戦隊のもあります。」
「愚痴を言いたいのか？聞いてくれと言うなら先輩ではあるが聞いてやるが？」

チラリと此方に視線をやり、下を向いて大きな溜め息を吐いた。

「シトレ本部長から伝言で閣下にハイネセンに帰還命令が出るそうで

す。ビュコック提督達と同じタイミングで帰ってくるようにだそう
です。」

「分かった。艦隊はどうしたらいい？そこら辺も聞いているか？」

「ウランフ提督が閣下の代わりに臨時で赴任するそうです。閣下は自
分と少数で此方に。」

「分かった。参謀長とクブルスリー副司令官は待機させる。ラップと
ワイドボーンに随伴を頼むことにするよ。輸送艦か巡洋艦でそちら
に行くことにする。」

「分かりました。伝えておきます。帰還した日は今回の戦いの式典が
あるので参加をお願いします。」

「分かった。仕事だからな。」

「夜も懇親会があるそうですが？」

「パスだ。こんな体で勘弁してくれ。」

アレックスは笑いながら答えてくれる。

「分かりました。夜のは不参加と伝えておきます。」

「次の日の夜に私の家に来ませんか？オルタンスと通信で遣り取りは
したことがあります。顔合わせはしてないでしょう？此方も結婚祝い
に色々と贈ったりしてくれましたので御返しにと。閣下の結婚の祝いも
したいですし。」

私の顔が赤くなつたのを見たのだろう。聞いてきた。

「何かご不満でも？」

「いや、アレックス達ではない。笑わないと約束出来るか？」

頷いたのを見てから話し出した。

「私が両腕を怪我しているから食事や身支度に不便だな。ジェシカが
色々と甲斐甲斐しく世話をしてくれる。嬉しそうにな。」

「両腕を怪我しているの仕方ないのでは？」

「アーンや着替え、入浴等の生活全般をするから困ったよ。」

アレックスがモニターから外れた。口を押さえながら外れたから
笑うのを我慢しているのだろう。

「失礼しました。今はどうなのです？」

「左肩はほぼ治った。右手はまだ一月かかるそうだ。」

「そうですか。」

「ジェシカも非常勤なので付いてくるだろうな。お邪魔させてもらおうよ。」

「分かりました。御馳走を用意して、お待ちしています。」

約束をしてから、ふうくと一息吐いて話題を変えた。

「それで今回の戦いはそつちではどう報道されている?」

アレックスの眉間が険しくなった。面白い話ではないらしい。

「4提督は奮戦したが残念な結果になったと。ムーア提督は大損害、閣下は運悪く負傷したことにしたいようです。」

「あのアホのせいだと流れてないのか?」

「はい。ミュッケンベルガー元帥の攻撃が不運にも当たったという流れにしたいようです。」

「そうか。国防委員長はそうしたいのだろうな。面白くないが仕方ない。」

「はい。トリューニヒト国防委員長はそのような筋書きを書いていきます。」

「軍も内憂外患だな。中のロボス派閥、外のトリューニヒト。一癖も二癖もあるな。友人付き合いはごめんな奴らだ。」

私の物言いが面白かったのかアレックスが笑っている。

「此方はそんな感じですか。では他に用がなければ失礼します。ハイネセンでお待ちしてますので。」

敬礼をしてから通信が切られた。私から切らないとダメなのだが察して向こうから切ったのだろう。相変わらず気の効く奴だと思っ

た。
やはり出来る男は違うなど笑ってしまった。

ハイネセンへ帰還

宇宙暦794年

ハイネセン

宇宙港

ハイネセンに帰ってきた。宇宙港の出入口にヤンが待っていた。私を待つていたようだ。敬礼しながら話しかけてきた。

「お帰りなさい、教官。」

「エル・ファシルの英雄に出迎えしてもらえとは。痛み入るな。」

「いい加減、そのからかい方は止めてくださいよ。」

「分かった、分かった。それで本部長からの迎えだな？」

「はい、私に行けと。キャゼル又大佐は忙しくて代わりにと。」

「そうか。では、行こうか。」

「そういえば、明日はキャゼル又さんの家で食事会をするそうですね？」

「耳聡いな。私とジェシカで何う予定だが？」

「出来たら私も参加したいのですが？紹介したい人が居まして。」

前を向いて歩いて歩いていたのだが、まさかのヤンの発言に足を止めて、顔を凝視してしまった。

「お前が結婚するとは思わなかったな。酒で失敗してどこぞの女でも妊娠させたのか？」

今度は私の発言に驚いたのか手を振りながら否定した。

「まさか。違いますよ。実はトラバース法で養子を取ることになりまして、同居人を紹介したいのですが。」

「なんだ、そうだったのか。驚いたよ。」

「私ですよ。で、どうですか？」

「私は構わない。アレックスに許可取っておけよ。」

「分かりました。教官がシトレ本部長と会っている間に取っておきますよ。」

そんな話をしながら統合作戦本部に向かった。

「クロー副司令長官です。」

「座りたまえ。コーヒーでいいな？」

「ありがとうございます。」

遣り取りをしながらコーヒーの入ったカップを貰い、一口飲んだ。「先の戦闘でムーア提督の処遇が今一つ定まらないので君に来てもらった。」

眉間に力が入っているのが自分でも分かった。

「そんな嫌そうな顔をするな。取り敢えず聞いてくれ。3つの案が上がっている。1つは退役させるだ。後腐れ無くさっぱりするな。2つ目は留任させて再戦の機会を与えるだ。これ迄、艦隊司令官として励んでいたのだ。1回の敗北で評価するのはどうかという意見だな。3つ目は降格させて下積みからやらせる。どこかの艦隊の参謀長、分艦隊司令官にするという案だ。」

「はあ、それで。」

手を顎下で組む、お決まりのポーズを取って言ってきた。

「君の艦隊にどうかかな？」

「嫌です。」

「え？」

「え？もしかして了承すると思っただんですか？嫌ですよ。あんなバカを配下に持つなんて。絶対御免です。」

「彼のせいで負傷した。その償いという意味もあるのだが。」

「償いなら2度と関わらせないでください。勘弁ですよ。」

「分かった。そこまで言うなら、この人事は無しにしよう。」

互いに笑いながら話す事が出来た。

「それでどんな処分になりそうなので？」

「恐らく、降格させて最後のチャンスを与える形になるだろうな。」

「そうですか。そろそろ時間なのですが式典に向かいませんか？」

「そうだな。遅れるよりはいい。出ようか。」

そう言つて2人で式典に向かうことにした。

式典会場に着いて将官用の席に着く。後ろはラップ、ワイドボーン
の2人が待機してくれている。隣はビュコック提督、ボロデイン提
督、ムーア提督が座っている。

国防委員長の話が始まるようだ。皆が拍手をしているのを横目に鼻をかむ。それが気に触ったのか警備を勤める佐官が近寄ってきた。

「クロー副司令長官、何故拍手をしないのです。」

「見て分からないのか？一目瞭然だろう。」

目付きが厳しくなった。怒っているようだ。

「先の戦闘の被害で両腕を怪我をした。拍手は腕に響くから良くないらしくて控えてるんだ。」

「振りでも軽くでもやりようはあるはずです。」

「手がまだ痛むので遠慮しておくよ。それよりもいいのかな？」

「なにがだ？」

「周りは皆、私達を見ているよ。副司令長官に絡む佐官として周りは見ているだろうね。」

周りを見回すと周囲はサツと視線を外したり、顔を背けたりした。それを見て恥ずかしくなったのか顔が紅潮している。

「さあ、早く元の場所に戻りたまえ。委員長も話が出来なくて困っているよ。」

笑いながら告げたら体がブルブルと震えだした。私の気遣いに感動したのだろう。肩を震わせながら戻っていった。

隣のビュコック提督が話しかけてきた。

「お前さん、性格悪いな。遊んでおっただらう。」

「いえいえ、事実を伝えただけですよ。向こうが勝手に絡んできて恥を掻いたんです。私のせいにもなりません。」

そんな下らないことを話ながらトリユーニヒト委員長の話を流し聞いていた。

「私はあえて言おう。銀河帝国の専制的全体主義を打倒すべきこの聖戦に反対するものは、すべて国をそこなう者である。」

誇り高き同盟の国民たる資格をもたぬ者である！」

そんな事を言ったので退室することにした。後ろにラップとワイドボーンが着いてきているのが分かった。

ロビーに出るとヤンが待っていた。恐らく私が出ていこうとしたのに便乗して出てきたのだろう。

「教官、今車の手配をしています。少々お待ち下さい。」

「えらく手配がいいじゃないか？その勤勉さを日頃から見せて欲しいものだな。」

私の皮肉に頭を掻きながら苦笑している。

するとジェシカがやってきた。彼女も私の退室を見ていたらしい。

1人の青年が入り口から入ってきた。私を確認すると敬礼して挨拶をした。

「ダステイ・アッテンボロー大尉です。クーロ副司令長官閣下、お会いできて光栄です。」

「閣下が士官学校の教官から移動した後に入ってきた後輩です。会場の警備をしていたので車の手配を頼みました。」

「表に待たせてあります。行きましよう、ご案内致します。」

そういつてアッテンボロー大尉は先頭を歩きだした。

「理由を付けて警備担当から外れるか。如才ない働きた。ヤン、お前より世渡りが上手いな。」

私の言葉にヤンは頭を掻き、ラップ、ワイドボーンは口を抑えながら笑っている。

後部座席にジェシカ、私で座り、対面にヤン、ラップ、ワイドボーンの3人が座った。アッテンボロー大尉は運転席に座るようだ。自動運転だが万が一の為に座るようだ。

「それで何で教官は演説の途中で退席したのです？教官の言う如才ない対応なら静かに聞いているべきでしょう？」

「私は選んだ仕事が偶々軍人ただただで、あの変な人の言う崇高な精神など持っていないし、聖戦に参加した記憶も無い。そういう事にしておいてくれ。」

私の無然とした返答に前に座る3人が肩を竦めた。

「それでこの後は閣下のご自宅でよろしいのですか？」

運転席に座るアッテンボロー大尉が後ろを振り向きながら尋ねてきた。

「いや、家に食材が無いから何かしら買いに行かなければ駄目だから店に寄ってくれ。お前達もどうだ？アッテンボロー大尉も暇なら来

てくれ。」

そういつて皆を誘うとラップとワイドボーンは家の家族に顔を見せないかと断られた。中心街で降りるそうだ。

ヤンも同居人がいるのでと言うので彼も呼べば良いと提案すると分かりましたと連絡を取り始めた。

「いいんですか？私までお邪魔しても？」

アッテンボロー大尉がそう言うので私は笑顔で頷いた。

「折角のヤンを慕う後輩だ。色々面白い話も聞きたいしな。」

「では、お邪魔させていただきます。」

そんな会話をしているとヤンが通信を終えた。

「ユリアンが作っていた夕食を持ってきてくれるそうです。そこまで量はないので必要な物は買わないといけませんね。」

「なら酒のツマミとかも買いに行くか。」

中心街へと車の方向を向けてくれた。

最後の教え子と宿敵を知る

宇宙暦794年 ハイネセン 自宅

買い物を終え、自宅の前に着くと家の前に1人の少年が立っていた。手に袋を持っているからヤンの家の夕食にする予定だった物だろう。確か、ユリアン君と言ったはずだ。

車から降りると先に降りたヤンが近寄って何か話している。此方をチラリと見たから紹介しているのだろう。

近くに寄ってから声を掛けた。

「君がユリアン君かな？車の中で少しだけ聞いたんだ。ヤンが保護者をしているんだって？私としては君が保護者だと思うのだが。」

私の言葉に後ろに控えたジェシカ、アッテンボローが笑っている。ヤンも苦笑いだ。

「初めまして、クーロ副司令長官閣下。自分はユリアン・ミンツと言います。ヤン中佐の下でお世話になっています。」

礼儀正しい子のようだ。

「ユーリ・クーロ大将です。ユリアン君、よろしく頼むよ。」

そういつて折れていない左手を差し出した。

私の顔と手、ヤンの顔を見た。ヤンが1つ頷いたので私の手を握りしめて握手をする。

「外で長々と話すのは止めよう。続きは中で。」

そういつて鍵を開けて中に入る。

リビングのテーブルに案内をし、飲み物の準備をジェシカがすると言うので男連中は続きをすることにした。

「礼儀正しいね。子は親の背中を見て育つというのが反面教師として学んだようだね。良いことだ。」

「そんな。ヤン中佐は本当によくしてくれています。」

「だそうだ。出来た子だな、ヤンよ。」

ヤンは頭を掻きながら答えた。

「ええ、どっちが保護者か分からなくなりそうですよ。」

アッテンボローと顔を見合わせて笑った。

世間話をしているとジェシカがキッチンから食事の準備が出来たと声を掛けてきた。食器等を持っていつて欲しいそうだ。

ヤンとアッテンボローよりも先にユリアン君が立ち上がって動き出した。

「本当に良い子だな、ヤン。大事に育ててやれよ。」

そう声を掛けると少しだけ真面目な顔をして頷いた。

食事が終わり、男同士での飲み会の様相になった。私はウイスキー、ヤンとアッテンボローはワインを飲んでいる。ユリアン君はジンジャーエールだ。ジェシカは洗い物をしてくれている。

士官学校時代の話をユリアン君に面白可笑しく話しているとヤンが忘れていたのを思い出したようでカバンに入った書類を渡してきた。

「こちら、教官が情報部に依頼された帝国のグリーンメルスハウゼン艦隊の分艦隊司令官の資料です。シトレ本部長から渡してくれと。」

「そうか、すまなかつたな。」

アッテンボローが気になったのだろう。尋ねてきた。

「どなたなんです？閣下が態々調べさせるなんて。余程出来るみたいですね。」

「ああ、分艦隊司令官と云う枠では同盟、帝国含めて一番かもしれないな。」

私の言葉に緊張が走った。

「そこまでの力量なんですか？」

「ああ、私が部下に欲しいと思った。ただ、彼が偉くなり権限が大きくなっても力量が落ちないかは知らんがね。」

私の言葉の意味がよく分からなかったのだろう、尋ねてきた。

「と言いますと？」

「分艦隊等の少数と一個艦隊の指揮は別物だと云うことさ。分艦隊の場合は全体の事は正規艦隊司令官に任せれば良い。自分の艦隊の行動だけを考えるだけだ。しかし正規艦隊司令官は全体の事を考えないといけない。両翼のバランスに中央との繋ぎ目の隙、他の正規艦隊

の戦況、連携。考える事は山程ある。そこまで見渡せるか、考える事が出来るかが重要になってくると云うことさ。」

「なるほど、勉強になります。さすがは元士官学校の教官ですね。」

アッテンボローが頷きながら褒めてきた。それに苦笑しながら資料に目をやった。

「ラインハルト・フォン・ミューゼル准将か。幼年学校を卒業した後は少尉として任官。転戦しているな。所属を変えながら。18歳で准将とは恐れ入る。」

資料を見ながら独り言を言うとヤンが彼の係累を見てくださいますと云って来た。

「アンネローゼ・フォン・ミューゼル。後宮に召され、グリューネワルト伯爵夫人になるか。皇帝の寵姫の弟と云うわけか。正当な評価をしにくくする項目だな。」

「はい、自分も教官が気になったと聞き、映像で確認しましたが非常に出来る司令官だと思います。帝国ではまぐれや運での昇進と言われているそうです。」

「私が気になるのは皇帝の寵姫の弟が何故軍人になり、最前線にも出ているのかということだ。普通は後方にいるべき立場の人間か姉の立場を使って政治的な立場になる人間だ。それが最前線に出て来て、更に有能で戦功を上げて昇進している。嫌なものを感じるな。」

私の疑問にヤンもアッテンボローもユリアン君も疑問の顔をしている。

「この姉君の後宮入りはどういった経緯かな？無理矢理か仕方なくか、進んでか。それによって違って来る。」

それに母親の事故死も気になる。貴族が関わっていたと資料にあるが。」

ヤンに視線を向けると首を横に振った。資料が無いのだろう。

「それは一次資料でして、取り敢えず分かったことを書いて持ってきただけのようです。」

「そうか。引き続き調査を頼んでくれ。どうも私はこの男が気になる。」

「どこら辺がその、気になるのです？」

ユリアン君がおずおずと聞いてきた。それに対し深く息を吐いてから考えながら答えた。

「母親の事故死に貴族が、姉の後宮への召し上げ、どちらも帝国の統治体制、貴族、皇帝に不平不満を抱くに足る内容だ。そして幼年学校に通い、首席で卒業すると前線を転戦して昇進を繰り返している。此れは明らかに不自然だ。」

「何か理由があるということでしょうか？」

「分らんよ。偉くなるだけで軍の頂点に立つだけでそれが解決出来るとは私は思わないが。何を考えて軍人に、戦場に出ているのか気になる。これから彼が昇進する事で見えてくるものもあるだろう。要注意だな。」

そういつて会話を終えた。此れが後に銀河を統べる事になる男の名を知った時であった。

ハイネセンでの平和な日常

宇宙暦794年

ハイネセン

公園

ジェシカと2人で早朝の公園を歩いている。池の周りの道をゆっくりと。

ハイネセンにいた頃は准将に昇進し、将官専用の住宅街に引っ越してから、この公園が近くにあるのでトレーニングで走っていたがエル・ファシルに赴任となり、ご無沙汰だったが変わりない景色に妙な安心感があった。

「無事に帰ってきたって感じがするわ。ハイネセンで貴方と2人でゆっくりと過ごしていると。」

ジェシカがそんなことを言ってから、チラリと右腕のギブスを見た。

「心配をかけたな。勝てる戦争だった。戦果、昇進に目が眩んだ奴がいなければ。」

そんなことを言った後に自分らしくないと思い、苦笑いをした。

「らしくない事を言ったな。これが戦争なのに。」

「辞めたかったら辞めていいのよ。生活なら貯金もあるし、私が本格的に働いていいし。」

笑顔でからかい口調なのだが目は本気で言っているのが分かった。

立ち止まって空を見上げた。綺麗な青空に少し雲がある。朝の澄んだ空気、公園の草木の香り、池の水の音が自分の身体を、心を満たしてくれる。

「今回の戦いで30万人近くが私の艦隊から死んだ。ますます辞められなくなったよ。」

ジェシカの顔を見て、告げる。彼女の顔が崩れてきた。

涙が浮かんでいる。泣くのを我慢しているようだ。

右手を私の頬に当ててきた。頬に当たっている手を左手で覆った。

「心配ばかりかけるな。申し訳ない。辛かったら何時でも言ってくれ。別れる事も…」

途中で頬を引っ張ってきた。怒り顔のジェシカが目の前にいる。「ゴメン。変な事を口走った。」

グイツと手を引っ張って歩き始めた。腕を引かれながら歩く。こんな日常がずっと続けばと思いつながら歩いていく。

宇宙暦794年

ハイネセン

キャゼルヌ邸

インターホンを押すとアレックスがドアを開けて出迎えてくれた。「いらつしやい、待ってましたよ。ヤン達は先に来ていますよ。」

「お邪魔します。これ、お土産です。」

そういつて40年物のウイスキーを渡した。

「おま、これ40年物じゃないか。それもか?」

そういつてジェシカの持った箱に目をやった。

「はい、モン・サン・ミッシェルのチーズケーキです。奥様にです。」

「取り敢えず上がってください。こっちです。」

リビングに先にたつて案内をしてくれた。ヤンとユリアン君が椅子に座っていた。

「どうも、教官。昨日ぶりです。」

「ユリアンさん、昨日は御馳走様でした。」

ヤンは座ったままで、ユリアン君は立って一礼してきた。

「気にしないでくれ。ハイネセンには1週間もないんだからな。」

「そうよ、ユリアン君。気にしないで。楽しかったし。」

「ありがとうございます。」

「さあ、夕食にしましょう。」

そういう声が聞こえた。オルタンスさん、キャゼルヌ夫人が鍋を持ってきた。

鍋を敷物の上に置いてから、私に向き直った。

「通信では顔を合わせましたけど面と向かって会うのは初めてですね。オルタンスです。夫共々、よろしく願います。」

「ユーリ・クローです。よろしく願います。アレックスは誠実で有能で後方勤務では出世頭です。私の艦隊も彼には大変お世話に

なっています。急に忙しくなったりする事もあると思いますがどうか彼をよろしくお願いしたい。」

「はい、分かりました。よろしくお願いいたします。」

互いに挨拶をすまし、ジェシカに目をやる。

「ジェシカ・E・クローです。よろしく申し上げます。」

「こちら、お酒とケーキです。お世話になるお礼です。」

そういつてボトルと箱を見せた。

「お酒は今開けます？ケーキは食後に頂きましょうか。」

モン・サン・ミッシェルのチーズケーキなんて滅多にたべられないし。さあ貴方、ユーリさんを接待。」

そういつてオルタンスさんはジェシカを席に案内してくれた。

「こちらにどうぞ。」

席を引いてくれた。ありがたく座らしてもらおう。

夕食が始まった。

他愛ない話をしながら食事の時が進む。美味しい料理が話を盛り上げる。楽しい一時が過ぎていった。

食事が終わった後、ケーキを食べている時にアレックスが思い出した事を話始めた。

「そういえばロボスがミサイル艇を掻き集めていますよ。私の方にも連絡がきました。だいたいで3000隻を越えるかと。」

「イゼルローン要塞攻略戦を考えているようです。」

アレックスの言葉を引き継いで話したのはヤンだった。

皆がヤンに視線をやる。

「作戦案なんかは知らないんですが、そういった話があるのは確かです。」

「また要塞攻略戦をするのか。被害を受けて益がない戦いをよくもまあ飽きずに何回もやるなんて。」

アレックスとヤンと顔を見合わせて小さく溜め息を吐いた。

「今回は私は参加しないからいいが、ヤンは参加する予定だろう？気を付けろよ。英雄だろうが凡将だろうが生きる死ぬは変わらない。」

生き残る、死なない努力は怠るなよ。」

「気を付けます。教官の所に行きたいですよ。ラップがいるし、教官も煩くないし、居心地良いだろうな。」

「だったら次回の戦いの後に申請するんだな。シトレ本部長が手放してくれたら此方にくれるだろうな。手放してくれたらな。」

ヤンに視線をやると大きな溜め息を吐いた。アレックスとその様を見て笑った。ジェシカもオルタンスさんもユリアン君も笑った。

第6次イゼルローン要塞攻防戦が直ぐに迫っているようだ。

第6次イゼルローン要塞攻略戦前哨戦

宇宙暦794年

エル・ファシル

補給基地

司令官室

夏が過ぎて9月に入ると第6次イゼルローン要塞攻略戦が軍から発表された。動員する艦隊は第7、第8、第9の3個艦隊になった。司令官はホーウッド中将、アツプルトン中将、アル・サレム中将の3人。

総司令官はロボス大将、総参謀長のグリーンヒル大将だ。そこに作戦参謀でヤン大佐が、補給担当でキャゼルヌ准将が配属されている。先日知り合いになったアツテンボロー少佐も駆逐艦エルムⅢ艦長として参加するようだ。

4万隻を越える同盟に対し、帝国も駐留艦隊の1万5000隻にメルカツツ提督の1万5000隻、ミュツケンベルガー元帥の1万隻の4万隻らしい。

前回の戦いで勝ったと云える帝国はヤル気満々だな。

10月から11月はイゼルローン回廊同盟側からイゼルローン要塞前までの間の宙域争奪戦が行われている。

残念な事にその戦いは連戦連敗らしい。

そんな敗戦の書類を見ていると連絡が入った。ヤンの家のようだ。出るとユリアン君が映っていた。

「ユーリさん、お久しぶりです。」

「ユリアン君か。この間は楽しい一時だった。それで何の用かな？」

「はい、あの、同盟が連戦連敗ってニュースになっていて。ヤン准将が心配で。誰かに聞きたいのですが皆さん出征しているのです。」

「そこで出征していない私という訳か。」

申し訳なさそうに言うユリアン君に笑ってしまった。

「す、すみません。失礼でしたよね。ごめんなさい。」

私に失礼をしてしまったと慌てているユリアン君に顔を横に振りながら答えた。

「いや、大丈夫だよ。良いところに目を付けたから感心していたんだ。

いいよ、答えよう。ただし、コーヒーを用意するから少し待ってくれ。」

そういつて準備をしてから話し始めた。

「イゼルローン回廊の中央にイゼルローン要塞がある。そしてそこに到るまでの間に数日はかかるくらい距離がある。5個艦隊位は展開できる広さがある場所もある。隠れやすい小惑星帯などが道々にある。ここまではいいかな?」

ユリアン君に視線を向けると頷いたので話を続ける。

「後背や側面をそこに隠れて突くという事をされると面倒なので哨戒、偵察をする必要がある。何もなければ安全という事だからな。地味に見えるが万全の態勢で攻める為に必要な行動だな。かといって大部隊を各所に送るのは効率が悪い。なので少数、分艦隊や特殊部隊、特別編成の艦隊を送ることになる。つまり少数対少数になる。であれば有能な艦隊、司令官がいる方が有利になるということだ。」

話終えるとユリアン君がウンウンと考え込んでいた。やはりこの子は真面目だな。元々の性格かヤンを反面教師にしたか分からないが良い子だ。

「つまり帝国の艦隊、司令官が優秀だと云うことですか?」

「そうなるな。ここまで連戦連敗ということは非常に優秀と言って良いな。」

「これからどうなりますか?」

「恐らく総司令部も看過出来なくなるだろう。士気にも影響が出るだろうしな。その艦隊が同じなら罫を仕掛けて一網打尽を狙うだろうな。」

「それじゃあ勝てますか?」

「分からん。だがここまで連戦連勝の艦隊なら油断、慢心、増長が起こつても可笑しくない状況だ。そこを巧く突ければ。」

「なるほど。分かりやすく説明してくれたので納得しました。流石は士官学校の教官ですね。ヤン中佐も授業が楽しかったと言っていました。」

「そうか、奴がそんな事を君に。また聞きたいことがあれば連絡して

くればいい。」

「ありがとうございます！」

そういつて通信を切った。出来る敵は討てる時に討つ。戦場の鉄則だがロボスが総司令官。果てしなく不安になるのは私の杞憂だろうか。

1週間後に新たな戦闘詳報が届いた。どうやら罫を掛けたが逃げられたようだ。

ヤンが時間差の包囲作戦を発案して実施したそうだ。しかしながら同盟軍が戦力の出し惜しみをしたために逃げられたらしい。愚かな事だ。大魚を逃した。

これを契機に帝国はイゼルローン要塞に後退し、要塞にて待ち受ける作戦に切り替えたようだ。

前哨戦は被害数的には同盟の敗北だが当初の目的通りにイゼルローン要塞攻略に取りかかれるようだ。

どんな作戦かは知らないが被害が少なくすむことを切に願う。

第6次イゼルローン要塞攻略戦を本番がこれから始まる。

第6次イゼルローン要塞攻略戦の考察

宇宙暦794年

エル・ファシル

補給基地

司令官室

12月1日にイゼルローン要塞攻略戦が開始された。

結果から言うと同盟が敗走した形で終わった。今は司令部の面々で映像と戦闘詳報での照らし合わせを行う所だ。ラップ少佐が司会進行役で進めていく。

「まず、同盟が左翼から第7、第8、第9艦隊に布陣。帝国は対面にゼークト提督、メルカツ提督、ミュッケンベルガー元帥の艦隊のようです。」

ラップが私達にここまででは問題ないかと視線を向けてきたので頷く。

「ミュッケンベルガー元帥の部隊は先の戦いで損害が大きかったので臨時編成とフェザンより報告がありました。例のミューゼル少将もここに編入されているそうです。」

「やはり昇進していたか。3000隻とは力量を期待されているようだな。」

「まず最初は互いに要塞主砲の射程外での艦隊戦になりました。左翼、中央は一進一退の戦況です。互いに同数の損害を出しながら進行します。」

「問題は右翼です。1万隻の帝国に対して同盟は1万4000隻の第9艦隊アル・サレム中将が相対したのですが…」

結果を知っているとは言葉にするのは別の力が要るようだ。

「例のミューゼル少将が見事な艦隊運用で損害を与えてきます。それとは別に気になる艦隊があります。この300隻程の艦隊が2つ有るのですが1つは高速機動艦隊でもう1つが普通の編成の艦隊になります。高速艦隊が戦列を乱し、もう1つが崩す。もしくは、普通の艦隊が壁になり、高速艦隊が横槍を猛スピードで入れる。この形で何度も崩されています。」

フウーと溜め息を吐いた。チウン参謀長もワイドボーン参謀も溜め息を吐いている。

「この少数艦隊も見事な艦隊運用だな。ミューゼル少将にあの2つの司令官が部下に欲しいな。楽をさせてくれそうだ。」

そういつて肩を竦めると苦笑してくれた。多少は空気が柔らかくなったのでホツとした。これからの話は重いので入る前に少しは和らげないと心理的に宜しくない。

「あまりにも被害が大きくなったのでロボス大将は仕切り直しをするべく艦隊を後退させて再編し、3個艦隊を1列にし大きな1個艦隊にしました。」

「それに対して帝国も対抗する形で隙間を埋めてイゼルローン要塞の主砲範囲内に布陣しました。これからが本番といった所なのでしよう。」

「同盟は『D線上のワルツ・ダンス』を行い敵を挑発します。帝国軍を挑発して射程外に誘き出す、もしくは混戦に持ち込む意図を見せながら緊張を強いる目的だったようです。本隊が囷になっている隙にロボス大将直下のミサイル艇3000隻が要塞本体への奇襲攻撃を実行しました。」

「ここまでは見事な流れだったな。成功するのではと思わせる部分があつたのは確かだ。」

チユン参謀長が資料と映像を見ながら発言した。

「はい、ここまでは見事な作戦でした。しかしそのミサイル艇を側面から攻撃する部隊があつたのです。ミューゼル少将です。理由は分かりませんが後方で待機していたようです。ミサイル艇をほぼ殲滅したミューゼル少将は交戦中の本隊を側面から襲いかかりました。それによつて順番に崩れました。帝国軍本隊の追撃も受けて、今回の戦闘では1万隻程の損害を受けました。」

「大損害だな。予備部隊をミサイル艇にしたから手持ちの手が空いている部隊が居なくて、ミューゼル少将の艦隊に対応出来なかつたということか。」

チユン参謀長の発言に賛意を示す。

「参謀長の言う通りだな。予備がなかつたのが敗因だろう。基本的な着眼点は間違いとは言えない。どうしても本隊の戦闘に人は注目し、

周りが見えなくなる。そこを遠回りに別動隊で攻撃は狙いとしては良いが。」

ワイドボーンも頷きながら話に入ってきた。

「ミサイル艇が攻撃された時に本隊が後退したら被害はミサイル艇だけだったのですが。」

「あの部隊を見捨てるというのか？」

味方を見捨てる発言をしたワイドボーンにラップが噛みついた。雰囲気が悪くなるのはごめん。

「ラップ少佐、気持ちは分かるが助ける手立てがあつた状況下では無いのだ。ワイドボーン大佐の後退からの撤退は最善策といえる。ミサイル部隊は捨て殺しだ。」

ラップ少佐も分かっているのだろう。黙って一礼した。

「それからシエーンコップ大佐が亡命した先々代の連隊長であつたリユーネブルク少将を挑発する無線通信を流す事を繰り返し、誘き出すことに成功し、一騎討ちを行って勝利したそうです。」

「そうか…吉報と聞いていいのだろうか。それでシトレ本部長はどうこの戦いを処理するつもりなのかな？」

3人が顔を見合わせた。

「ご存知ないのですか？国防委員長はシトレ本部長が行なつた第5次よりも要塞に被害を与えたのでロボス大将を昇進させる意向だそうです。ミサイル部隊を指揮したムーア少将も中將に返り咲き正規艦隊司令官に戻るようです。それから…」

「まだ有るのか？頭が痛いのだが。」

手をこめかみにやった。頭がいたくなってきた。

「はい、今回の作戦を立案したホーランド少将が中將に昇進します。それと前哨戦で同盟に被害を与えていたミューゼル少将の艦隊に被害を与え、様々な作戦を立案し、いくつかの作戦立案が功績として評価され、ヤンが准將に昇進します。」

「そうか…目出度いな。」

今回の戦い同盟と帝国はほぼ同数であつたが帝国は5000隻を越える損害、同盟は1万5000隻を越える損害を受けた。

無駄に被害を受けて要塞に傷をつけただけで昇進する事に苛立ちと歯痒さと怒りが渦巻いている。

戦果を挙げたことにしたい政府と主戦派軍部に形容し難い感情がある。この気持ちを持ち続けることへの言い知れぬ気持ち悪さが同盟の上層部への不信感なのか同盟自体への不信感なのか分からなかった。

血の代価

宇宙暦794年 エル・ファシル 補給基地 自室

第6次イゼルローン要塞攻略戦が終わり一週間が経った。正確な戦闘詳報が提出され、それに副司令長官として目を通す。特別に不審な点はなく、正確に記載されている。

総参謀長がグリーンヒル大将なので虚偽や虚飾は無いと思っっているが予想通りで安心する。

ただ1つ確認しないといけないことが有る為にとある男からの連絡を待っている。

約束の時間になったら通信が入った。ボタンを押して出る。ヤン大佐だ。互いに敬礼をする。

『総司令部作戦参謀ヤン・ウエンリー大佐です。御用と伺い連絡を致しました。』

「先日の戦闘は御苦労だったな、ヤン大佐。活躍を認められ准将に昇進すると聞いた。おめでとう。」

『祝いの御言葉、ありがとうございます。』

「何故、今回連絡を取ったか想像はつくな、ヤン。」

私の言葉も表情も険しいのが分かったのだろう。ヤンも沈痛な面持ちで話し始めた。

『ミューゼル少将の艦隊を取り逃がした事についてですね。』

「ああ、お前なら私の考えを理解しているだろう。出来る敵は早々に撃たなければならない。大きくなる前に。そして大きくなるに連れて撃つ機会が少なくなっていくと云うことは。」

『はい。包囲網を敷き他方向からの包囲殲滅を図ったのですが数が足りずその後1歩の所で取り逃がしました。』

「何故、そんなことになった。」

『私は1個艦隊で包囲網を敷くように進言したのです。ですが小規模の艦隊にそのような大部隊を使うのを恥と思わないのかと。各艦隊の分艦隊合わせて5000隻もあれば十分だろうとロボス司令長官が。』

天を仰ぎながら溜め息を吐いた。その様子を見ながら続きを話してくる。

『総参謀長も1分艦隊規模に1個艦隊も出すのは如何と。それにロボス司令長官は要塞攻略戦を早く執り行いたいようでそういった戦闘は雑事のように対応していました。』

「別動隊によるミサイル攻撃か。それをしたいが為にミューゼル少将を取り逃がした。そしてミサイル攻撃をミューゼル少将に阻止される。なんと評していいのかわからんな。」

『…………』

「ヤン。今回の功績でミューゼル少将は中将になるだろう。つまりは1個艦隊、もしくはそれに準ずる艦隊を指揮する事になるだろう。」

『はい、申し訳なく思っています。』

私が責めていると思ったのだろう。謝罪を口にしてきた。

「勘違いするなよ、ヤン。私はお前を責めている訳では無い。お前は今回の戦いでは1参謀に過ぎない。つまりはその他兵士とそこまで変わらない。責任を負うべきは司令官、総参謀長の2人だ。」

「歴史に詳しいヤンなら知っているだろうが過去に大業を成した軍人、武将は何人もいるが敵に殺される危機、殺すチャンスはある。そこで生き延びたから大業を成せた。曹操、ナポレオン、アレクサンダー大王、カエサル、織田信長、チンギス・ハーン。」

『はい。』

「今回、彼を逃がしたことで同盟は大きな犠牲を払った。そして次もある。それを考えると彼を取り逃がした事による血の代価はいかほどになるのか考えると恐ろしいよ。」

「何れは私も、そしてお前も艦隊司令官として彼と向き合う時がくるだろうな。その時はどちらの血が流れる事になるのか。」

『教官…………』

「御苦労だったな。ヤン、ハイネセンに戻ったらユリアン君と共に食事に行こう。いいな、約束だぞ。」

意識的に笑顔を作って約束を迫ると苦笑しながら頷いた。

『分かりました。ユリアンには伝えておきます。』

「では、またな。」

そう言つて敬礼をするとヤンも答礼を返してくる。それを確認してから通信を切った。

椅子を回転させて窓の方を向く。夕陽になろうとする太陽が見える。少し赤みがかつた太陽だ。

血生臭い話をしたからか、太陽の色が血の色に似ていると考えてしまふ。

今回の戦いで敗戦したと考えたシトレ本部長は次の出兵計画を立案した。

目玉は総司令官に私、副司令官ユーリ・クーロ大将を据えて計画しているそうだ。

近年は同盟で帝国軍艦隊に損害を与えているのは私。なので総司令官と言うことらしい。ロボスは元帥に昇進した。それに鈴を付ける意味合いも含まれていると私は睨んでいるが。

私を含めて3個艦隊を計画しているようだ。恐らくは迎撃戦になるだろう。要塞攻略戦は趣味じゃないと常々言っている私にさせることは無いと思う。

同盟と帝国、撃つては撃たれ、殺しては殺され、100年近くが経つた。こんな事を何時まで続けるのか。

私も何時までするのか、底知れぬ沼に溺れ、終わりの見えない道を歩いているようだ。

その果てに何があるのか分からず、見えずにいる。

まさかと不本意

宇宙暦794年 エル・ファシル 補給基地

後1ヶ月で今年も終わる。来年に帝国は皇帝フリードリヒ4世の在位30周年記念に花を添えるためというだけの理由での出征が予定されているらしい。

フェザーンの自治領主からの報せだそうだ。フェザーンに有る自由惑星同盟の弁務官事務所はどうなっているんだ？情報が一切上がってこないじゃないか。

イライラが募る。我慢だ。落ち着け、深呼吸だ。

私の様子に不安か何かを感じたのかチュン参謀長が話し掛けてきた。

「如何なさいましたか？帝国の出征の諸々の情報が届いたと推察できますが？」

「ああ、皇帝の在位30年を祝う出征らしい。私は春頃と思っていたが外れたな。」

「在位を祝う出征ですか？」

肩を竦めながら答えた。

「帝国では、そういったこともあるらしいな。同盟も選挙間近や支持率が下がったら戦争をするから五十歩百歩だろう。」

私の言葉に何とも言えない顔をしている。

「まあ、それはそうですが。」

「それよりも私は来年早々の出征式典に出なければならぬ。来週にはここを出る。」

「出征の準備は此方でおきます。ワイドボーン中佐は手伝いに残してもらいますが。」

「私は旗艦と他数隻を率いてハイネセンに向かうよ。」

「代わりの艦隊は誰か連絡は？」

「いや、まだ無い。出征の頃には分かるだろう。とりあえず準備は頼むよ。」

「承知しました。」

敬礼、答礼をして話し合いは終わった。

自宅で夕食を取り終え、ジエシカとコーヒーを飲みながら話をする。何時もの習慣だ。

「来年早々に出征が決まった。私が総司令官らしい。帝国の皇帝在位30年記念の出征に対して迎撃する。」

「そんなことで出征があるの?」

ジエシカが驚きの声を出し、驚きの表情をする。

「同盟も選挙間近や支持率が下がったら戦争するから五十歩百歩だろう?」

朝にチュン参謀長に話した事を話す。話ながら笑ってしまった。当たり前の疑問を流さない周りに落ち着いている自分がいる。

「それはそうだけど、嫌な習慣ね。」

「ああ、互いにな。」

「気を付けてね。」

「ああ、分かっている。怪我は思いの外に痛いのが分かった。何度もなるのはゴメンだ。」

苦笑しながら言うと安心したのか微かに笑ってくれた。

「あのね、少し考えていることがあって…ユーリに相談があつて……」「何だい?ジエシカがいい淀むなんて珍しい。」

チラリと私の顔を見ては視線を落とす、カップのコーヒーを見るを繰り返している。余程の悩みなのだろう。心当たりがなくて嫌な予感がした。

意を決したのか強い視線を私に向けてきた。

「周りからエル・ファシルで議員にならないかと薦められているの。」余りの答えにコーヒーが気管に入り、噎せてしまった。

「ゴホッ、ゴホッ、ゴホッ。すまない、予想外の内容でコーヒーが気管に入った。」

「いえ、私も急に変な事を言い出してごめんなさい。」

「いや、変じゃないだろう。色々と考えて口に出したのだろう?」

「ええ、元々エル・ファシルは反戦、非戦が強い土地なの。最前線に一

番近いし、何なら最近1度戦場にもなったから。」

「ヤンのエル・ファシルの奇跡だな。」

「ええ、あそこで民間人は無血で脱出出来たから主戦論は盛り上がりなかった。ロボス司令長官が奪還作戦を直ぐに行ったことも影響してるわね。」

「なるほど。」

「それにエル・ファシルは中央に不満を持っているの。」

「それは穏やかではない話だな。」

「中央に不満を持つのは辺境、地方の常でしょう?」

ジェシカの言い分に苦笑していた。確かにそうだな。

「それでジェシカ、お前が候補に選ばれた、推薦された理由は?お前が反戦、非戦、講和など戦争をしないとといった意見を持っているのは知っていた。戦争の拡大に反対なのは。」

「色々理由があるのよ。私が女性で若くて容姿端麗で有ること、夫の貴方が戦争に積極的でないこと、軍のNo.3の副司令長官で有ること、エル・ファシルの住民の救援に早く駆けつけてくれた艦隊司令官であったこと、私とエル・ファシルの英雄であるヤンが友人関係で仲が良いこと、貴方とヤンが教官と教え子の関係でヤンが貴方を慕っていること、貴方の艦隊乗組員150万人がエル・ファシル住民としてカウントされることを考えてね。」

余りの理由の多さに苦笑していた。確かに現役の軍人である私やヤンが立候補する事は出来ない、軍事面を考えて退役するのは危険だろう。

それならばエル・ファシルに住んでいる私の配偶者であり、ヤンの友人のジェシカに白羽の矢が立つのは当然であり、自然か。

「中央にも地方の一議員よりも様々な影響力があると思われているみたい。それが有るのか無いのかは分からないけど普通の人よりは良いだろうって。」

議員になった時の自身の影響力は疑問視しているのか。意外に客観的に自身を見れているようだ。

「そこまで考えているなら構わないよ。そもそも君の人生だ。好きに

したらいい。勝算も十分に有るみたいだしね。」

最後の方は笑ってしまった。自身の影響力も計算に組み込まれている事に対してだ。

「そう、分かったわ。来年春の選挙に立候補させて貰うから応援宜しくね。」

苦笑しながら頷いた。私が好きになった女性は強かな女傑であったようだ。

宇宙暦795年 ハイネセン 統合作戦本部

年が改まってハイネセンに戻ってきた。本部長に正式な編成を聞く為に本部長室に向かっている。

前方に一人の男が立っている。その人物が分かり、少し横を向いて小さく溜め息を吐いた。

目の前に私が立つても横に退く気配がない。

「ホーランド中将、通行の邪魔だ。何か用があるのならさっさと済ませてくれないか？」

私の言葉に怒ったのか肩を震わせて顔を強張らせている。

「失礼しました。今回の副司令長官の出征に同行させて頂く事になりましたのでご挨拶をと。」

「何？私の一存という話だった筈だが？」

ホーランド中将が含み笑いをしている。

「国防委員会、司令長官、統合作戦本部長の話し合いで決まったそうですよ。閣下を総司令官に私とウランフ中将が付き従う事に。後詰めでビュコック中将とムーア中将がエル・ファシルで待機するそうです。」

マスコミが持ち上げている言葉を使って激励する事にしよう。

「そうか。ではブルース・アッシュビーの再来に期待しよう。死に様を真似するようなことが無いように頼むよ。」

そう言って肩を叩いて通り過ぎた。後ろで怒りで撃ち震えているのが容易に想像が付く。

私の総司令官としての初の出征は前途多難になりそうだ。溜め息

しか出てこない。

第3次ティアマト会戦

同盟

宇宙暦795年 ティアマト宙域 旗艦

同盟も帝国もティアマト宙域の端にいる。戦闘に入るには半日ずつ互いに近付かないといけない。此れが互いに最後の作戦会議、補給になるのだろう。

同盟もウランフ中将、ホーランド中将の司令官、副司令官、参謀長を呼んで最終確認を行っている。

「偵察艇の報告では帝国はミュッケンベルガー元帥が中央、グライフス中将が左翼、ミューゼル中将が右翼のようだ。艦数は15000、13000、12000となっているそうだ。」

ウランフ中将、ホーランド中将に視線をやると頷いたので続ける。

「此方は中央に私の艦隊、左翼にウランフ中将、右翼にホーランド中将で相對する。作戦は特に定めるつもりはない。各人が眼前の敵に對処し、撃破してくれ。」

ホーランド中将は嬉しそうに笑っている。心の内が読めてゲンナリする。もう少し隠すことは出来ないものか。

「ただし、後退命令を状況によっては出すこともあるだろう。その時は、理由あつての事である。努々、抗命罪を犯すことの無いように。」
最後にホーランド中将を見ながら言うと思つた嫌な顔をしながら頷いた。
一応は釘を刺したと思おう。

会議を終えると足早にホーランド中将は退室した。どうやら私と一緒にの空間に居たくないらしい。

そんな様子を見てからウランフ中将が傍に寄ってきた。

「あの様子を察するに抜け駆けしますよ。総司令官閣下は宜しいので？」

「構いません。釘は刺したので。それでも何か言うなら軍法会議で白黒着けますよ。それよりも貴方を左翼に配したこと、察して頂けていますか？」

「私にミューゼル中将を見ろということですか？閣下が危険視してい

ると云う話は聞いています。」

「ホーランド中將が破れた時、ウランフ中將がミューゼル中將を見ているのなら私はミュッケンベルガー元帥、グライフス中將を見る事になります。配置を逆にして、ミュッケンベルガー元帥とミューゼル中將を見るよりはマシでしょうね。」

「そうなるとう今回の出征は負けということになりますが宜しいのでしょうか?」

「死ぬよりはマシと思ひましょう。」

肩を竦めながら言うとうランフ中將も笑ってくれた。

「確かに死んだら負けですな。アツハツハツハツ。」

「色々と面倒ですがよろしくお願ひします。」

互いに敬礼し武運を祈った。

間もなく戦闘が始まる。レッドゾーンまで後1分もないだろう。この瞬間とトールハンマーの射程内に入る時が一番兵は緊張するらしい。

「間もなく射程圏内に入ります。」

オペレーターの声に唾を飲み込む音が聞こえた。

右手を上げてその時を待つ。

「射程圏内に入りました!」

「撃て!」

間髪入れずに命じると一斉に砲撃が飛んでいくのが見える。恐らくホーランド中將が動くだろう。あまり接近すると此方が急な戦況の変化に対応できなくなるのでレッドゾーンに入ったのを維持する。隣のウランフ中將も私の艦隊運用を察して遠くからの斉射に留めてくれている。

1時間程で動きがあった。予想通りホーランド中將が動いた。急進し、孤軍突出したのである。

幾つもの小艦隊に分裂し敵の狙いを散漫にし、見事グライフス中將の艦隊との混戦状態を作り出したのである。

グライフス中將は不本意な混戦になったのだろう。混乱の極みに

あるようだ。私から見ても適切な対応が出来ていない。1時間もごちやごちやと戦っているとホーランド艦隊は横のミュツケンベルガー元帥の艦隊にも入り始めた。

此れでは私の艦隊は攻撃できない。そんなことを考えているとウランフ中將から通信が入った。

「閣下、如何しますか？このままではホーランド艦隊が邪魔で閣下が攻撃できないですが？」

グライフス艦隊の相手をするように通信を入れることを溜め息を吐いてから伝えると眉間に皺を作りながら話してきた。

「果たして命令を聞き入れますかな？」

「無理でしょうね。戦場の臨機応変、現場判断とか言って無視するでしょう。」

更に厳しい顔付きになっている。

「それでは閣下の副司令長官、総司令官の権威が損なわれますぞ！よろしいのですか!？」

「彼がこのまま勝利するならそれもいいでしょう。とりあえず通信をして眼前の敵に対処するように命令は送ります。」

「閣下がそれでよろしいのでしたら…。」

「ウランフ提督にはミューゼル中將の警戒をお願いいたします。つまらない役割を任せてしまつて申し訳ない。」

そう言つて頭を下げると慌てて返事をしてくれる。

「頭を上げてください。閣下の御指示に従い、しっかりと警戒することになります。」

「ありがとうございます。」

通信が切れると横に顔を向けるとチュン参謀長、ワイドボーン参謀が顔を引き攣らせている。

「閣下の予想通りに進行していますな。」

「ふつ、奴が分かりやすいだけです。我が強く、英雄思考の強い男です。今ごろはこの艦隊を自分の力で撃ち破り、飛び級昇進して司令長官になり、イゼルローン要塞を奪り、帝都に攻めいる夢でも見ているかもな。」

私の自嘲にチュン参謀長は苦笑いしている。

「閣下、いくらなんでもそれは。」

「彼を一年だが士官学校で見たが基本的な性格は変わっていないようにみえる。とりあえず通信を入れよう。繋いでくれ。」

通信を繋ぐように指示を出した。

ホーランド視点

「そもそもこの作戦は眼前の敵に各々が対する決まり。ミュツケンベルガー元帥の艦隊まで入るは作戦無視に当たる。グライフス艦隊を相手にしろ。」

上官面をする男が正面のモニターに映っている。何時までも教官面をする、私に恥をかかせた憎い、目障りな男だ。

「戦場には機と云うものがあります。閣下の相手をしていたミュツケンベルガー元帥に隙がありましたので纏めて相手しようと思ったのです。今現在上手く行っているのを止める道理はありません。」

「今現在上手く行っているからといって未来永劫上手くいく作戦はない。機を見て退けるのが名将である。」

「であれば尚更退けませんな。敵は我が艦隊に対処出来ずに混乱の極みにあります。それを退けとは私に武勲を上げさせない気ですか？」
「常に先覚者は理解されぬもの。もはや一時の不和、非協力は論ずるに足らず。永遠なる価値を求めて小官は前進し、未来に知己を求めん」

モニターに写っている男は溜め息を吐いている。

「貴官がそこまで言うならもう何も言うまい。自分の責は自分で取れるが宜しかろう。」

不愉快そうな顔をして言い放ってきた。不愉快なのは此方も同じだ。

「これ以上問答の必要性を感じないので通信を切らせていただく。失礼いたします、副司令長官殿。」

通信を此方から切らせた。勝利は目の前にあるのだ。

第3次ティアマト会戦

帝国その一

宇宙暦794年

オーデイン

軍務省

軍務尚書室

ミュッケンベルガー元帥

「それでは陛下の在位30周年記念の式典に花を添えるために出征せよと言われるのか？」

私の疑問に軍務尚書が答える。

「だが司令長官、この数年来叛乱軍の大規模な攻勢が続いておるのも事実だ。先般もイゼルローン要塞に六度目の攻撃をかけてきておる。」

「それは撃退しておるし、その前にはヴァンフリート星域迄進出して、叛徒どもの前線基地を叩いておるではないか。」

「しかし2年前にもイゼルローン要塞に肉薄されておるし、被害もかなり受けておる。」

ヌウ、と唸り声を出してしまった。

「別に卿だけの責任を問うているのではない。我らは同じ責任を負うておるのだ。」

軍務尚書の言葉に統帥本部総長も深く頷いている。

「ここいらで叛乱軍に手痛い報復をくれてやり、我らも実績を上げねばならぬ時期に来ておると言うことだ。」

「軍務尚書の言いたいことは分かった。だがな、フェザーンからの情報では次の迎撃に叛乱軍はあやつが総司令官として出てくるそうではないか。」

統帥本部総長が引き継いで話してくれた。

「叛乱軍随一の名将ユーリ・クークか。しかし総司令官としては初であらう？どうかかな？」

「分からぬ。だが艦隊運用をみても戦略家と言ってよい。此方が勝てるとは限らないぞ。」

私の言葉に軍務尚書は腕を組んで考え込んだ。

「出征は決定なのだ。出来ることは誰を連れていくかであろう？司令

長官は誰がよいのだ？」

「私の他に参謀長を務めてくれたグライフス大将、勝つことを重視するならメルカッツを連れていきたいが艦隊の再編中だ。となるとイゼルローン要塞の駐留艦隊のゼークトか近頃武勲を上げて中将になり1個艦隊を指揮する事になったミューゼル中将辺りか。」

「その事だが興味深い話がある。どうやらユーリ・クローグがミューゼルの興味があるらしい。何でも艦隊運用を見事と褒め、情報を集める指示をだしたそうだな。」

統帥本部総長の言葉に事実かと視線を向けると事実だと頷いた。「では決まりだな。グライフスとミューゼルを連れていくことにする。」

不満があらうと決定は覆ることはない。なら最善を尽くすのみだ。

宇宙暦795年 オーデイン 出征式典

ラインハルト

「中将に昇進して、ようやく1個艦隊を指揮する身となった途端、この出征だ。運気が巡ってきているな。」

「ミュッケンベルガーを見ろ。堂々たるものだ。」

チラリとキルヒアイスに視線だけ送る。

「ただし、堂々たるだけだ。」

私の言葉に溜め息を吐いている。

「閣下、今回の敵はあのクローグ提督が総司令官だそうです。努々油断なさらぬように。」

「キルヒアイス、総司令官と云うことは中央を担当すると云うことではないか。俺が相手をする事は余程の事がなければあるまい。」

「左様ですが…」

「分かった、分かった。気を付けることにしよう。」

「はい…」

キルヒアイス

現在はイゼルローン要塞で最終的補給を受けている。

ラインハルト様が楽しそうに話しかけてきた。

「聞いたか、キルヒアイス？要塞司令官のシュトックハウゼンと要塞駐留艦隊のゼークトがまた角を突き合わせたそうさ。」

「またですか？」

「それも今度は総司令官の前でさそうさ。それでミュッケンベルガーが仲裁役をせねばならなかったらしい。如何に堂々と双方を宥めたかこいつは見物だったな。」

「どうやらゼークトが出征への同行を望んだらしい。それに対してシュトックハウゼンが要塞を空にしてどうする！と罵ったらしい。」

「からかい口調で言うラインハルト様はいつも通りのようさ。」

「ラインハルト様もお人が悪い。」

「そういうな。ところで何か用か？」

「その、ミュッケンベルガー元帥の旗艦でそろそろ会議が始まります。ご用意ください。」

真顔に早変わりした。

「ああ、そうだったな。」

「お忘れでしたか？」

「忘れてはいないさ。忘れたかっただけだ。まだまだ他人に呼びつけられれば出向かざるを得ない我が身をな。」

「ラインハルト様。」

少し注意喚起しなければ。

「ダゴン星域で無能者のヘルベルト大公が惨敗して以来、幾度戦いがあつたと思う？」

「これは不満を消化させた方がいいようさ。」

「さあ？」

「小競り合いを入れて329回だ。150年間に329回、よく飽きもせずに繰り返したものだ。」

「決着が着きませんでしたから。」

「同盟軍、いや叛乱軍の奴らは戦略を知らんだ。流血を見ずしてイゼルローン要塞を無力化する方法があるものを。」

「件のユーリ・クークも参戦していたな。奴が積極的に要塞攻略を行っていたなら興醒めだ。」

此方を見てきた。

「そもそも何故奴らは愚劣にもイゼルローンに固執する。要塞があれば正面から戦って落とさねばならぬと信じている。思考の硬直の極みだな。」

「だからこそ帝国にとっては要塞を建設した意味がありません。」「違くないな。」

少しは鬱憤も晴れたかな。会議への参加を促すか。

「それにしてもそろそろお時間です。シャトルの用意は整ってノルデン少将もお待ちですが。」

「出たくない。どうせ出たところで意見を求められるでもない。無視や悪意には慣れているが不毛な時間を一人で過ごすのはやりきれない。キルヒアイス、せめてお前が一緒なら未だしも、同席するのがあの参謀長ではなあ。」

「ノルデン少将はお嫌いですか？」

「好き嫌いの問題ではない。奴は使えない。」

「32才で少将です。そうとばかりも言えませんまい。」

「子爵家の嫡男だから出世が早いだけだ。奴を見ていると軍も単なる官僚組織でしかないのを思い知る。大体あんな奴を俺の下に付けるとは人事局の悪意が感じられるな。」

「単に配慮が足りないだけだと思いますが。それはそうとラインハルト様。」

再度促すとハアーと溜め息を吐いた。

「俺が出席すると出席者の平均年齢が下がる。其れだけがまあ取り柄だな。」

愚痴を溢しながら立ち上がられた。ようやく向かわれるようだ。

ラインハルト

「敵の降伏を認めず、完全に撃滅し、もって皇帝陛下の栄誉を知らしむる、此れが今回の目的である。」

ミュッケンベルガー元帥が遠征の目的を話した。

馬鹿馬鹿しいにも程がある内容だ。

(そんなものが目的か。どのような戦略上の課題を満足させるために数万隻の艦隊を動かし、数百万の兵士を死地に立たせ、膨大な物資とエネルギーを消費するのか。)

(その根本から目を反らし、課題を戦術レベルに限定し、尤もらしく討議したところで何の益がある。)

(こいつらは戦争ゴツコをやっているだけなのだ。自由惑星同盟等と称する叛乱軍の輩と似合いの好敵手と言うべきだろう。)

(それとも何か。帝国内での抗争に敗れて同盟に亡命した数を考える。と将来の亡命先を失うことがないように手加減でもしているのか。いや、これは過大評価だろう。全力を上げてこの程度に違いない。)

「ミューゼル中将、貴官には右翼に布陣してもらおう。何か思うところが有るのか?」

(俺を後方に置いて予備にしないところはだけは評価に値するな)

周りの視線も感じる。呆れて首を振ったのを咎められたか?

「承知しました。意見と仰られましたも特にありません。元帥閣下のご遠望は少官ぶとき若輩の考え及ぶところではございません。」

「うむ、では他に意見もないようだし戦勝の前祝いとして酒を開け、陛下の栄光と帝国の隆盛を卿らと共に祈ることとしよう。」

(成すべき事を成してもいないのに勝利だけを確信しうるという精神構造が理解を絶する。)

「それでは、皇帝陛下の恩為に。」

好敵手足り得るかも知れぬクーク提督の相手も出来ず、右翼でじつとしていろとは。

戦闘が始まった。

「独創性の欠片もない陣形から独創性の欠片もない戦闘が産み出されている。」

「ラインハルト様。」

これがユーリ・クークの戦い方か? 何の事もない平均的な戦いが? だとすれば期待外れもいいところだが。

そう思っていると叛乱軍右翼が動き出した。バラバラになってグライフス艦隊に突っ込んできた。

下がって体勢を整えればいいものを。

「敵将が誰かは知らんが理論を無視することが奇策だと思っっているらしいな。それに掻き回されている方も情けない限りだが。」

「下がって体勢を整えればいいものを。」

「ラインハルト様と同じ位置に下がると云うのが嫌なのでしよう。」

「それである有り様か。器が小さいのか自尊心が大きいのか判断の悩ましい所だな。」

「ラインハルト様の仰る通りですがあの跳ね回っている艦隊の運動は芸術的ですね。」

「芸術とは非生産的なものだな。動きの秩序の無さを見るがいい。エネルギーを浪費するために動き回っているようだ。」

「独創的には違いありませんが。」

キルヒアイスの言葉に首を振ってしまった。

「独創的とは新たな理論を構築することだ。既存の理論を破壊するだけでは独創とはなり得ん。」

「敵ながら見事な用兵ですなあ。」

前から呑気な声をだしながら近づいてくる男がいる。今回の戦いに参謀長として着任したノルデン少将だ。

「敵将の用兵は既成の戦術理論を越えております。一定の戦闘体系を取らず、さながらアメーバの様に自在に四方に動き回り、意表を突いて痛撃を加えます。中々非凡と言わざるを得ません。」

「下には下がある。無能者どもが。思いもかけぬところを痛打されたからといって何程の事がある。中枢部を直撃されたわけではないぞ。」

「無能と仰いますが、彼らは帝国軍人として勇敢に闘い、その本分を尽くしております。翻って我が艦隊は遠巻きから牽制なのか威嚇なのか攻撃なのか分からない事をしていきますが閣下のお考えは？」

「前進すれば前の艦隊と隣のクロー提督が攻撃をかけてくるぞ。卿は2個艦隊を相手したいのか。ミュツケンベルガー元帥、グライフス大將は敵との混戦で何も出来ずにいる。我が艦隊がミュツケンベルガー元帥の艦隊に並べば必ずやあの跳ね回っている艦隊は我が艦隊

にも入り込んでくる。そうなりたいか！」

「そもそも、あの帝国軍内部に入った敵は速度と躍動性には優れているが他の艦隊との係を欠き、また補給線が伸びるのを無視しているのが明らかだ。つまりその意図は極端な短期決戦であって、用兵の根本を無視した動きによつて、我が軍の混乱を誘い、それに突け込んで出血を増大せしむるにある。」

「だとすれば我が軍は無用な交戦を避け、敵が前進すれば同じだけ後退し、敵がエネルギーを使い果たした時点で反攻に移るべきだ。故に現時点では応戦する必要はない。」

敵が彼方此方に跳ね回っているのだ。此方は後ろに下がる。つまりエネルギー消費量に違いが出る。必ず敵の方が先にエネルギーが尽きるのだ。

「では何時応戦なさるので？」

「敵が行動の限界点に達したらだ。」

「ほう、何時の事ですか？一年後ですか？それとも百年後ですか？」

「ここまで言つても分からない阿呆がこの俺の参謀長とは、こいつが可笑しいのか他の参謀長もこんな奴ばかりなのか。拳を力一杯握りしめた。」

キルヒアイスが心配そうに此方を見ている。分かっている。手を振り下がるように命じた。

「キルヒアイス、キルヒアイス、俺を褒めてくれ。全くこの2週間俺はよく我慢をしている。一生の忍耐力をここで使い果たしてしまいうだ。」

「今少しのご辛抱です。ラインハルト様のお手で形勢が逆転すればいずれが正しかったかどんな愚か者にも分かります。その時、思い切り勝ち誇つておやりなさい。」

「そうしよう。だがキルヒアイス、いざ俺が勝ち誇るとお前は言うのさ。彼らは自分達の誤りを知つて恥じているのだから許しておあげてくださいいな。」

キルヒアイスの前髪に手を伸ばした。

「それにしても同盟軍のクロー提督は何もしていないな。」

「恐らくは突出した艦隊司令官の独断かと。」

「それでは私の他にクロー提督も不本意の極みか。」

「そうなりますね。」

まだしばらくはミュッケンベルガー元帥、グライフス大将、叛乱軍のホーランド艦隊との混戦を眺める事になるようだ。

第3次ティアマト会戦

帝国その二

宇宙暦795年　ティアマト星域　戦艦タンホイザー
ラインハルト

眼前でミュッケンベルガー元帥とグライフス大将の艦隊が敵の攻撃に乱されている。この程度の敵に何をしているのか。

私の艦隊と相對している敵は微速前進している。ミュッケンベルガーとグライフスが後退する余地を創ってやるか。

「全艦、後退せよ。」

命令を出すと参謀長のノルデン少将が駆け寄ってきた。

「閣下！総司令部の指示も無しに後退するとは如何なるご見か。」
またか。

「何度も言わせるな。今我々が前進すれば入り込んでいる敵を調子づかせるだけだ。寧ろ後退して味方にも後退の選択肢を与えてやるのが優しさだろう。」

この俺が後退するのだ。ミュッケンベルガーも面目が立とう。

「突出している敵の更なる前進を誘い、その行動性を限界まで引き伸ばすことが肝要だ。」

まだ意見があるらしい。

「しかし総司令部からの指示がありませんが。」

「指示があるまで何もせんと云うなら各艦隊に司令官がいる必要はない。個々の局面に於いては司令官の判断で行動する。」

「ですが…」

「参謀長と同様。総司令部の指令を墨守するだけなら艦隊参謀長など無用の長物の最たるものとなるうが。如何に！」

「……」

何も言えないようだ。少しは頭を使え。こんな当たり前の事を何度も言わせるなど。

キルヒアイス

「敵が接近してきます。」

「見えている。」

「対処しないのですか、司令官？」

「これはいけない。」

「閣下、前進し応戦なさいますか？」

ラインハルト様が此方を見ている。私の意図に気付いてくれればいいのだが。

気付かれたようだ。無用な諍いをするのは良くない。

「いや、まだ早い。更に後退せよ。キルヒアイス少佐、焦る必要はない。今一步で敵の攻勢は限界に達する。攻勢を懸けるのはその瞬間だ。おぼえておけ。」

「はい、閣下。出過ぎたことを申しました。」

一礼して謝罪する。これで空気が変わるだろう。

ラインハルト様がノルデン少将に眼を向けると我関せずと前方を見ている。

ラインハルト様も憤懣遣る方ない様子だ。肩を竦めてお茶を濁すことにした。

ラインハルト

同盟の先覚者的戦術によって、帝国軍の惨状は醜態と評すべきものだ。

「何をしているのか、一体！叛乱軍の無秩序な運動に何故付き合う必要がある。奴らが踊りたければ暗黒のステージで勝手に踊らせておけばいいのだ。何故相手と同じステップを無理に踏んで自ら足を纏れさせるのか。」

隣に立っている参謀長に言っているのに今一つ分かっていない。気が付けば、椅子に座ってキルヒアイスに愚痴を溢していた。

「低能揃いだ。最もだからこそ俺達の出世も早まるというものだが、少しは使える奴がいないと今後の野心の展望に支障をきたす。俺とキルヒアイスだけで全てをこなすわけにはいかないのだから。今回は人材収集の面でも意味のない戦いに終わりそうだ。」

「そろそろ終わりですね。」

流石だな、キルヒアイス。どこぞの参謀長とは大違いだ。

「そうだ。俺の忍耐よりも先に限界点に来るだろう。」

「ラインハルト様の忍耐の限界点も高くなりましたね。」

「当たり前だ。幼年学校以来、随分と鍛えられたからな。殺してもいいような奴らを半殺しで済ましてやったことが幾度あったか。」

「そろそろ御命令を。」

「艦隊を停止させろ。」

「まもなくだな…」

私の命令を察しない馬鹿もいる。これが参謀長なのだから恐れ入る。

「司令官閣下、もはや大勢は決した様に思われます。損害を被らぬ内に退却なさるべきでしょう。」

「敵の攻勢は終末点に近付いている。無限の運動などあり得ぬ。終末点に達したその瞬間に敵の中枢に火力を集中させれば砂上の勝利は一瞬に潰えさる。なのに何故逃げねばならぬ。」

跳ね回っている叛乱軍の艦隊が私の艦隊に入り込もうと此方に向かってきた。

「それは机上のご思案。そのようなものに囚われず後退なさい。」

コイツは今まで何を聞いていたのだ。いい加減我慢の限界だ！

「黙れ!!臆病者が!!味方の敗北を口にするすら許しがたくあるの、その上司命令の指揮権に口を差し挟むか!!」

こんな奴にこれ以上構っていられん。命令を出さなければ。

「全艦、砲撃用意!・命令があり次第斉射するのだ。」

「全艦、砲撃用意。」

キルヒアイスが復唱し、オペレーターが命令を全艦に伝え始めた。間もなく終幕の時だ。

暴風の如き破壊力と運動性で戦局をリードしていた敵の艦隊の動きが止まった。ミュツケンベルガー、グライフスの艦隊は後退しているので自然と距離が出来る。

よし、今だ!

「全艦、主砲斉射!!」

一筋の光が集まって束の様な攻撃が敵に向かっていく。

「第2射、用意。撃てっ！」

これで大勢は決しただろう。

「見たか。」

ここからは追撃戦だ。戦果を大きくする機会だ。キルヒアイスに命令を出させるために見遣ると顔を横に振っていた。追撃してはならんというのか？

「追撃してはならんというのか？キルヒアイス、どうしてだ？」

「敗残兵の追撃にラインハルト様のお手を煩わす必要はないと思われ
ます。ただ、其れだけの事です。」

キルヒアイスがチラリとモニターに視線をやった。なるほど、十分な功績は立てた。残敵掃討の功績など他の提督達に分けてやれと云うことか。

それにクローロ、ウランフの両将は健在で救援、援護に向かってくる。労多くして功少なしになる公算が大だな。

「なるほど、ただ其れだけの事だな。分かった。」

「では、味方の勇戦振りをここからは見物させてもらおうとしようか。」

提督席に深く腰掛け、見物する事にしよう。

ウランフ提督の艦隊が此方を警戒している様だ。援護が十分ではない。それに対してクローロ提督は側面に回る形をしている。

暫くするとウランフ提督が積極的に援護を始めた。どうやら私が動かないのが確認出来たらしい。敵ながら見事な艦隊運用で的確に巧妙に連携しつつ、第1艦隊の残存兵力を庇いながら後退戦をしていく。

数度に渡る帝国軍の突進はその都度柔軟で的確な防御網にあって跳ね返されている。

どうやら致命的な損傷を与えられぬまま終わるようだ。

「同盟軍の見事な退却戦だな。あの2人は名将と言って差し支えないだろうな。」

「善戦を讃える通信でも送りますか？」

キルヒアイスが訊ねてきた。送ってやりたいがそれは止めておく

方がいいだろうな。この戦いでミュッケンベルガー元帥に良いところが一つもなかった。

「今は止めておこう。第2次ティアマト会戦の後、シユタイエルマルク中將は敵將ブルース・アツシユビーの死に対する弔電を送ったが、その為に軍務省上層部の忌避をかったという。俺もまだ一介の中將だ。俺が全軍の指揮権を握るようになって、誰からも文句をつけられなくなったらそうするさ。」

「キルヒアイスは苦笑している。」

同盟軍の後続の艦隊が到着したようだ。帝国軍もティアマト星系から撤退するよう命令が出た。

会戦における勝利と云う事実があれば無人の恒星系の占拠など続ける必要はない。元々国内政治向けという以上には意味のない戦いである。その目的は十分以上に果たしたといえるだろう。

ラインハルトは劣勢の局面を一撃で逆転させるという功績をたてた。

単に運が良かったと見方をするものも多かったが事実として勲功第一と評価された。

これで大将への昇進は確定となった。

「差し当たり、運命はラインハルト様に媚びを売ったようですね。」
「運命？運命等に俺の人生を左右されて堪るか。俺は自分の長所によって成功し、自分の短所によって滅亡するだろう。全て、俺の器量の範囲内だ。俺とそしてお前が協力すれば運命等に干渉させないさ。」

「ご立派でいらつしやいます。」
「そうありたいのだがな。」

帰国後、19歳の大將となった。これはゴールデンバウム王家の男子を除けば最年少の大將である。

その際に大將に与えられる個人の旗艦を与えられた。

純白の貴婦人ブリュンヒルトである。新理論による装甲システムを備えた次世代戦艦の試作艦だ。

従来の旗艦タイプより若干小型だが火力はアップしている。試作

艦なればこそ、量産コストを無視した装備も搭載している。

ラインハルトの座乗艦として長く、多くの戦場を共にする艦との出会いであった。

第3次ティアマト会戦

同盟その二

宇宙暦795年

アスターテ星域

旗艦

ラップ少佐

ホーランド提督との通信が切れた。副司令長官は映らなくなった画面を今だに見ている。

そんな様子を見ていられなくなったのだろう。ワイドボーンが声を掛けた。

「閣下、宜しいので……」

声を掛けられた閣下が顔をワイドボーンに向けると口を噤んだ。

そしてまた正面を向いた。

「参謀長、プランF351D51を全艦に通達して下さい。」

唐突の命令に参謀長に視線を向けるとチュン参謀長が顔を強張らせている。

何だ。手元にある端末で作戦情報を検索する。

こ、これは！思わず閣下、参謀長、ワイドボーンに視線を向ける。

閣下は変わらずに前を向いている。参謀長は顔を強張らせながら口をパクパクしている。

ワイドボーンも顔を蒼白にしながら端末を凝視している。

「参謀長、復唱はどうしました？」

「か、かしこまりました。オペレーター！プランF351D51を通達しろ！」

我に返ったワイドボーンが閣下に質問をした。

「閣下、本当にこの作戦案をするのですか!？」

混戦状態の敵2個艦隊を味方諸とも撃つ作戦だ。ウランフ提督と協力すれば壊滅的被害を与えられるだろう。ホーランド艦隊をも巻き込んで戦果になるが。

その後はスパルタニアンで掃討戦を行わせ、本艦隊とウランフ提督でミューゼル艦隊を挟撃に移る作戦案だ。

「悩んでいる。勝つ為の現在の最良の作戦だ。」

「味方諸とも撃つことになりませんが。」

「命令無視、抗命罪だ。ホーランド艦隊を味方と呼ぶか呼べるのかどうか悩んでいる。」

クロー閣下とワイドボーンの遣り取りを見ているとチュン参謀長が間に入ってきた。

「閣下、副司令官、分艦隊司令官は了解、命令を待つと返信がありました。」

ワイドボーンが顔を引き攣らせている。恐らくは俺もそうだろう。「参謀長、小用に行きます。10分程艦橋と指揮を頼みます。ラップ、付き合え。」

そう言つて立ち上がり出ていこうとしている。

「恐らく、閣下は指揮下の艦隊の引締めを行ったのだ。命令に背けばこのような手を使うことも有ると。」

チュン参謀長が溜め息を吐きながら教えてくれた。

「ラップ少佐、早く行きたまえ。」

参謀長に促されて後を追った。

前を歩く男がいる。ユーリ・クロー大将、同盟軍副司令長官の地位に居る。

士官学校を卒業し中尉任官すると数ヶ月で任地の汚職を検挙して昇進した。近隣惑星も捲き込む大騒動に発展。大尉に昇進。その後、パトロール艦隊に勤務し、サイオキシン麻薬の密輸を阻止。少佐に昇進。

その後、ほとぼりを冷ます目的でフェザーンに駐在武官として赴任、そこでも産業スパイを帝国軍人と協力して逮捕。中佐に昇進している。

辺境の補給基地に後方支援の任務に着くと会計の詐称、偽証、地元の大企業との癒着を暴き、大佐に昇進。

パトロール艦隊の司令として6隻を指揮し、帝国の先遣艦隊を撃退する。

その功績を持って士官学校教官に赴任となっている。

一年に一回のペースで昇進している。

あまりの昇進スピードに待ったをかける意味の士官学校教官だった。30歳になる前で将官になる予定だったのだ。自身が前線を望まず、昇進を望まなかったからこうなったが望んでいたらブルース・アッシュビーを越える最年少司令長官になっていたと思う。それくらいに隔絶した能力がある。政略、戦略、戦術、戦術どれを取っても一流だ。戦場にあつては冷静沈着で伶俐、冷徹な程に生死、勝敗に拘つてゐる。

前を歩いているクローロ大将が振り返つた。

「ラップ。聞きたいこと、言いたいことがあるなら遠慮無く言え。何も言わずにジツと見られるのは気分がよくない。不平、不満を腹に抱えたまま副官を勤められても俺がしんどい。お前もだろう？」

そう言つてきた。予想外の言葉に慌てて返事をした。

「その、味方ごと攻撃する作戦案を出されてましたが。」

「まあ作戦案としては秀逸だが無理だろうな。市民感情や政府、軍上層部が五月蠅くなる。負けると分かつていても、勝つ為の手段があるのにも関わらず、手が出せないとは歯痒いことだ。」

何も言えない。言えることがない。

「今回は我が艦隊の被害は軽微と云うことで自らの心と折り合いをつけるしかないな。」

そう言つて前を向いて歩き出した。

目の前でホーランド艦隊がやられている。攻勢限界点がきたのだ。

「戦艦エピメテウス、撃沈!!ホーランド提督戦死!!」

オペレーターの報告に艦橋が固まった。

「第1艦隊に後退の命令を出せ。指揮は私が引き継ぐ。可能な限り早く後退しろと伝えろ。」

閣下が指示を出すと動き始めた。

「ウランフ提督より通信が入りました。」

「モニターに映せ。」

「総司令官閣下、予想通りになりましたな。」

「ウランフ提督にはミューゼル艦隊の監視を頼みます。彼が追撃戦に

参加しないなら両翼からミュツケンベルガー、グライフス艦隊を挟む形にしましょう。」

「かしこまりました。」

互いに敬礼をして通信を終えた。

帝国の追撃戦も1時間で終わった。ミューゼル艦隊が動かないと確認出来たウランフ提督と左右から挟み込むように攻められて音をあげたようだ。

概算だが帝国は5000隻、同盟は10000隻は失ったようだ。

帰還後に今回の論功行賞が行われた。色々な要素が絡み合った出征であったがクーク副司令長官はホーランドに厳しい処分をと望み、国防委員長、ロボス司令長官が折れたことで戦死による2階級特進は無し、1階級降格の少将になるそうだ。

そしてどう云った意図、目的かは分からないがクーク副司令長官に最新鋭の旗艦級戦艦が与えられることになった。

旗艦の名前は『アトラス』機動性、防御力、通信能力が大きく強化されており、最後まで生き残って指揮を取ることに主眼がおかれた戦艦である。

数々の戦いを潜り抜け、数奇な運命を辿ることになる戦艦とクーク提督の出会いがあった。

束の間の一時

宇宙暦795年 ハイネセン ローゼンリッター兵舎

先の戦いから帰還後に賞罰の会議を行った。主に私の言い分が認められた。早く幕引きをしたい希望が国防委員長、司令長官にあったのだろう。

エル・ファシルに帰還する前にトレーニング目的で訪れた。ストレス発散が本当の目的である。

「貴方、無理はしないでね。」

ジェシカが心配そうに声をかけてくる。

「あまり心配するな。ただの訓練だ。」

そんなこんな言っていると言っていると訓練場に着いた。

「ようこそ、副司令長官。」

シェーンコップ以下、ローゼンリッターが勢揃いで出迎えてくれた。

「シェーンコップ、世話になる。早速だが着替えて始めよう。」

「はっ。リンツ、ブルームハルト、案内してやってくれ。私はご婦人を案内しよう。」

着替えて格闘戦を行う。徒手格闘戦、ナイフ戦、剣戦と行う。

「くっ、ふっ、しっ。」

「はっはっはっ、やりますな。相も変わらず見事な腕前ですな。」

「貴様の腕も落ちてないようでっ！」

剣同士で打ち合う。焦ったのか熱くなったのか大振りになった一閃を躲して首筋に剣を当てる。

ギリギリ薄氷の勝利を得た。

「ハッハッハッハッ。フウー。」

息が荒くなっている。大きく呼吸をして息を整える。横目で見るとシェーンコップは息を乱していない。

「いや、負けました。これで負け越しですかな。」

「手加減してくれているからな。誇るに誇れんよ。」

ベンチに座っているジェシカの元に向かいながら話をする。

「どうぞ、タオルと飲み物よ。」

「ありがとう。助かるよ。」

貰ったタオルを頭に被り、ボトルの水を呷る。

「ふう、生き返るようだ。」

「貴方って強いのね。」

ジェシカの率直な感想に私は苦笑し、周りで見学していた、ローゼンリッターの隊員は爆笑した。

「閣下は士官学校在学中に同盟軍陸戦大会で優勝していますよ。我々現役専門家の大会でね。」

「あの時は騒ぎになったな。」

「ああ、学生に次々と優勝候補が負けるんだから。」

「貴方って何でも出来るのね。」

ジェシカの感想に肩を竦めて答えた。

「それなり以上に努力してるのだがな。何故か皆はそれを見ずに高く評価する。大変迷惑しているよ。」

私の困った顔と返答に薔薇の騎士連隊は笑いに包まれた。

宇宙暦795年

ハイネセン

ヤン・ウエンリー宅

ヤン

同期であるラップ少佐、ワイドボーン大佐が家に来た。

ラップとは同期でも仲が良かったがワイドボーンは例のシミュレーターでの一件でギクシヤクしていたがラップが間に入ってくれたことで普通の友人付き合いが出来るようになった。

しかし私の性格、ワイドボーンの性格はあまり相性が良くなく2人で食事に行く等は皆無だが…

「すまないな、ヤン。食事に酒まで用意して貰って。」

ラップのすまなそうな声に続いてワイドボーンも感謝の言葉を言ってきた。

「ああ、助かるよ。独り身で本拠地はエル・ファシルだ。食事をするのは基本的に外食になる。こうやって家庭料理を食べる機会がなくて

てな。ユリアン君、ありがとう。」

「い、いえ。こんなので良ければいつでもハイネセンに来た時に寄ってください。」

ワイドボーンの言葉にユリアンも恐縮しっぱなしだ。

「先のティアマト会戦はどうだったんだい？ ホーランド提督がエネルギー切れを起こし、ミューゼル中将に手痛い一撃を喰らったと云うのは知っているが。」

私の言葉にラップとワイドボーンは顔を見合わせた。顔が少し強張ったように見える。

「ヤンの言う通りだ。ホーランド中将が突撃し、ミュッケンベルガー、グライフス艦隊を混乱させた。ここまでは良かったのだが、一定の戦果も挙げたのだから補給に戻れと伝えても戻らなかったんだ。」

ユリアン君も驚いた表情をしている。

「それって不味くないですか？ 戦いの最中にエネルギー切れを起したりしたら。」

「ああ、大変不味い事態になる。」

「その、ホーランド提督は気付かなかったのですか？」

「敵を2個艦隊掻き乱し、混乱していた。自分の作戦は上手く行っていると思っただろうな。エネルギーを多大に消費し、エンジンに必要以上の負担を掛ける。そんな艦隊運動だったよ。」

「ああ、戦争中だからかな。皆が予定以上にエンジンを吹かしていたのだろう。それによって消耗も早まったはずだ。」

ラップ、ワイドボーンの話しに溜め息を漏らしてしまった。

「恐らくは戦闘が正常な判断力を奪っていったんだ。勝っている、敵を乱している、自分の作戦通りに進んでいると。」

「ヤンの言う通りだ。冷静になれば分かる事だ。ホーランド提督も分かったはずだ。それが出来なかった。不幸な一戦だったよ。」

ラップ：ワイドボーンも何とも言えない表情をしている。

ラップが大きく息を吐いた。

「そして…閣下の凄味と恐ろしさを嫌と云う程に感じた戦いだっただよ。」

ワイドボーンも頷いている。

「何があつたんだい？」

私の問いにラップとワイドボーンは顔を見合わせた。そして一つ頷くとラップが話し始めた。

「閣下が抗命罪、軍法会議を持ち出してホーランド提督の後退を求めた。最後通告だな。」

「それをホーランド中将は拒否をした。そして閣下はホーランド艦隊と混戦状態になっているミュッケンベルガー、グライフス両艦隊にウランフ提督との一斉射を行なおうとなされた。味方をも巻き込んで。」

ラップもワイドボーンも険しい表情だ。私も似たような表情をしているだろう。

ユリアンの唾を飲み込む音がやけに大きく聞こえた。

「問題になるのでは？その味方殺しになりますよね？」

ユリアンの質問に3人で顔を見合わせた。保護者として私が答えるべきか。

「ユリアン、確かに味方だ。しかし総司令官である閣下が抗命罪、軍法会議を出してまで従わなかったんだ。軍の命令系統から逸脱したと判断しても問題はない。」

「でも、その、だからと言って……」

「ああ、問題は味方の艦隊を配下の艦隊が撃てるかどうかだ。他の副司令官、分艦隊司令官が命令に従って同盟艦隊を攻撃出来るかだ。」

「それに関してはクブルスリー副司令官以下全員が命令に従うと戦場では通信があつた。恐らくは問題なく遂行されたと思う。」

「閣下に対して様々な感情を抱いたよ。恐さ、強さ、冷徹さ、怜悧さ、慎重さ、他にも色々な、ね。」

「ああ。」

ここにいる4人が暫くの沈黙に覆われた。ユーリ・クローロと云う傑物をどう言っているのか分からなかった。

ただ味方であつたことが幸いといえると云うことだけは確かであつた。

束の間の一時 その2

宇宙暦795年 エル・ファシル 中央通り大広場

「戦場で今日も愛する人達が死んでいきます。私達は一体何時までこんな悲しみの中で過ごさなければならぬのでしょうか？ 帝国と同盟の人達は同じ人間です。一体何時まで戦い続けなければならぬのでしょうか？」

ジェシカが集まった観衆に向かって言葉を放っている。

「私達は何の為に戦うのでしょうか？ 守る為に？ 何を？ 自らを？ 未来を？ 誰かを殺して守る未来。誰かを殺して手に入れる未来。そして討たれた者には無い未来。それで満足なのですか？ その手に掴むその果ての未来は幸福？ 本当にそうでしょうか。」

問い掛けるジェシカ。問われた観衆。皆が其々に考えながら此れまでの過去を振り返っているのだろう。

「私は、私は決めたのです。見ない振りはしないことを。聞こえない振りをしないことを。沈黙しないことを。その為に私は今ここに立っています。」

正面を見ながら話すジェシカに苦笑してしまった。意外と天職かもしれない。肝が座っている。

「立候補するにあたっては随分迷いました。只の教師であった私にそのような資格は無いのではないかと。でも決めたのです。以前、私はこう思っていました。歴史とは埃を被った過去の物だと。でも違うのです。歴史とは今生きている私達が作っていくものなのです。歴史書にその名を残す人達だけの物ではなく、今生きている私達一人ずつが作り出すべき物なのです。私達の1歩1歩が未来へと繋がっているのです」

周囲を見渡しながら訴え掛けている。拍手が起こった。

「私達の歴史は此れまで多くの戦争と共にありました。この先も戦争と共にあるかどうか。其れは私達自身が決める事です。此れは正義の戦争だと声高に言う人がいます。正義の為に命を捨てるのは崇高な行為だと。けれども正義とは何か、崇高な行為とは何か、決めるの

は私達一人ずつです。戦地に行く家族を見送る貴方、戦地で家族を失った貴方、決して何処か安全な場所に身を置き、自分は何一つ失わず傷付かずにいる人達等に決めて貰いたくはありません。」

「私は権力を持った人に常に問い掛けてゆきたいのです。貴方達は何処にいるのか、兵士達を死地に送り込んで貴方達は何処で何をしているのかと！」

「150年も長きに渡って継続されて来た銀河帝国との戦争をまだ続けたいのですか？多くの人を犠牲に戦争を継続するそんな社会が正常であると言えるのでしょうか？私達は今何が最も優れて現実的であるのか問わなければなりません。その答えは1つ、平和です。私はそれを求め続けていきたいのです。」

強く問い掛ける口調に観衆は静かに聞き入っている。此れは決まりだろうと思ってしまった。

ジェシカの話が終わり、私の応援演説になった。

「そもそも帝国と同盟の戦争の始まりは帝国を脱したアーレ・ハイネセンが自由惑星同盟を建国したのが始まりだ。帝国は叛乱軍と称して鎮圧の軍を送ってきた。それを阻止する為の守りの戦争だった。国力に差があり、様々な艱難辛苦を乗り越えて帝国と同等とは言わないうが五する勢力になった。」

「そこで帝国は同盟領への橋頭堡、帝国侵攻への防壁とイゼルローン要塞を建築するに至った。ここまでは良い！」

強い視線を観衆に向けてながら話し掛ける。

「そこから何故か帝国領侵攻を目指したイゼルローン要塞攻略戦が行なわれるようになった。守りの戦争から攻める戦争も始まった。とある政治家は専制政治に対する正義の戦争だの、崇高な義務だの、銀河帝国の打倒し圧政と脅威から全人類を救う等と言う方々がいる。本当にそれが必要な事なのか、皆さんにもよく考えて欲しい。」

観衆の拍手に片手を挙げて応える。席に戻り襟元を弄る。些か緊張していたようだ。

ここでハイネセンから応援メッセージが届いているので流すそうだ。心当たりが何人かいるが誰かな。

「皆さん、お久し振りです。ヤン・ウエンリーです。彼女とは士官学校の時からの友人付き合いですのでこうして応援メッセージを送らせていただきました。」

何時もの癖の頭を掻きながら話している。詰まりながら言葉選びに悩みながら話すヤンに笑いが漏れる。

「最後に彼女が議員になるに相応しい資質が一つありました。其れは私が敬愛する教官であり、帝国、同盟で名将と云われるユーリ・クロー副司令長官を墜としたからです。此れは帝国には出来ていない偉業であり、その部分で彼女が如何に優れているかの証拠ではないでしょうか？」

余計なことを言う教え子だ。観衆が皆笑いを堪えながら私を見ているのが分かった。肩を竦めると会場は笑いに包まれた。

その数日後の選挙結果は80%を越え、90%に迫る得票率で圧勝した。ここに平和を求める議員が1人誕生した。

束の間の一時 その3

宇宙暦795年 ハイネセン 士官学校

今日は用事があつて昼前に士官学校を訪ねた。ヤン、ラップ、ワイドボーン達の卒業以来なので中々に久し振りだ。門の警備員に声を掛ける。

「失礼、人と会う約束があるのですが。」

私の声掛けに下で何かをしながら返答してきた。

「所属と官姓名を。」

驚かれるなと思った。

「自由惑星同盟軍宇宙艦隊副司令長官ユーリ・クロー大将です。」

私の答えに勢いよく顔を上げ、私の顔を凝視する。そして本物と分かったのか急いで立ち上がって敬礼をした。

「し、失礼いたしました。副司令長官閣下。」

あまりの慌てように苦笑してしまった。

「確認が取れたなら中に入っても？」

「はっ、案内をお付けいたしましたでしょうか？」

緊張している警備員に無用と伝える。

「私はここの卒業生だし、数年前まで教鞭も取っていた。大丈夫だ。」
「畏まりました。お気を付けて。」

警備員の変な答えに又も苦笑しながら中に入ることにした。

入り口に向かっていると講義の無い候補生だろう。私が見つかったのかヒソヒソと話している。

玄関まで後少しというところで1人の候補生が駆け寄ってきた。

「お待たせしました、クロー副司令長官閣下。フレデリカ・グリーンヒル候補生、参りました。」

「御苦労。忙しい中に呼び出してすまない。」

「いえ。それで御用件は？」

御父君のグリーンヒル総参謀長によく似て生真面目さが出ている。

「そこまで難しい事では無い。とある場所で道案内をして欲しいのだ。これ以上は向かいながら話す。前に車を止めてるので行こうか

「？」

「はっ。」

歩きだした私の後ろを敬礼してから追ってきた。

「その、目的地は何処なのでしょう？」

「ああ、ハイネセン中央墓地だ。君の母上の墓参りをとね。亡くなられたときはエル・ファシルに赴任中だったからね。君も士官学校に入学してしまっていたから。」

「確かにそうでしたね。」

「うん、行こう行こうと思ってはいたのだけど両方の都合が折り合わずにズルズルと延びてしまったから強権を使わしてもらった。」

「母も喜ぶと思います。」

「そうだと良いが。士官学校はどうか？今は上位にいると聞いたが？」

「訓練が大変ですが頑張っています。成績も次席です。このまま行けるかなと思っています。」

「そうか。」

「閣下が一度も首席から落ちたことが無いことも聞きました。閣下のように頑張れと言われています。」

「そうか、何か気恥ずかしいな。」

照れながら苦笑する私が可笑しいのかフレデリカさんも笑っている。

暫く車を走らせて墓地に到着した。後部座席に置いてあった花を抱えてフレデリカさんの先導で歩いていく。1つの墓の前で立ち止まり此方に振り返った。

「此方です。」

「ありがとう。」

礼を言い、花を墓前に置き黙礼をする。1分程してから隣を見るとフレデリカさんもしていた。私が動いたのを察したのか顔を上げて此方の顔を見てくる。

「御父上のグリーンヒル総参謀長も最近来られたようだね。」

私の言葉に驚いている。

「父がですか？どうしてそれを？」

「墓前の草が踏まれている。恐らく手入れをしたのだろう。」

周りの墓と比べてそうかなと思っただけだが。

「全く分かりませんでした。」

「多分だ。違う人かもしれないし、ご両親かもしれない。さて、もう一人ついでに墓参りしてもいいかな？」

私のお願いに快く了承してくれたので今度は私が先導して向かう。それほど遠くはなく2、3分もかからずに着いた。先程と同じように花を墓前に置き黙礼をする。1分程で止めて振り返るとフレデリカさんもしてくれていた。

「さあ、行こうか？」

「分かりました。」

そう言つて車に向かっているとフレデリカさんが質問をしてきた。好奇心からだろう。

「あの、先程のお墓は誰の何ですか？御名前はアレン・ヘンダーソンとありましたか？」

「士官学校時代からの友人だ。付き合いは長くないが親友だった。一番のね。」

「そうだったんですか。」

「士官学校では何かと間に入ってくれてね。成績は普通だったが良い奴だったよ。事あるごとに私の副官になりたいと言っていたよ。お前が偉くなったら俺を高級副官にしてくれと。」

「その、それで何時その…」

立ち止まって話した。

「私の初任務の時だ。多くの者が不正に関わっていた。私が所属していた補給基地司令官、司令部がやっていた。その取り押さえを私達が向かったんだ。反抗されて銃撃戦になったよ。ローゼンリッターが来るまで適当に応戦していたのだが1発の銃弾が頭に当たった。」

「目の前で崩れ落ちたよ。そして死にたくないよと2回声が出た。そして2回は声が出なかった。天才でも平凡でも死ぬ時は一瞬だと理解した出来事だった。」

振る切る様に歩きだしてから声を掛けた。

「昼食を食べてから送るよ。」

彼女がどうなるか分からないが少しでも長生きしてくれたらと思うだけだ。

祝賀会と初航海

宇宙暦795年

ハイネセン

自宅

「乾杯！」

「「「乾杯!!」」」

ジェシカが議員として当選証書を貰い、議会に出席したことを祝おうと知り合いを集めてパーティーをすることにした。艦隊司令部の面々にアレックス家族、シエーンコップ、ヤンとユリアン、アツテンボローが来てくれた。

「おめでとう、ジェシカ。」

「おめでとうございます、ジェシカさん。」

皆が祝いの言葉をかける。嬉しそうにありがとうと言いながら乾杯をする。和やかな雰囲気で会が始まった。

「さあ、皆さん。今日は私の祝いに主人が料理を全て作ってくださいました。どれも絶品だから食べてくださいね。」

「「「おお~~~~」」」

という声と共にテーブルに饗された食事を見ている。

トマトソースとデミグラスソースのジャガイモとニンジン入りの煮込みハンバーグ、イサキのアクアパッツア、マルゲリータピザ、海藻サラダ、カリカリベーコンとクルトンのシーザーサラダ、クラッカーの上にチーズやトマト、生ハム等を盛り付けたオードブルが並んでいる。

皆が思い思いに好きなものを皿に盛って食べている。

男連中は煮込みハンバーグとワインを楽しんでいる。女性陣は、といてもマダムキャゼルヌと娘しかいないのだがジェシカと話ながら子供が食べるのを楽しそうに見ている。

「それにしてもクローロさんがここまで料理上手なんて知らなかったわ。」

オルタンスさんの言葉に笑いながらジェシカが答えている。

「彼、何でも出来るみたいよ。料理、洗濯、掃除、意外にマメにする性格みたい。」

「旨い。流石ですな。」

「ああ、見事なものだ。」

口々に褒めてくるので気恥ずかしくなった。

「褒めるのはいいから沢山喰え。どれも代わりはあるからな。」

照れ隠しがバレたようだ。笑っている。不屈きな輩が多いことだ。

「ジェシカ、改めてになるがおめでとう。」

私からの祝福に嬉しそうに笑ってくれる。

「ありがとう、あなた。平和を求めていきたいの、あまりに多くの人が多くのものを失っているから。これについてはずっと訴え続けていきたいの。」

「そうか、応援しているよ。」

そう声をかけてその場を離れた。テラスのテーブルに料理をよそった皿とワインボトルとグラスを置いて、椅子に座った。

その動きを目敏く見ていたのだろう。アレックスとシェーンコップがやって来た。後ろにチュン参謀長もいる。

4人で椅子に座った。

「何の用だ？何かあるから来たのだろうか？」

アレックスとシェーンコップに問い掛けると2人は顔を見合わせて笑い合っている。

「流石の慧眼。恐れ入りました。」

「ユーリ閣下は帝国と和平、或いは講和等が出来ると本当にお思いですか？」

アレックスの鋭い質問について苦笑した。

「ほぼ100%の確率で無理だ。どう考えても無理筋な話だよ。」

「それはどういった理由ででしょうか？」

「様々な理由があるが先ずは帝国が対等な立場での和平、講和が成立することはないでしょう。」

3人を見渡すとピンときていないようだ。

「全人類の支配者にして全宇宙の統治者、天界を統べる秩序と法則の保護者、神聖にして不可侵なる銀河帝国皇帝。つまりは帝国と同盟は対等な国家ではないということです。帝国軍も叛乱軍と我々を呼ん

でいますしね。」

最後の言葉は肩を竦ませながら言うのと苦笑はしてくれた。

「先ずは帝国に自由惑星同盟と云う国家を認めさせなければならぬ訳です。しかし神聖不可侵と称している皇帝がそれを認めるのか、甚だ疑問ですね。自分の皇帝位、命も危うくなる選択になるでしょう。」

3人が難しい顔をしている。

「同盟軍が帝国軍に甚大な被害を与えたとしても恐らくは帝国軍が守勢を取る休戦状態に持ち込もうとするはずです。同盟はここぞとばかりに攻めるから休戦状態にはならないでしょうけど。」

アレックスが疑問を呈してきた。

「ではどうやっても和平、講和は無理ということですか?」

冷笑を浮かべてしまった自覚を持ちながら話す事になった。

「そもそもが和平、講和交渉をどうやって行うのです? そういった組織や人が互いの国に居ないのにどうやって進展させるのです?」

私の問いにハッと気づいた後に考え込んでいる。チュン参謀長が問い掛けてきた。

「フェザーンを仲介にするのはどうでしょうか? 数は少ないですが捕虜交換を仲介して貰った実績もありますし。」

チュン参謀長の答えに首を横に振ることで答えた。

「それは止めた方がいいでしょう。国の安全保障に関わる問題です。只の仲介、立ち会うだけなら未だしもこの問題に関してはフェザーンを関わらせるべきではないと私は考えています。」

私の発言に3人全員が驚いた顔を見せた。

「それは何故です? 貴方の事だ。中々に深遠な意味を持っているのでしょうか?」

シェーンコップが挑発的か面白がっているのかよく分からん顔で問い掛けてきた。

「フェザーンが間に入るチャンスは今まで沢山あったのに捕虜交換以外になにもしなかった。それどころか戦争を助長する動きもあったでしょう。そんなフェザーンを国家として信頼できない。」

「帝国から自治を認められた自治領のフェザーンが平等公平中立の立

場でいられるのか。そもそもがフェザーンの自治領主が帝国と我々を戦わせる様に導いているのではと疑いも持たざるを得ない。」

「フェザーンは何を考えているのでしょうか？」

「さあな、状況が煮詰まってきたら見えてくるものがあるのかもしれないが、そうなった時に我々が生きているか、状況を好転させれる立場にいるか、そもそもそんな力が同盟に残っているのか分からんからな。どうなることやら。」

「では閣下は和平、講和は無理だと？」

アレックスが問い掛けてきた。

「現実的には帝国に大きな損害を与えて、此方からも攻めない自然休戦状態が良いところだろう。3年から5年の間を繰り返すかな。」

「それでは永遠に戦いが終わりませんな。」

「だからこそ其処に一石を投じてくれるかもしれないジエシカに期待をしているんだ。何か起こしてくれるのではないかとね。」

「ベタ惚れですな。」

そう言つて爆笑するシェーンコップに一睨み入れてから私も笑つてしまった。

他の2人も笑っている。楽しい一時として過ごせることが出来たと思うことにしよう。

宇宙暦795年

バーラト宙域

戦艦アトラス

今日、多くの試験項目をクリアした最新鋭旗艦級戦艦アトラスを受領する運びとなった。

艦長と受領の手続きを艦橋でする事になっている。

私を先頭に第1艦隊司令部の面々が艦橋に入ると一斉に敬礼をしてきた。司令官席の傍で待っているのが艦長だろう。答礼をしながら近付き、傍で解くと艦長も手を下ろした。

手に持った通信端末を開きながら説明を始めた。

「この度、アトラスの艦長を拝命致しました。ラルフ・カールセン大佐です。」

「宇宙艦隊副司令長官兼第1艦隊司令官ユーリ・クローロ大将です。」

カールセン艦長、よろしく。」

「ハッ、同盟随一の名将と誉れ高いクローロ司令官の座乗艦の艦長を勤めるとなると高揚するものがあります。」

「そうか。では艦長、早速だが報告を受けよう。よろしく頼む。」

「ハッ。此方の端末をご覧ください。順に説明をさせていただきませう。」

項目が沢山並んでいるが一番上の項目から開いて確認していく。各項目の重要な部分は口頭でも説明するのが規則なので順々に説明をしてくれるみたいだ。

「まずはエンジン出力ですが30%上昇しています。同盟軍では最速の艦となっております。」

「次に装甲、防御機能ですが20%上昇しております。」

側面の回頭用エンジンは隠蔽式になっており、側面の防御力も幾ばくか向上しております。」

「武装は3連主砲を中央に三門、左右両翼に二門ずつ、単装砲レールガンが側面に一門ずつの計2門、後部ミサイルが

24門、鉄鋼砲が2門となっております。」

「それと此方の艦は大気圏突入、離脱、航行も出来ます。帝国の鹵獲した旗艦級からのフィードバックも受けておりますので。」

「そうか。ついでの機能として覚えておく。」

単艦で大気圏に入っただけでどうする！良的になるだけじゃないか！どう評価したらいいのか分からん。

次々と項目の説明を終えていく。

「当艦は既存の旗艦級戦艦と比べまして性能面で劣るところは無いと言えます。」

「性能面で…か、他で何か問題があるのかな？」

大体の答えが分かるが聞かないわけにもいくまい。

「建造費が既存の旗艦級戦艦に比べて倍はするそうです。」

やはりそうか。

「この艦に切り替えるか既存の旗艦を使い続けるかはアトラスの働きを見て決めるそうです。」

「旗艦に働きをと言われてもな。旗艦が戦闘能力を十全に発揮する状況と云うのが問題だろう。」

私の言葉に確かにそうだと云う声が上がった。

「そもそもそれでは最新鋭旗艦級戦艦ではなく、最新鋭技術を搭載した実験艦ではないか。」

私の愚痴をカールセン大佐も苦笑しながら返してくれる。

「そう言われるのはごもっともですが閣下が結果を残してくれれば量産されるのは事実ですから。」

「分かった、分かった。性能面で優れているのが事実なら文句はない。有り難く使わせて貰おう。」

「それがよろしいかと。」

会話が一段落したので気になっていたことを聞いてみた。

「私が今まで使っていた艦はどうなる？誰が後任か知っているか？」

ハイネセンの事情をよく知っているのか疑問をスラスラと答えてくれる。

「同盟きつての武勲艦ですから該当者が出るまではハイネセンで保管することになる予定と聞いています。一世代前の旗艦級戦艦です。正規艦隊司令官の乗艦には出来ませんし、誰も立候補しないでしょう。分艦隊司令官も撃沈されれば中々に事ですからな。乗りたがらないでしょう。」

「そうか。長い間相棒を務めてくれた愛着のある艦だ。撃沈される姿を見ないですむのは有難いし、知らされるのも辛いからな。」

ウンウンと頷いていたカールセン大佐が最後の報告をしてくれた。

「閣下のご要望の司令部が座る机と椅子の配置はご希望通りに変更しております。」

アトラスを受領するにあたって1つ要望を出した。司令官が座る席の後方に司令部要員の椅子と机が用意されていたが、一々後方に椅子を回すのが面倒で前方にして司令官の対面に艦長の席を置いた。艦長や操舵や通信、火器管制が前方で参謀長、参謀が後方なんて効率が悪すぎるだろう。受取りの手続きを終えたので最初の命令を下す。「では、これよりエル・ファシルへと帰還する。各員所定の位置につ

け。参謀長、周りに待機中の艦隊にも伝える。」

私の命令を受けて、全員が各々の持ち場に移動する。

各セクションから準備完了の報告を受けたカールセン艦長が私に声をかける。チユン参謀長も周りの艦隊からの報告を伝えてくれる。

「閣下、発進準備整いました。」

「閣下、艦隊の発進準備整いました。」

周りに視線を向けると命令を待つ体制が整っていた。1つ頷いてから命令を出した。

「全艦隊発進！第二戦闘速度！」

「全艦発進、第二戦闘速度を維持せよ。」

アトラスの最初の船出がこうして始まった。これからどの旗艦よりも歴戦を重ねることになるとは、この時の乗組員は誰も、クー口自身も思っただけいなかった。

第4次ティアマト会戦

宇宙暦795年

エル・ファシル

補給基地

チエン参謀長

クーロ司令官の部屋の電気が付いている。まだ仕事をしているのだろうか？部屋に入ると机で端末を弄っていた。チラリと私に視線を向けて、直ぐに作業に戻られた。

「まだ帰られないのですか？」

私が問いかけると笑いながら答えてくれた。

「妻が議会で遅くなるそうで仕事をしていました。戦術パターンの作成をね。参謀長は何故ここに？まだ帰っていなかったのですね？」

「私は副司令官、分艦隊司令官と艦隊行動の打ち合わせをしています。閣下の戦術に迅速に対応できるように。」

閣下が苦笑していらっしやる。御自分の戦術が残業を強いていることに申し訳なさを感じているのだろう。

「気にしないでください。我々は閣下の下で働けて嬉しいのです。同盟屈指の名将を支えていると。」

これは皆の本心だ。閣下の役にたつことに喜びを感じている。

「閣下、ロボス元帥が長年の悲願であるイゼルローン要塞攻略を目指す同盟軍は要塞に7度目の攻勢をかけるべく出兵計画を立案しているようです。」

宇宙艦隊司令部、統合作戦本部のクーロ副司令官シンパの将官からの情報を伝える。私の報告に苦笑している。恐らくは呆れているのだろう。

「相も変わらず懲りない人だ。幾度失敗してもめげない精神はここままでいくと尊敬する。それに付き合わされる兵には同情を禁じ得ないが。」

「第2、第10、第12を動員するそうです。」

「ボロディン提督、ウランフ提督の両名を連れていくか。心底勝ちたいようだ。」

閣下が冷笑を浮かべている。今まで勝つための努力をしていな

かった事への不平、不満があるのだろう。

「そろそろ私も帰るとしますか。参謀長も帰るところだったのでしょうか?」

「そうしましょう。明日もあります。」

我々は我々の仕事を果たすことが大事と云うことか。

「第2艦隊が先行してイゼルローン回廊同盟側出口の一つであるティアマト星系を進軍していた所に、木星型惑星レグニツアの大気圏内を航行中、帝国軍と遭遇戦となったそうです。」

今朝、統合作戦本部から送られてきた戦闘詳報だ。ここには第2艦隊と閣下が最大限に警戒しているミューゼル提督との記録がある。

閣下もデータを見ながら私の報告を聞いている。

「惑星レグニツアの大気圏はレーザーがほとんど効かず、両軍共に目視で探査、航行しており、双方全く予期しない嵐の中の遭遇戦という形で砲撃戦が開始されたそうです。」

「当初はパエツタ中将率いる第2艦隊が優勢に進めておりましたがミューゼル提督が惑星レグニツアの大気に核融合ミサイルを撃ち込み、水素とヘリウムからなる大気を爆発させ、巨大なガスの奔流を第2艦隊に向けて叩きつけるという奇策を用い、戦局を一瞬で逆転させた。」

「此方が使うべき戦術を彼方が使うか。頼りになる味方だな。頼もしい限りだ。」

笑いながら一人愚痴る閣下に得もしれぬ感情を抱いた。

「形勢不利を悟ったパエツタ提督は自軍を撤退させ、帝国も逆襲を被る危険を避けるため撤退したようです。帝国も逆襲を被る危険を避けるため撤退した為に、両軍にとって消化不良な一戦であり、両軍の被害は互いに自然環境が不利に働かなければ自軍が勝っていたと主張しうる程度のものであったようです。」

「そうか。互いに痛み分けて終わったか。まあ、本番はもう少し先だ。此方に幸運の女神が微笑むことを祈るとしよう。」

閣下の感情が一切籠っていない言葉に言い知れぬ不安を感じた。

「っ、これは……!？」

なんだこれは。敵の左翼部隊が同盟軍と帝国軍の間を横断している。常識外の大胆な運動で敵味方の不意をついたのか、同盟の3個艦隊は攻撃をせずに通過を見ているだけだ。

「閣下!!これは。」

頬杖を付きながら険しい表情で戦闘モニターを見ている。

「恐らくは思考の硬直、停止だろう。私の時にしてくれたならば完勝出来たのに運がないな。それともミューゼル提督に天運があるのか、どちらかな?」

ミューゼル艦隊は同盟の左翼側面を窺う位置に着いた。一方、我に返った両軍の主力は衝突せんばかりの距離に接近しており、そのまま芸のない正面からの乱戦にもつれこんでいる。

ミューゼル艦隊の側面攻撃に対応しながらになった為に同盟軍の劣勢になるも同盟も迂回攻撃を画策し、帝国軍本体は狼狽し、優勢に転じるもその別動隊がミューゼル艦隊からの別動隊に壊滅させられた。

ウランフ提督が帝国軍本体に撃つて出るもミューゼル艦隊が後方から追撃し、帝国軍本隊を救援し、巧みな指揮で同盟軍は翻弄され大損害を被った。

相次ぐ大損害を受けた同盟軍はついに撤退したが、帝国軍本隊もまた同盟軍に勝るとも劣らぬ損害を被り、同盟領への進撃を断念して撤退した。結局この戦いもまたなんらの戦略的意義もなく、ミューゼル提督の名声を上げるに終わった。

同盟軍も帝国軍も2万隻に近い損害を出し、何の益もない消耗戦と相成った。

その内、ミューゼル艦隊の損害は3000隻にも満たなかったそう
だ。

この戦功により、ミューゼル提督は上級大将に昇進し、さらに断絶していたローエングラム伯爵家の名跡を継いで、名ばかりの貧乏貴族から本当の貴族へと立身出世した。

帝国の談合

宇宙暦796年 軍務省 軍務尚書室

エーレンベルク元帥

私の執務室に統帥本部総長シュタインホフ元帥、宇宙艦隊司令長官ミュツケンベルガー元帥の2人が集まった。

議題は先頃ローエングラム伯爵家を継いだラインハルト・フォン・ミューゼル上級大将。いやローエングラム伯爵か。が総司令官としての軍事行動の詳細を詰める為の会議だ。

「国務尚書と共に皇帝陛下よりローエングラム伯の遠征を計画するように仰せつかった。国務尚書からは兵数は2万隻程と言われた。それと委細は任せると。」

「それとローエングラム伯爵家は武門の名家、帝国騎士。それを継ぐに相応しい試練を科すべきとブラウンシュバイク公爵からの進言があり、陛下が尤もであると仰せになった。」

シュタインホフ元帥、ミュツケンベルガー元帥は顔を見合わせている。

「今回の目的はローエングラム伯の力量を視るのが最大の目的だ。あやつ個人のな。」

私の言葉にシュタインホフ元帥が一つ頷いてから言葉を継いだ。

「では、分艦隊司令官のロイエンタール、ミッターマイヤーの両名、参謀長のメックリンガー、旗艦艦長のシュタインメッツを外そう。」

ミュツケンベルガー元帥も納得したのか頷いている。

「そういえば副官も勤めている赤毛の小僧はどうする？幼馴染みだったかな？」

シュタインホフ元帥がどうでもよさそうに鼻を鳴らした。

「副官と云うことは階級は低いのであろう？ならどうでもよかろう。影響はないだろうからな。」

ミュツケンベルガー元帥に視線を向けると同意してくれた。本題に入るとしよう。

「では代わりに誰を入れて編成するかだ。余りに露骨な編成をすると

軍への非難、不信感が増そう。それをブラウンシユバイク公爵の為だけにそんな事を引き起こす訳にはいかん。」

シユタインホフ元帥が口元に手をやった。

「つまりはそこそこの編成にしなければならんと云うことか？候補者は？」

「一応リストアップしてある。」

「メルカッツ大将にシユターデン中将か。」

「それにフォーゲル中将、エルラツハ少将、ファールレンハイト少将。」
「良いのではないか？ローエンングラム伯が7000隻、メルカッツが4000隻。シユターデンとフォーゲルが各々3000隻、エルラツハ、ファールレンハイトが各々1500隻でどうかな？」

2人に視線を向けると同意の意思を示してくれた。

「では国務尚書に報告しておく。次は叛乱軍がどうするかだな？」

「その事で2人に報告がある。統帥本部の管轄にある情報部から報告があった。叛乱軍の迎撃の司令官はあの男のようだ。」

直接相對したことがあるミュツケンベルガー元帥が唸りながら話した。

「ユーリ・クーロか。」

シユタインホフ元帥が唸りながら続きを話した。

「どうやらロボスと交互に総司令官を務めているそうだ。あの2人は仲があまり良くないらしい。ロボスが国防委員長派閥、クーロが統合作戦本部長派閥らしい。」

「ローエンングラム伯にとっては好機かな？」

「どうかな？叛乱軍にとっても好機だ。ローエンングラム伯を警戒しているクーロ大将が2万隻という敵にどう対応すると思われる？」

「ふむ。あやつなら2個艦隊は動員するだろうな。万全の態勢にするなら3個艦隊4万隻になるだろう。」

「ローエンングラム伯の真価が問われる事になるだろう。」

宇宙暦796年 オーデイン 酒場

オスカー・フォン・ロイエンタール

ミッターマイヤー、メックリンガーの3人で飲みに来ていた。色々話したいことがあるからだ。メックリンガーはピアノを演奏している。

「あの方の部隊編成も決まったな。」

「融通の利かない」メルカツツ、「扱いづらい」フアーレンハイト、「実戦には向かん」シュターデン、「足手まといにしかならん」エルラツハにフォーゲルか。」

「使える者と使えない者が半々か。手足を縛られた上に、重石までつけられた状態だな。」

「あの方は無事に帰ってこられるだろうか？」

「最早我々がどうこうすることは出来ないのだ。大神オーデインに祈るしかない。」

そんな話をしながらメックリンガー参謀長に近寄りながら話かける。

「卿は何か知っているか？」

ピアノを弾きながら視線を此方に向けた。

「情報部にいる知り合いから聞いた情報ではクローロ大將が迎撃にでてくるそうだ。」

「何っ、それは確定情報か？」

「ああ、そうらしい。規模や司令官等の詳細はまだだが。」

「厳しい戦いになりそうだな。」

「ああ、あの方の運と実力を信じよう。」

「そうだな。」

戦場へ

宇宙暦796年 エル・ファシル星域

チウン・ウー・チエン参謀長

我々の艦隊もエル・ファシルの駐留基地を出撃して1日が経った。第2、第4、第6の3個艦隊は我々を待たずに先行している。パエツタ、パストーレ、ムーア提督は司令長官の命令として戦域、戦場の確定、確保を命じられたと言っていた。

そしてクーロ副司令官が総司令官として出撃する手筈だったが予算の承認と国防委員会、総司令部の承認が遅れて要らぬ足止めを喰らった形になった。

閣下は何も言葉を発せずに沈黙考しているので司令部の皆が黙々と軍務に勤しんでいる。

先程から閣下の端末に通信が入って確認されていたが一つ大きな溜め息を吐かれた。

「ワイドボーン、ラップ。先程連絡があつて此方の作戦が策定されたそう。ダゴン星域会戦と同じく包囲殲滅戦を行うらしい。」

そう言つて送られてきたデータを正面のモニターに映した。確かにその様な作戦を行うと書かれている。

「2人はどう思う？可能と思うか？」

伶俐冷徹な視線を両名に向けている。温もりや暖かさの欠片もない作戦の遂行を客観的に判断すると同時に両名がどれくらい出来るか見定める為の評価もしているのだろう。

両名が顔を見合わせて一つ頷いた。参謀を勤めるワイドボーン大佐が答えた。

「三方向からの攻撃は定石からみたら問題ないでしょうが三方向からの進軍は各個撃破の的になる危険性があります。各艦隊の間に距離があり、何処の艦隊も救援、援護に行くにしても時間がある程度はかかります。」

その通りだ。三方向からの進軍と攻撃は似て非なるものだ。例え

るなら街の別の道路を走っているのと三車線を走っているようなものだ。

「続きはラップ中佐が引き継いだ。」

「確かにダゴン星域会戦は今なお同盟市民にとって人気のある戦いなのでそれを再現すると云うのは分からなくはないですが前提条件に大きな差があります。」

「そう言つてモニターにダゴン星域会戦の詳細を表示させている。」

「閣下もご存知の通り、ダゴン星域は迷宮も同然の小惑星帯に太陽嵐が吹き荒れる難所であり、同盟軍は地勢を知り尽くし索敵においても勝っていました。」

「それに対して帝国軍の実質的な指揮官インゴルシュタットは索敵どころか自軍の位置測定さえ困難なダゴン星域の地勢を考慮し、密集隊形での迎撃に徹して同盟軍を消耗させる策を採りました。」

「皆が知るダゴン星域会戦だ。領きながら聞いている。」

「紆余曲折ありましたが帝国軍が分散した艦隊に再結集を命じ、同盟軍はその命令を傍受し、敵が連携を欠いたまま集結したところを一挙に包囲殲滅する事になりました。」

「それに翻つて、現状は同盟側の位置も兵数も敵に知られており、敵の位置はフェザーンからの情報で推測した位置です。」

「クロー副司令長官が此方に視線を向ける。」

「参謀長は2人の考えをどう思う?」

「はっ、2人の考察は見事です。ここから考えるに敵は急進からの各個撃破に移る可能性が多分にあります。」

「2人も領いている。」

「ではその場合の攻撃順はどうする? ワイドボーン大佐。」

「少官なら中央に位置する最も規模が小さいパストーレ中将率いる第4艦隊を撃滅し、時計回りに迂回してムーア中将の第6艦隊の側背から強襲します。この2個艦隊を潰せれば残りは今回の戦いのために補充され、数が最も多いですが新兵も多いパエッタ中将の第2艦隊が相手です。十分に有利に闘えるものと思います。」

「我々はどう動くのがいい?」

「このまま進軍すれば中央で救援、合流を目指した第2艦隊と敵が交戦している場に着くと思われます。」

「なるほど、敵が常道の手段で勝とうとするならそれが一番だろうな。」

変な言葉だ。何か懸念があるのだろうか？聞こうとしたら先に話された。

「敵が中央のパストレーレを撃って、そのまま真っ直ぐに進軍。救援しか頭に無い我々を正面から強襲の可能性は考えないのか？味方は前進しているから救援ないし、来援要請も時間がかかるだろう。何より通信妨害で此方からは連絡は取れない可能性もあるだろうしな。」

まさかの予想に唾を飲み込んだ。閣下を討つという1点に於いては時間を十分に取ることが出来、兵数も5000隻は多い状況で戦闘に入れる利点がある。可能性として十二分に考慮に入れないと致命的な怪我をする恐れがある。場合によっては戦死する事も…

「1日は戦闘になる可能性は低いだろう。半日は半舷休息にする。6時間交代で休ませろ、飲酒もグラス一杯なら許可する。」

「はっ、閣下は如何なさいますか？」

「先に休ませてもらう。それから席を外すのも憚れるからな。敵がローエングラム伯爵なら尚更だ。」

「承知しました。ではその間は私が指揮を与らせていただきます。」
「頼む。」

そうやって閣下は艦橋を出られた。閣下の危惧を重く受け止めたのだろうか、空気が重い。

「閣下は最善を尽くし、最悪を回避される方である。君達は己が職務に邁進し、最善を尽くせばよい。後の事は閣下が何とかしてくれるはずだ。」

私の言葉に納得したのか何人かは頷いてから仕事に戻った。嫌な空気は少しは払拭できたと思いたいのだが。

休息を開始してから1日が経った。閣下が臨戦態勢に入ったのが分かっているのだろう。艦橋はピリ付いている。いい緊張感をもつ

て職務に当たれている。

「閣下！通信を傍受しました！これは…第2艦隊旗艦。パトロクロスです！」

オペレーターの報告を聞き、閣下に顔を向けると険しい顔をしていた。

「通信を聞く。流してくれ。」

オペレーターが返事をして準備にかかった。

『私はパエツタ総司令官の次席幕僚ヤン・ウエンリー准将だ。旗艦。パトロクロスが被弾し、パエツタ総司令官は重傷を負われた。総司令官の命令により私が艦隊の指揮を引き継ぐ。』

これは…最悪の状況のようだ。

『心配するな。私の命令に従えば助かる。生還したいものは落ち着いて私の指示に従ってほしい。我が部隊は現在のところ負けているが、要は最後の瞬間に勝っていればいいのだ。負けはしない。教官…いや副司令長官もそう遠くなく此方に駆け付ける。其の時こそ反撃の時だ。』

これは…まあ、何と言うか大言壮語を…

閣下に目をやると頬杖を付いて笑っておられる。

『新たな指示を伝えるまで各艦は各個撃破に専念せよ。』

「通信の発信場所の特定は出来たな。時間的距離はどのくらいだ？」

「はっ、2時間以内に着きます。」

「そうか。では2時間後には戦闘になるトイレや覚悟を定めておけ。今回の敵は中々にやる男だからな。」

憂鬱そうな顔で溜め息を吐かれながら命令を出された。

アスターテ会戦

Yan side

宇宙暦796年

アスターテ宙域

旗艦パトロクロス

部屋で休んでいると通信が入った。通信元は艦橋のようだ。提督が呼んでいるらしい。

艦橋に入るとパエツタ総司令官が座りながら端末を視ている。敬礼をしながら挨拶をする。

「ヤン・ウエンリー、命令により参りました。」

「君の提出した作戦案を見た。中々興味深い案だった。しかし慎重に過ぎて、些か消極的ではないかな?」

「そうでしょうか?」

「確かに負けがたい作戦案ではある。しかし負けただけでは意味がない。勝たなくてはな。」

「我が軍は敵を三方から包囲している。しかも敵の2倍の兵力でだ。更に後方には副司令長官の艦隊が後詰めとして控えている。これだけの要件を備えて、何故今更負けられない算段をせねばならんのだ?」

「ですが、まだ包囲網が完成したわけではないです。」

「兎に角、この作戦案を却下する。言っておくが君や副司令長官に含むところがあるわけではないぞ。」

そう言いながら私が提出した作戦案が入った端末を返してきた。これ以上はこの場で言っても仕方ないだろう。

「承知しました。」

提督の御前から下がり、自室に戻ろう。エレベーターのボタンを押すと後ろから声が掛かった。

「准将閣下。」

後ろを振り向くと1人の男が階段を降りて来ている。

「えくつと…きみは?」

「幕僚のラオです。エル・ファシルの英雄と同じチームになれて光栄です。」

恐らく変な顔をしているだろう。未だに英雄扱いに慣れずにいる。

「止めてくれ、英雄なんて。ところで私に何か？」

「こういう時は話を進めるに限る。」

「そのお顔から推察するにパエツタ中将はヤン准将の策を受け入れなかったようですが。」

「当たり前だ。私はそんなに不景気な顔をしていたかね。」

私の質問にラオ少佐は肩を竦めた。

エレベーターが丁度来たので共に乗ることにした。

「閣下は今の状況をどうお考えなのかお聞かせ願えませんか？」

壁にもたれ掛かりながらラオ少佐の質問を聞いている。

「我々は如何にも有利だが。私が敵ならこの機を必ずしも危機とは見ない。」

着いたので下りたら後ろからラオ少佐が声を掛けてきた。まだ話すことがあるらしい。

「准将。」

「ん？」

振り向きながら返事をする少し嬉しそうにしている。

「私は悪運が強いんです。艦隊が全滅しながら生還した3人の1人だったこともあります。」

あまりの悪運に肩を竦めてしまった。

「そいつはあやかりたいものだな。」

「そんな私からすると、今回の任務も楽観してるんです。どうかお気を落とさずに。」

「あ、ああ。」

敬礼をしながら言われた内容考えた。

全滅しながら生還した3人って、それ私は戦死してるんじゃないのか？

『哨戒艇371より旗艦。パトクロロスへ。帝国軍艦艇想定宙域に発見出来ず。繰り返す…』

旗艦。パトクロロスに想定宙域へ派遣した哨戒艇から通信が入った。やっぱりか。これは不味いかもしれない。

「帝国軍艦艇、想定宙域に発見出来ず。」

「何だと！そんな非常識な。有り得んことだ。第4艦隊の指揮官に緊急通信！」

「応答なし。電波干渉、敵通信妨害の模様。」

前方でパエツタ中將が慌てている。

隣のラオ少佐がその様子を見ながら話しかけてきた。

「仰る通りになりましたね。」

「嬉しくはないがね。」

生きるために最善を尽くすとしよう。

此方の包囲網が完成されていない以上、各個撃破は極めて妥当な戦法だ。ダゴン殲滅戦の轍は踏まないと謂うことか。とりあえず想定し、考えておいた戦術プランを登録し終わった。一先ずは生きていれば命綱になる可能性になる。

「ヤン准将。」

「はい。」

さつき迄、慌てていたパエツタ中將が私を呼んだ。今更何の用だろう？

「貴官はこの事態をどう見る？意見を言ってみたまえ。」

意見と言われても先に伝えた通りなのだが。左手で頭の上に乗せた帽子を取り、右手で頭を搔いた。

「敵が各個撃破に出てきたというでしょう。先ず、最も少数の第4艦隊を標的にするのは当然の策です。彼らは分散した同盟軍の中から当面の敵を選択する権利を行使したわけです。」

「第4艦隊は持ちこたえることが出来るだろうか？」

「数に於いて相手を上回り、しかも機先を制した側が有利になります。」

「兎に角戦場に急行し、第4艦隊を救援せねばならん。上手く行けば帝国軍の側背を突くことも可能だろう。そうすれば一挙に戦局は有利になる。」

希望的観測があまりに過ぎる。

「恐らく無理でしょう。」

「どういう意味だ。」

私の言葉が気に触ったのだろう。険しい顔をしている。

「我々が到着した時、戦闘は既に終わっています。敵は戦場を離脱し、第2、第6の両艦隊、どちらかの側背をに回って攻撃をかけてくるでしょう。我々は先手とられ、しかも現在のところ取られっぱなしです。これ以上敵の思惑に乗る必要はないと考えますが。」

「ではどうしろと言うのだ。」

モニターを操作しながら説明する事にしよう。その方が分かりやすい。

「手順を変えるのです。第4艦隊の救援に向かうのではなく、後方から向かっておられる教官、いえ副司令長官に合流し、第1、第2、第6の3個艦隊で正面から押すのです。此れが最も安全な手段です。または一刻も早く第6艦隊と合流し、その宙域に新しい戦場を設定します。両艦隊を合すれば2万8千隻になり、それ以後は五分以上の勝負が挑むことが出来るでしょう。」

「すると君は第4艦隊を見殺しにしろと言うのか?」

「今から行ってもどうせ間に合いません。」

「そうとは限らん!第4艦隊とてむぎむぎ破れはすまい。彼らが持ちこたえていれば。」

「無理だと先刻も申し上げましたが。」

どうやら私の案は不同意らしい。

「ヤン准将。現実には貴官の言うような計算だけでは成立せんのだ。今回の遠征軍を率いているのはローエングラム伯だ。若く、経験も少ない。」

「司令官閣下、経験が少ないと仰いますが彼の戦略構想は…」

「もういい、准将!パストーレ中将は百戦錬磨だ。むぎむぎやられはせん。」

そう言い捨てて指揮官席に戻っていかれた。

計算だけでは成立せんが希望だけで成立するわけではなかりょうに溜め息が出た。

私に通信が入ったとラオ少佐が教えてくれた。

「ラップ。通信封鎖命令が出ているのによく分かったな。」

『副司令長官の艦隊は全速力で後を追っている。いざという時は場所を報せろよ。』

ラオ少佐が知り合いの第6艦隊の参謀に連絡を取っているが先刻、通信妨害で切られた。これは…本格的に不味い状況だ。

「閣下、状況はお分かりのはずです。敵の次の目標は間違いなく我々第2艦隊です。」

「ヤン准将、消極的ではない提言はないのかね。」

「私は常に積極的な事しか言っていないつもりです。」

「電波妨害の模様。索敵システムに一部障害。」

「光学探知。接近する艦影有り。画像解析、敵艦の可能性大！」

「全艦に第一種戦闘配備命令。急げっ！」

思ったより早いな。間に合うか。

戦闘が始まってすぐに敵の一撃が艦橋に当たった。吹き飛ばされた影響で少し意識が飛んでいたようだ。

「うっ、うう…」

パエツタ司令官が側で倒れている。腹に血がある。負傷されたようだ。とりあえず軍医を呼ばなければ。

「パエツタ司令官が負傷された。至急医療室の準備を。誰か！士官で無事なもの！」

周りを見回しながら声を発した。

「私は大丈夫です。」

「ラオ少佐。」

「言っただけでしょう。私は悪運が強いって。」

爆発で出た煙を吸ったのか噎せているが元気そうだ。確かに悪運が強いな。

「ヤン准将。君が艦隊の指揮を執れ。」

「私ですか？」

「健在な士官の中でどうやら君が最高位だ。用兵家としての君の手腕を…」

そう告げられてから意識を失われた。一時だけ意識を取り戻され

たのだろう。

「内心、高く評価してたんですね。」

「そうかな。」

とりあえずこの苦境を脱しなければ。

『私はパエツタ総司令官の次席幕僚ヤン・ウエンリー准将だ。旗艦パトロクロスが被弾し、パエツタ総司令官は重傷を負われた。総司令官の命令により私が艦隊の指揮を引き継ぐ。』

『心配するな。私の命令に従えば助かる。生還したいものは落ち着いて私の指示に従ってほしい。我が部隊は現在のところ負けているが、要は最後の瞬間に勝っていればいいのだ。負けはしない。教官…いや副司令長官もそう遠くなく此方に駆け付ける。其の時こそ反撃の時だ。』

本当はどれくらいで来てくれるのか分からないが少しは希望を持っている内容も入れないと。

『新たな指示を伝えるまで各艦は各個撃破に専念せよ。』

敵が中央に集まっている。紡錘陣形での中央突破を図るようだ。先の通信で味方を鼓舞しつつ敵への挑発を入れた甲斐があった。出来る男と教官が評した男だからな。しつかり勝ちたいならそうすると思った。

「敵は紡錘陣形に艦隊を再編しています。」

「中央突破を図る気なのだろうな。」

「どう対処なさるのですか？」

「対策は考えてある。」

「しかしどうやって命令を出さんです。敵電子攻撃で此方の通信網は混乱。データリンクも回復してません。一体どうやって?」

「心配ない。全周波帯に圧縮データ通信。各艦の戦術情報システムC o d e C - 4 を開くように伝えてくれ。それだけなら例え通信を傍受したところで敵には判断出来ないだろう?」

私が何時その戦術を送ったか気付いたようだ。中々聡いな。

「無用になってくれれば良かったのだがね。」

各艦が後退しながら陣形を整え始めた。よし第一段階クリアのようだ。

「先ず上手くいきました。後は味方が思うように動いてくれるかどうかですね。」

「ああ、一歩誤れば收拾がつかなくなる。」

「その時はどうなさるお積もりですか？」

「頭を搔いて誤魔化すさ。」

そう言つて笑いながら頭を搔いた。

どうやら上手くいったようだ。わざと敵に中央突破をさせて此方は敵の後方から噛みつく。消耗戦になるが仕方ないだろう。負けるよりは良い。輪のような戦況になっている。互いに敵の尻に噛みつきつこうとしている。

「こんな陣形、初めて見ます。」

「そうだろうね。私もさ。」

いや、これは初めてじゃない。有志以来どこかの戦場で幾度となく繰り返されてきたことだ。

「もうすぐ敵は引き始めるだろう。教官が来るからな。そのタイミングで引くはずだ。」

「では追撃するのですか？」

「止めとこう。敵の呼吸に合わせて此方も引くんだ。この状況ではここまでが精一杯だよ。」

「レーダーに反応！これは…第1艦隊です！副司令長官が来ました。助かった！」

艦橋に喜びの声が上がった。

「よし。タイミングを合わせて離脱する。」

離脱し、第1艦隊の横に付けた。通信が入ったようだ。

『ヤン、助けに来てやったぞ。感謝しろよ。』

「感謝します、教官。」

『どうだ？敵の司令官は。』

笑いながら聞いてくる教官に思わず苦笑いが漏れた。

「2個艦隊は破れ、この艦隊も半数近くを失いました。今のところは完敗でしょう。」

『だろいな。ところでどうやら敵はもう一戦したいようだな。若いってのはいいな。ヤル気に満ち溢れている。』

「教官も年寄りと謂う程の年齢ではありませんよ。」

『そうか？中年と言っている年齢ではあると思うがな。敵から通信が入った。恐らく一戦になるだろう。準備を頼む。』

「ハッ。」

そう言って敬礼をしてから通信が切られた。

「一戦に及ぶと言っておられましたか？」

「教官の洞察は深い。恐らくそうなるだろう。そして私にそう言ってきたということは一働きしろということだ。」

まだ戦いは終わらないようだ。

アスターテ会戦

宇宙暦796年

アスターテ宙域

旗艦ブリュンヒルト

ラインハルト・フォン・ローエングラム

「敵旗艦、被弾確認。」

オペレーターから報告が入った。第2艦隊も終わりだろう。

「このまま殲滅出来れば良いのですが。」

キルヒアイスは少し心配性が過ぎる

「お前は本当に心配性だな。どうしても俺が信じられないか？」

「私は貴方を疑ったことはありません。ただ時折、怖くなる時があるのです。貴方がここにいるように敵にも秀でた誰かが居たらと。」

キルヒアイスの心配性に笑ってしまった。

「可笑しな事を考えるのだな、キルヒアイス。もし実際にそんな人物が現れたとしたら是非一戦交えてみたい。そして出来れば顔も合わせてみたいものだな。さぞや話も弾むことだろう。」

通信士が報告してきた。

「敵通信を解析。全艦隊へ向けられたものと推測。」

「流せ。」

命令を出すと直ぐに通信を流し始めた。

『私はパエツタ総司令官の次席幕僚ヤン・ウエンリー准将だ。旗艦パトロクロスが被弾し、パエツタ総司令官は重傷を負われた。総司令官の命令により私が艦隊の指揮を引き継ぐ。』

『心配するな。私の命令に従えば助かる。生還したいものは落ち着いて私の指示に従ってほしい。我が部隊は現在のところ負けているが、要は最後の瞬間に勝っていればいいのだ。負けはしない。教官：いや副司令長官もそう遠くなく此方に駆け付ける。其の時こそ反撃の時だ。』

『新たな指示を伝えるまで各艦は各個撃破に専念せよ。以上だ。』

この状況下でそんな通信をするとは。

「負けはしない。自分の命令に従えば助かるか。随分と大言壮語を吐

く奴が叛乱軍にもいるのだな。この期に及んでどう劣勢を挽回する
気にいるのかな。」

思わず笑い声が零れてしまった。

「まあいい。お手並み拝見といこうか、キルヒアイス。」

「はい。」

「戦列を組み直す。全艦隊紡錘陣形をとるように伝達してくれ。理由
は分かるな?」

キルヒアイスに訊ねると間髪入れずに答えが返ってきた。

「中央突破をなさるお積もりですね。」

「そうだ。流石だな。」

命令が徐々に形になっていく。ファーレンハイト少将を先鋒に敵
艦隊に侵食していく。敵が崩れるのももうすぐだろう。

「哨戒艦からのデータを合成中。リアルタイムです。」

「勝ったな。」

「……………いや、待て、これは…」

「いかがなさいました? ラインハルト様?」

「おかしい。なにかが変だ。我々は勝利しつつある。それは間違いな
い。だが……………」

モニターのデータを見ている。敵は此方の攻撃により左右に分断
されているのは分かる。なんだ…何が引つ掛かる?

ハッ、まさかこれは…

「しまった。」

「敵艦、左右に分かれ我が軍の両側を高速で逆進していきます。」

オペレーターの報告に臍を嚙んだ。

「してやられた。敵は左右に分断されたとみせて、両手に分かれ我が
軍の背後に廻る気だ。」

「中央突破戦法を逆手に取られてしまった。」

後方についた敵の一撃に最後尾が少なからず被害を受けた。

「どうなさいます? 反転迎撃なさいますか?」

キルヒアイス、冗談にしては笑えないな。

「冗談ではない。俺に低能になれと言うのか。敵の第4艦隊司令官以

上に。」

「では前進するしかありませんね。」

「その通りだ。全艦隊、全速前進。逆進する敵の背後に喰い付け！」

全艦が時計回りに全速前進し始めた。先頭のフアーレンハイト少将が敵の最後尾に喰い付いた。

「なんとたる無様な陣形だ。これでは消耗戦ではないか。」

眼前のモニターで無様な陣形が表示されている。

「キルヒアイス、どう思う？」

「そろそろ潮時ではないでしょうか？これ以上戦っても双方損害が増すばかりです。戦略的に何の意味もありません。悔しいとお思いですか？」

「そんな事もないがもう少し勝ちたかったな。画竜点睛を欠いてしまっているのが残念だ。」

「2倍の敵に三方から包囲されながら各個撃破戦法で2個艦隊を全滅させ、最後の敵には後背に回り込まれながら互角に戦ったのです。十分ではありませんか。これ以上をお望みになるのは些か欲が深いというものです。」

「分かっているよ。」

「それに先の通信が本当なら、敵のクローロ司令官が近くにいる可能性があります。この状態で戦闘に入るのはあまり面白くないかと。」

「そうだな。レーダーに反応があり次第、帝国側に離脱し艦隊を整えるように命令を出せ。」

「承知しました。」

10分程でレーダーに反応が出た。

そのまま流れるように両軍共に輪を解きそれぞれ帝国、叛乱軍側に移動し艦隊の陣形を整えた。そうしていると敵の艦隊が到着し、敵の残存艦隊の收容を行った。負傷艦を後方にやっている。合わせて2万隻には届かないが我が軍と変わらないくらいの規模になったようだ。

「いかがなさいますか？」

「敵の旗艦に通信を繋いでくれ。」

「通信をですか？」

「そうだ。両陣営で名将と讃えられる男と話してみたい。」

「分かりました。通信を繋いでくれ。」

数分で繋がった。正面のモニターに黒髪の男が頼杖を突きながら此方を見ている。若干億劫そうに敬礼をしてきた。

『自由惑星同盟軍宇宙艦隊副司令官ユーリ・クローロ大将だ。』

「私はラインハルト・フォン・ローエングラム上級大将だ。」

クローロ大将は一つ頷いた。

『ローエングラム伯爵家を継がれたそうで祝いの言葉を。そして今回の遠征の戦勝も、お祝い申し上げます。』

淡々としている中にも祝う気持ちがあるのが分かった。

「叛乱軍の名将に祝ってもらえるとは思わなかった。感謝する。」

『それでこの通信は何の用で？敵と通信するなど酔狂ですな。』

「これから一戦するのだ。死なれては通信も出来まい。死ぬ前に名将与詠われる男を見てみたかったのだ。」

『左様ですか。3個艦隊を破ったのです。もう十分かと思うのですが。』

戦いたくないのか退かせようとしているようだ。

「まだ卿がいる。無傷の1個艦隊がな。」

クローロ大将は溜め息をついている。

『戦いたいと仰られるなら仕方ありませんな。お相手いたしましたしやう。では。』

敵が敬礼をしてきたので此方も敬礼を返す。

「キルヒアイス、ファーレンハイト少将を中央の先陣に。メルカツツとエルラツハを右翼、シュターデン、フォーゲルは左翼だ。」

「承知しました。」

さて、クローロ大将のお手並み拝見といこうか。

宇宙暦796年

アスターテ宙域

旗艦アトラス

ユーリ・クローロ

「閣下、通信が切れました。」

チユン参謀長の言葉を聞きながら次の命令を出す準備をする。

「通信、データリンクを頼む。」

そう言うのと副司令官、分艦隊司令官、第2艦隊残存艦隊のヤンが映った。

「右翼クブルスリー、左翼は3人の分艦隊司令官に。ヤンは予備だ。」
「ハッ。陣形は如何なさいますか？このまま横陣で？」

「いや、折角のローエングラム伯との会話したのだ。もう少し彼の人となりを知るために工夫しよう。右翼を前に出す斜線陣にしてくれ。」

疑問があるだろうが先に命令の伝達をしてくれる参謀長に好感が持てた。やはりいい参謀長だな。

「敵も斜線陣に変更してきています。」

ふむ…もう少し弄ってみるか。

「そのまま左翼を前に出してくれ。鶴翼の陣にする中央は後退、左翼も後退だ。」

「承知しました。」

敵が紡錘陣形を取り始めた。鶴翼の中央を突破したいのか。えらく攻撃的だな。

「中央はそのまま紡錘陣形に再編してくれ。」

此方の紡錘陣形を見て、縦深陣に変更しているな。

「閣下、もう少し近付きませんかと砲が届きません。互いに射程外から陣形を変える等、演習ではないかと。」

参謀長が心配になったのだろう。声を掛けてきた。ここからでも大いに読み取れることがあるのに。

「これは遊びではないよ。敵が此方の意図にどう対処するか。此方が敵の意図にどう対処するかを互いに見合っているのだ。ボクシングで云うところのジャブ、柔道で云うところの胴着の取り合いといったところかな。」

「それは分かっておりますが砲火も交えずに分かるものなのですか？」

「色々とな。ではそろそろ始めようか。半月の陣を。」

左翼を伸ばして中央と左翼の繋ぎ目と中央が手薄にしてみたが動じないか。

「左翼を下げろ。陣形はいい。」

命令を伝達してから此方を心配そうに見ている。

「それでは陣形が崩れますが?」

「誘いの隙を作ってみたのだ。恐らく敵は手を噛まれる事を嫌って手を出してこない。鶴翼の陣を、右翼を伸ばせ。目一杯にな。」

「なっ!それでは両翼の陣形がめちゃくちゃになります!」

驚きの声と諫めの声がごちゃ混ぜになっている。

「構わない。やってくれ。」

何か言いたそうにしているが頭を振り、命令の伝達を指示した。右翼のクブルスリーが

艦隊を伸ばしている。左翼が後退を止め、体勢を整え始めた。ここでも来ないのか?私の見込み違いかな?と思い始めた瞬間に!

「閣下!敵の左翼が我が軍の右翼クブルスリー提督との繋ぎ目に向かって前進してきました。」

やはり来たか。さっきから逸っているのか陣形構築にラグがあったからな。気になっていた。

ローエングラム伯、今回の遠征は君の能力を視る為のもので部下の大半を連れてこられず、臨時編成とある情報筋から連絡があった。その隙を大いに突かせてもらおうよ。

「ヤ~~~~ン。」

『承知しました。正面に移動し、奇襲を掛けます。』

敵の左翼が前進するのをヤンの艦隊が待ち受け、右翼のクブルスリーが横から正面の我々が斜め左からの同時攻撃で損害を出している。大炎の花が咲いている。3000隻程は倒したかな。

「体勢を整えるように命令を出せ。」

さて数に差がついたがどうする?ローエングラム伯。

「閣下、敵が!」

引き際は弁えているようだ。此方もここまでだな。

「全軍に後退命令を出してくれ。」

「はっ。全軍に後退命令を。」

自席に深く座り直してからゆっくりしようとするワイドボーン、ラップの両名が傍に寄ってきた。

「閣下にお聞きしたいことがあります。」

「何故敵が突出してくると分かったのです?」

この2人にとっては大いに疑問なのだろう。

「最初に行った陣形の変更の応戦は確かに一発の砲火も放たなかった。が敵の陣形構築の時間や反応等、様々な情報が見ることが出来た。その中で敵の左翼が面白い動きをしていたので何度も動きの中からかってみたら突撃してきただけの話だ。恐らくは独断専行、命令無視の類いだな。」

これは：お前達が何処まで様々な情報を拾い集めるかも見ていたのだが：まあ、ここら辺は仕方ないか。

チユン参謀長が近寄ってきた。

「閣下、敵の総司令官から電文が入っています。」

「なんと送ってきた。」

「貴官の戦術に敬意を表する。再戦の時まで壮健なれ。銀河帝国上級大将ラインハルト・フォン・ローエングラムと。」

「此方も返信をしますか?」

あの生真面目な性格を少しからかってみるか。

「そうだな。返信してくれるか。俺の勝ちってな。」

言いながら笑ってしまった。さぞかし敵の旗艦は居心地が悪くなるだろうな。頭から湯気を出して怒るかもしれないな。

そんな私を見ながら3人は呆れていた。笑い終わってから命令を新たに出した。

「残存兵の收容、救助を急いでくれ。助けれる命は助けたい。」

「ハッ。」

3人が敬礼をして救助活動、救援活動の指揮を取り始めた。

どうやらこの会戦も終わったようだ。なんか疲れた。早く帰ってゆつくりしたいものだな。

アスターテ会戦 帝国 side

宇宙暦796年 アスターテ宙域 戦艦ブリュンヒルト

ラインハルト・フォン・ローエングラム

叛乱軍の名将と名高いユーリ・クローロとの通信が切れた。私の心を高揚させてくれる相手との対戦に胸が踊るといふものだ。艦隊が寄せ集めなのが不本意だが仕方ないことだ。

キルヒアイスが話しかけてきた。

「戦うことになりましたが如何なさいますか？ラインハルト様？敵の出方を見るか、此方から仕掛けるか？」

当然の事を聞いてきた。

「愚問だな、キルヒアイス。此方から仕掛ける。待ち受けるなど性に合わない。」

「左様ですね。では陣形は如何なさいますか？」

キルヒアイスの問いに答えようとしたらオペレーターが焦った声をあげた。

「敵が動き出しました！陣形を変えております！」

その声にモニターに映された敵の陣形を見る。敵の右翼を前に出した斜線陣を形成しようとしている。

「敵の方が先に動き出しました。如何なさいますか？ラインハルト様。」

キルヒアイスが微かに笑いながら問い掛けてきた。

「なら此方も合わせようか。右翼のメルカツツとエルラツハを前に出せ。斜線陣を形成せよ。」

「ハツ、右翼前の斜線陣を形成せよ。」

キルヒアイスが復唱し、オペレーターがそれを受けて各艦に命令を出し始めた。

それから幾度か陣形を射程外から変えながら互いに敵味方の艦隊運用を確認しながら牽制をする。

「このまま勝負なしに持ち込む気か？」

敵のヤル気が見えない動きに不審感が募る。それを感じたのだろ

う。キルヒアイスが自分の所感を話してきた。

「此方は3戦した後です。武器弾薬、燃料に不安があります。それを見越して時間稼ぎをしているのかもしれないと期待外れか。」

「あの男が私相手に時間稼ぎするしかないとは期待外れか。」

幾ばくかの落胆の思いを口にすると同時にオペレーターが緊張感を持ちながら報告してきた。

「敵左翼が艦列を崩しながら後退しております！大きな隙が！」

モニターにも左翼が艦列を大きく崩しながら後退している。

「ラインハルト様、敵の隙を突きますか？」

分かっていて聞く等、相変わらず人が悪い。

「誘いの隙だ。此方が痛い目を見ることになる。全艦に動くなど伝えろ。」

「承知しました。」

終局に向けて少しずつ時が進んでいる。

宇宙暦796年 アスターテ宙域 戦艦ミネルヴァ

ウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッツ

副官のシュナイダー大尉が声を掛けてきた。

「中々戦闘になりませんね。」

「ふむ。私はクロー口提督と幾度となく戦場で相對してきたが無駄なこととはしないタイプの男だと思っている。」

私の言葉に疑問を持ったのか聞いてきた。

「無駄なことはしないタイプですか？ではこの射程外からの陣形変更にも何らかの意図がある？」

「そうだろうな。それが何なのかは私には一切分からないが。」

「はあ。」

「しかし分かっていることもある。奴は危険すぎる程に危険な男だと云うことだ。」

そんな話をしているとエルラツハ少将から通信が入ったとオペレーターが報告してきた。

繋ぐように命じるとモニターに険しい顔をした男が映る。

「メルカッツ提督、どうなっているのだ。全く戦闘にならないではないか！」

「互いに牽制しているのです。達人同士の闘いが一瞬で決まるように見えない攻撃が飛び交っているのです。」

私がエルラツハ少将を宥めているとオペレーターが緊急に報告してきた。

「敵左翼が艦列を崩しながら後退しております！」

その声を聞いたのか意気揚々と前進し攻撃をしようとエルラツハ少将が言ってきた。

「メルカッツ提督敵が陣形を崩している！攻撃する好機だ！」

「誘いの隙だ。敵左翼の艦首を確認すれば分かります。全てがある一点に向けられている。私達が攻撃をしようとしたら敵の罠に飛び込むことになる。」

「ぐっ、なら攻撃は自重することにしよう。」

此方は問題ないようだ。敵の誘いは巧妙かつ緻密の極みだ。ローエングラム伯爵は分かっているだろうが、此方の左翼はどうだろうか？ シュターデンにフォーゲルとローエングラム伯に反発している。乗らずにいられるだろうか。

宇宙暦796年 アスターテ宙域 戦艦ブリュンヒルト

ラインハルト・フォン・ローエングラム

「敵の誘いに右翼のメルカッツ大将、エルラツハ少将は乗らなかったようです。」

キルヒアイスの報告に一つ頷いた。

「メルカッツ程の歴戦の雄なら敵の狙いは分かるだろう。問題は左翼の2人がどうなるのか。」

私の心配もよそに敵のクロー提督は手を打ってくる。

「敵の右翼が艦列の外に伸ばしつつあります！此方の左翼を半包围しつつあり。」

敵の中央と右翼の繋ぎ目が切れそうになっている。隙だがあからさま過ぎる。罠だろうか。

「左翼に後退の命令を出せ。」

敵の半包囲に後退して躲そうと命令を出した。

「左翼が突撃しています！」

オペレーターの報告に立ち上がりながら声を荒げてしまった。

「馬鹿な！誘いの隙が分からないのか！後退の命令も出した筈だ。」

「ラインハルト様！改めて後退の命令を出してよろしいでしょうか！？」

大きく息を吐いた。

「もう間に合わない。敵の中央、右翼から左右。第2艦隊の生き残りが正面からの3方向から袋叩きだろう。」

私への反発心から命令無視する可能性を考慮に入れていたが敵が作った隙に乗るとは。愚かに過ぎる。

フォーゲルが突撃し、シユターデンも引き摺られて突撃している。

フォーゲルが攻撃する瞬間に3方から攻撃を受けて大炎の花を咲かしている。引き摺られて前に出たシユターデンも前衛が攻撃を受けている。下がろうとしているからそこまで被害は受けていない。

敵は追撃をしないようだ。敵の狙いは最初から定まっていたようだな。

「戦艦フオファナ、撃沈！フォーゲル中将戦死！」

オペレーターが焦った様に報告してきた。それを見てキルヒアイスは訊ねてきた。

「如何なさいますか？概算で左翼が4000程の被害を受けました。フォーゲル中将戦死との事です。」

「ここまで戦力差が開いた以上、無理は出来ない。全軍に後退命令を出してくれ。」

「かしこまりました。」

キルヒアイスが命令を出している。

「負けたな。敵の狙いは寄せ集めの我々を挑発し、隙を作り、血気に逸った処を的確に撃つことだったようだ。見事にしてやられたな。」

「3個艦隊を壊滅させたのです。敵もその様に思っておりますよ。」

「そうだ、キルヒアイス。敵のヤン・ウエンリー、ユーリ・クークに奮

戦を賞する電文を送ってくれ。再戦を心待ちにしていると。」
「承知しました。」

電文を送って直ぐにクロー口提督から返信が来た。俺の勝ちと勝ちを誇られた。

「俺の勝ちか……残念だがその通りだな。次は私が勝利の凱歌を奏でたいものだ。」

「ラインハルト様なら可能です。」

「俺達ならだ、キルヒアイス。」

キルヒアイスが嬉しそうに笑顔を浮かべている。

「はい、ラインハルト様。」

「帰ろう、キルヒアイス。俺達の帰りを姉上が待っている。」

この戦いで同盟軍は3万隻を越える被害を受けたのに対し、帝国軍は3千隻を越える被害であった。勝敗は誰の目から見ても帝国軍の勝利に終わったもののラインハルトの心の内に引掛かるものが出ていたのは確かであった。

宇宙暦796年 オーデイン 黒真珠の間

「アスターテ星域における叛乱軍討伐の功績により汝、ローエングラム伯ラインハルトを帝国元帥に任ずる。また帝国宇宙艦隊副司令官に任じ、宇宙艦隊の半数を汝の指揮下に置くものとする。帝国歴487年銀河帝国皇帝フリードリヒ4世。」

辞令書が読み上げられ、式部官の台に辞令書を置き、代わりに元帥杖を手に取り、前に差し出された。それをローエングラム伯爵が恭しく受け取る。

「ふん、二十歳の元帥か。光輝ある帝国宇宙艦隊は何時から幼児の玩具に成り下がったのです、閣下?」

装甲擲弾兵総監オフレッツサー上級大将が不満げに宇宙艦隊司令官ミュッケンベルガー元帥に噛みついた。

「あの金髪の小僧に用兵の才能が有ることは否定できぬ。現に叛乱軍を撃破しておる。その手腕には百戦錬磨のメルカツでさえ舌を巻いておるのだ。」

事実を伝えたがオフレッツサーにとってはそれも不満のようだ。

「牙を抜かれたと見えますな。勝ったとは云え一度だけでは偶然という事もありましょう。小官に言わせれば敵が無能すぎたと思えません。」

事実を事実と受け取れないとは余程嫌悪が過ぎるのだろう。

「それに叛乱軍のクロー口提督との戦いでは負けたというではないですか。」

「その前に3万隻を越え、4万隻に近い数の叛乱軍を撃破しておる。これでも昇進に値しないと云うのかね？装甲擲弾兵総監オフレッツサー上級大将？」

「それは……」

「認めなければならぬ。結果は結果だ。」

その後は恙無く式が終わった。

歴史に燦々と名を残すことになる1人の元帥が帝国に誕生した。

次のステップ

宇宙暦796年 首都星ハイネセン 宇宙港

アスターテで負傷兵の救助、損傷艦の修理等を済まし、残存部隊を纏め、ハイネセンに帰還の途についた。一月程掛けてハイネセンに到着した。

帝国軍は掃討戦を行わず、敵艦隊の撃破を優先した形であった為、4万隻の内3万隻近くが撃沈したが兵員の多くは助かった形となった。

第4艦隊、第6艦隊で合わせて2万隻を越える数の艦が第2艦隊が半数を失った。兵員にして150万人を越えて200万人近くの兵士を喪うことになった。

この敗戦を誤魔化す為に英雄を必要とした。敗軍の将はからヤン・ウエンリー。敵に一矢報いたユーリ・クー口の2人が対象になった。これは民衆の視線を大局から眼を反らすためであり、今回の大敗北を負けてはいないと虚飾するかの如くであった。その為に同盟軍最新鋭艦であるアトラスは宇宙港に着艦することに相成った。私の希望でコバルトブルーに塗装された艦が大気圏を抜け、着艦シークエンスに入った。

初めてアトラスが地上に降りる為、多くの見物人がいるようだ。最初に大気圏を航行出来ると聞いた時は1艦だけ出来てどうすると思っただがこういった使い方もあるのかと感心した。皮肉ではあるが。宇宙港の定められた地点に着陸すると参謀長のチュン少将が声を掛けてきた。

「閣下、着艦いたしました。参りましょう。」

「分かった。見世物になりに行くのでしょうか。」

小さく溜め息を吐くと後ろに居た副官のラップ中佐、作戦参謀ワイドボーン大佐が苦笑している。

タラップで地上に降りようとしたら大きな歓声が上がった。タラップの所に国防委員長がいた。

タラップを降りると気安く話しかけながら肩を叩こうとしたので

敬礼をしながら躲し、握手しようとして差し出された手に気付かない振りをして待たしている車に向かって歩き去った。

トリューニヒト派閥は壊滅的なダメージを受け、ロボスの進退も瀬戸際らしい。そして此方との関係改善、鞍替えを画策でもしているのだろう。相変わらず調子の良い男だ。

統合作戦本部に出頭すると直ぐに本部長の元へ案内された。そこにはシトレ本部長、ロボス司令長官がいた。

私の姿を確認すると前のソファアを手で指し示し座るように促してきた。

それを確認してから座ると前置き無用と話し出した。

「クーロ副司令長官、遠旅御苦労だったな。」

「いえ、今回の遠征は残念でした。勝つチャンスは大いにあつたものを…。」

ロボス司令長官は私達の会話を口惜しそうに聞いている。

「ロボス司令長官と今後の同盟軍の作戦行動について今回の戦いの反省を踏まえ話し合つたのだが、前線はクーロ副司令長官に任せようとなつた。ロボス司令長官は後方で総合的な戦略の選定、参加する艦隊や補給関連、編成に尽力される形となる。」

「それでは次からの会戦は毎回私が、私の艦隊が参加すると云う形になるのでしょうか？」

ロボス司令長官は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべている。察するに余りある顔だ。恐らく本部長が頭を押さえた形になつたのだろう。

「そういうことになる。艦隊自体の参加は必須ではなく君だけの参加でも良いが君の出兵は決定だ。ああ、それと君の艦隊の乗員は昇進だ。君も元帥になる。」

「私ですか？」

「そうだ。生者では最年少元帥になる。」

「はあ、微力を尽くします。」

伝えることが終わったのかロボス司令長官は足早に退室した。

「君も嫌われているな。」

シトレ本部長がからかい口調で言ってきたので真面目な口調で言い返してやった。

「閣下には負けますよ。」

2人で暫く顔を見合わせてから笑ってしまった。

「ローエングラム伯、君は危険だと言っていたがやつと宇宙艦隊司令部も認識したよ。遅きに失したと言いたそうだな。」

「はい。これ程の被害を我々は受け、敵は元帥に昇格しました。最前線に出てくる事はそうないでしょう。つまり彼を討つのはより困難になったと云うことです。」

「此れからどうなると君は考えている?」

「ローエングラム伯が遠征を指揮するでしょう。規模としては3個艦隊から5個艦隊位になると思いますがあしらいつつ国力増強、艦隊戦力の整備に勤しむべきかと。」

「ふむ、やはりそうなるか。分かった、参考にさせてもらう。今日の所は帰ってもらっていい。明日の9時に昇進となる。3日後に戦没者慰霊祭となっている。少しはゆっくり休んでくれ。」

「お気遣いありがとうございます。失礼致します。」

敬礼をし、外に出ると溜め息が出た。疲れた、早く帰ろう。

宇宙暦796年 ハイネセン シルバーブリッジ

ヤン・ウエンリー

「ヤン准将。ヤン准将! ヤン准将、遅れますよ!」

「ううん、何に遅れるんだ?」

寝惚け眼のまま傍に立つユリアンに問い掛けた。

「ヤン准将!!」

少し口調が強くなったな。とりあえず身体を起こすか…

「ふあゝあ。」

「朝食の準備も出来てますから早くリビングに来てくださいね。」

頭が覚醒しないまま、急かされたのでリビングにノソノソと移動する。

席に着くと朝食が用意されていた。

「朝からこんな調子で、他ならぬ貴方が慰霊祭に遅刻だなんて有り得ませんよ。」

「そうか…そうだな。」

キッチンにユリアンが自分の分を取りに行った時に小さく溜め息を吐いていた。相変わらず私は不甲斐ない保護者だな。

朝食も済み、軍服に着替えながらユリアンとの朝の会話をする。まあ、一種のコミュニケーションなのだろう。

「ユリアン。私の、ほら、荷解きしていなかった箱の本…」

「もうとつくに片付けました。」

「じゃあ、隣の箱の万暦赤絵は…」

「然るべき場所に飾っておきました。」

玄関に向かいながら会話しているとユリアンが見送りに来た。律儀なことだ。

「お気を付けて。」

「ああ、ユリアン。」

「はい？」

「何だか色々すまない。帰ってきたらもつと保護者らしくするよ。それじゃ。」

そう言っ外に出る。と同時に散水機の水が後頭部に直撃した。

「ああ、ヤン准将！」

最初から最後まで締まらない保護者だな、こりや。軍服がビショビショだ。

エレカに乗り、自由惑星同盟軍統合作戦本部に着いた。

正面玄関口に一際確りとした作りの特別製エレカが止まっていた。

「ラップ、ワイドボーン。」

エレカから元帥に昇進された教官が降りてこられた。

「教官！あ、いえ、クロー元帥閣下。」

傍により敬礼をした。

閣下は苦笑しながら答礼なされた。

「これはアスターテの英雄殿。」

「勘弁してくださいよ。私は敗軍の将です。」

「私は3個艦隊が敗れた後に行った英雄だ。先の3個艦隊の中にも英雄が必要なのだ。負けた事を覆う、偽る英雄がな。」

「それは理解していただけますが…」

「そんな事より何だ？お前のその格好は？服を着ながらシャワーでも浴びたのか？」

「あはは……」

教官は自室に向かうよう専用エレベーターに乗って向かわれた。

欠伸をしながら会場に向かっていると前方で統合作戦本部長次席副官を務めるキャゼル又少将が待っていた。

「フワア~~~~」

「まだ完全に目が覚めていないようだな。アスターテの英雄は。」

「誰が英雄です？」

「俺の前に立っている人物さ。ジャーナリズムはこぞってそう書き立っているぞ。」

「はあ、敗軍の将ですよ、私は。」

「そう、同盟軍は敗れた。よって英雄を是非とも必要とするんだ。大勝利なら敢えてそれを必要とせんがね。」

私の肩を抱きながら会場に向かって歩き出した。

「敗れた時は民衆の視線を大局から反らさなくてはいかんからな。エル・ファシルの時もそうだったろうが。」

少し進んでから私の肩に回した腕を放した。どうやらびしょ濡れの服が気になったようだ。

「ところでお前何でこんなに濡れてるんだ？」

「いや、まあ、あはは……今日2度目です。教官にも言われましたよ。」

ユーリ・クロー

「お集まりの市民諸君、兵士諸君。今日、我々がこの場に馳せ参じた目的は何か。アスターテ星域会戦に於いて散華した200万の英霊を慰める為である。」

身振り手振り。鬱陶しいことこの上ないな。

「彼らは尊い命を祖国の自由と平和を護らんが為に捧げたのだ。彼らが散華したのは個人の命より更に貴重なものが存在すると云うことを後に残された我々に教える為なのだ。」

「それは何か？すなわち、祖国と自由である。200万の将兵は何故死んだのか。」

トリューニヒトの演説も熱を帯びてきた。

「司令長官、軍司令部、艦隊司令官が馬鹿揃いだからだ。」

私の眩きにシトレ本部長、ロボス司令長官、グリーンヒル総参謀長、艦隊司令官、キャゼルヌ少将等多くの上層部が此方を様々な目で見ている。アレックス、笑いすぎだ。

ヤン・ウエンリー

「首脳部の作戦指揮が不味かったからさ。」

隣に座っている将官、佐官が非難の目で私を見てきた。

「彼らは自由と祖国を護るために命を擲ったのだ。」

どうやら私の周囲は主戦派が多いようだ。

「私は一段と声を大にして言いたい！祖国と自由こそ命を代償として護るに値するものだ。帝国との講和主張する一部の自称平和主義者達よ、迷妄から覚めよ！平和を口で唱える程優しいものはない。」

(いや、安全な場所に隠れて主戦論を唱えることも優しい。)

「銀河帝国の専制的全体主義を打倒すべきこの聖戦に反対するものは全て国を損なうものである。我々は歴史を知っている。この偉大な歴史を持つ我々の祖国、自由なる我が祖国、護るに値する唯一の物を護る為に我々は立って戦おうではないか。戦わん、いぎ、祖国のために！同盟万歳！共和国万歳！帝国を倒せ！」

「同盟万歳！共和国万歳！帝国を倒せ！」

仕込みか自発的かは知らないが何人かが立ち上がって声を上げた。周りの軍人は立って拍手をしている。まあ私はする必要もないか。いや、教官。壇上で鼻ほじってるし！鼻づまりの方が気になるのね。

「貴官、何故起立せぬ！」

警備担当者か何かが座っている私を咎めてきた。

「この国は自由の国です。起立したくない時に起立しなくてよい自由

がある筈だ。私はその自由を行使しているだけです。」

「では何故起立したくないのだ!」

「答えない自由を行使します。」

「貴官はどういうつもりで…!」

壇上から眼前で怒っている軍人を呼ぶ声がした。

「クリスチアン君。」

もうよいと云う意味か手を少し上げた。私を一睨みしてから元の場所に戻って行った。これで終いかな?

場も何処と無く白けた雰囲気になったのだろう。このまま慰霊祭も終わってくれないかな?

「諸君、我々の強大な武器は全国民の統一された意思である。自由の国であり、民主的共和政体である以上どれ程崇高な目的であっても強制する事は出来ない。」

まだ続くのか。教官が退席するようだ。まだ鼻を弄っておられる。何かあるのか?

教官を見ていたのに気付かれた。顎をクイツと上げられた。これは外に出ると云うことだろう。詰まらない慰霊祭に参加しなくていいのか。喜び勇んで外へ向かった。

宇宙暦796年 統合作戦本部 本部長室

深夜にシトレ本部長に呼び出しを受けた。何の用だ? わざわざこんな深夜にとは。

命令で呼び出すとは、嫌な予感しかしないな。

「ヤン・ウエンリー、入ります。」

「ヤン准将、そこに座りたまえ。」

「はあ、失礼します。」

「1局付き合いたまえ。」

三次元チェスを始めた。

「相変わらずチェスの腕は上がらんな。」

「で、こんな時間に私を呼び出したのはチェスの相手をさせるためですか? それなら教官でも呼べばよかつたのに。ハイネセン一の腕前

ですよ。」

「ふふ、負け戦をわざわざせんき。君に知らせておくことがあって来てもらった。正式な辞令交付は明日の事になるが君は今度少将に昇進することになった。内定ではなく決定だ。昇進の理由は分かるかね。」

「負けたからでしょう?」

「君は昔と少しも変わらん。穏和な表情で辛辣な台詞を吐く。士官学校時代からそうだった。」

「ですがそれが事実なのではありませんか、校長? いえ、本部長閣下。」

「何故そう思うのかね?」

「やたらと恩賞を出すのは急迫している証拠だと古代の兵書にありません。敗北から眼を反らせる必要があるからだそうです。」

「ある意味では君の言う通りだ。近来ない大敗北を被って、軍隊も民間人も動揺している。此れを鎮めるには英雄の存在が必要なのだ。」

「教官ではダメなのですか? 帝国にも同盟にも名の知られた彼なら。」

「無論彼も必要だ。しかし彼も何時までも現場に立つわけではないかな。次の備えが必要なのさ。それがつまりは君だ、ヤン少将。」

「ふうん。」

溜め息しか出てこない。

「君にとつては不本意だろうな。創られた英雄となるのは。」

シトレ本部長が前に乗り出してきた。

「話は変わるが君が戦闘開始前にパエツタ中将に提出した作戦計画。あれが実行されていたら我が軍は勝てたと思うかね?」

一体、何の話しだ? 嫌な予感しかしない。

「ええ、多分。」

「だが別の機会にあの作戦案を活かすことは可能ではないかね? その時にはローエングラム伯に復讐する事が出来るだろう。」

手元の三次元チェスに盤面を弄りながら説明して差し上げよう。

「彼が今回の成功に驕り、再び少数の兵で大軍を破ろうとの誘惑に抗し得なかった時には、あの作戦案が生き返ることはあるでしょう。しかし………」

「しかし……」

「しかし多分そんな事にはならないと思います。少数を以って多数を破るのは一見華麗ではありますが用兵の常道から外れており、戦術ではなく奇術の範疇に属するものです。それと知らないローエングラム伯とも思えません。次は圧倒的な大軍を率いて攻めてくるでしょう。」

「なるほど、そうだろうか。所でもう一つ。これは決定ではなく内定だが軍の編成に一部変更が加えられる。第4、第6両艦隊の残存部隊に新規の兵力を加えて、第十三艦隊が創設されるのだ。で、君がその初代司令官に任命される筈だ。」

「艦隊司令官は中将を以て、その任に充てるではありませんか？」

「新艦隊の規模は通常のほぼ半分だ。そして第十三艦隊の最初の任務はイゼルローン要塞の攻略と云うことになる。」

「半個艦隊であるイゼルローンを攻略せよと仰るのですか？」

「そうだ。」

「今の私の話を聞いておられましたか？」

「無論だ。その上で話をしている。」

「可能だとお考えですか？」

「君に出来なければ他の誰にも不可能だろうと考えておるよ。自信がないかね？もし君が新艦隊が率いてイゼルローン要塞の攻略と云う偉業を成し遂げれば、君個人に対する向後の念はどうあれ、トリューニヒト国防委員長も君の才幹を認めざるを得んだろうな。」

「はあ、この件を知っておられるのは？」

「今の所、君と私の2人だ。そして物資関連の手配をするキャゼルヌには説明した。必要な物は全て可能な限り揃えてくれる。イゼルローン要塞攻略をすると云うことは拡がるだろうが作戦案の詳細は私とキャゼルヌ、君の司令部要員だけになる。司令部要員には君から話してくれ。勿論箝口令をしいてな。」

「教官はどうなのですか？」

「彼は何も知らない。もちろんロボス司令長官もだ。司令長官が知らないものを副司令長官が知っている等、後々の火種になるからな。」

「承知しました。微力を尽くします。」
とんでもない難題を押し付けられた気分だ。いや、実際難題を押し付けられたのか。

第十三艦隊

宇宙暦796年

ハイネセン

統合作戦本部

ヤン・ウエンリー

「帝国の巡洋艦と軍服40着?」

キャゼル又先輩が疑問の声をあげている。

「はい。帝国艦は以前鹵獲したものがあろうでしょうか?軍服は、何とかお願いします。」

私のお願いに真面目に答えてくれる。

「軽く言うな。機密漏洩を防ぐためとはいえ、作戦プランも教えずに必要な物だけを寄越せとは。」

「まあまあ、コニヤックを一杯奢りますから。」

「いや、駄目だ。三杯にしてみらおう。」

「ふふふ、了解しました。」

ラウンジに着いてコーヒーを注文し、コーヒーが届いてから話を再開した。

「そうそう。もう一つお願いがあるんです。」

「何だ?」

「留守中、ユリアンが心配なんです。MPの配備をお願い出来ませんか?」

「そのくらい御安い御用だが、何処か他の家に預ける訳にはいかないのか?」

「無論、そう考えましたんですが……」

回想

「お断りします!僕が居なくなったら庭は荒れ放題、家の中もホコリだらけでもうどうにもならなくなります。」

「ヤン少将のお留守の間は僕が留守司令官として責任をもって、この家を守ります!」

「と……云うわけでして……」

苦笑しながら伝える。キャゼル又先輩はに笑われた。

「そいつは頼もしい。了解した。直ぐに手配しよう。」
「助かります。」

「ああ。さて、ボチボチ本題に入ろう。」

「十三艦隊隊員編成書……」

小さな溜め息が漏れた。

宇宙暦796年 ハイネセン 統合作戦本部 十三艦
隊司令官室

程なくしてヤンとキャゼルヌに選り抜かれた幕僚達が第十三艦隊の旗印の下に集まった。

副司令官にはアスターテで善戦した老巧のフィッシャー准将を、主席幕僚には緻密で整理された頭脳を持つムライ准将、次席幕僚にはファイターと称されるパトリチエフ大佐をそれぞれ任命した。

「謹んで承ります。しかし何故私を？」
フィッシャー准将が問い掛けてきた。

「アスターテでは貴方の艦隊運用の手腕に助けられた。我が艦隊は第四、第六艦隊の敗残兵と新兵を集めて組まれた艦隊です。だからこそ確実に綿密な連携が不可欠になる。」

「なるほど。それは重責だ。」

疑念が氷解されたようで何よりだ。隣にいるパトリチエフ大佐に視線を向けると少し嬉しそうにしている。

「ご無沙汰だね。」

「お元気そうで何よりです。」

「相変わらずだよ。三次元チェスも上達してないしね。」

その隣で微動だにしていないう方に話しかける。

「エコニア以来ですね。」

「貴方が私を指名してくるとは意外でした。」

「何かあったら貴方を呼びたいと常々思っていたんです。」

立ち会ってくれているキャゼルヌ先輩が会話に入ってきた。

「エコニアの一件ですっかり貴方に惚れ込んでしまったらしい。」

「私が艦隊を率いるなら貴方のような人物が必要なんです。どうか力を貸してください。」

「喜んで。」

挨拶が終わり、今後のスケジュールについて話そうとした時、急にドアが開いた。ノックも無く、ブザーも無く入ってくるとは。

「よう、ヤン司令官殿。」

おぎなりの敬礼をしながら教官が入ってこられた。左脇に木箱を抱えておられる。教官の姿を確認したフィッシャー准将、パトリチーフ大佐、ムライ准将は慌てて敬礼をしている。それに歩きながらサツと答礼し、私の机に木箱を置かれた。

「司令官就任祝いだ。高いから心して飲めよ。帝国は皇帝フリードリヒ何世かが飲んでいるウイスキーだ。1本くれてやる。1人で飲むもよし、恋人と飲むもよし、司令部要員と飲むもよし、好きにしろ。」
好き勝手な行動、言動に笑ってしまう。

「教官。司令部要員がいる前で渡され、そんなことを言われたら皆で飲まないといけないじゃないですか。」

前に立っている3人も賛成だと云うように頷いている。

「そうか？それはすまなかった。明日の昼にはここを発つからな。挨拶に来たんだ。」

「そうですね。訓練の時にはお世話になると思いますのでよろしくお願ひします。」

ニヤリと笑って了承してくれた。

「そんなことより私の前の旗艦を使うんだって？物好きな奴だ。壊すなどは言わんが沈むような事がないようにな。まあ最悪沈んでも無事に帰ってきたら許してやる。」

あんまりな言い分だ。

「ユリアンがいるのでまだまだ死ねませんよ。」

「分かっているなら良いんだ。ではまたな。」

そう言って颯爽と帰っていった。急に来て急に帰られた。嵐のような状況だな。

「まあ、そんな事で良いものを頂いた。正式に司令部を発足したら飲

むことにしよう。それまで楽しみにしていてくれ。」
3人が大層嬉しそうに敬礼をした。仕方ないか…

3人が退室し、キャゼルヌ先輩と2人になると伝達事項を話し始めた。

「例の副官人事だがね。」

「誰か見つかりましたか?」

「ああ、794年度士官学校次席卒業。お前さんより余程優秀だ。現在統合作戦本部情報分析課勤務。尋常じゃない記憶力に定評がある。まだ取り込み中なんですね、後で挨拶に来させよう。」

そう言っただけで伝えることを全て伝えて帰られた。作戦案のブラッシュアップでもして時間を潰すか。

日が傾き、夕暮れになった。

作戦案にぶつくさ文句を垂れていると机の前に誰かが立っていた。

「ん…?」

女性が1人立っていた。

「フレデリカ・グリーンヒル中尉です。この度、ヤン少将の副官を拝命致しました。」

「あつ、ああ。」

困惑しながら答礼をした。

「キャゼルヌ少将から仰せつかりました。」

「いや、これは予想外だ。」

「えっ、予想外とは?」

「いや、何でもないんだ。グリーンヒルと言うとひよっとして…」

「はい、ドワイト・グリーンヒル大將は父です。」

「確かに私より余程優秀だ。」

「とんでもありません。経験の浅い若輩の身ですがご指導お願いいたします。」

「こちらこそよろしく頼むよ。私の作戦要旨は見たかな?率直な意見

をくれないか？」

「成功します。」

あまりに自信満々に言う彼女に驚きと疑問が湧いた。

「どうしてそう自信満々なんだ？」

「8年前、エル・ファシルの時も提督は成功なさいましたもの。」

古い話を持ち出してきた。

「それはまた。薄弱極まる根拠じゃないか。」

「でも、あの時提督は一人の女の子に絶対的な信頼を植え付けることに成功なさいました。私は母と一緒にエル・ファシルの空港に居たのです。」

「とつくに忘れておいででしょうね。私が差し出したコーヒーを飲んで命が助かった後で何と言ったのかを？」

全く覚えてない。何と言ったんだ？

「何と言った？」

「助かったよ。でもコーヒーは嫌いだから紅茶にしてくれた方が良かった。」

「そんな失礼な事を言ったかな？」

「ええ、仰いました。」

「そうか、謝る。しかし君の記憶力はもつと有益な方面に活かすべきだと思うな。」

「グツフフフ。はい、恐れ入ります。」

彼女との正式な出会いだった。

仕事を終えられたキャゼル又先輩が帰る前に話をと行ってこられたのでラウンジに向かうことになった。

テーブルで3人の将官が談笑をしていた。

「第四、第六艦隊の敗残兵に新兵とはな。」

「ヤン・ウエンリーはまだ二十代で経験も浅い。そんな人間にあのイゼルローンが落とせるものか。」

「本部長も何を考えておられるのか。」

「嘗ての勇将も戦場を離れて久しい。遂に耄碌されましたかな。」

「ハハハハハハハハッ」

「後日、恥じ入るような事がなければ良いがな。」

後方から声をかけられて振り替えると驚きの声をあげた。

「ああ、ビュコック提督！」

「お前さん達は大樹の苗木を見て、それが高くないと笑う愚を冒して
るのかもしれないぞ。」

第五艦隊ビュコック提督の注意に恐縮してしまったみたいだ。

「提督はお前の味方のようだ。」

「でも礼は言いませんよ。どうせ鼻で笑われます。」

横を通りすぎる時に軽く頭を下げて一礼した。

「だが心強くはある。」

テールについて直ぐに話し始めた。

「そうそう、やっと作戦要旨が届いたぞ。」

「それは何より。」

「しかし、無謀な作戦だ。呆れるしかない。」

事実だが、他の作戦は不確定要素や手が足りない。それでも酷い作
戦なのだろう。

「恐縮です。」

「でっ、肝心の実行部隊はどうする気だ？余程の命知らずじゃなきや、
務まらないだろう。」

「実は1人、心当たりがあるんですが。」

翌日の午後、実行部隊を率いる隊長に会いに行くことにした。

道中、午前中にしたグリーンヒル中尉との会話を思い出していた。

「薔薇の騎士、ローゼンリッター連隊。帝国からの亡命者で結成され
た陸戦部隊で作戦能力は同盟軍内でも屈指と評されています。その
ローゼンリッター第十三代連隊長がワルター・フォン・シェーンコッ
プ大佐です。」

「帝国公用語の問題はないな。」

紅茶を持ってきてくれるながら答えてくれる。確かに有能だな。私
より遙かに…

「はい。ですが良からぬ噂があります。」

「噂？」

「歴代の隊長で帝国に寝返ったのが過去に6名。彼が7人目になるのではないかと。」

「根拠は？」

「入れてもらった紅茶を一口ゆつくりと飲む。うん、旨い。練習してくれたのかな？」

「十三と云う数字が不吉だからだそうです。」

「では、根拠はないに等しいわけだな。」

彼女に視線を向けながら告げるとそうですと笑う。彼女も信じていないみたいだ。

「お会いになりますか？直ぐにアポイントを取りますが。」

「いや、此方から出向く事にしよう。大変なお願いをする訳だからね。」

ローゼンリッター連隊が本拠地とする官舎に着いた。広大な土地に演習場や訓練場、寝起きする宿舎迄揃っているらしい。

休憩室に向かうことにした。ローゼンリッターの隊員達が好奇の視線を向けてくる。我々は招からざる客のようだ。

「ふつ、場違いな人が来たようだぜ。」

そんな視線を気にせずグリーンヒル中尉は用件を伝える。

「第十三艦隊ヤン・ウェンリー提督とフレデリカ・グリーンヒル中尉です。シエーンコップ大佐に面会に参りました。」

「あんだ、グリーンヒル大将の娘さんだろ？噂には聞いていたが本当に美人だな。フッフッフ。」

「敬礼もなく無礼な人達ですね。」

「あー、実は私達は緊急の用件で来ているんだ。是非シエーンコップ大佐をご紹介頂きたいんだが。」

まだからかうのを止めないようだ。

「グリーンヒル中尉殿になら特別に大佐の居所を教えて差し上げますよ。」

「提督の前で礼を失するにも程があります。」

グリーンヒル中尉がそう呟き、後ろからかけられた手を振り返りながら掴み、軍隊格闘術を使って地面に投げ飛ばした。おいおい…そのまま手刀を入れようとしている。それはまずいっ…

タイミングで横から防ぐ手が出た。

「ここまでです、中尉。お前その芝居何時まで続ける気だ？」

そのまま中尉の手を引っ張り立たせた。助かった、私には防げそうになかったよ。

「全員、悪巫山戯が過ぎるぞ。ワルター・フォン・シェーンコップ大佐であります。久しぶりですな、ヤン提督。活躍は知っておりました。」
「ありがとうと言っていいのかな？」

シェーンコップ大佐が敬礼をすると皆がサツと敬礼をした。彼の威令は行き届いているようだ。

「貴方のような美しい人を見ると皆童心に戻っちゃうんですよ。私もそうだ。どうかお許しを。」

深く頭を下げられた。

「で、エル・ファシルの英雄がわざわざお越しになるとは一体どういうご用件でしょうか？」

「貴官に相談がある。」

「重要な事でしょうか？」

「多分ね。」

私の言葉に危険を感じ取ったのか戦士の眼をして私を見ている。察しのいい男だ。教官が出来る男と評する訳だ。

防諜、防音の効いた部屋を用意してもらった。2人で話すことになるとグリーンヒル中尉を残すことになるので信頼できる男と少人数で話したいと言うとカスパール・リンツ中佐、ライナー・ブルームハルト大尉の3人で聞くと言ってくれる。

作戦の概要を説明し終わると少しの沈黙が流れた。

「確かに他の方法はないでしょうな。堅牢な要塞に依る程、人は油断する。ただし、私が噂通り7人目の裏切り者になったら事は全て水泡

に帰しますが、そうなたらどうします?」

「困る。」

正直な気持ちを答えたら笑われた。いや困る以外に無いのだが…

「そりやお困りでしような。しかし、困ってばかりいるわけですか?何か対策を考えておいででしように。」

「いや、何も浮かばなかった。貴官が裏切ったらそこでお手上げ、どうしようもない。」

被った帽子を手に取り回しながら答える。

「すると私を全面的に信用なさる訳で?」

「実は余り自信がない。だが貴官を信用しない限り計画そのものが成立しない。だから信用する。こいつは大前提なんだ。」

「なるほど。」

「それに知り合いから貴官はとても有能で勇敢だと。そして卑怯、卑劣といった言葉とは無縁な男だと聞いています。」

苦笑している。予想外の高評価を告げられて照れているらしい。

「それは高く評されていますな。ありがたいことだ。それで今回の作戦に彼は何と?」

「教官には伝えていない。」

シエーンコップ大佐は驚きに眼を少し見開き、鋭い視線を向けてきた。

「本部長から司令長官に知らせてないものを副司令長官が知っているのは如何なものかと言われたのでね。確かにその通りだと。総司令部や総参謀長も知らない。知っているのは作戦に参加する私の幕僚、本部長、物資の手配をしてくれる本部長の次席副官を勤められるキャゼルヌ少将、そして君達だ。」

「それはそれは…一つ伺ってよろしいですか?」

「ああ。」

「今回、貴方に課せられた命令は土台無理なものだ。半個艦隊、それも烏合の衆に等しい弱兵を率いてイゼルローンを落とせと言うんですから。貴方が拒否なさっても責めるものはいない筈だ。それを承諾なさったのは元々この計画があたりだったからでしょう?」

「しかし、更にその底には何が有ったかを知りたいものです。名誉欲ですか？出世欲ですか？」

「出世欲じゃないと思うな。30歳前で閣下呼ばわりされればもう十分だ。第一、この作戦が終わって生きていたら、私は退役するつもりだから。」

「退役ですと？」

予想外の答えに頓狂な声で問われた。

「うん。まあ、年金も付くし、退職金も出るし。私ともう1人位慎ましく生活する分にはね。不自由ないはずだ。」

「この情勢下に退役すると仰る。」

苦笑いをした。皆それを言うな。

「それ。その情勢って云うやつさ。イゼルローンを我が軍が占領すれば帝国軍は侵攻の殆ど唯一のルートを断たれる。同盟の方から逆侵攻等と云うバカな真似をしない限り両軍は衝突したくとも出来なくなる。少なくとも大規模はね。」

「同盟政府の外交手腕次第だが、軍事的に有利な地を占めたところで帝国との間に何とか満足のいく和平条約を結べるかもしれない。そうなれば私としては安心して退役出来ると云うわけさ。」

「しかし、その平和が恒久的なものになり得ますかな？」

「恒久平和なんて人類の歴史上なかった。だから私はそんなもの望みはしない。だが何十年かの平和で豊かな時代は存在できた。我々が次の世代に何か遺産を託さなくてはならないとするなら、やはり平和が一番だ。」

「そして前の世代から手渡された平和を維持するのは次の世代の責任だ。それぞれの世代が後の世代への責任を忘れないでいれば結果として長期間の平和が保てるだろう。」

「要するに私の希望は高々この先何十年かの平和なんだ。だがそれでもその十分の一の期間の戦乱に優ること幾万倍。私の家に14歳の男の子がいるが、その子が戦場に引き出されるのを見たくない。そういうことだ。」

「失礼ながら提督、貴方は余程の正直者か、でなければルドルフ大帝以

来の詭弁家ですな。」

シエーンコップ大佐の了承を得られ、翌日の夜、司令部幕僚に召集をかけた。作戦案の詳細を開示し、皆の意見を聞くためだ。皆、何とも云えない顔をしている。

「博打のような作戦ですな。」

パトリチエフ大佐が正直な感想を漏らした。

「否定はしない。」

肩を竦めながら返す。

「言葉ありません。」

フィツシャー准将の答えも。

「かもしれんね。」

ムライ准将が懸念を訊ねる。

「もし、失敗したら？」

両手を広げ、肩を竦める。

「尻尾を巻いて逃げ出すさ。」

「しかしそれでは……」

「なーに心配ない。元々が無理難題なんだ。失敗して恥を搔くのはシトレ本部長と私だけさ。」

「昨日、提督とこの作戦について吟味しました。方法はこれしかないと考えます。」

後ろに控えたシエーンコップ大佐が結論を答えた。

それに対してキャゼル又少将が質問した。

「いいのかね？あんたが一番危険な役回りだが？」

「失敗して捕虜にでもなれば祖国に戻るだけの事ですからな。フハハハハハ。」

周りの気まずい空気に気付いたのか訂正した。

「失礼、冗談が過ぎましたな。」

「蛮勇に見えるかもしれないが私としては至って合理的に考えたつもりだ。信じてくれ等とは口が裂けても言わない。ただ考えてみてほしい。半個艦隊でイゼルローンを攻略する方法を。手順は幾つか考

えうるかもしれないが自ずと結論は同じとなるだろう。」

皆が顔を見合わせて一つ頷いた。ムライ准将が代表して答えてくれた。

「了解しました。直ちに作戦準備に取りかかります。」

「うん。」

この時、この瞬間、同盟の歴史が大きく動く作戦が開始された。

一夜の逢瀬

宇宙暦796年

エル・ファシル

補給基地

ジャン・ロベール・ラップ

アスターテ会戦より帰ってきて乗組員に休暇を交代で与えることにし、順々に休暇を取っている。

上官であるクーロ大將が元帥に昇進し、前線の一切を任されることになった為、組織の再編に取りかかっている。第一艦隊は基本的に變更無しだが私の立場が高級副官に昇進となった。下に下士官、従卒を置くことになったのだ。

確かに大佐が彼方此方に使いつぱしりしていたら他の者も困るだろう。そういうことらしい。ただ、いい人材を見繕っている途中なので暫くはこのまま頼むと云うことらしい。

仕事も終わろうかという時間帯に來客があつた。ブザーが鳴り、誰か確認するとクブルスリー副司令官だつた。閣下が入室を許可したのでロックを外し、中に入れた。

「クーロ元帥閣下、受付に來客があるそうです。」

閣下が不思議そうな顔をしている。スケジュールには無いから不審があつている。誰何すると綺麗な女性の方でミリアムと名乗られたと副司令官が答えた。

閣下が笑つて分かつたと答えられた。

「このまま退勤しますが緊急の書類はありますか？明日は昼過ぎに此方に來ますのでそれまでに判が必要ならクブルスリー副司令官の権限でお願いします。それ以外は私の机に置いておいてください。」

そう言つて荷物を片付け始めた。2、3分で終え、ではと言つて去つていった。

一連の流れをワイドボーンが見て一言。

「どうする？奥方に伝えるか？」

「……………いや、見なかつた事にしよう。君子危うきに近寄らずと謂うしな。」

「フツ、賢明だな。俺も見なかった事にする。」

互いに顔を見合つて一つ頷いた。

シレーツとクブルスリー副司令官は閣下と共に退室した。手際のいい人だ。

宇宙暦796年

エル・ファシル

月夜の白狼亭

ここはエル・ファシルで人気のレストランだ。エル・ファシル産の山菜や根菜をジビエと合わせて出してくれる。

注文を済ませ、対面にいる女性に目をやる。

「よく来てくれた。会いたかったよ。」

「あら、嬉しい事を言ってくれるのね。でも周りの人に気づかれていくけどいいの？元帥の醜聞は宜しくないのではなくて？」

直裁的な物言いに苦笑してしまった。

「仕事の話を持ってきたのだろうか？それで名分は立つさ。」

「そうね。とりあえずさっさと済ませましょうか。此方の書類を。」

そう言つてミリアムは封筒を渡してきた。

「順調に稼いでいるわ。それと平行して規模の拡大にも取り組んでいくわ。」

「そのようだな。数字からもそれが読み取れる。例の2人はどうなっている？」

「あの2人ならフェザーンで番頭をしてくれているわ。真面目に誠実に働いてくれて、その上頗る優秀だわ。いい人材を紹介してもらえた。」

「そうか…。あの人との約束だからな。」

「料理が来たわ。折角の料理が冷めるのはもったいないから後にしましょうか？」

一つ頷いて食事にした。

ホテルで熱を交わり合わせ、一時をすごす。ベッドで横になりながら頼んでいたローエングラム伯ラインハルト元帥が開いた元帥府を調べてもらっていたので、その報告を聞いている。

「ウォルフガング・ミッターマイヤー中将。清廉で公明正大な人物と評価されています。同僚からも部下からも絶大な支持を得ている。その公正さゆえに軍規に厳しく、特に軍隊による民間人への略奪や暴行には容赦ない処断を下すことで有名だそうです。」

「ほう。」

「彼の用兵は艦隊の機動力を十全に生かした高速移動を得意とし、用兵の速さから「疾風ウォルフ（ウォルフ・デア・シュトルム）」の異名をとるそうです。」

「機動力を用いた高速戦闘か。対処が難しいな。」

「彼の用兵を親友であるロイエンタール中将が合理的で迅速な戦術、戦略を神速で行い、それが理に適うと評したそうです。」

「それが事実なら名将だな。」

私の言葉に一つ頷き、次の将官の説明に入った。

「オスカー・フォン・ロイエンタール中将。帝国騎士の称号を持つ下級貴族。左右の瞳の色が違う金銀妖瞳（ヘテロクロミア）の特徴を持つ美男子ね。」

「なるほど美男子か。」

「漁色家として知られ、関係を持つては捨てる事を繰り返し、季節ごとに女を変えると言われているわね。」

今の自分の状況を考えると彼を悪くは言えないな。

「軍人としては白兵戦は達者、艦隊戦では戦術、戦略共に傑出しており、宇宙艦隊司令長官のミュツケンベルガー元帥も出来ると評価しているそうです。他にはミッターマイヤー中将とは親友らしいです。」

親友が名将同士か。面倒この上ないな。

「カール・グスタフ・ケンプ中将。豪放にして公明正大、統率力も勇気も非凡と評される提督です。元はワルキューレのエースパイロットであったのですが艦隊司令官に移動してからも変わらず頭角を現し、昇進したそうです。ただ、いささか柔軟性に欠けるそうです。」

「フリッツ・ヨーゼフ・ビツテンフェルト中将。黒色槍騎兵艦隊を率いる猛将で常識外れの猛々しさと破壊力を誇り、相手の狙い通りに動いたり、策に嵌つたりしたにもかかわらず、それをそのまま打ち破る能

力があるそうです。一方で守勢に回ると脆く、勝利した場合でも大きな損害を被っていることが多く評価が難しい将官です。」

「エルネスト・メックリンガー中将。軍人と同時に優れた詩人・画家・音楽家でもあり、文化人としても一流だそうです。軍人としては戦場全体を広い視野で見わたし、状況に応じて必要な兵力を配置・投入することで、着実な勝利をものにするという、戦略家タイプの提督です。」

「アウグスト・ザムエル・ワーレン中将。温和な紳士で剛毅で部下からの人望も厚い用兵家です。勇気と用兵術の均衡のとれた良将で総合的には堅実な用兵巧者で戦術的能力のある名将。」

「コルネリアス・ルッツ中将。非凡な作戦指揮能力を有す正統派の用兵家です。普段は温和な性格ですが、興奮すると瞳の色が藤色の彩りを帯びるそうです。射撃の腕が卓越しているようで士官学校の成績もずば抜けて良かったそうです。」

「ジークフリード・キルヒアイス少将。ローエングラム元帥の元帥府開設に伴い少将に任命されました。ローエングラム元帥の副官としてずっと仕えていたそうです。その献身ぶりを副官ではなく家臣と云う者も。人間性は温和で人当たりの良い性格で人間としても清廉で彼を悪く言う人はそうはいないそうです。」

「軍人としては射撃能力が卓越しており、幼年学校時代に大会で何度も金メダルを獲得する程の腕前です。白兵戦の技量も非常に高く、幼年学校では白兵戦も首席を取っています。」

「これがローエングラム元帥府の主要人物ね。書類の方に何人か此れはと云う人物も居ますので資料には載せてあります。シミユレーシヨンのデータも入れてあります。確認を。」

「ありがとう、助かるよ。やはりフェザーンの駐在弁務官や情報部だけでは限界があるからね。帝国にも商売で足を運ぶ商人に頼んで正解だ。」

ミリアムが身体を起こして、少し真剣な表情をした。

「少し気になることがあるの。良いかしら?」

そう言って椅子に向かって歩きだした。彼女の気になること。

フェザーンで本格的に商売をしている彼女に何が琴線に触れたのか興味がある。

「私は貴方から預かったお金で輸送会社を買収して輸送業に参入した。でもフェザーンでは新規で会社を立ち上げると自治領主府の任される仕事を基本的に受けないとダメなの。それが地球教の信者を地球に運ぶ仕事で燃料や食料品も自治領主府持ちなの。臭いと思わない？」

聞いていて話が進むごとに自分の感覚が鋭くなっているのを自覚した。

「自治領主府が直ぐに倒産しないように支えてると取ることも出来るが明らかに不自然な所が多々あるな。」

「ミリアムも厳しい目をしている。」

「どうする？調べる？」

「ああ。だが深いところはまだいい。地球教信者はフェザーンにも同盟にも帝国にもいる。つまり何処に信者と云う名のスパイ、工作員がいるか分からないからな。調べるのに慎重に慎重を期する必要がある。」

私の注意、警告にミリアムの顔が少し引き攣っている。自分の隣に危険人物がいるかもしれないのだ。そうなるだろう。

「じゃあ、どうするの？」

「先ずは地球教の地球巡礼を知りたい。同盟、帝国の信者がフェザーンを介して行っているのか、どれくらいの規模なのか。それと地球教信者の事についても知りたいな。それから信者のパーソナルデータも欲しいな。古来宗教と犯罪、麻薬は切っても切れない関係だ。テロリストや狂信者を作り出すのにうってつけの物だ。薬物中毒者がいないか調べてくれ。」

私の言葉に深く頷いている。険しい表情をしている事からも厄介な問題と認識したようだ。

「慎重かつ丁寧、そして内密に調べないと駄目な問題だ。すまないがよろしく頼む。」

「分かったわ。貴方の疑念、心配が事実なら面白くない、大変危険な問

題に発展する可能性がある。」

「頼む。」

「自治領主のアドリアン・ルビンスキーはいいの？」

「奴は有能だ。無理はしなくていい。誰と会ったかだけを確認してくれたらいい。それ以上は危険だ。闇夜に消される可能性がある。」

「了解。帰り次第取り組むわね。」

コクリと頷き、渡された資料を自分の鞆に入れた。後で確認しなければ。

「じゃあ、もう一度よろしくね。久し振りの逢瀬なのだから。」

そう言っつて私の手を掴みながらベッドへ誘う彼女に抵抗せず流された。

苦悩と葛藤

宇宙暦796年 エル・ファシル 補給基地 司令官室

マルコム・ワイドボーン

副司令長官であるクーロ提督が元帥になり、2ヶ月にもうすぐなる。職務内容は変わらないが前線の一切を任せられる事になったので部下が大幅に増えた。補給関連、特に食料、武器弾薬、エネルギー関連を管理する人間が増えた。

私も艦隊の次席参謀としてチュン参謀長を補佐する事になった。他に参謀が3人赴任し、5人体制になった。ラップも高級副官として部下を3人付けられた。

今日も午前中は補給関連、艦隊乗組員からの報告書の処理をする。そんな平穏な日常を壊す事態が起こった。

バンツと大きな音を起ててドアが開いた。

「閣下!!ヤンが!!ヤンがイゼルローン要塞を落とすと連絡が!!」

ラップが急いで部屋に入りながら報告してきた。

「なっ!!」

「まさか!?!本当か!?!」

チュン参謀長も事実かの確認をしている。

内容が内容だけに驚きのあまり椅子から立ち上がっていた。

「本当の事です!先程、連絡がありました。誤報でも冗談でもないみたいです。」

ラップが自信満々に報告してきた。どうやら事実のようだ。これからどうするか閣下の判断を聞こう。

「閣下っ……………」

閣下に声を掛けようとするも閣下が無表情で考え事をしていらっしやった。この時は全員が口を噤み、静寂の一時となる。閣下の思考の邪魔にならないように気を使っていると云えるが本音は口を挟むのが恐いのだ。

どのくらいの時間が経ったのか。5分か10分か？チラリと時計を見ると3分も経っていなかった。

閣下が深く溜め息を吐き、下を向いた。

首を横に幾度か振った後、参謀長に顔を向けられた。厳しい顔をなさつておられる。何かあるのだろうか？

「参謀長、明日の1000時に出征します。準備をしてください。」

「出征ですか？どちらに？」

チユン参謀長は戸惑いながら答えられた。

「イゼルローン要塞です。十三艦隊は半個艦隊、6000隻程です。帝国が奪還作戦を行う可能性は0に近いですが無いとは限りません。その場合、十三艦隊の兵力では一抹の不安があります。」

参謀長は困惑しておられる。

「奪還作戦ですか？こんな直ぐに行うのでしょうか？」

「十中八九ありません。しかしそれは無いとは違います。貴族が勝手に兵を出すと云うこともあるでしょう。」

「分かりました。万が一を警戒するのが閣下の信条です。私達もそれに備えるようにしましょう。」

チユン参謀長の言葉に苦笑を浮かべている。

「それにヤン提督はハイネセンに帰還命令が出る筈です。交代要員の意味合いもあります。」

「確かに難攻不落の要塞を落とした英雄には凱旋してもらわなければ。」

ラップが含み笑いを浮かべている。ヤンが嫌がるのを分かっているのに悪い奴だ。

「私の最後の仕事です。恙無く行いましょう。」

「……………えつ、今何と言われた？最後の仕事？どういうことだ？」

「今回の要塞攻略戦。私は一切関知していません。前線の一切を与る立場の人間として面目丸潰れですね。これ以上本部長と関り合いになりたくありません。だから辞めます。」

「そ、それは…………」

チユン参謀長も何も言えずに言葉を窮している。

「恐らく、司令長官も知らされていないでしょう。そして司令長官が知らされていないのに副司令長官が知っているのは後々のしこりになると判断したのでしよう。」

参謀長、ラップに顔を向けると一理あると頷いている。確かにそうだ。司令長官が知らず、副司令長官が知っているのはよくないだろう。

「防衛体制が、防衛方針が変わる事態が起こるのです。内密に話を通すこともしない、されない、信頼の無い副司令長官など無用の長物です。辞めさせてもらいます。」

部屋にいる皆が緊張している。顔が強張っている。副司令長官の苛立ちを感じたのだ。日頃見せない生の感情を露になされた。

「それにヤン提督のお陰で帝国への門戸が開きました。私の予測が当たれば早ければ今年、遅ければ来年に帝国領侵攻作戦が行われるでしょう。数個艦隊か大規模かは同盟市民と最高評議会、軍上層部の判断によるでしょうが。」

思わぬ内容に顔を見合わせた。帝国領侵攻作戦!? 本当か!?

閣下が頬杖を付き、人差し指でこめかみを叩きながら吐き捨てられた。

「そして市民は政治家は愚かな選択をするでしょう。帝国の圧政からの解放作戦と銘打って大規模侵攻作戦を行うでしょう。そうなれば辺境の開発に防衛をしなければならぬ。金が幾らあっても足りません。軍事的にも何時来るか規模も分からない敵から辺境星域を守ることにあります。」

今度は内容に顔を強張らせた。確かに各星系を守るのに1個艦隊を配備しないといけないう。だが前回の敗戦で3個艦隊が無いのだ。動員可能な艦隊は半分くらいになるだろう。敵の庭で戦うのに広範囲に配置しては各個撃破されるだろう。そうなれば少ない兵力が更に少なくなる。本末転倒になりかねない。

「地獄ですよ。イゼルローン要塞を落としたが為に大規模侵攻作戦を誘発し、同盟の軍事に深刻なダメージを負うでしょう。」

「し、しかし閣下が指揮を取られるのです。まだ負けると決まった訳

では……」

チユン参謀長の言葉に閣下は冷たい視線を向けている。段々尻すぼみになり、最後まで言葉を言えず口を閉じた。

「ふう、恐らく前線で指揮するのはローエンングラム伯ラインハルト元帥です。彼の戦略眼はどの程度か分かりませんが戦術眼は我々も知つての通りです。私達が勝つても無傷は有り得ません。半数以上は損害を受けると計算するのが妥当でしょう。」

大きな溜め息を吐きながら御自身の見解を述べられた。可笑しい所はない。私も妥当な線だと思う。

「そして次に門閥貴族かオーディンを守るミュッケンベルガー元帥が来る筈です。ローエンングラム伯を相手にした後には大軍を率いる敵の二連戦が待っています勝つても負けても地獄ですよ。」

皆が何も言えずに黙っている。

「とりあえず非常呼集を伝達してください。明日、イゼルローンに行きます。」

閣下の言葉に参謀長が命令伝達をするために自分の席の通信端末を操作し始めた。

「ラップ大佐、シトレ本部長と話したい。緊急の用件があると伝えて繋ぐように要請してくれ。」

ラップにそう伝えられてから、デスクに置いてあった木製の小箱を手にとった。

葉巻だ。シガーシザーを手にとられ、先をカットし、マッチで火を着けられた。大きく吸われて濃白煙を吐き出された。

顔を苦悩の表情に歪められている。煙越しにしか見えないが色々と想定外の出来事に苛立ちを隠せていないのだろう。

ラップが側に来た。閣下の葉巻を吸う姿に驚きながらも報告する。「繋がりました。此方のモニターに繋がります。」

そう言って正面のモニターに繋がった。シトレ本部長が映ると連絡を終えた参謀長、俺、ラップが敬礼をする。

横目で閣下を見るとおぎなりながらも敬礼をしている。そんな閣下の様子に本部長は目を見開き驚いておられる。閣下が葉巻を咥え

ながらの姿に驚いたのだろう。

「副司令長官、連絡は受けたかね？ヤン・ウエンリーがやったぞ。念願のイゼルローン要塞を攻略した！これで我々は一息つくことが出来る。」

白煙を吐きながら閣下が吐き捨てられた。

「それは目出度いですな。それで私が一切関知させてもらえなかったのは？」

本部長が言葉を詰まらせた。余りの面白くなさそうな表情、言葉に何も言えなくなってしまうている。

「私は退役します。退役届けは数日中に送りますので今月末で辞めさせていただきます。」

「それは!?私が君に何の相談もせずイゼルローン要塞攻略を行ったから、それに対する不満からかね？」

「それが一切ないとは申しません。ですが最大の理由は今年中にあると推測される帝国領大規模侵攻作戦に参加したくないからです。私はまだ死にたくない。」

最後にポツリと呟いた言葉に言葉を窮してしまった。閣下の能力の高さは知っているし、死ぬような事はないと思っていたがそれは閣下自身の努力によって死ななかつたのだ。状況や環境、様々な事象を乗り越えたから今の閣下があるのだ。

「イゼルローン要塞を落とした今、我々は帝国からの防衛拠点を得た。先ずは戦力の拡充に力を注ぐべきであろう？なのに君は帝国領侵攻作戦があると？」

閣下が白煙を吐き出しながら溜め息を吐かれた。

「同盟市民はやられた分やり返せってなりますよ。これまでは殴られてからやり返すか殴りに行って殴られて帰るばかりでした。」

帝国軍の侵攻作戦への防衛戦に過去のイゼルローン要塞攻略戦か。確かにその通りだ。これ迄は相手が主導権を握っていた。しかし要塞が落ちたことで我々が主導権を握る事になる。

「ハイネセンでは主戦派、強硬派が大多数を占めます。それに大勢集まれば景気の良い話をしたくなる、聞きたくなります。これ迄の鬱憤

晴らしもあるでしょう。民意は帝国領侵攻に傾きます。これを止めるのは至難の技です。それに同盟政府、最高評議会は政権運営に不安を抱えています。それを解消するのに利用するかもしれないですね。このままでは良くない、ここは起死回生、一発逆転しよう」と。「では止める手段は無いと。」

本部長も閣下の考えに一理あると見たのか、その流れになると予想出来たのか苦悶の表情になっている。

「こうなりますと阻止も考える必要はありますが巧く遠征を畳む事を考える必要もあるでしょう。」

「畳むのは私の責任で行う。その後を君に頼みたい。」

「お断りします。貴方が信頼するヤン・ウエンリー提督に頼めばいいでしょう。」

「君の怒りは理解した。すまないと思っている。ヤン提督は生粋の戦術家だ。軍政も見ないといけない時に用いることは出来ない。私は君に頼まざるを得んのだよ。」

閣下が眉間に皺を浮かべて考えておられる。大きな溜め息を吐かれた。

「此れから言う条件を呑まれるのであれば遠征軍実戦部隊司令官職を受けましょう。」

「頼めるなら何でも呑もう。」

閣下が口にされた条件が余りに意外なもので多岐多種に渡るため多くの時間を要した。通信が終わり、閣下が暗く苦渋に満ちた表情でポツリと。

「此れで一兵でも多くが帰ってこれればいいが。余りにも不確定要素が多すぎる。我々も帝国で死ぬことになるかもしれないな。」

そこまで危険視しているのか。勝つための手を打つ事が出来ず、負けないため、被害を少しでも少なくするための手しか打てない事に暗く重い気持ちになっている。

此れが歴史の転換点になるということなのだろう。

私が迷う必要はない。閣下と共に生き、閣下を支え、閣下の盾となる。それが自身の軍人としての生き方だ。

陰々滅々

宇宙暦796年 イゼルローン要塞 司令室

ヤン・ウエンリー

イゼルローン要塞を奪取して一週間が経った。今日、クーロ教官が此処に来られる。要塞を落とした次の日にシトレ校長、いや、本部長から通信があった。クーロ教官が落とした事による同盟の道を話し合ったそうだ。

十中八九、帝国領侵攻作戦が行われると言われたらしい。実権を奪われたロボス司令長官、好戦的且つ主戦論者が大勢を占める総司令部、大々的な戦果により政権の安定を狙う政府首脳部、これまでのやられた分をやり返したい大多数の市民が大規模出兵の機運を盛り上げている。

ハイネセンに居るキャゼルヌ先輩やアッテンボロー、ユリアンに聞いてみると論調は2割が反対、6割が賛成、2割が賛成よりの中立といった感じらしい。

最高評議会では明確に反対をしているのはジョアン・レベロ、ホアン・ルイの2名で他は積極的、消極的の違いはあるも賛成らしい。

教官は本部長と話し合い、遠征の中止、延期を図りつつ、遠征になっても巧く幕を閉じる事を考えているらしい。

そもそも先の戦争で艦隊戦力が減っている同盟に帝国を征服する等不可能だ。純粹に戦力が足りない。動員可能な艦隊は私の第十三艦隊を入れて9個艦隊。

それに対して帝国はローエングラム伯の9個艦隊、ミュッケンベルガー元帥の9個艦隊、貴族の私兵艦隊も十万隻を軽く超える数になるそうだ。

帝国貴族も同盟軍に降るとなると自らの様々な特権を奪われるとなれば一致団結して向かってくるだろう。ブラウンシュヴァイク公もリッテンハイム侯もその派閥もその段階まで争うような事にならないだろう。

イゼルローン要塞が帝国の手にあればローエングラム伯かミュツケンベルガー元帥の遠征に対処することになっただろう。

ブラウンシュヴァイク公、リッテンハイム侯の皇帝位争いがオーデインで行われている為に軍勢力での決着を起こさせないためにそれへの抑えで宇宙艦隊の大半を置いておかないといけない。

参加可能な艦隊は3個艦隊から5個艦隊が限界と教官は言われたらしい。

帝国の内情が教官の言われる通りならそうなるだろう。

つまり私は、本部長は余計なことをしたという事らしい。とりかえしのつかないことをしたようだ。

どうする事も出来ないのに過去を振り返って苦悩している。

「……………督、提督!!」

宇宙暦796年　イゼルローン要塞　司令室

フレデリカ・グリーンヒル

「提督。提督。……提督！提督!!」

呼んでも反応なされないヤン提督に大きな声で呼びかけ、手を肩に置いた。

ハツとしたように反応なされ、私の方に顔を向けられた。

「ああ、すまないね。グリーンヒル中尉、考え事をしていた。」

申し訳そうな顔をしながら返事をなされた。

「いえ。」

「それでどうしたのかな。」

「いえ、そろそろクロー元帥がイゼルローン要塞から視認出来る距離に参られます。港の方に向かいませんと。」

頭の髪をグシャグシャと掻き回された。

「そうだね。そろそろ向かおうか。遅刻はまずいだろうし。」

「はい、それがよろしいかと。」

そう言ってヤン提督を先頭に司令部要員全員で港に向かう。

最近のヤン提督は深刻な顔で考え事をなされることが多い。

暗く憂鬱そうな顔を浮かべられる。大小、重い軽い様々な溜め息を

吐かれる事が多々ある。ムライ参謀長、パトリチエフ副参謀長、フイツシャー副司令官、シエーンコツプ大佐も心配しておられる。

イゼルローン要塞を落とした連絡をシトレ本部長に連絡なされた翌日の朝にシトレ本部長から連絡があり、午前中は二人きりで話された。その後からこの状態が見られるようになられた。

皆が心配し、度々声を掛けられるがなんでもない、心配ないばかりで口籠られる。

父がハイネセンでは帝国領侵攻作戦が話されていると言っていた。ヤン提督がイゼルローン要塞を落としたおかげで門戸が開かれた。帝国の防衛体制が整う前に一撃を与え、状況によつては帝都オーディンの攻略を目指すべきだと……

父は不確定要素が多いので帝都攻略案は否定的だが帝国軍に一撃を与えるのは有効だと思っている。確かに帝国軍の要塞攻略戦を待つよりは敵に損害を与えやすいがヤン提督はローエングラム伯は稀に見る名将で彼を相手に勝つは至難の技と言っておられる。

確かに彼による被害は目を覆う程のものだ。敵に被害を与える前に此方が被害を受ける事になりかねない事をヤン提督も危惧していた。

港に向かう専用列車に司令部要員全員で乗り込んだ。

路々に兵士の姿がある。皆、同盟の最新鋭旗艦級戦艦アトラスを見に来たのだろう。意外かもしれないが兵士の多くが実際に間近で見たことがないのだ。ハイネセンに帰還の時は宇宙港に離着陸するので市民は見られるが兵士は見る事が出来ないように今回は間近で見ることが出来ると楽しみにしている兵士が多いらしい。

宇宙港の接舷部に着くと直ぐに入港をすと司令部から通信があった。5分もしないうちに入港し、接舷部に無事に接舷なされた。その度に歓声上がる。

接舷して直ぐに副司令長官が艦から降りてこられた。オオオという歓声上がる。それに笑顔で手を上げ、応えられている。

クーロ元帥がヤン提督の前に立たれた。ヤン提督が敬礼をなされ

たのと合わせて私達も敬礼をする。クロー元帥が答礼をなされ、後方に控える第一艦隊の司令部要員もそれに倣う。

「クロー副司令長官におかれましては迅速なる来援、誠にありがとうございます。」

「ヤン提督、イゼルローン要塞攻略見事であった。同盟史に残る偉業だ。君の名と第十三艦隊の名は永劫に語り継がれるだろう。」

肩を叩きながらヤン提督に声をかけられた。

「あ、ありがとうございます…」

クロー元帥のお褒めの言葉にヤン提督が困惑と緊張しながら感謝の言葉を述べた。

「早速で悪いが打ち合わせをしたい。伝達しなければならぬこともあるので互いの司令部要員が入れる部屋を頼む。」

そう言われたヤン提督は私の方に顔を向けられた。

「グリーンヒル中尉、どうかな？」

「第一会議室にご案内します。」

「よろしく頼む。」

コクリと頷かれて案内を頼まれた。

会議室に案内をしている最中も笑顔で話しかけられ、攻略戦の話やイゼルローン要塞内部の事を聞かれた。私達も笑顔で応え、色々と話された。道中、すれ違う兵士にも気さくにお声を掛けられたり、敬礼をしたりしていた。

気になるのが第一艦隊の司令部要員が顔を若干強張らせているという事だ。何かあるのかしら？会話にも積極的に入ってこられないし。ラップ大佐、ワイドボーン准将は士官学校の同期生と聞いているが滅多に会話にも加わらない。ラップ大佐は親友と聞いていたのだが。チュン参謀長も憂色の顔をしている。

会議室に着くと上座にクロー元帥が左右に第一艦隊と第十三艦隊の司令部要員が座った。先程の笑顔から一転して真面目な顔になった。第一艦隊の司令部要員が緊張している。それを見て我々にも

少し緊張の色が出た。

「先ずは決定事項から伝えていく。私と第十三艦隊にはハイネセンに帰還命令が出ている。そして第十三艦隊は皆、一律ハイネセンに帰還次第1階級の昇進だ。」

オオオと第十三艦隊の司令部要員は声を上げた。

「それから君達には勲章が授与される。主だったのが2つヤン提督に。司令部要員には1つが。」

更に歓声が上がる。互いの肩を叩いたりして喜びを分かち合っている。

「ハイネセンに帰還後、第十三艦隊の乗組員は一週間の休暇が与えられる。羽根を伸ばすといい。」

更に嬉しそうな顔を浮かべている。

「ハイネセンへの帰還は第十三艦隊全艦とアトラスのみだ。第一艦隊がイゼルローン要塞防衛の任に着く事になる。チュン参謀長、クブルスリー副司令官の2人が責任者となつてすすめてくれ。防衛作戦の計画書、行動書は作成しておいた。互いに確認し、連携を深めてくれ。艦隊司令官はクブルスリー提督に、要塞司令官はチュン参謀長に頼む。」

「ハッ。」

「承知致しました。」

クブルスリー提督とチュン参謀長は恭しく一礼し返事をした。

「第十三艦隊は何時ハイネセンへの帰還準備が整うかな？」

クーロ元帥が訊ねられたのでヤン提督が中尉と声を掛けられたので私が一礼し答える。

「補給、整備は終わっていますので第一艦隊の皆様を引き継ぎを終えれば直ぐにでも。」

コクリと一つ頷かれてた。

「なら明日0900時に出港でいいかな？」

ヤン提督が頷かれてから答える。

「異存ありません。」

「ではそういうことで。明日の0900時にハイネセンへ帰還する。」

全員が敬礼をして命令を受諾した。

「ヤン提督にはハイネセンに帰還次第、イゼルローン要塞奪取の英雄として様々な行事に参加してもらおう事が決定している。」

クーロ元帥の言葉に第十三艦隊の面々は苦笑している。ヤン提督がそういうことが嫌いなのを察しているからだろう。

「それが終わり次第、最高幕僚会議が行われる。議題は帝国領侵攻作戦についてだ。」

続いて出たクーロ元帥の言葉に皆は言葉を失ってしまった。皆が目で会話している。驚愕と疑問の表情をうかべている。

「最近、ハイネセンでは帝国領侵攻作戦が世論では幅を効かせているらしい。帝国軍の防衛体制が整う前に一撃与えるか何かしらの戦果を挙げるべきだと。」

更に困惑顔になった。私も困惑している。帝国領侵攻作戦？可能なのかしら？

「私、並びに第一艦隊司令部要員に権力を根こそぎ奪われることを危惧した司令長官、総司令部が立案したらしい。」

クーロ元帥の話にムライ参謀長が質問なされた。

「シトレ本部長がその作戦案を通されたと云うことでしょうか？」

「いや、シトレ本部長は反対された。此方の戦力が少ない以上、防衛で敵の戦力を削ぎ、此方の戦力の拡充を行うべきだとね。」

更に皆が困惑顔を浮かべた。パトリチェフ副参謀長が続いて問われた。

「では何故、帝国領侵攻作戦が議題になるのです？」

「総司令部の誰かが最高評議会議長の元に直接持ち込んだらしい。今、誰が持ち込んだか調べてもらっている。その作戦案を見た議長や主戦派の閣僚は大層乗り気だそうだ。私も見たがまあメリツトしか書かれていない都合の良い作戦案だったよ。夢か妄想か空想か、それともサイオキシン麻薬に脳がやられているのかもしれないな。」

嘲笑しながら言うクーロ元帥に第一艦隊の司令部要員は苦笑を第十三艦隊の面々は絶句していた。

フィツシャー副司令官が咳払いをしてクーロ元帥に話しかけられ

た。

「では帝国領侵攻は決定しているということでしょうか？」

クロー元帥が重々しく頷かれて溜め息を吐かれた。

「ああ、決定だ。問題はどの規模、どういった戦略、戦術を取るのかが定まっていないという点だ。」

怪訝そうな表情でヤン提督が訊ねられた。

「と言われますと？」

「あまりに不確定要素、希望的観測が含まれているので私、本部長から見ると到底作戦案と言えない代物だ。詰めれるところは詰めるための会議だそうだ。」

シェーンコップ大佐が不敵な笑みを浮かべてクロー元帥に問うた。

「で、副司令長官閣下は勝てる可能性は如何程とお思いで？」

こめかみを指で押さえながら沈鬱そうに答えられた。

「10%以下だろうな。より正確に答えるなら0に限りなく近い。」

ムライ参謀長が疑問を呈した。

「総司令部の作戦案に副司令長官に不満があるのは分かりましたが悲観的になり過ぎでは？」

「ローエングラム伯を運が良いだけの小僧、ミュッケンベルガー元帥を引き際を誤った老害と評している。」

皆が絶句している。私自身も信じられない思いがある。

「作戦案の中身も中々に酷い。戦略、戦術的な事は書いてあるが補給、後方支援、補助作戦はほぼ無い。此方にとって都合の良い事ばかり書かれた、そんな作戦案を実施しようとしているのだ。御先真つ暗だな。」

会議室に沈黙の時間が流れている。皆、なんといいのかわからないのだろう。

「ヤン提督。君はハイネセンに帰り次第、軍を辞める気であるのかもしれないが私もシトレ本部長も認めることはない。それはここで明言しておく。今回、シトレ本部長は私の政敵になりうるロボス司令長官、並びに主戦派の総司令部を敗戦の責任を取らせて一掃する計画だ。」

第十三艦隊の面々は険しい顔をしている。一種のクーデターと云える行為だからだろう。

「今回の作戦で同盟は大きく戦力を減らすだろう。イゼルローン要塞を拠点に防衛戦を行うことになる。戦力の拡充を図りながら。内輪で揉め事をする余裕も余力もないだろう。私は大々的に今回の侵攻作戦に反対するから戦後の私の立場は盤石だ。生きて帰ってこれたらな。」

そう言つて立ち上がられた。一つ息を吐かれた。

「私は艦に戻る。旗艦乗組員は艦のチェックが終わったら、今日一日休暇を与えるから自由にさせろ。第十三艦隊の軍人もアトラス内部の見学をしたいならさせてやれ。保安部に立ち入り区域の警護の指示だけ忘れずにな。」

そのままラップ大佐に命じ、部屋を出ていった。シェーンコップ大佐が後を追つていった。

気まずい空気が流れている。第一艦隊も第十三艦隊も何も言えずに静まり返っている。

ラップ大佐が大きく息を吐き出した。

「ヤン、今は親友として言おう。閣下はイゼルローン要塞奪取の報を受けて、ここに来るまでの間、ほぼ寝ておられない。1時間のタンクベット睡眠を取り、要塞防衛戦の作戦案を練っておられた。そして帝国領侵攻作戦の作戦案を練っておられた。」

「あまりの自身の追い込み方に何も言えずにいる。参加する多くの将兵が命を失う結果になると見ておられるのだろう。それを少しでも少なくするために文字通り身を削っておられる。」

首を振りながら言われるラップ大佐に第一艦隊の司令部要員は皆険しい顔をしている。

「ヤンにはヤンなりの考えや思いがあつたのは理解できる。だが閣下の姿を見ると憐れだよ……………」

ワイドボーン准将が後を引き継ぎ話した。

「ヤン、次の作戦は大規模だ。綿密な連携を必要とするだろう。協力してくれないか？お前の力量はよく知っている。お前なら状況を理

解すれば個人的感情を排してくれると。」

僅かな沈黙が場を支配してから、ヤン提督が覚悟を決めたのか答えられた。

「分かった、協力しよう。私も此処にいる皆を死なせたくないし、私個人も死にたくない。多くの将兵が死ぬのもゴメンだからね。」

「ありがとう、感謝する。」

ワイドボーン准将の言葉に第一艦隊の司令部要員は軽く頭を下げられた。私達は何も言えなかった。

宇宙暦796年　イゼルローン要塞　通路

「教え子を苛めるのは貴方らしくありませんな。」

シエーンコップが後ろから話しかけてきた。私が心配かヤンが心配か分からないな。

「苛めてなどいない。事実を言ったただけだ。」

「まあ、そうですが。憤懣が少しもなかったと?」

「そうだな。全くなかったとは言えないな。折をみて謝る。」

フフフと笑い声が後ろから聞こえた。

「それがよろしいかと。」

ふうつと溜め息を漏らした。些か冷静さを欠いていたようだ。それをこいつに見透かされた。腹立たしい限りだ。

「それで帝国はどう出てくると貴方は考えているのです?」

後ろをチラリと見てから答えた。

「私の部屋で話す。」

部屋に入り、シエーンコップに隅にある棚を指さした。

「彼処にバーボンがある。グラスと一緒に持って来い。隣の冷蔵庫に氷もある。」

奴が準備している間に此方も帝国領をモニターに映し、準備をする。

シエーンコップが2人分作り、1つを此方に差し出した。それを受け取り、グラスを掲げ一口含んだ。芳醇な香りと強いアルコールが口

の中で広がり、身体に染み渡るのを感じた。

「それで先程の話の続きですが。」

「ああ……」

聞く体勢に入っている。あまり面白い話ではないのだがな。聞きたいとは相も変わらず酔狂な奴だ。

「帝国軍が取る作戦案としては大きく分けて3つある。1つ目は回廊出口で出て来る同盟軍を順に叩く作戦だ。」

ふむと言い、頷いている。軍人なら誰もが思い付く作戦だろう。

「これは戦場を固定でき、出て来る同盟軍を順に撃破出来る利点がある。回廊が戦場だから互いに側面、後背に戦力を回せないから消耗戦になる可能性が大だ。ミュツケンベルガー元帥ならまだしもローエングラム伯は選んだらうな。互いに力押しになり被害が大きくなりすぎる。」

「2つ目は艦隊決戦をする。広い場所を戦場に定め、互いに正々堂々と戦う事だ。戦略、戦術の幅が大きく、ローエングラム伯の気質からこれを選ぶ可能性が高い。先のアスターテでは戦争に勝ち、戦鬪に負けたと言われているらしいからな。私に負けたことを貴族に笑われているらしい。」

「好戦的且つ有能ならありますな。屈辱を感じていると。」

「ああ。3つ目は長期戦だ。辺境星域を同盟に占領させる。各地の惑星に艦隊が駐留することになり分散している。各個撃破のいい的だ。焦土作戦でもすれば食料も枯渇して、同盟軍の士気は下がり、尚勝ちやすくなる。勝つと云う事を念頭に置けばこれが一番帝国軍は勝利を得やすい。」

グラスに入ったバーボンを口に含んだ。陰々滅々な話なのに酒は変わらず旨い。何とも言えない気分だ。

「だがローエングラム伯の気質からこれは低いと思っている。」

興味深そうに訊ねてきた。分かっているくせに。

「ほう、一番同盟軍に勝ちやすくなるのにそれをしないとは何故ですか？」

「民衆を一時的とはいえ、苦しみを与えるのはローエングラム伯の性

格上考えにくい。」

「でしような。彼は少し潔癖なところがあるようですし。」

「まあ、どの作戦案を取ろうがローエングラム伯より寡兵な同盟軍は前途多難な遠征になるだろうな。」

シエーンコップがフフフと笑いながら此方を見ている。

「陰々滅々ですな。」

こいつ、こんな状況で笑うなど相変わらず不敵で不思議で不謹慎な男だ。

ハイネセン到着

宇宙暦796年 ハイネセン近郊 戦艦アトラス ブリッジ
マルコム・ワイドボーン准将

イゼルローン要塞を出てから一月が経った。ヤンがイゼルローン要塞を落としてから一月半に過ぎた計算になる。

ヤン提督率いる第十三艦隊の司令部要員がアトラスに移ってきた。このままアトラスで宇宙港に降りて、英雄としての役割を全うしてもらう予定になっている。

ただ艦橋内の空気が悪い。イゼルローン要塞での話し合いからヤンとクロー元帥の関係改善がなされていない為だ。

一応、チュン参謀長、俺、ラップの三人で来たる帝国領進行作戦案の相談を元帥の居ないときに行っているが。

恐らくは閣下は気付いているだろうな。卒のない方だから。「ラップ大佐、ヤンを呼んでくれ。それと皆は悪いが席を外してくれ。」

閣下の言葉に皆が顔を見合わせた。頷いて席を立つ。我々が後ろにいる第十三艦隊の司令部要員の元に近寄ると彼らは緊張を露わに姿勢を正した。

それを素知らぬ顔でラップはヤンに閣下が呼んでいる旨を伝えた。ヤンが閣下の傍に恐る恐ると近寄ると閣下が顔を少しヤンの方に向け、話しました。

しばらくは互いに緊迫した空気を出していたが会話を続けていくと空気が弛緩していくのを感じた。互いに笑いながら話している。互いの気持ちに折り合いがついたようだ。

これから始まる未曾有の事態に対処しないとイケない状況で二人の関係改善は間違いなく大きなプラス材料がなるだろう。

宇宙暦796年 ハイネセン

「あの、いいんですか？ 僕なんかを連れて来て？」

隣を歩くユリアン君に尋ねられたので正直に答えた。

「先にユリアン君との予定が入っていたんだ。先方が嫌ならそつちを断るさ。それが約束というものだ。」

「ですが……」

「それよりも外食になってしまって申し訳ないね。」

「いえ、それは大丈夫なんですが。」

ユリアン君の恐縮した態度に擦れていない素直な性格に好感を持つ。ヤンがイゼルローン要塞陥落の英雄として昼夜問わずにあちらこちらに駆り出されている為、一人のユリアン君を誘って食事をすると思ったのだが。

私自身もジェシカがエル・ファシルにいるので一人だから丁度食事相手に良かったのだが。

「先方の奢りだからしつかりと食べるんだよ。分かったね。」

「はい。」

いい返事だ。

「さあ、入ろうか。」

そう声を掛けて店に入ると名前と予約の待ち人がいることを伝えると奥の個室に案内された。

個室に入ると案の定といった人がいた。財務委員長ジョアン・レベロ、人的資源委員長ホアン・ルイの二人だ。

「シトレ本部長から会ってほしい人がいると聞いてきたのですがやはりと言ったところですね。」

私の言葉にホアン・ルイ委員長が訊ねてきた。

「私達が待っていると分かっていたのかね？」

「いえ、予想の何人かの内に入っていただけです。二人共。二人一緒とは思いませんでした。」

ユリアン君と二人、席に座ると飲み物と食事のコースのメインを聞きに来た。私はワイン、ユリアン君はジンジャーエールを頼み、メインは二人とも肉料理をお願いした。

「さて、時間も限られている。色々君に聞きたいことがあってこうした場をシトレに頼み、用意してもらった。」

「シトレ本部長とはどういった関係なのですか？」

真面目な顔でレベロ委員長が話してくれる。

「私と彼は同郷の幼馴染でね。私は政治家、彼は軍人になったから馴れ合うわけにもいかないが互いに同盟の将来に影響を持つ立場になったから必要最低限の連絡を取り合っている。そして彼が今回の議題になっている帝国領進行作戦案を危惧し、自身の進退が懸かっているという。」

そこまで言ってから隣のホアン・ルイ委員長が引き継いだ。

「なので後任と必要な話し合いをするべきだと言うので場を設けさせてもらったと云うことだ。」

「分かりました。そう云うことなら。で、何を話し合うのです?」

「君は帝国領進行作戦を危険視しているが何故かね?」

毎回同じ話をしないといけない状況に辟易しているがこれも仕事と割り切るしか無い。

「はい、此方が使える艦隊は私の第一艦隊、第三艦隊、第五艦隊、第七艦隊、第八艦隊、第九艦隊、第十艦隊、第十二艦隊、第十三艦隊の9個艦隊です。」

司令官は私、ルフエーブル、ビュコック、ホーウッド、アップルトン、アル・サレム、ウランフ、ボロデイン、ヤンだ。

ここまでは良いかと視線を向けると二人が頷いたので続ける。

「それを迎撃する帝国軍はローエンングラム元帥の9個艦隊、ミュッケンベルガー元帥の9個艦隊合わせて十八個艦隊、それに貴族の私設艦隊が十万隻は優に超えると言われています。ざっと十二万隻とすれば同盟では十個艦隊に匹敵する数です。三十個艦隊に近い敵を相手に9個艦隊で帝国領に進行など正気の沙汰とは思えませんね。」

「数だけで勝敗は決まらんだろう? 先のアスターテでは倍の同盟軍が負けた。」

「戦いは数と補給等を含めた後方支援、そして戦略、戦術が複雑に絡み合い勝敗が決まります。しかし大抵は戦力差が大きなアドバンテージになり、押し切られてしまいます。」

「どうにかして勝つ事は出来んかね?」

政治家というのは無茶や無理、夢想を押し付ける癖があるのか。

「此方が9個艦隊でローエングラム元帥の9個艦隊と対峙した時にミユツケンベルガー元帥、貴族艦隊に対応出来る予備がありません。側面や後方を何時突かれるか恐る恐る戦う羽目になります。」

二人が険しい顔をしている。私の話を理解してくれたようだ。

「分かった、勝つのは厳しい。なら巧く畳む事を考える必要があるな。」

「それに関してはシトレ本部長が司令長官、総司令部の主導で進めさせ、私は一貫して反対の立場に立ち、彼らの作戦の破綻を待ち、責任を取らせ一掃する予定です。」

二人が厳しい視線を向けてくる。

「私は敗戦した後はイゼルローン要塞での防衛に専念し、同盟、同盟軍の財政、軍事の立て直しを図るべき提案、提言する予定です。国家として借金をしながら戦争等バカの極致でしょう。」

私の発言に若干の苛立ちを見せながら此方にこれからの話をしてきた。

「今回の進行作戦で政府内の主戦派は力を失うだろう。そこに私達の反戦派、ソーンダイク率いる和平派が票を伸ばし、席も伸ばすだろう。政権運営を担当するまでかそれに匹敵するまで行くと思う。そうなったら君にも君の奥方にも活躍してもらおう事になるだろう。協力してくれるかね?」

「私は私の考えで彼女は彼女の意思で活動しています。協力出来ることとなりますがそれは絶対ではないことは御理解下さい。」

二人が顔を見合わせて頷いた。恐らくはそれで良いといったところか。

「分かった。今日は有意義な話し合いが出来たと思う。感謝している。」

そう言われたので軽く数cm程度頭を下げた。此方もと意思表示をした。

食事も終わり、デザートを食べて店を後にした。ユリアン君と歩きながらヤンの家に送っていく。

「また戦争になるのですか?」

「ああ、残念ながら今の政府では帝国領進行作戦が決定されるだろう。」

「皆さん、無事に帰ってきますよね？」

不安そうに此方を見ながら訊ねてきた。

「正直に言うとは分からない。不確定要素が敵味方に多すぎて未来の予想、想定が追いつかない。私もヤンもどうなるか。」

「そんな……」

「だが、最善を尽くすことを尽くさせることを誓う。私もヤンも。」

「ありがとうございます。」

私の言葉に安心したようだ。しばらく歩くとユリアン君が相談があると言ってきた。

「僕は将来軍人になりたいんです。ですが……」

「ヤンが反対しているか？」

「はい、死んだ父が軍人でした。今も遺族年金や支援を受けているので。」

「ヤンにもそれくらい金はあるだろう？君の成績ならフライングボールのプロや大学に行ってもいい。働きたいというなら交易会社を私が紹介してもいい。」

「ですが……」

「君が本当に考えて決めたのなら応援しよう。私は周囲に流されて軍人になった。代々医者の家系だったが父は何も言わなかったから誘われるまま士官学校に入った。」

ユリアン君に視線を向けると困惑している。

「後悔しているのですか。」

「父が医者になれといえれば医者になっただろう。自分で決めず他人に決められるのが楽だからな。生憎と才能もあり、努力も苦にならない性格なので軍人でもメキメキと頭角を現し、四十を前に軍のN.O.3だ。だが敵も味方も多く殺す今の立場が苦痛を伴うものであることを理解していなかった。」

「ユリアン君、君が本当に軍人になりたいなら推薦書は書いてやる。ヤンでは士官学校は頼りにならないからな。諸々よく考えるんだな。」

歩いていたユリアン君が立ち止まった。

「もう少し考えてみようと思います。自分の将来について。」

「ああ、一回限りの人生でやり直しがきかない。後悔がないようにな。」

「はいー!」

少しは吹っ切れたのだろう。しつかりと返事をし、歩き出した。若者の苦悩しながらも前に進もうとする姿勢に嬉しく思うと同時に後悔のないように協力出来ることはしてやろうと思う。

頑張れよ、ユリアン君。

宇宙暦796年 ハイネセン 統合作戦本部

必要な書類にサインをしていると来客のベルが鳴った。誰かと思ったらヤンがやって来た。

「教官に最高幕僚会議へ一緒に行かないかとお誘いに。」

チラリとヤンを見ると頭を掻いている。

「分かった、直ぐに準備する。少し待て。」

そう言っただけで準備をする。といっても脱いでいた上着を着て、用意していた書類の入ったバックを持って行くだけだ。

「行こうか、ヤン。」

「はい、お供させていただきます。」

そう言っただけで一歩後ろを歩いてくる。私は元帥、ヤンは中将だ。

「ユリアンの進路の相談に乗っていただけただけだ。ありがとうございます。ごさいます。」

「大した事は言っていない。自分の人生だ。自分でしつかりと考えて決めろって言っただけだ。」

「それでも感謝します。義務感からか軍人になると考えていたのが自分の人生に目を向けるようになりました。」

「そうか。だが今からは私達の人生について考えよう。馬鹿馬鹿しい作戦案を元に馬鹿馬鹿しい会議が開かれる。」

「えらくあけすけですね。気持ちには分かりますが。」

「ヤン、お前も思うことがあるならしつかりと発言しろ。そして己の

立場を明確にしておけ。」

「はい。」

「さあ、行こうか。冗談のような本気の、本気のような冗談な会議に。」

私の言葉にヤンが失笑を漏らした。これから同盟史に残る会議が始まる

最高幕僚会議

宇宙暦796年 ハイネセン 統合作戦本部

中央に統合作戦本部長シトレ元帥が座り、左右に実戦部隊と総司令部要員が分かれて座っている。司令長官ロボス元帥が総司令部側、私副司令長官クロー元帥が実戦部隊側の最前列に座っている。

「それでは遠征軍の部隊編成に関して、後方主任参謀キャゼルヌ少将より確認してもらおう。」

「はっ、先ず遠征軍総司令官は宇宙艦隊司令長官ラザール・ロボス元帥が務められます。総参謀長はドワイト・グリーンヒル大将。作戦参謀はコーネフ中将以下3名。情報参謀はビロライネン少将以下2名。後方参謀は小官以下1名であります。」

「次に実戦部隊として9個が宇宙艦隊が投入されます。前線司令官を兼任するユーリ・クロー元帥麾下第一艦隊。ルフエーブル中将麾下第三艦隊。ビュコック中将麾下第五艦隊。ホーウッド中将麾下第七艦隊。アップルトン中将麾下第八艦隊。アル・サレム中将麾下第九艦隊。ウランフ中将麾下第十艦隊。ボロディン中将麾下第十二艦隊。そしてヤン中将麾下の第十三艦隊。その他、各種独立部隊等を合わせ、総動員数三千百二十三万七千四百名。」

あちらこちらから感嘆の声、溜息が聞こえる。

実戦部隊で二千万を越え、補給部隊や後方支援で一千万近くになる。妥当な数字ではある。

但し、三千万と云えば全軍の6割に及ぶ。こんな数を揃えてどんな戦果を挙げれば帳尻が合うのやら。

「諸君、今回の帝国領への遠征は最高評議会による決定事項である。が具体的な行動計画はまだ樹立に到っていない。本会議はそれを決定する為のものである。諸君の活発な討論を期待する。」

「本部長閣下。」

一人末席に座った男が手を上げ、指名もされていないのに立ち上がり喋り始めた。

「作戦参謀フォーク准将であります。今回の遠征は我が同盟開闢以来

の壮挙であると信じます。」

勝手に信じていてくれ。

「それに幕僚として、参加させて頂けるとは武人の名誉。これに過ぎたるはありません。」

シトレ本部長が座れと手で合図をした。作戦案の発表じゃないのかよ。

「総司令官閣下にお訊ねします。我々は軍人である以上、命令とあらばどこへでも行く。ましてやゴールデンバウム王朝の本拠地を突くということとあれば喜んで出征しましょう。が、これ程の大規模侵攻であるからには、先ずこの遠征の戦略上の目的をお聞かせ頂きたい。」
ウランフ中將が最初の質問をした。そもそもこの遠征の目的はと聞いたがなんと答えるのか。

「作戦参謀、説明を。」

ロボス元帥が作戦参謀に答えるように命じた。

「はっ、大軍を保って帝国領土の奥深く侵攻する。それだけで帝国軍人共の心胆を寒からしめることができましょう。」

中々にウィットに富んだ回答だ。

「では、戦わずして退くというわけか？」

「それは高度な柔軟性を維持しつつ、臨機応変に対処することになるかと思えます。」

真剣に答えているのかはぐらかしているのか分からんな。顔を見るに真剣に答えているように見えるが…

「それではあまりに抽象的過ぎる。」

ウランフ中將が苦言を呈する。

「要するに行き当たりばったりということではないのかな。」

ビュコック中將の皮肉交じりの冷やかしが入った。フォーク准將はムツとしたようだ。

「本作戦は同盟史上空前の規模である。壮挙それ自体が帝国人民に希望を与え、専制政治に対する打撃となることは明らかだ。」

ロボス元帥が手助けを出した。

「ありがとうございます、総司令官閣下」

「侵攻の時点を現時点に定めた理由をお聞きしたい。」

ヤンが質問をする。この質問もフォーク准将が答えるみたいだ。

「戦いには機というものがあります。」

「つまり現在こそが帝国に対して攻勢に出る機会だと貴官は言いたいのか？」

「大攻勢です、ヤン中将。」

フォーク准将が自信満々でヤンの説明に答える。

「イゼルローン失陥によって帝国軍が狼狽している正にこの時期、同盟軍の大艦隊が長蛇の列をなし、自由と正義の旗を掲げて進むところ、勝利以外の何物がありませんか？」

「しかし、この布陣では敵襲に深入りしすぎる。隊列は余りに長くなり、補給にも支障をきたすだろう。しかも敵は我が軍の側面を突くことで容易に此方を分断できる。」

ヤンの物言いに不満を抱いたのだろう。フォーク准将が語気を強めて反論する。

「何故、分断の危険のみを強調するのか理解に苦しみます。我が軍の中央部に割り込んだ敵は前後から挟撃され、惨敗すること疑いありません。」

「待ち給え。ヤン中将の指摘は正しい。兵力集中の機を逸し、各個撃破の憂き目にあつたアスターテの愚を繰り返すのか？」

ビュコック中将のヤンの意見への賛同も何処吹く風のようなだ。

「戦術家で名だたるビュコック中将のならではのお考えです。」

「どういう意味か？」

「戦術的にはともかく、戦略的には先の戦いは敗北等ではありません。我が軍は最終的に帝国軍を駆逐し、アスターテ星系の侵入を阻んだではありませんか。」

「何だど？」

「そもそも今回は戦いそのものの意義が異なります。本作戦に於いて、我々は帝国の圧政に苦しむ民衆を救いだす解放軍なのです。」

フォーク准将の独演会が始まりそうな時にアレックスが間の手を入れた。

「よろしいですか？」

「キャゼル又少将。」

シトレ本部長の指名を受けて、話しだした。

「後方を預かる小官としては、その場合の補給について危惧を憶えま
す。長い補給線に加え、解放軍として占領地への対処も行おうとなれ
ば、たちまち物資不足に陥ります。」

アレックスの当然の危惧を質問した。

「多少の補給が滞った所で占領地の民衆に物資を供出させることも可
能ではないか？」

ロボス元帥の希望的観測に頭が痛くなった。

「それを計算に入れて補給計画を立てるわけには。」

「何とかするのが君の仕事だ。」

「ですが帝国軍の指揮官はあのローエングラム伯です。彼の軍事的才
能を考慮すれば、作戦計画の策定には慎重過ぎるということは無いと
思います。」

これまでのローエングラム伯に被った被害を思えばヤンの指摘は
至極当然だ。

「中将、君がローエングラム伯高く評価している事は分かる。だが彼
はまだ若い。失敗を冒すこともあるだろう。」

「それはそうです。しかし勝敗とは結局相対的なもので、彼が侵した
以上の失敗を我々が犯せば、結果は自ずと明らかではないでしょう
か。」

「それは予測でしかありません、ヤン中将。敵を過大評価し、必要以上
に怖れるのは武人として最も恥ずべきところ。ましてや、それが味方
の士気を削ぎ、その決断と行動を鈍らせるとあつては結果として敵を
利する事になります。」

バンと机を叩く音が聞こえた。ビュコック中将が叩いたようだ。

「フォーク准将、貴官の今の発言は礼を失しておる。」

「何処がでしょうか？」

「貴官の意見に賛同せず、慎重論を唱えたからと言って利敵行為呼ば
わりとは何事か！」

「小官は一般論を申し上げたまで。一個人に対する誹謗と取られては甚だ迷惑です。そもそもこの遠征は専制政治の暴圧に苦しむ銀河帝国250億の民衆を解放し、救済する崇高な大義を実現するためのものです。我々が解放軍として大義に基づいて行動すれば、帝国の民衆は歓呼して我々を迎え、進んで協力するでしょう。」

フォーク准将の独演会がそろそろうつつとおしく思ったので手を上げて質問しようとした。

「そろそろ具体的な作戦計画を話し合いませんか？中身の無い話を続けられるとこのままでは寝てしまいそうだ。」

私の言葉に艦隊司令官連中は失笑している。

「私が先に出した3つの帝国軍の行動に対しての具体的な内容をお聞かせ願いたい。」

フォーク准将が答えるみたいだ。

「高度な柔軟性を維持しつつ、臨機応変に対処することになります。」

「それは具体的な内容とは言わない。答えられないなら引っ込んでいってくれ。作戦主任参謀コーネフ中将、答えてくれ。」

コーネフ中将に視線を向けると緊張を露わにした。

「その、閣下が出した作戦案と言いますと……」

「シトレ本部長に提出した帝国軍が取る可能性のある3つの作戦案の事だ。シトレ本部長よりイゼルローン要塞陥落の次の日には総司令部に提出され、周知されていると聞いている。」

「それはその……」

口籠るコーネフ中将に更に質問を重ねる。

「先ず、第一案のイゼルローン回廊出入り口付近を封鎖し半包囲で我々同盟軍の侵攻を阻止するという作戦案に対し、我々はどのような作戦を取ればいい？此方が突破出来ない時は何処迄の被害を被れば良いのかね？消耗戦になる。」

私の問い掛けに皆が口を噤んだ。

「同盟でも帝国でもその人ありと謳われるクーロ元帥がそのような弱気を口にされるとは思いませんでした。」

またしやしやり出てきやがったと思った。

「敵はイゼルローン要塞を落とされて混乱しています。イゼルローン回廊付近で迎撃する等という積極的防衛戦を行えないと思われません。」

フォーク准将の言にロボス元帥が頷いている。

「ロボス元帥も同意見ですか？頷いておられたが。」

私の指摘に慌てている。頼りない総司令官だ。昔は優れた戦術指揮能力で前線指揮官として輝かしい功績を挙げてきたが今は只の石ころだな。

「他の2案、敵が決戦を仕掛ける、焦土作戦を実施するはどうですか？何かしらの対案はお有りですか？」

「敵は閣下の言うような効果的な迎撃は出来ぬものと推測しております。閣下の心配は些か過ぎるというものです。」

フォーク准将の言について笑ってしまった。

「何が可笑しいのですか？」

「いや、ロボス元帥の近年の愚かな失敗を思うと理由が分かったのでつい笑ってしまいました。君のような最悪の事態の想定もせず、自分の思い通りに事が進むことばかりを考えている参謀を重用しているからだとね。」

「小官を愚弄なされるので。」

「私は士官学校の教官を一年だけだが勤めた。教え子には30にして艦隊司令官を務めるヤン中将や、」

「教官、私はまだ29歳です。お間違いなきようお願いします。」

ヤンの自身の年齢を気にした発言で横槍が入った。

「細かいな。今年か来年で30だろう。誤差の範囲だ。」

「20代と30では天と地ほどの差があります。」

熱心に言い募るヤンに呆れつつ、謝罪しようと思った。

「分かった、分かった。ヤン中将は29歳だ。それでいいな。」

「はい、それでいいです。」

何話してたっけ？ヤンが入ってきて飛んでしまった。ああ、そうだった。

「艦隊司令官を務めるヤン中将や私の艦隊で参謀を務めるワイドボー

ン准将、副官を務めるラップ大佐がいる。他にも何人も各艦隊の分艦隊司令官や作戦参謀がいる。皆が私を恩師だと言ってくれているのが私の密かな自慢だ。」

腕を組み、顔を横に振りながら話す。

「アスターテでは第六艦隊の参謀を務めたエミル大佐は残念だった。三個艦隊の分散合撃を各個撃破の餌食だと進言していたと聞く。それを何処からかの馬鹿な命令で実施され、儂い命を散らす羽目になった。200万人もの儂い命をな。」

馬鹿な奴らと当て擦れられたロボス元帥に総司令部の面々は顔を紅潮させ、怒りを露わにしている。

総司令部要員の代表に厳しい視線を向けると姿勢を正した。

「今回はそのような事が無いように念には念を入れ、入念に準備をすべきだと申しているのです。勝つのは難しいですが負けるのは簡単です。その負ける要因を少しでも減らし、味方の被害を少なく済ますのも我々上に立つものの努めではないでしょうか？」

私の言葉に艦隊司令官側は一様に頷いて賛意を示した。矢面に立つのは我々なのだ。色々と思うところもあるだろう。

だがロボス元帥がバンと机を叩いて立ち上がった。

「クーロ元帥の言は一理あるが全部向こうに行つてから分かるものだ。それを確認し、現場で対応するのが君達の仕事だ。この遠征は決定事項なのだ。行くことが決定している以上、どのような結果を齎すのであれ行かねばならぬのだ。」

目茶苦茶だ。支離滅裂ではないか。これを作戦会議と言うなら笑いものだな。ローエングラム元帥も知れば呆れるか笑うかのどちらかだろう。

「イゼルローン要塞より先に行き、帝国軍の作戦が判明してから適宜対応するのが最善だろう。クーロ元帥の質問にも答えたいし、以上で会議を終える事とする。各自、遠征開始迄の間に万全の準備をするように。解散。」

そう言つて勝手に解散して、会議室を出ていった。艦隊司令官の面々は不満げな顔を浮かべている。が解散を宣言され、総司令官が居

なくなったので各々、周りを見渡しながら様子を伺いながら少しずつ出ていった。会議室にはシトレ本部長と私とヤンが残った。

隣に座っているシトレ本部長が天を仰ぎながら溜息を吐かれた。「私が甘かったよ。イゼルローンを取れば戦火は遠のくと思っていたのだからな。私には自業自得だが君にはいい迷惑だな。前線では君の思い通りに指揮を取り給え。今回の遠征の不始末は私とロボス、総司令部の面々に取ってもらう。」

私も重い息を吐いた。

「その前に生きて帰れるのですかね？それが心配でなりません。」

「そうか、そうだな。そこは君の才覚でどうにかしてもらおうしかないな。ヤン、君にも厄介事を任せることになる。頼む。」

近寄ってきていたヤンに声を掛けた。

「本部長……」

「私はこれでもそれ相応の苦労を長きに渡ってしてきた。君にも階級、才能相応の苦労してもらわんと。第一不公平というものだ。」
硬い空気を和ませる為だろう。それがヤンにも分かったのか苦笑している。

「不公平ですか。」

「さあ、君達は行きたまえ。私はもう少し此処にいる。」

ヤンと顔を見合わせた。1つ頷いてから敬礼をする。私達の敬礼に座りながら答礼を返してきたので手を下ろして踵を返し、出口に向かう。退出した瞬間に後ろから声が聞こえた。

「無事に帰ってきてくれ。武運を祈る。」

厳しい顔をした本部長の姿が一瞬だけ見えた。

帝国軍人として

宇宙暦796年 首都星オーデイン ローエンングラム元帥府

エルネスト・メックリンガー

アスターテ会戦で叛乱軍に勝利したミューゼル上級大将は貴族としてはローエンングラム伯爵家を継ぎ、軍人としては元帥に昇進なされ、宇宙艦隊副司令長官に任命され、宇宙艦隊の半数を指揮下に入れられた。

そのローエンングラム元帥が元帥府を開かれ、何人もの軍人を自らの元帥府に招聘なされた。私もその内の一人だ。

他にはミッターマイヤー中将、ロイエンタール中将、ビッテンフェルト中将、ケンプ中将、ワーレン中将、ルッツ中将、キルヒアイス中将の7人が正規艦隊司令官として配属された。

これに私とローエンングラム元帥を入れ、9個艦隊がローエンングラム元帥府の戦力になる。

我々、艦隊司令官に招集命令が下され、定刻にローエンングラム元帥が会議室に現れた。

恐らくは最近、市井の民衆にも拡がっている叛乱軍の侵攻作戦についての話し合いが行なわれるのだろう。兵力三千万人を越え、率いる将は当代無双と言われるクーロ元帥だ。市井の民衆も貴族も政府も、そして我々軍人も気になる話だ。

前にローエンングラム元帥が来られ、我々の方を向かれた時に敬礼を行う。元帥が答礼を返されてから手を下ろす。

「卿等も承知の事だろう。自由惑星同盟を僭称する辺境の叛徒共、帝国の前哨基地であるイゼルローンを強奪、占拠した。情報によれば現在、敵は彼の地に膨大な兵力を結集しつつある。推定では艦艇二十万隻、将兵三千万。」

場に驚きの声にならない声響いた。

「叛徒共は我が帝国の中枢部へ向け、全面攻勢をかけてくるつもりだ。」

この敵の妄動に対し、私が迎撃の任に当たる事になった。近く勅命が下るだろう。卿等の善戦を希望する。」

ローエングラム元帥府に所属し、正規艦隊司令官になっての初の戦いが叛乱軍の大攻勢を迎え撃つとは得も知れぬ昂揚感を感じずにはおれまい。

「要するに他の部隊は全て後宮の飾り人形。まるで頼りにならないというわけだ。昇進と勲章を手に入れる良い機会だぞ。」

ローエングラム伯のあからさまな言葉に失笑と苦笑が漏れた。

「昨日、帝国軍3長官会議で決まった事を通達する。敵のクロー元帥を撃つたものは2階級特進、250万帝国マルクの賞与、双頭鷲武勲章の授与、トラウンシュタイン産バツファローの毛皮を1枚下賜される事が決まった。」

「「「「おおくくくくくくく。」「」」」」

私だけではなく、他の艦隊司令官も驚愕の声をあげた。

2階級特進だけならまだしも、元帥の年間給与と同額の250万帝国マルクに双頭鷲武勲章、トラウンシュタイン産バツファローの毛皮とは破格の恩賞ではないか。

一人の命に此処までの物を付けるとは。

「では卿等の意見を聞きたい。我々は如何なる戦術で叛徒共を迎え撃つか、忌憚無く申してみよ。」

先ずは好戦的なケンプ中将、ビットテンフェルト中将、ミッターマイヤー中将辺りが進言するだろう。

「敵がイゼルローン回廊を出ると同時に叩く。これに優る戦術はありませんまい。」

ビットテンフェルト中将が自信満々に言い、手を打ち合わせた。確かに妥当な作戦案だ。これが第一案に出るは当然の作戦案ではある。

「確かに。敵の出現する宙域を特定でき、先頭を正面から叩くことも、半包囲体勢を取ること可能です。」

ミッターマイヤー中将がビットテンフェルト中将の意見に賛意を示した。

「叛徒共は帝国領を寸土も踏むことなく逃げ失せましような。」

ミッターマイヤー中將が賛意を示した事に自信を深めたのかビツテンフェルト中將が更に言い募った。

「卿等の意気や良し。だが、回廊出口での迎撃は敵も予測しているはず。先頭には精鋭を配置している可能性が高く、叩いた所で残りが回廊から出てこなければ攻勢の掛けようがない。」

ローエングラム伯の言葉に私も皆も驚きの声を上げた。確かに叛乱軍の迎撃に適した作戦案だ。無難だか堅実のものだ。

それだけではローエングラム伯は不満だと言っている。

「では、どうなされると?」

ミッターマイヤー中將が疑問を呈した。

「叛乱軍を帝国領奥深くまで侵攻させ、時期を見て殲滅する。」

艦隊司令官皆が驚愕の顔を見合わせた。

「て、帝国領への侵攻を許すと仰っしゃるので!?!」

ビツテンフェルト中將が我々の思いを代弁してくれた。神聖不可侵なる帝国領への侵攻を許すとなれば皇帝陛下、門閥貴族、政府のローエングラム伯を嫌っている、危険視されている方々に問題にされるのでは……

「帝国領奥深くまで侵攻させ、戦線と補給線が限界まで伸び切った所を全軍で攻撃する。敵は全兵力の6割を投入してくる。我々はこれを掃滅し、叛徒共の反抗の意思を完全に打ち砕く。それによって我々が力秀でたる者達だと云う事を叛乱軍にも帝国臣民にも知らしめる。」

ローエングラム伯の仰っしゃられる事は分かるが……

「オーベルシュタイン。」

我々、艦隊司令官の後ろに居る一人の男をローエングラム伯は呼んだ。

先のイゼルローン要塞陥落の折に駐留艦隊司令官ゼークト大将の参謀であった男だ。ゼークト大将の元を去り、敵前逃亡の罪に問われていた処をローエングラム伯が帝国軍3長官に口添えし、自らの元帥府に入れたと聞いたが……

「では本作戦の要旨を説明いたします。」

感情の起伏なく、淡々とした口調で話しだした。

作戦の中身を聞かされたが皆が驚きの顔をし、周りの様子を伺いながら沈黙考した。確かに敵に多大な負担を与え、勝つまでの時間を早める事が出来るだろう。しかしそれは辺境の貴族、辺境の臣民に多大な負担を掛け、ローエンングラム伯への要らぬ嫌悪、憎悪、嫌疑が出ないか？

叛乱軍を掃滅後に叛乱軍の脅威が激減した時、ローエンングラム伯の排除へ向かわぬ保証はない。帝国への脅威は圧倒的な軍才を持ち正規艦隊の半数を指揮下に置いており、帝国、政府、門閥貴族への反感、敵意を持っていると見られているローエンングラム伯と見られる可能性がある。元帥は大逆罪以外では処罰されない特権を持つが我々正規艦隊司令官は違う。政府、門閥貴族、軍部の話し合いでローエンングラム伯の排除に動く可能性だつてある。

名誉職へと昇進させ、実戦部隊から離す。これでローエンングラム伯の危険性は大きく削がれる事になるだろう。

嫌な考えばかりが脳裏を過ぎる。ローエンングラム元帥府に入った今、最早この方と進むしかないのだが一抹の不安を心に宿す事になった。

宇宙暦796年 首都星オーデイン ミッターマイヤー邸

オスカー・フォン・ロイエンタール

元帥府での会議が終わり、ミッターマイヤーに夕食を共にしないかと誘いを受けた。了承すると奥方に連絡すると言つて足早に目の前から去り、自室へと向かったミッターマイヤーに苦笑していたのが昼過ぎであった。

そこから夕方まで艦隊戦力の確認と司令部要員、副司令官、分艦隊司令官との打ち合わせ、補給関連の決裁をし、ミッターマイヤーから誘いの通信が入ると仕事を切り上げ、共にミッターマイヤー邸へと向

かった。

花屋へ連絡して用意した奥方へのプレゼントの薔薇の花束を見たミッターマイヤーは苦笑して、俺が夫なのに何もしない酷い男に見えないかと告げてきた。

それに私も苦笑し、なら卿も奥方に何か送ればよかろうと助言した。そうだなそれが良いと笑って何を送ればいいか訊ねてきたので、そこは卿の才覚の見せ所だろうと告げると苦手なのだが自分で考える事に意味があるかと納得したようだ。

家に着き、呼び鈴を鳴らして玄関を潜ると直ぐに奥方が出迎えてくれた。

「ウォルフ、おかえりなさい。ロイエンタール提督もようこそいらっしやいませ。」

ミッターマイヤーと私に挨拶をしてリビングに案内をしようとする奥方を引き留め、薔薇の花束を今日のお礼として渡すと折角だからリビングに飾ろうと言い花瓶を持ってくると去って行った。

ミッターマイヤーがリビングに行っておこうと言い、案内してくれた。テーブルに食事の準備が大半出来ていた。

席に着いて一心地つくると奥方が花瓶に活けられた薔薇とワインを持ってきてくれた。ウォルフと言ひ、ミッターマイヤーにワインを渡して俺のグラスに入れるように促した。

「直ぐに残りの料理を持ってきますわね。」

そう言って足早にリビングからキッチンへと立ち去った。

「さあ、ロイエンタール。先に始めていよう。」

そう言つてミッターマイヤーはボトルを俺の方に向けていた。苦笑しながらもグラスをミッターマイヤーの方に差し出すとトクトクと小気味の良い音が鳴り、赤褐色色の液体がグラスに注がれた。注がれたグラスをテーブルに置き、ミッターマイヤーと声を掛けるとボトルを差し出してきた。それを受け取り、ミッターマイヤーのグラスにワインを注ぐ。

互いに注ぎ終わると丁度良いタイミングで奥方が料理を持ってきてくれた。

互いの前にメインを置いてくれ、「さあ、食べましょうか。」と声を掛けてくれた。

それを見てからワインボトルを奥方に差し出すと少し驚きながら「では一杯だけ。」と言ってグラスを持ったのでそれに注いだ。

食事が始まると奥方の美味しい料理に舌鼓をうち。料理を褒める言葉だけが話題だった。

1時間程で食事が終わると今度は酒席になった。話題はやはり、今度の叛乱軍の事だった。

「叛乱軍が大軍で攻めてくるという話がオーデインに拡がっています。ローエングラム元帥が迎撃に出ると専らの噂です。」

奥方が不安そうな表情で不安を口にした。ミッターマイヤーが厳しい表情をしているがそれでは不安を煽るだけになると判断して笑いながらある程度の真実を伝える。

「叛乱軍がイゼルローン要塞を落とし、その勢いそのまま帝国領への侵攻作戦を決行するようだ。」

「おい、ロイエンタール！」

私が真実を話し始めた事にミッターマイヤーが注意をした。

「ミッターマイヤー、大凡バレているのだ。下手に隠しても何れはバレる。此処はしっかりと事実を伝えた方が良い。」

そう言つて奥方の方に視線を向けると姿勢を正して聞く体勢になっていた。

「叛乱軍は総兵力の半数を超える規模らしい。」

私の言葉に驚愕の表情を浮かべ、口元を手で覆った。

「街の噂では帝国でも名将と評されるクーロ元帥が総司令官と……」

かなり不安な表情をしている。クーロ元帥の評価は俺が思っているより高いようだ。だが間違いは正しておかねばな。

「それは間違いだ。クーロ元帥は前線の兵力を指揮する前線指揮官だか総司令官は叛乱軍の宇宙艦隊司令長官ロボス元帥だ。」

それでも愁眉は晴れないらしい。

「クーロ元帥はこの遠征に反対したらしい。これは帝国軍情報部に届いた内容だ。」

「まあ、何故ですか？」

軍事的な事だからな分らないらしい。

「大規模侵攻作戦。言葉にすれば格好良いがそれに見合ったりターンを得れるかという問題がある。奥方も例えば買った調理器具が値段に見合わなければ不満だろう？それが高価な物であればあるだけ。」

私の例えが面白かったのか口元を手で抑えてクスクスと笑っている。

「それに今回の作戦は必ず決まる作戦だ。大勝利を獲られずとも此方の勝ち揺るがないさ。」

私の話しに安堵の表情を浮かべていたが、また不安の色が顔を覗かせた。

「まだ何か不安かな？奥方には常日頃から美味しい手料理を御馳走になっている。奥方の不安を取り除く為なら万難を排しても努める所存だ。」

私が冗談めかして言うとな不安そうな表情からまあと嬉しそうな表情に様変わりした。が直ぐに不安げな表情になり。

「ウォルフが危険な目に遭わないかだけが心配で……」

「おい、エヴァー！」

ミッターマイヤーが叱責の声を上げた。

「ミッターマイヤー、そう怒るな。奥方の立場なら不安を口にするのは至極当然の事だ。」

「それはそうだが……」

「早く死んでくれと願われるよりはマシだろう？」

私のあけすけな言葉にミッターマイヤーは苦笑し、奥方は笑っている。

「奥方、心配しないでいい。ミッターマイヤーは帝国でも屈指の名将だ。それにいざという時は私が必ず助ける。奥方には毎回美味しい食事を御馳走になっているからな。その恩を返さなければ。」

「まあ、こんな食事でロイエンタール提督の力添えをいただけるなら更に腕によりをかけますわ。」

そう言いながらクスクスと笑っている。

「そろそろ片付けて休むわ。ウォルフ、ロイエンタール提督をよろしくお願いしますね。部屋はいつもの所を準備しておきました。」

「ああ、いつもすまないな。」

そう言つて退室した奥方を確認すると真面目な顔になった。これからが本題なのだろう。

「卿はどう思った？」

「どうと言われてもな。」

答え倦ねていると少し苛立った表情を見せた。

「はぐらかす様な言い方はよせ。」

「と言つてもな。内に外にと厄介事がある状況だ。」

「内の問題を先にしよう。」

俺の言葉にミッターマイヤーが内の問題を話そうと提案し、先に話せと此方を見つめている。

「オーベルシュタインか。出来る男ではあるようだ。」

私の感想に同意する様にミッターマイヤーが頷いた。

「ああ、切れる男なのは分かった。切れ過ぎるほどだ。」

「問題は奴の切れ味が此方側にも発揮している点だ。」

俺の言う事に今一ピンときていないようだ。

「今回の辺境星域の焦土作戦。それによつて叛乱軍に補給の負担を多大に負わせる。辺境だけでも人口は数億人はいらるだろう。今回の叛乱軍の遠征の規模は三千万人らしいから軽く見積もつても5倍から10倍だ。その補給もするとなれば半年どころか数ヶ月で補給は破綻するだろうな。」

「しかしそれでは辺境の住民達が飢餓に陥る可能性がある。」

辺境の住民達の心配か。ミッターマイヤーは優しい男だ。こんな男だから俺のような男とも付き合えているのだろうな。

「今回の叛乱軍の目的は帝国の圧政からの解放を謳っているそうだが、それを鑑みれば食料の配布を行わざるを得まい。徴発を叛乱軍がイゼルローン要塞を発った時にすれば一週間程で届く事にはなる。そして叛乱軍が補給の限界にきた所で打ち払い、辺境臣民に食料を返す手筈だ。しかし辺境の食料を徴発した事には変わらない。食べ物

恨みは恐いからな。帝国ではローエングラム伯が一心にそれを負う事になるだろうな。」

「……………」

沈黙が流れた。

「ローエングラム伯が焦土作戦を取ると言った以上、決定事項だ。キルヒアイス中将も意見具申くらいはしていよう。それでも翻意なされなかったという事だ。」

「やるしかないのか……」

苦渋に満ちた表情をしている。

「ああ、心苦しいのは俺も同じだ。話を変えよう。次は外の話をしよう。」

暗く重い空気を入れ替える目的で違う話を振ってみた。俺の気遣いに気付いたのかミッターマイヤーは苦笑しながら気持ちを入れ替える目的でワインを一口飲んだ。

「ユーリ・クーロ元帥が前線司令官か。」

「奴の軍歴は半分は綱紀粛正だ。前線指揮官としては准将からだな。」

俺がクーロ元帥の軍歴はペラペラと話すのに疑問の顔をしている。

「調べたのか？」

「ああ、情報部に私の知り合いがいて、頼んでみたら冊子をくれたよ。卿も見るか？」

そう言っただけに傍にあった俺の鞆から冊子を取り出し、ミッターマイヤーに手渡した。

「奴の家系はアーレ・ハイネセンのロンゲストマーチで医者を務めていた男の家系らしい。そこから代々医者として働いていたらしい。」
「なるほど。」

ミッターマイヤーは頷き、返事をしながら最初の方に書かれている事をなぞりながら聞いている。

「奴自身は幼少期から優秀で勉学で一番以外の成績を取ったことがない。そして15歳の時に3次元チェスで大人も含め1位になる。前代未聞の事だな。」

「帝国でも流行ったクローシシステム。敵に攻勢主導権を渡し、此方は

少ない手数で凌ぎ、駒得をする思考の下に生み出された戦法だ。」

俺もミッターマイヤーも嗜み程度に3次元チェスをするが先ず上手くなる為に覚える戦法の一つがクロシテムだ。交互に指すゲームである以上、駒を攻勢の準備を進めながら前に進める手順がある相手と自身の陣地を徹底防御の構えに出る此方側では手数が違う。故に防御側が有利に進めれる。敵の攻勢を上手く凌ぎ、相手の損害を大きく、此方の損害を小さくする。その手法に感嘆した覚えがある。

「3年連続チャンピオンになると同時にフライングボールの得点王にもなる。この時も学業はトップを譲らず、ハイネセンでは文武両道の鏡の様に云われたそうだ。」

「天は二物も三物も与えたか。」

ミッターマイヤーが羨ましい声を上げた。確かに此処まで出来れば羨望の目を向けるか嫉妬の念を抱くだろう。

「まあ、そんな男だから大層モテる。ハイネセン屈指の美人との浮き名にも事欠かない。任官するまで1年毎に相手がいる。」

「季節毎に変える卿よりはマシだか確かに多いな。」

此方からかいの表情を向ける。嫌味がないから腹も立たない。苦笑して返した。

「それにしても軍人にならず医者にでもなつていればいいものを。」

「それには同意する。ローエングラム伯にも土を付けた男だ。只者ではない。」

「ああ。」

互いに先のアスターテの会戦の最終局面を思い出し、振り返っていた。

「ロイエンタール、奴の何が凄いと思う?」

「速さだろうな。」

「速さ?」

俺の言った内容が理解できなかったのか首を傾げている。

「ああ、敵が攻勢に出る。それに対して効果的な防御陣を築きながら刺す一手も同時に行う。此方が陣形を変える、それに対して素早く陣

形を変えて一瞬の隙を突く。此方は陣形変更中だから適切な反撃に時間を要する事になる。その間はあちらの独壇場だ。一方的に攻撃する。そして此方が陣形を整えたらさっさと退く。攻撃を受けていた分、此方が更に不利な状況になる。言葉にすれば簡単だがそれを同時進行出来る艦隊司令官が何人いるか。」

「うゝゝゝむ。」

「先のアスターテでは互いに陣形を変えながら相手を探った。その時に帝国の左翼が血気に逸っていると視たのだ。少し挙動が可笑しかったからな。」

「何？そんなのか？」

ミッターマイヤーが驚きの声を上げた。

「ああ、気になったので調べてみたが確かに前進は速かったが前進に比べて後退が遅かった。どうみても攻勢を掛けたがっているように見えた。そこでクローロ元帥はより大きな隙を作って見せたのだ。」

「それに此方は引つかかったということか。」

「そうなるな。」

ミッターマイヤーがうゝゝゝむと唸りながら腕を組んでいる。

「今回の叛乱軍の侵攻作戦はどうなると思う？」

ミッターマイヤーが問いかけてきた。

「クローロ元帥が前線指揮官とは云え、帝国臣民を圧政からの解放を謳っている以上は辺境臣民の保護をしなければならない。つまりは食糧や医薬品、生活物資の供出だな。敵が幾ら多く揃えたとしてもそれを運ぶ手段は限られている。」

「ああ、戦争中だ。最前線になる辺境宙域で民間企業の輸送船は使えないからな。軍の輸送船を使おうにもそれを補うだけの数を揃えることは出来ないだろうな。」

ミッターマイヤーの意見に頷きながら追加で得た情報を伝えるか。

「クローロ元帥が反対したのは焦土作戦をされた時の補給の困難さもあがるが辺境を占拠した時に辺境を前線基地化する事の大変さも訴えたいらしい。今回の遠征軍の費用と同等の金が少なくとも毎年掛かるだろう。何せ、辺境奪還の軍を帝国が起こす度にハイネセンから艦隊を

派遣とはいくまい。距離の問題による時間がネックになるからな。そうなると辺境に駐留艦隊を数個艦隊の規模で置かなければならないだろう。だがイゼルローン要塞を防衛ラインにしておけばその負担は無いからな。安心して戦力の拡充を行える。」

「確かにそうだな。となると叛乱軍は致命的な悪手を打ったということか。」

「そうなるな。後は誰が誰を相手にしてクーロ元帥の首を取るか。取れるのかと云う問題だけだ。」

互いに笑っていた。勝つという一点に対しては間違いなく此方が圧倒的に有利だ。後は何処まで勝ちきれぬかが勝負と云うことだ。チラリと時計を見るともう日付が変わろうとしていた。

「そろそろ休もうか、ミッターマイヤー。」

「ああ、話したい事も話せたい休もう。何時もの部屋を使ってくれ。」

「いつもすまないな。」

そう言って。互いにリビングを出た。